寒田窯跡群４号

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第10集

倉敷埋蔵文化財センター

2003.3

1．窯跡本体

2．4号窯跡と陶盆地

序

岡山県の代表的焼き物としては備前焼が全国的に有名ですが、古代・中世においては倉敷市玉島地域も備中における一大窯業産地として栄えていました。なかでも中世に玉島八島で生産されていた亀山焼は瀬戸内一帯をはじめ、遠く鎌倉にまで行き渡るほどの流通範囲を持っていました。さかのぼって古墳時代から奈良・平安時代には亀山焼のルーツとなる須恵器が、玉島陶の地域で焼かれていました。この「陶」の地名も須恵器の生産地であったことに由来すると考えられています。現在、20基以上の窯跡が確認されており、玉島陶古窯跡群と呼ばれています。

本書で報告いたします寒田窯跡群４号は、この玉島陶古窯跡群に属する窯跡の一つで、今回の発掘調査は特別養護老人ホーム増設工事に伴い実施したものです。調査の結果、窯本体の保存状態は非常に良好なことが判明し、その構造が明らかになりました。また、灰原からも多くの須恵器が出土し、これを検討した結果、玉島陶古窯跡群のなかでも最も古い古墳時代後期の窯跡であることが確認されました。

今回の報告書は、こうした窯跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護、保存に活用されるとともに、学術研究の基礎資料として、また郷土の歴史を研究する材料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ出土遺物の整理にあたりご指導ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長　田中俊彦

例　　言

1．本書は、特別養護老人ホーム増築に伴い発掘調査を実施した、倉敷市玉島陶地内に所在する寒田窯跡群４号の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、倉敷埋蔵文化財センター主任 鍵谷守秀・学芸員 小野雅明・藤原好二(いずれも調査当時)が担当し、1999年９月１日～12月９日にかけて実施した。

3．須恵器の胎土分析については岡山理科大学　白石 純氏に依頼した。炭化材の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

4．出土遺物の整理および報告書作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては、倉敷埋蔵文化財センター嘱託職員 内田智美、臨時職員 大江久仁子・金谷奈奈・石井恵子・藤川明日香・田中玲子、実習生 渡邊春奈の協力を得た。

5．本書の執筆は、第３章第１節の一部を小野、第３章第２節の陶棺を鍵谷、他を藤原が担当し、編集は藤原が行った。また、白石　純氏には玉稿をいただいた。

6．発掘調査における遺構の写真撮影は藤原が行い、遺物の写真撮影は鍵谷が行った。

7．挿図に使用した高度値は海抜高であり、方位はいずれも磁北である。

8．発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターにて保管している。

9．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々並びに機関に御指導・御教示を賜った。記して感謝する次第である。

大谷晃二・大橋雅也・小野一臣・亀田修一・狩山俊悟・北村精三・草原孝典・河本 清
小林利晴・小林博昭・白石 純・高田知樹・武田恭彰・富岡直人・新納 泉・日野浦弘幸
平井泰男・福本 明・藤原憲芳・前角和夫・間壁忠彦・間壁葭子・松木武彦・松永訓子
村上幸雄・山田邦和・横田美香
岡山県古代吉備文化財センター・岡山県立吉備路郷土資料館・総社市埋蔵文化財学習の館

目　次

序

第１章 遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節 地理的環境 …… 1
　第２節 歴史的環境 …… 1
　第３節 玉島陶古窯跡群 …… 3

第２章 調査に至る経緯と経過 …… 5
　第１節 調査に至る経緯 …… 5
　第２節 調査の方法と経過 …… 6
　第３節 整理作業 …… 7
　第４節 調査の体制 …… 8

第３章 発掘調査の成果 …… 9
　第１節 遺構 …… 9
　　１　窯体 …… 9
　　２　灰原 …… 17
　第２節 遺物 …… 18
　　１　窯内出土の須恵器 …… 18
　　２　灰原出土の遺物 …… 22

第４章 まとめにかえて …… 89
　第１節 窯の構造 …… 89
　第２節 須恵器の編年 …… 91
　第３節 金属器模倣 …… 103
　第４節 ヘラ記号 …… 104
　第５節 陶棺 …… 109
　第６節 備中南部における須恵器生産の展開 …… 111

附編 自然科学的分析 …… 149
　１　寒田窯跡群４号出土須恵器の胎土分析 …… 149
　２　寒田窯跡群４号から出土した炭化材の樹種 …… 156

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 1
第２図　周辺の遺跡 2
第３図　寒田窯跡群の位置（Ｓ＝1/5,000） 3
第４図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/500） 5
第５図　区割図（Ｓ＝1/400） 6
第６図　全体平面図（Ｓ＝1/200） 9
第７図　窯体横断面図（Ｓ＝1/40） 10
第８図　窯体平面・縦断面図（Ｓ＝1/40） ..... 11・12
第９図　床面・遺物出土状況図（Ｓ＝1/50） 13
第10図　排水溝平・断面図（Ｓ＝1/50） 14
第11図　灰原縦断面図（Ｓ＝1/50） 15
第12図　灰原横断面図（Ｓ＝1/50） 16
第13図　窯内出土遺物１（Ｓ＝1/4） 19
第14図　窯内出土遺物２（Ｓ＝1/4） 20
第15図　窯内出土遺物３（Ｓ＝1/4） 21
第16図　灰原出土遺物１（Ｓ＝1/4） 23
第17図　灰原出土遺物２（Ｓ＝1/4） 24
第18図　灰原出土遺物３（Ｓ＝1/4） 25
第19図　灰原出土遺物４（Ｓ＝1/4） 26
第20図　灰原出土遺物５（Ｓ＝1/4） 27
第21図　灰原出土遺物６（Ｓ＝1/4） 28
第22図　灰原出土遺物７（Ｓ＝1/4） 30
第23図　灰原出土遺物８（Ｓ＝1/4） 31
第24図　灰原出土遺物９（Ｓ＝1/4） 32
第25図　灰原出土遺物10（Ｓ＝1/4） 33
第26図　灰原出土遺物11（Ｓ＝1/4） 34
第27図　灰原出土遺物12（Ｓ＝1/4） 35
第28図　灰原出土遺物13（Ｓ＝1/4） 36
第29図　灰原出土遺物14（Ｓ＝1/4） 38
第30図　灰原出土遺物15（Ｓ＝1/4） 39
第31図　灰原出土遺物16（Ｓ＝1/4） 40
第32図　灰原出土遺物17（Ｓ＝1/4） 41
第33図　灰原出土遺物18（Ｓ＝1/4） 42
第34図　灰原出土遺物19（Ｓ＝1/4） 43
第35図　灰原出土遺物20（Ｓ＝1/4） 44
第36図　灰原出土遺物21（Ｓ＝1/4） 46
第37図　灰原出土遺物22（Ｓ＝1/4） 47
第38図　灰原出土遺物23（Ｓ＝1/4） 48
第39図　灰原出土遺物24（Ｓ＝1/4） 49
第40図　灰原出土遺物25（Ｓ＝1/4） 50
第41図　灰原出土遺物26（Ｓ＝1/4） 51
第42図　灰原出土遺物27（Ｓ＝1/4） 52
第43図　灰原出土遺物28（Ｓ＝1/4） 54
第44図　灰原出土遺物29（Ｓ＝1/4） 55
第45図　灰原出土遺物30（Ｓ＝1/4） 56
第46図　灰原出土遺物31（Ｓ＝1/4） 57
第47図　灰原出土遺物32（Ｓ＝1/4） 58
第48図　灰原出土遺物33（Ｓ＝1/4） 59
第49図　灰原出土遺物34（Ｓ＝1/4） 61
第50図　灰原出土遺物35（Ｓ＝1/4） 62
第51図　灰原出土遺物36（Ｓ＝1/4） 63
第52図　灰原出土遺物37（Ｓ＝1/4） 64
第53図　灰原出土遺物38（Ｓ＝1/4） 65
第54図　灰原出土遺物39（Ｓ＝1/4） 66
第55図　灰原出土遺物40（Ｓ＝1/4） 67
第56図　灰原出土遺物41（Ｓ＝1/4） 68
第57図　灰原出土遺物42（Ｓ＝1/4） 69
第58図　灰原出土遺物43（Ｓ＝1/4） 70
第59図　灰原出土遺物44（Ｓ＝1/4） 71
第60図　灰原出土遺物45（Ｓ＝1/4） 72

第61図　灰原出土遺物46（S＝1/4）……73
第62図　灰原出土遺物47（S＝1/4）……74
第63図　灰原出土遺物48（S＝1/4）……75
第64図　灰原出土遺物49（S＝1/4）……76
第65図　灰原出土遺物50（S＝1/4）……77
第66図　灰原出土遺物51（S＝1/4）……78
第67図　灰原出土遺物52（S＝1/4）……79
第68図　灰原出土遺物53（S＝1/4）……81
第69図　灰原出土遺物54（S＝1/4）……81
第70図　灰原出土遺物55（S＝1/4）……82
第71図　陶棺１（S＝1/10）……84
第72図　陶棺２（S＝1/6）……85
第73図　陶棺３（S＝1/6）……86
第74図　陶棺４（S＝1/4）……87
第75図　製塩土器（S＝1/2）……87
第76図　坏・坏蓋法量相関図……91
第77図　備中南部古墳出土須恵器組成表……93
第78図　備中南部古墳出土須恵器編年……94
第79図　寒田窯跡群須恵器編年１……98
第80図　寒田窯跡群須恵器編年２……99
第81図　把手の変遷……103
第82図　ヘラ記号拓影１（S＝1/2）……106
第83図　ヘラ記号拓影２（S＝1/2）……107
第84図　ヘラ記号拓影３（S＝1/2）……108

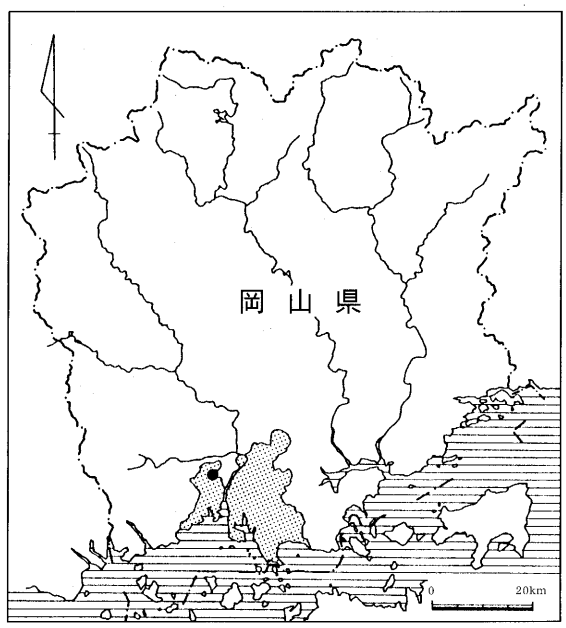
図　版　目　次

図版１　１．遺跡遠景（調査前・北から）
２．遺跡遠景（調査中・東から）
３．窯体検出状況（東から）
図版２　１．窯体ａ-ｂ断面（西半・北から）
２．窯体ａ-ｂ断面（中央・北東から）
３．窯体ａ-ｂ断面（東半・北から）
図版３　１．窯体ｅ-ｆ断面（東から）
２．窯体ｇ-ｈ断面（東から）
３．調査風景（西から）
図版４　１．遺窯体物出土状況
２．煙道付近遺物出土状況
３．焚口遺物出土状況
図版５　１．Ａ～Ｄ区第51層残存範囲
２．Ａ・Ｂ区床面断ち割り
３．Ｅ・Ｆ区床面断ち割り
図版６　１．床面形成土内遺物出土状況
２．焚口初期窯壁（南壁）
３．焚口最終窯壁（南壁）
図版７　１．灰原検出状況（北から）
２．灰原縦断面（北から）
３．灰原横断面（東から）
図版８　出土遺物（１）
図版９　出土遺物（２）
図版10　出土遺物（３）
図版11　出土遺物（４）
図版12　出土遺物（５）
図版13　出土遺物（６）
図版14　出土遺物（７）
図版15　出土遺物（８）
図版16　出土遺物（９）
図版17　出土遺物（10）
図版18　出土遺物（11）
図版19　出土遺物（12）
図版20　出土遺物（13）
図版21　出土遺物（14）
図版22　出土遺物（15）
図版23　出土遺物（16）陶棺
図版24　出土遺物（17）陶棺

第１章 遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

寒田窯跡群4号の立地する倉敷市玉島陶は、JR山陽本線新倉敷駅北方の丘陵を越えた盆地状の地域である。現在では倉敷市の行政区域に属しているが、『和名類聚抄』にみられる「下道郡穂北郷」の陶にあたり、明治4(1871)年以降、吉備郡陶村となった。明治22(1889)年、服部村との合併後、吉備郡穂井田村大字陶、昭和31(1956)年、玉島市に合併、昭和42(1967)年の倉敷市・玉島市・児島市の三市合併後、今日にいたっている[1]。



第１図　遺跡の位置

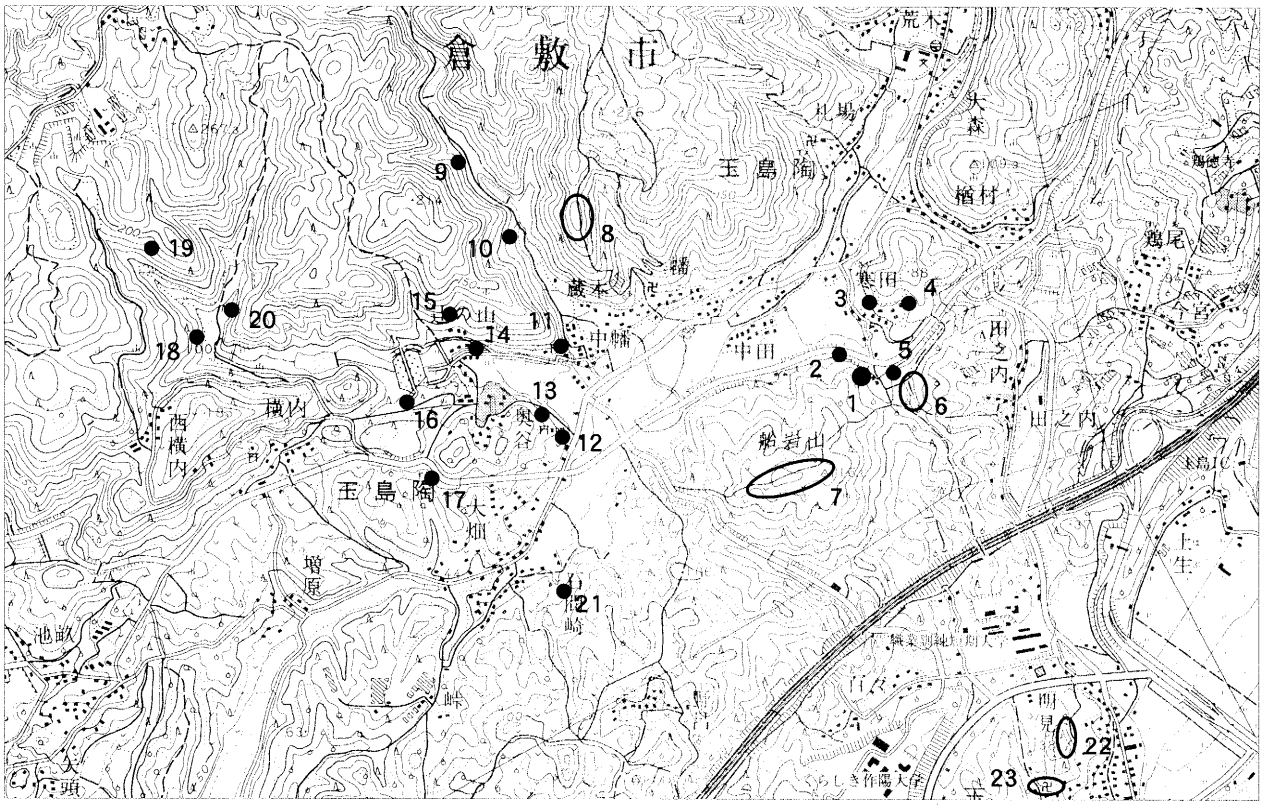
陶の盆地は北に標高約300mの弥高山、西には標高約400mの遙照山を望み、東と南は標高100m程度の低い丘陵に囲まれた幅約0.5km、長さ約3km程度の小地域である。北の弥高山からは真谷川が流れ出し、盆地中央を大きく湾曲しながら北に流れを変え、高梁川の支流である小田川に注いでいる。真備町分にあたる小田川の北岸には古代からの山陽道が通じており、川沿いに吉備の中枢地である総社平野に至ることができる。南方は約1kmほどで海に出ることができるが、丘陵を越えねばならないことから、江戸時代以前は南の玉島側よりもむしろ、現在の真備町側とのつながりの方が強かったものと考えられる。

第２節　歴史的環境

陶の盆地内では、これまで旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていないが、南側の海に面した道口・八島などの地域では縄文時代の遺跡が確認されている。

弥生時代になると、盆地南側の丘陵上に集落が営まれるようになる。寒田窯跡群4号の南西の丘陵上には船岩山遺跡が立地し、石鏃・石槍などが採集されている。また、西方の玉島富の丘陵上には平松遺跡が存在する。弥生中期の土器・石器をはじめ、銅鏃などが出土したことでも知られる[2]。

古墳時代では、後期より窯が築かれ始めるにもかかわらず、これまで陶盆地内に確実な古墳は知られていない。丘陵を南に越えた海岸沿いの地域を中心に若干の横穴式石室が存在するが、これが最も近接する例である。また、陶から真備町に抜ける途中、玉島服部には「塚山」という小字が残っており、あるいはこの付近に窯と関係した集団の古墳が存在する可能性も残されている。吉備郡穂井田村陶出土の陶棺として、須恵質家形陶棺の存在も知られており[3]、今後、この付近で古墳が確認



番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	寒田窯跡群4号	古墳後期	今回調査	13	陶神社北窯跡群	古墳～奈良	確認調査
2	寒田窯跡群5号	〃	県調査	14	山の辻窯跡	古墳後期	
3	寒田窯跡群6号	〃		15	浄蓮寺窯跡群	古墳～奈良	
4	寒田窯跡群7号	〃		16	奥池南窯跡	古墳後期	
5	寒田窯跡群1～3号	奈良		17	黒土窯跡群	奈良	県調査
6	道木遺跡	古墳後期		18	横内北窯跡群1～3号	〃	確認調査
7	船岩山遺跡	弥生		19	横内北窯跡群4号	奈良？	
8	陶山城跡	中世		20	横内北銀鉱跡	近世～近代	
9	真渓谷窯跡群2号	奈良		21	石間崎窯跡	平安？	
10	真渓谷窯跡群1号	奈良？		22	明見貝塚群	中世	
11	大堂窯跡	古墳後期		23	後貝塚群	〃	
12	陶神社南窯跡群	奈良					

第2図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

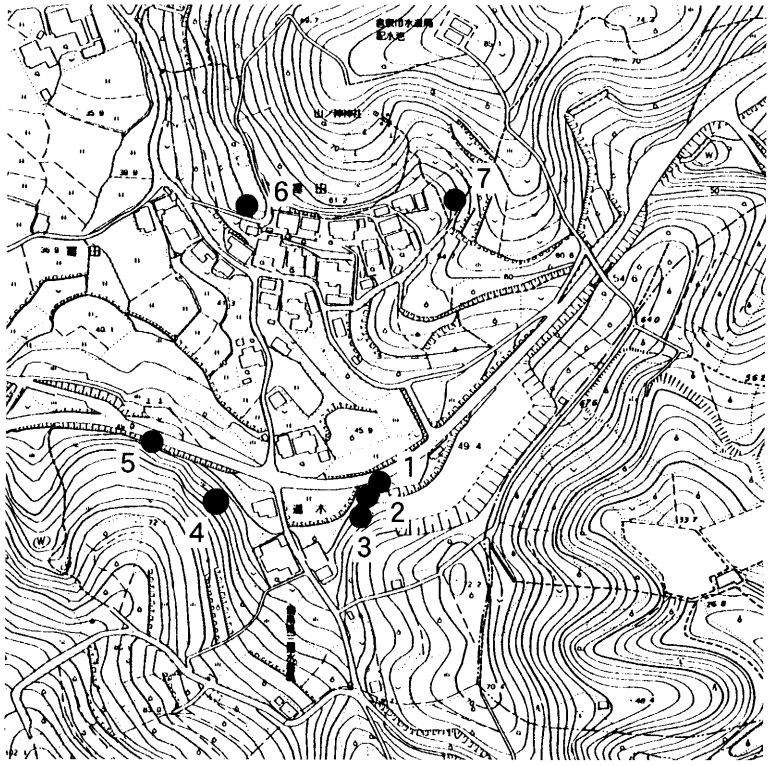
される可能性は大きい。窯跡と古墳以外の遺跡としては、寒田窯跡群1～3号の背後の丘陵上に道木遺跡が所在している。7世紀初頭のものと考えられる須恵器が散布しており、寒田窯跡群を形成した工人集団の集落・工房跡などの可能性もある。

古墳時代以後も、平安時代にいたるまで多くの窯が築かれ、玉島陶古窯跡群と呼ばれるが詳細は後述する。

中世には弥高山山塊の南端、陶の盆地を見渡せる位置に、陶山城が築かれる[4]。陶山備中守が在城したとされる。二段程度の郭を有する小規模な城郭であり、備前焼の破片などが採集されている。南麓の観音寺の墓地にはこごめ石製の五輪塔や宝篋印塔も散在しており、陶山城と関係した人々の墓石かもしれない。また、寒田窯跡群の周辺には小規模な中世貝塚も形成されている。

第３節　玉島陶古窯跡群

玉島陶古窯跡群については、岡山県教育委員会による調査報告書[5]に概要が掲載されているが、その後の新知見などもあるため、今一度ここで概観しておきたい。



第３図　寒田窯跡群の位置（S=1/5,000）数字は窯跡の番号

寒田窯跡群　玉島陶古窯跡群で最も東に位置する一群である。1～3号の瓦窯3基、4～7号の須恵器窯4基から成る。1～3号は北西向き斜面に並んで存在する。1930年頃に納屋の建築中に発見された3号窯跡が調査されている[4]。地下式有段構造の窖窯で、奈良時代の布目瓦が出土しているが、軒瓦は知られていない。1971年に市の史跡に指定されている。近年、市道新設工事に伴って窯跡前面の確認調査を実施したが、灰原等は確認されなかった[6]。1・2号も3号窯に隣接して存在するが、崩壊が著しく詳細は不明である。4基の須恵器窯の内、4・5号窯跡は1～3号と谷を挟んで西向かいの斜面に位置している。5号窯跡は1978年に農道整備事業に伴って発掘調査が行われた。4号窯より若干下る時期に操業を開始する須恵器窯である[5]。6・7号窯跡は1～3号の北側、南向き斜面に位置する。6号窯跡は山道建設によって発見され、蜜柑畑の開墾によって破壊されたとされる。今回の調査中の踏査で窯体片と蓋坏身部の破片を採集しており、須恵器窯であったことがわかる。7号窯跡は新たに発見されたものである。6号窯跡の東方に位置し、畑の中に須恵器片・窯体片が散布している。採集された須恵器片から6・7号窯跡はいずれも、4・5号窯跡とほぼ同時期のものと考えられる。

真渓窯跡群　陶盆地の中央部、弥高山から真谷川が流れ出てくる谷筋に所在する。1号窯跡は従来は砂防堤工事によって消滅したらしいとされていたが、砂防堤より120mほど南方の地点に存在している。土取りが行われた斜面に灰原が露出しており、須恵器片各種と縄目瓦が採集されている。2号窯跡は真谷川をさらにさかのぼった地点に位置し、林道によって灰原が切断されている。甕などの各種の須恵器に混ざって布目瓦も採集されている。

大堂窯跡　中幡集落の北西山裾に位置する。窯本体は削平されてしまったとされるが、須恵器片が採集される。また、平安時代の軒丸瓦も採集されたとされる[4・7]。

山の辻窯跡　喜手庵という尼寺の東側の民家の下約1.6mから、宅地造成工事中に灰原が発見されたという。現在では遺物などの確認はできない。

浄蓮寺窯跡群　辻奥の集落の北側、南向きの斜面に2基の窯跡が数十m隔てて存在するという。1号窯跡の灰原からは須恵器片が採集されたが、2号窯跡は確認できなかったとされる。現在では雑草の繁茂により、両窯跡ともに確認できない。

陶神社南窯跡群　陶神社境内の南側に隣接する民家を中心に6基の窯跡が存在したとされる。現在は窯跡を確認することはできないが、南側の畑ののり面などに布目瓦の破片が散布していることから、瓦窯を中心とする窯跡群であると推定される。『吉備郡誌』に掲載されている陶神社周辺出土の瓦とされるものはこの窯跡群で採集されたものである可能性が高い。軒瓦の中には倉敷市浅原の浅原寺跡出土の瓦と同形のものが存在する(4・7)。

陶神社北窯跡群　陶の盆地の中央に位置する低丘陵の東端には陶神社が位置している。この神社の北側、北面する斜面には3基の窯跡が所在している。北から1号・2号・3号窯跡で、市道の南側に窯の断面が露出している。1989年に市道改修に伴って確認調査が実施され、須恵器片が出土している。また、西上方の斜面にも未確認の窯跡が存在する可能性が指摘されている。

奥池南窯跡　奥池の南側、北向きの斜面に位置するとされる。1989年に農道新設に伴って、確認調査を実施したが窯跡の存在をうかがわせるような遺物などは確認されていない。

黒土窯跡群　陶神社の西方谷奥の丘陵中腹に位置する。1978年、広域農道建設に伴い調査され、2基の窯跡が確認された。1号窯は斜面をくり抜いた窖窯で、2号窯は小型の平窯である。壺・甕・鉢などの須恵器、軒丸瓦などの瓦類が出土し、8世紀後半の操業が推定されている(5)。

横内北窯跡群　これまでは横内上池西窯跡と呼ばれていたものである。1～3号窯跡は奥上池のある谷を西に突き当たった東向きの丘陵麓に位置する。北端のものを1号窯跡とし、以下、南へ2・3号である。いずれも須恵器窯跡であるが、3号窯跡については1984年に農道改良工事に伴い灰原の末端が調査された。4号窯跡は、これまでは横内上池西奥窯跡と呼ばれていたもので、1～3号窯跡のある地点からさらに北西に谷筋を登った南向き斜面に位置しているとされる。現在では草木の繁茂のため正確な位置を確認できない。

石間崎窯跡　石間崎集落の南西山裾に位置するとされる。蜜柑畑の開墾で破壊されたとされるが、亀山焼の窯跡かとも言われている。

この他にも、玉島道口に数基の窯跡があり、また、陶盆地の北方の弥高山の山上にも須恵器の採集できる地点が数ヵ所存在し、未確認の窯跡はまだまだ存在するものと考えられる。

註

(1)　倉敷市文化連盟『倉敷市歴史年表』　1978
(2)　藤田憲司「倉敷市玉島富平松発見の銅鏃」『倉敷考古館研究集報』第9号　1974
(3)　末永雅雄『本山考古室要録』岡書院　1935
(4)　永山卯三郎『吉備郡誌』　吉備郡教育会　1937
(5)　柳瀬昭彦・伊藤 晃『黒土窯址・寒田窯址』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告31　1979
(6)　小野雅明「寒田瓦窯跡確認調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報』6　倉敷埋蔵文化財センター　1999
(7)　間壁葭子「備中「スエ」と瓦」『倉敷の歴史－倉敷市史紀要－』第2号　1992

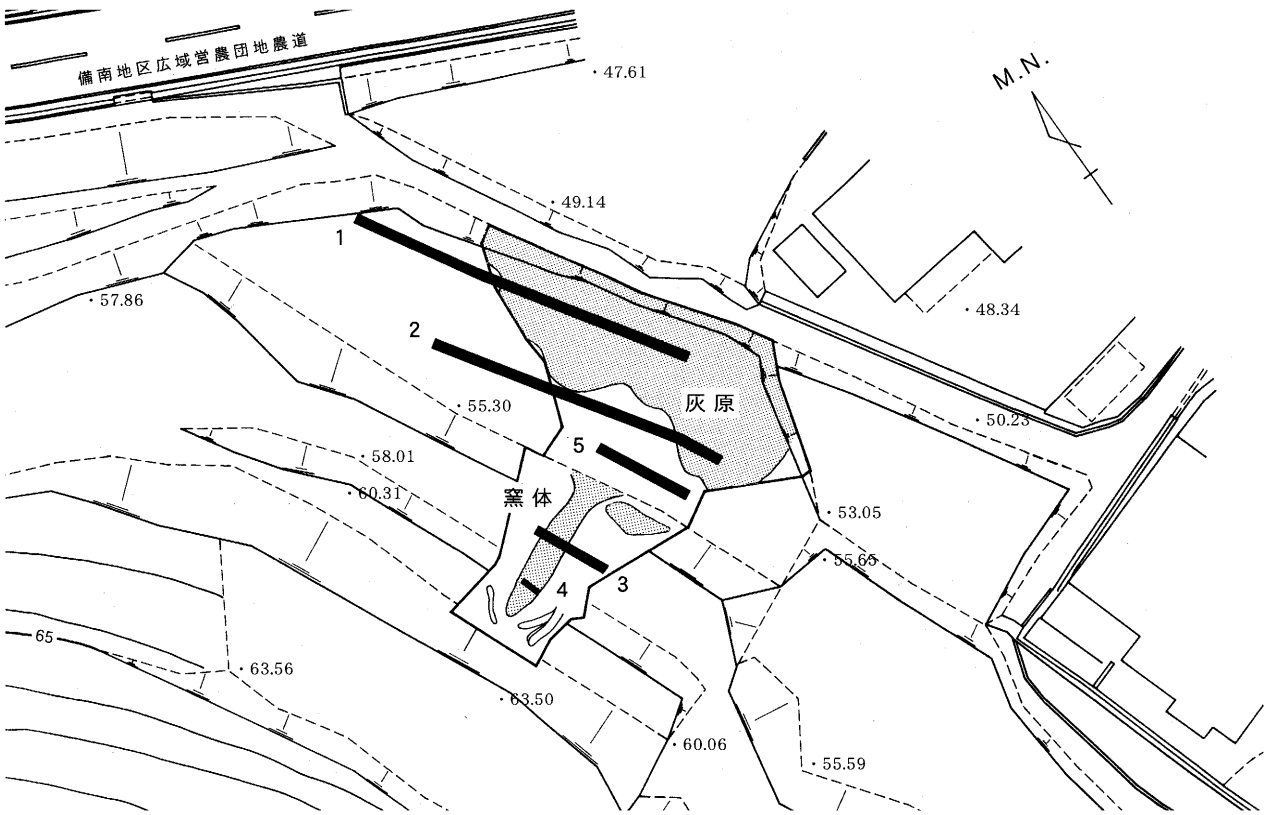
第２章 調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

倉敷市玉島陶には、古墳時代後期から平安時代にかけての窯跡が20基以上存在しており、玉島陶古窯跡群と呼ばれている。今回、調査を行った寒田窯跡群4号もそれらの中のひとつである。1975年発行の『倉敷市文化財分布図』には、同地点に寒田南窯跡群A・Bとして2基の窯跡の存在が記されていたが、1979年発刊の『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告31』では、1基の窯跡として寒田4号窯跡と呼称されてる。

平成7(1995)年4月、倉敷市玉島陶に特別養護老人ホームの建設を予定しているとのことで、事業者から協議があった。当初計画では建設予定地は寒田南窯跡群A・Bの西側に隣接する土地であったが、未発見の窯跡が存在する可能性を考慮して確認調査を行ったほうがよいとの回答を行った。

その後、平成8(1996)年4月に、再度事業者からの協議があり、建設予定地が東に拡大し寒田南窯跡群A・Bが含まれることが判明した。しかし、山林の荒廃により窯跡の正確な位置を特定できないため、確認調査が必要であり、その後に遺跡の保存を含めた対応策についての協議を行うとの同意にいたった。なお、この事業は国の補助金を得て行うもので、その内示は6月頃の予定であり、内示後すみやかに造成工事を行いたいとの意向であった。このため、早急な確認調査の実施が必要となっ



第4図　トレンチ配置図(S＝1／500)(ゴシック数字は確認調査時のトレンチ番号)

た。

これを受けて、平成8(1996)年5月28日から6月7日にかけて確認調査を実施した。調査は窯跡の位置および範囲を確認することを主眼に、等高線と平行する幅1m未満のトレンチ5本を設定して実施した。現地は近・現代に開墾され、三段に造成されていたが、西上方の旧水田ののり面に窯の断面の一部が露出しており、窯体部分が残存していることが判明した。また、下方の畑の斜面に設定したトレンチからは幅28m以上、長さ18m以上[(1)]にわたって灰原が放射状に広がっていることも判明した。あわせて窯跡は1基のみの存在であることも確認できた。

こうした調査成果に基づき、事業者と遺跡の保存を含めた対応について再度協議を行った結果、当該窯跡部分については、特別養護老人ホームの増設時の2期工事分にあたることとなり、それまでの当分の間は現状のまま保存されることとなった。

平成11(1999)年5月、特別養護老人ホームの施設拡張に伴う協議が行われた。その結果、施設の増築は老人ホームの運営上必要なものであり、設計変更も困難との理由から、やむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

註

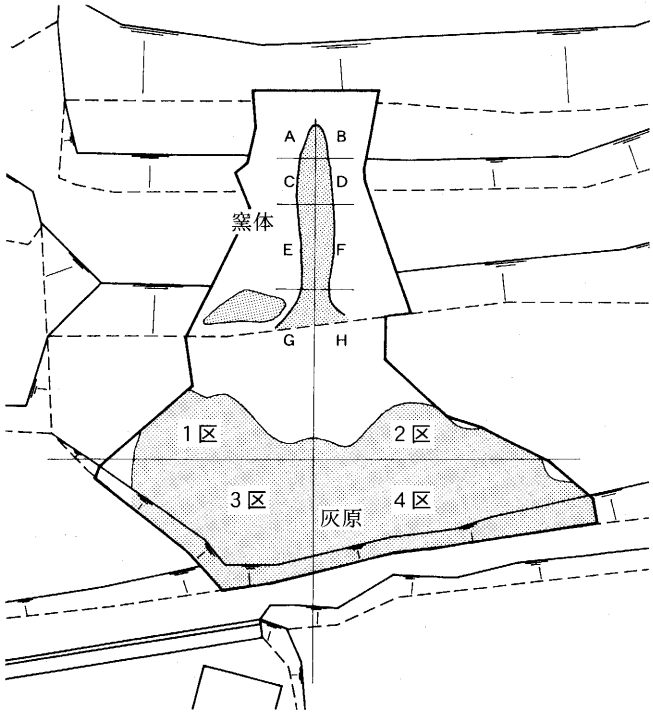
(1)　数値は確認調査時の所見。

第２節　調査の方法と経過

調査に先立ち窯跡の正式名称を寒田窯跡群4号と決定した。発掘調査は、平成8年度の確認調査結果から窯跡本体と灰原が存在すると考えられた範囲約315㎡について実施した。その費用は社会福祉法人 瀬戸内福祉事業会が負担した。

調査区は遺構の存在すると考えられた最小限の範囲に限定したため、いびつな形状となっている。付近は戦後、水田や畑として造成されており、窯本体部分は2枚の水田、灰原は畑として開墾されていた。

写真撮影などの都合から、調査は窯跡本体部分から開始した。確認調査では窯の残存長等が確認できていなかった。このため煙道部を検出し、まず窯の上端を確認しようと、斜面上方の二枚の旧水田のうち上段旧水田の山側のり面から掘削を始めたが、窯体は全く検出されなかった。このため、上段の旧水田面を掘り下げたところ、熱によって赤化した部分が検出され、ここから下方に向かって窯体の上面の検出を進めていった。確認調査時には下段旧水田の中程、



第5図　区割図(S=1/400)

トレンチ3の付近が窯の前庭部にあたると推定していた。しかしトレンチ3をさらに深く掘削したところ、旧水田面から深さ約1.8mのところで窯体の上端が検出され、窯体はさらに東に延びることが判明した。さらに下段旧水田の東側のり面を精査したところ、窯の断面が露出していることが確認された。

窯の全長を確認した後、主軸を設定し、窯の内部はA～Hの8区画になるようアゼを残して調査を行った。全区画を一度に掘り下げるとアゼが崩れる可能性が高いことから、窯の内部は北半分から掘削を行った。縦断のセクションには崩落した天井の塊がかかっており、これの観察から天井の補修がかなりの回数行われていることがわかった。また、最終床面の遺物取り上げ後、床面の立ち割りと側壁の精査を行った。その結果、床面の東側約2/3程度が操業期間中に一度掘り下げられていることが判明した。さらに、燃焼部南側の側壁も3回以上補修されていることがわかった。

灰原の調査は窯内の調査が八割方終了した11月10日より開始した。1～4の4区画になるようアゼを残して行った。調査期間の制限から、十分な分層をおこなって遺物を取り上げることができなかったが、区画ごとに上層・下層に分けて取り上げた。遺物は上層では畑の開墾や植林などによって細片化していたが、下層では比較的良好に残存していた。

以下に調査経過の概略を示す。

調 査 日 誌 抄

1999年(平成11年度)

9月1日(水)　調査予定地の樹木伐採開始
9月8日(水)　樹木伐採完了・発掘機材搬入
9月10日(金)　窯体の上面検出作業開始
10月5日(水)　調査委員会
10月6日(水)　窯体の上面検出完了
10月7日(木)　窯体上面検出状況写真撮影・主軸線の設定
10月8日(金)　窯体内部の掘削開始
10月20日(水)　窯体主軸セクション写真撮影
10月22日(金)　窯体主軸セクション実測完了
10月28日(木)　窯体横断セクション写真撮影
10月29日(水)　窯体横断セクション実測完了
10月30日(土)　窯体床面遺物出土状況写真撮影
11月4日(木)　窯面遺物出土状況実測完了・遺物取り上げ
11月9日(火)　窯体断ち割り・写真撮影完了
11月10日(水)　灰原表土剥ぎ開始
11月18日(木)　灰原表土剥ぎ・窯跡本体の排水溝掘削完了
11月19日(金)　ラジコンヘリによる調査区全体の航空写真撮影
11月20日(土)　現地説明会・灰原の掘削開始
11月25日(木)　窯体床面の精査開始
11月29日(月)　窯体床面の精査完了
12月4日(土)　灰原のセクション写真撮影
12月7日(火)　灰原のセクション実測完了・土手の取り外し
12月8日(水)　完掘状況の地形測量
12月9日(木)　完掘状況写真撮影
12月15日(水)　埋め戻し完了

第３節　整理作業

発掘調査後の整理作業は、藤原好二・鍵谷守秀・小野雅明が中心となって、倉敷埋蔵文化財センターで行った。平成11年1月～平成13年4月に遺物の洗浄・注記を実施、併行して遺物の実測を行った。実測は平成14年5月に完了した。遺物の胎土分析は平成13年度に岡山理科大学の白石 純氏にお願いした。窯内の木炭樹種分析は平成14年度にパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。遺物の写真撮影は平成14年9月～平成15年1月に行い、編集は随時行った。

第４節　調査の体制

寒田窯跡群発掘調査委員会

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会　長
専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委　員
〃	河本　清	〃	〃
監　事	宇野音平	倉敷市教育委員会	生涯学習部長
〃	道広正彦	(社)瀬戸内福祉事業会	理事長
事務局長	武田俊宏	倉敷埋蔵文化財センター	館　長
事務局員	鍵谷守秀	〃	主　任
調査員	小野雅明	〃	学芸員
〃	藤原好二	〃	〃
〃	片岡弘至	〃	〃

(肩書き及び役職名は、いずれも調査当時)

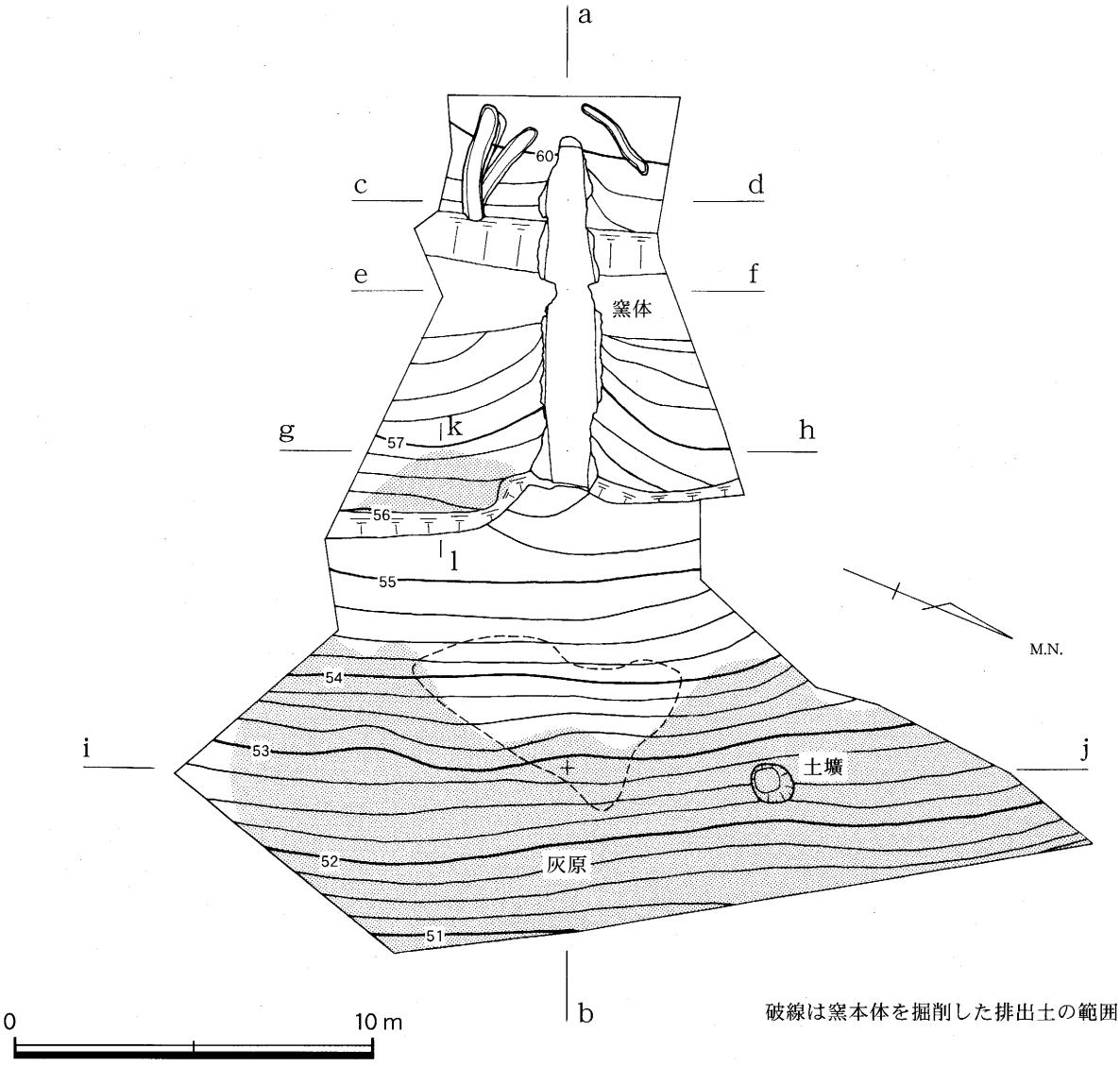
第３章 発掘調査の成果

第１節　遺構

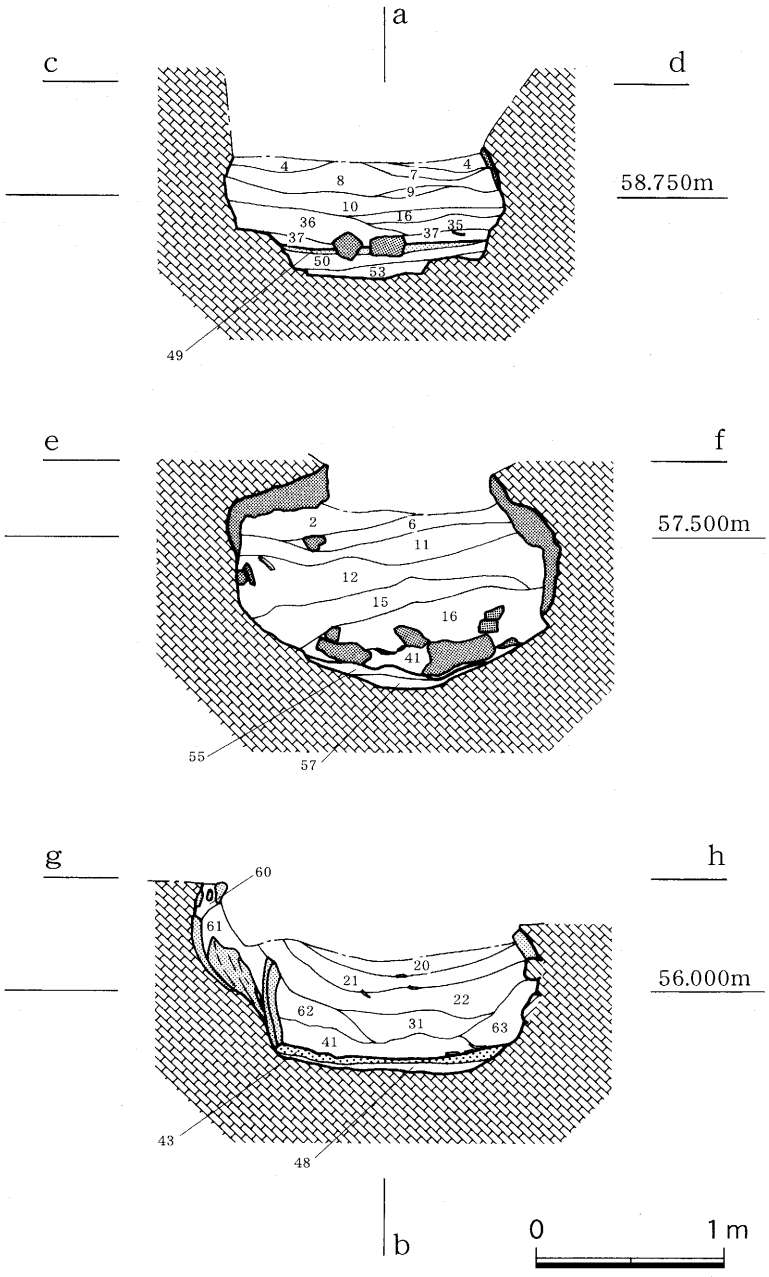
１　窯体

窯体は地山を掘り貫いた、地下式無段無階の窖窯構造をとる登窯である。水田の造成などによって部分的に削平を受け、天井部は崩落していたが、残存状況はおおむね良好であった。

平面形態は寒田窯跡群5号と同様で、焼成部中央よりが広く、焚口付近が狭まる葉巻形を呈している。N68°Eの主軸をもち、残存長9.68m、最終焚口幅約1.03m、焼成部最大幅1.72mである。残存している焚口から奥行約1.96mまでが燃焼部であることが、木炭の残存範囲から推定される。焼成



第6図　寒田窯跡群4号全体平面図（S=1／200）



第7図　窯体横断面図（S=1／40）

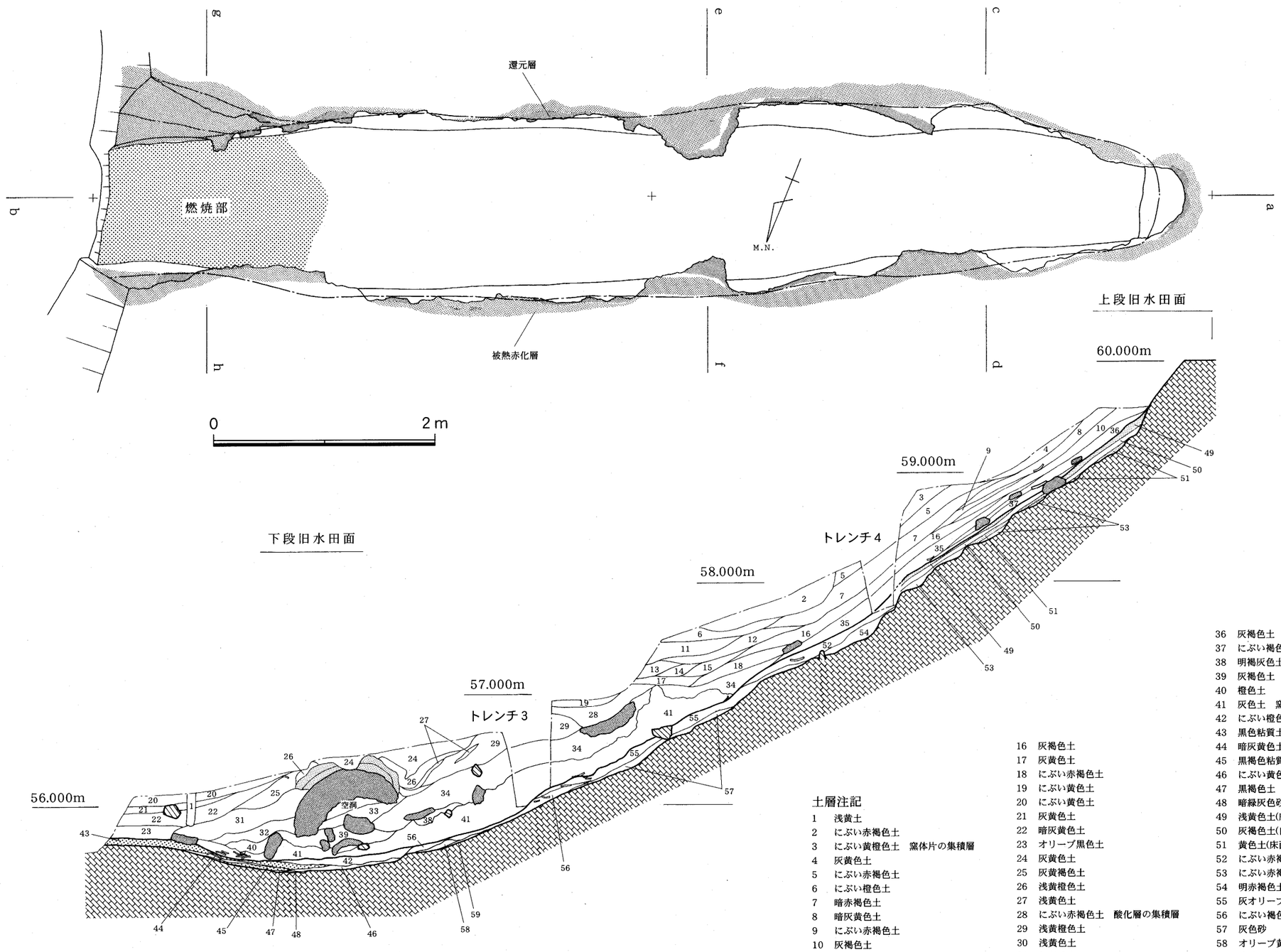
部は燃焼部から奥に向かって一度約26cm程度落ち込んでから、登り始める。天井の高さは崩落のため不明であるが、最も残存状況の良好であったe－f断面で、最終床面から約1.0m程度に復元できる。また、縦断面に崩落していた天井部の塊を観察した結果、厚さ28cmにおよぶ補修が行われており、重ね塗りされた粘土層の状況から7回以上の操業が行われていたことが推定される。

床面は焼成部付近で傾斜角30°を測る。焚口から奥へ7.2m(トレンチ4付近)までの床面形成土は砂質が強く、焼成ごとの面を捉えるのが困難な状況であった。床面形成土には甕などを中心とする破片や窯体片が食い込んでおり、とくに甕の破片などは水平を意識して据えられたようなものも多く、焼台として使用されたと考えられる。また、42層は木炭層(43層)上に被さっており、窯の廃絶後の最初期の堆積土の可能性もある。

トレンチ4よりさらに煙道にいたる部分では、前半2/3の床面とは全く状況が異なり、浅黄色の土で貼られた2枚の床面(49・51層)が確認された。この2枚の床面は間に灰褐色土層(50層)を挟んでおり、操業に一定の休止期間があったことを推定させる。この部分では甕などを利用した焼台はあまり見られず、窯体の破片や粘土塊を焼台として利用している。

トレンチ4をはさむ前後の床面形成土の関係については、確認調査時に状況を把握しないまま掘削してしまったこともあり、十分確認することができなかった。

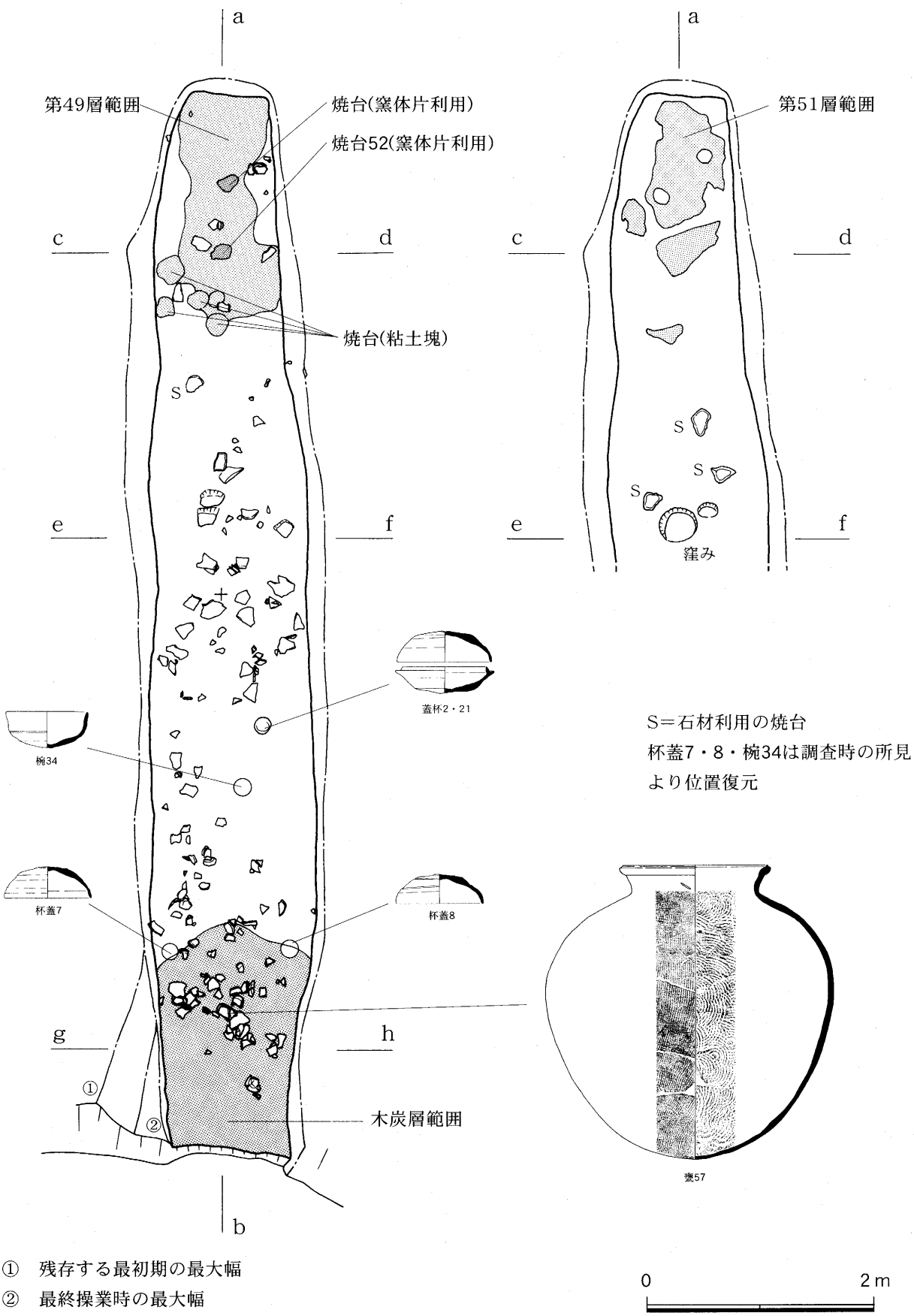
最終床面上に残存する遺物は燃焼部から焼成部前半にかけて多く残存していた。坏身・坏蓋・脚付椀などが認められたが、破片となったものが多いうえ、雑然とした状況であった。窯詰めの状態は把握できなかった。



土層注記

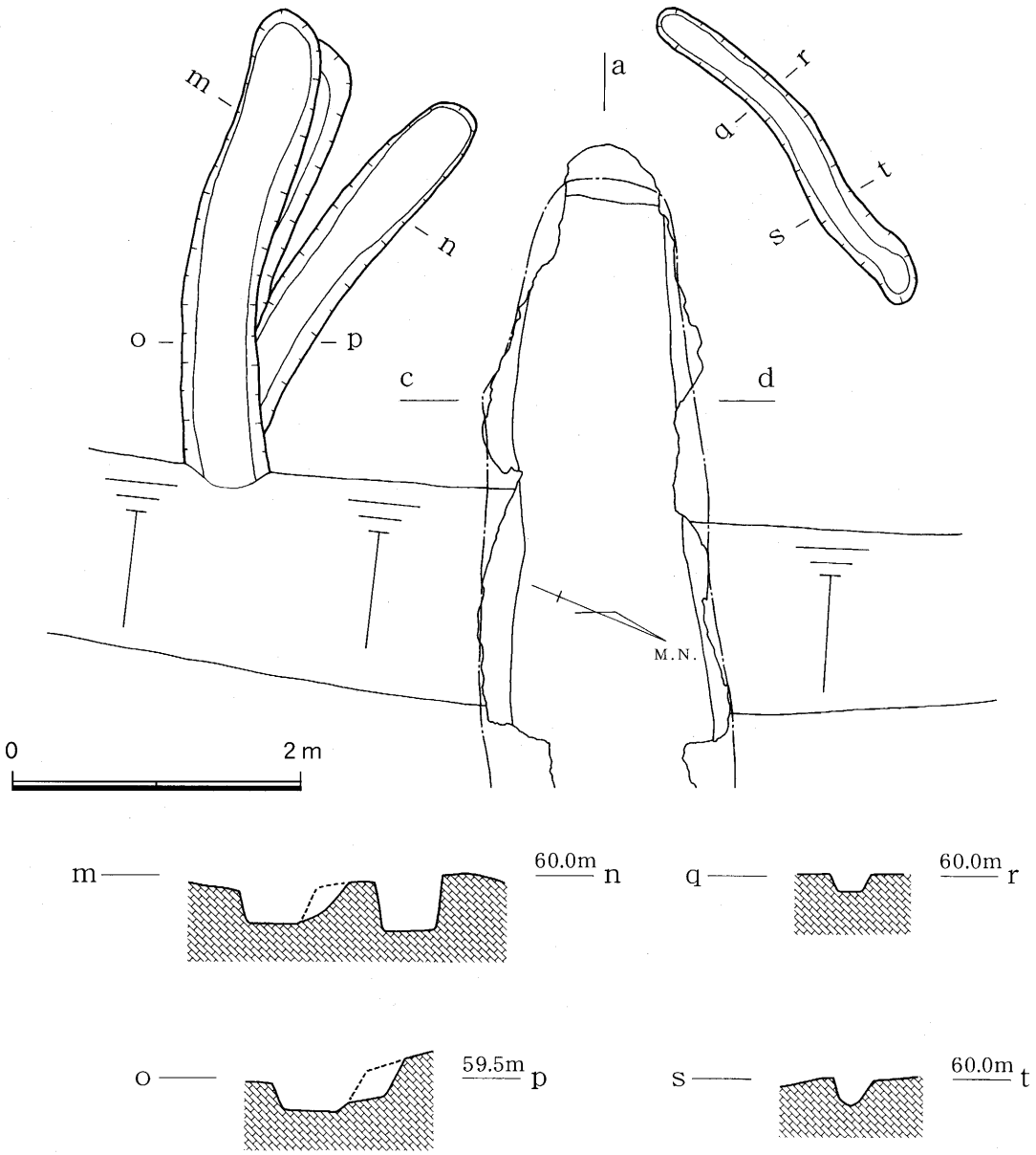
1　浅黄土
2　にぶい赤褐色土
3　にぶい黄橙色土　窯体片の集積層
4　灰黄色土
5　にぶい赤褐色土
6　にぶい橙色土
7　暗赤褐色土
8　暗灰黄色土
9　にぶい赤褐色土
10　灰褐色土
11　にぶい黄色土
12　にぶい褐色土
13　灰黄褐色土
14　灰褐色土
15　にぶい黄色土
16　灰褐色土
17　灰黄色土
18　にぶい赤褐色土
19　にぶい黄色土
20　にぶい黄色土
21　灰黄色土
22　暗灰黄色土
23　オリーブ黒色土
24　灰黄色土
25　灰黄褐色土
26　浅黄橙色土
27　浅黄色土
28　にぶい赤褐色土　酸化層の集積層
29　浅黄橙色土
30　浅黄色土
31　浅黄色土
32　灰黄色土
33　暗灰黄色土
34　にぶい赤褐色土　窯体の集積層
35　暗赤褐色土
36　灰褐色土
37　にぶい褐色土
38　明褐灰色土
39　灰褐色土
40　橙色土
41　灰色土　窯体の集積層
42　にぶい橙色土(初期堆積土?)
43　黒色粘質土
44　暗灰黄色土
45　黒褐色粘質土
46　にぶい黄色土
47　黒褐色土
48　暗緑灰色砂
49　浅黄色土(床面形成土)
50　灰褐色土(自然堆積土)
51　黄色土(床面形成土)
52　にぶい赤褐色土(床面形成土)
53　にぶい赤褐色土
54　明赤褐色土
55　灰オリーブ色砂
56　にぶい褐色土
57　灰色砂
58　オリーブ黄色土
59　オリーブ灰色砂
60　灰黄褐色土
61　にぶい赤褐色土
62　にぶい褐色土
63　灰黄褐色土

第８図　窯体平面・縦断面図（Ｓ＝1／40）



① 残存する最初期の最大幅
② 最終操業時の最大幅

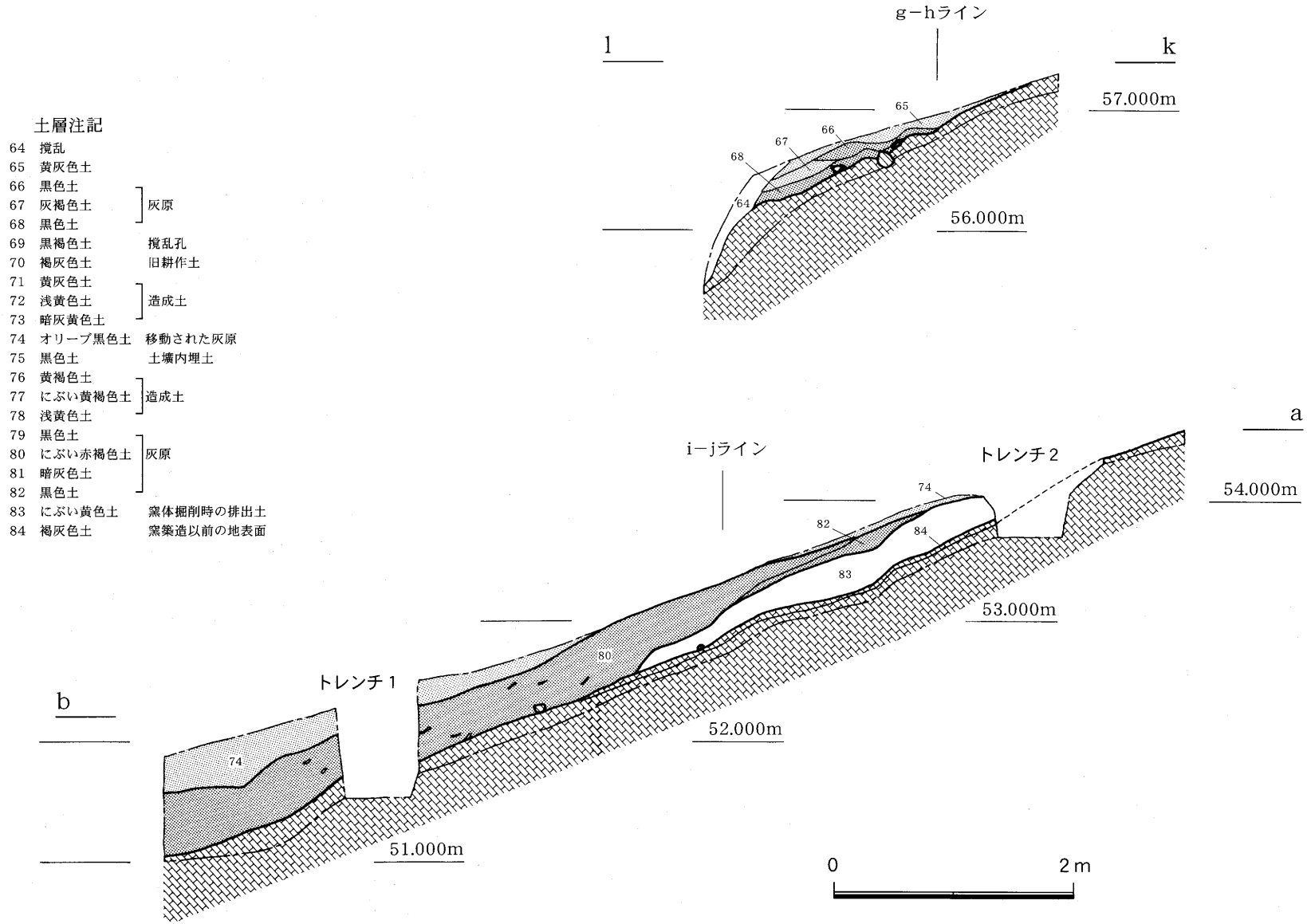
第9図　床面・遺物出土状況図（S＝1／50）



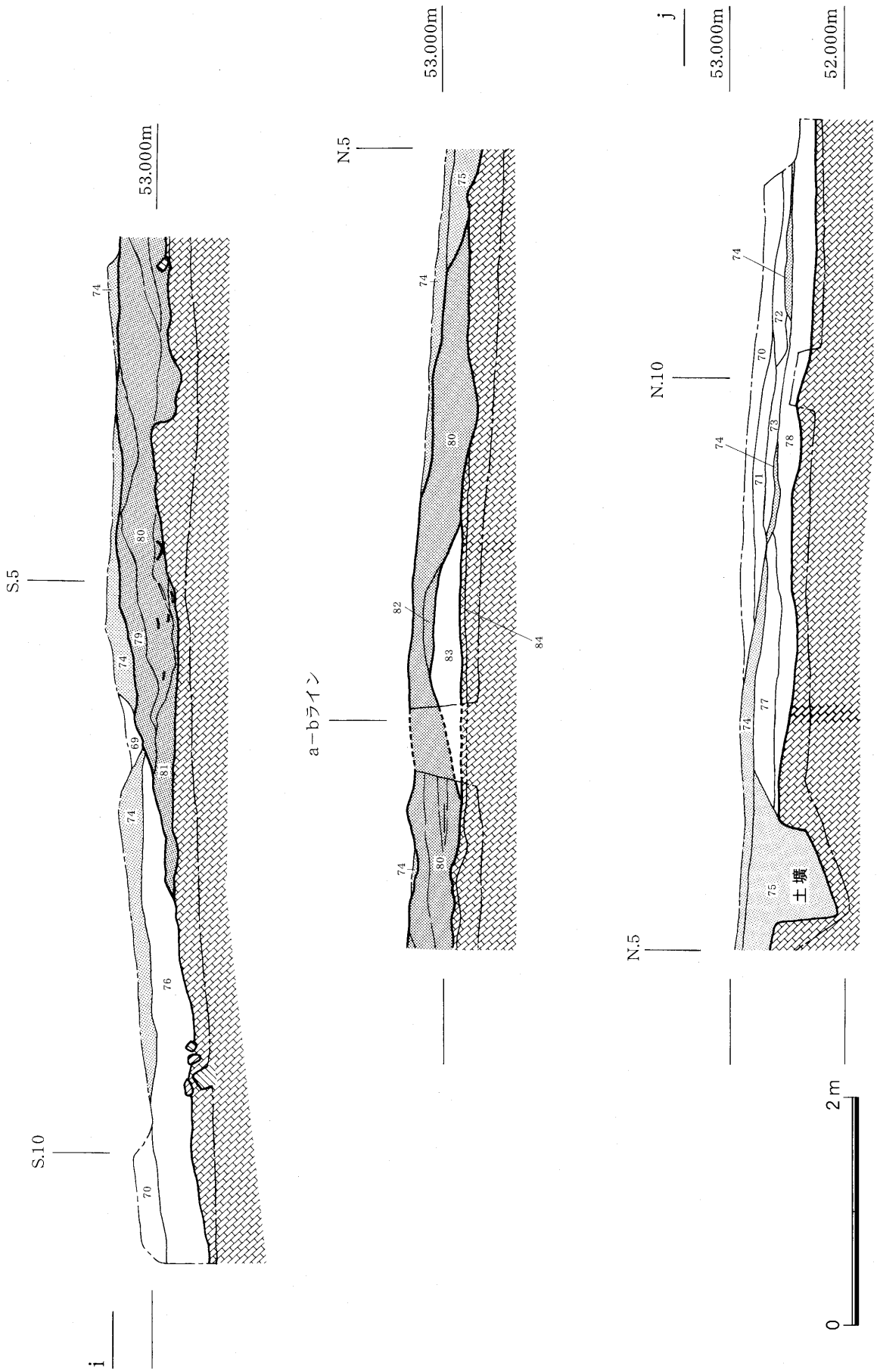
第10図　排水溝平・断面図（S=1／50）

甕57は燃焼部中央付近でほぼ完形のままつぶれた状態で出土したが、C区で出土した破片もあり、本来は焼成部中央付近に据えられていた可能性も高い。また、蓋坏2・21・坏蓋7・8・椀34は床面形成土に埋め込まれていた。いずれも掘方などは検出されず、床面を貼る際に埋め込まれたと考えられる。坏身21・坏蓋2は一組で身の部分を上の状態で、椀34はやはり伏せた状態で埋め込まれていた。坏蓋7・8は燃焼部と焼成部の境界付近に主軸を挟んで左右対象の位置に埋め込まれていた。窯の補修に伴って行われた祭祀の痕跡を示す可能性もある。

側壁は全体に残存状況が悪く、あるいは側面全体にわたっては粘土の貼りつけが行われていなかったのではないかとも考えられる。実際に焚口部分北側壁の下半部は自然の石がそのまま露出しており、粘土が貼られた形跡はうかがえない。天井部と同様に、貼りつけられた粘土にはスサがまじり、



第11図　灰原縦断面図（S=1／50）



第12図　灰原横断面図（S＝1／50）

堅く濃青灰色に焼けている。また、焚口南側壁は数度の補修によって徐々に内側に狭まり、それと同時に床面の高さが低くなっていることが確認された。

煙道は床面より若干急な角度(約58°)で立ち上がる。岩盤削りだしで、高さ65cm程度が残存し、よく還元している。当初より粘土の貼り付けは行われていなかった可能性が高い。

煙道の外周部には、排水溝と考えられる溝がめぐっている。現状では上部が削平され、煙道の西側で北と南に分離されているが、本来は一連のものであった可能性もある。北側は長さ2.64mが残存し、幅0.28m、深さ0.16mである。南側は2回以上掘り直された痕跡が認められ、最後に掘削されたと考えられる溝は長さ3.3mが残存し、幅0.52m、深さ0.24mである。溝の壁は垂直に近い角度で立ち上がり、断面が台形状を呈する。埋土はにぶい赤褐色土で、細かい炭粒が少し混じる。遺物としては甕片などが数点出土している。

2　灰原

灰原は窯の前面、約25°程度の傾斜地に広がっている。調査当初、灰原の範囲は長さ10m、幅25mにわたって広がっていると考えていた[(1)]。しかし横断面の土層を観察した結果、灰原の上層(74層)は後世に畑の造成を行なった際に移動させられた土である可能性が高まった。このため本来の灰原の範囲(79～82層)は東西南北のアゼでのみ押さえられる結果となった。長さ6.3m、幅は窯体の主軸延長線を中心に南へ6.7m、北へ4.4m、計11.1mとなる。最大厚は東端で0.52mとなる。窯の焚き口との間は約7.5mほどが、後世の造成によって削平されていた。また、東端も市道や畑の造成によって切断されていた。

遺物は各種の須恵器の他、陶棺・窯体片などが多量に出土している。上層は耕作や杉の植林などによって攪乱されていたが、下層は遺物の保存状況が比較的良好であった。堆積状況は主軸線を中心に両側に重なっていく傾向が認められた。須恵器の器種ごとに出土位置が集中するといった傾向は認められなかった。しかし、陶棺については北半の造成土(78層)を中心に出土した。

窯体前面の灰原の下には、窯を構築する際に掘削されたと考えられる土(83層)が最大厚34cm程で堆積しており、この下からは旧表土(84層)も確認できた。

窯体の南側では炭と須恵器の集中する部分が確認され、土器だまりとして遺物を取り上げた。この土器だまりの炭層は焚口の補修された南側側壁の間に入り込んでいるため、いずれかの操業段階で形成されたものと考えられる。遺物には前面の灰原に接合する個体が認められ、畑が造成される以前は下方の灰原と一連であった可能性もある。

灰原の4区では土壙が1基確認された。一辺0.8m、深さ0.6mの隅丸方形で造成土の上から掘り込まれていることから、窯よりも新しいものと考えられるが性格は不明である。

註

(1)　第4～6図の灰原はこの認識で記録した範囲である。

第２節　遺物

遺物は整理用コンテナ約130箱分が出土し、大きく窯内と灰原からのものに分けられる。

1　窯内出土の須恵器

窯内から出土した遺物はその状況から、床面中、最終床面上、窯体崩壊後の流土中に分けられる。床面中の遺物は最終操業以前のもの、また、最終床面上のものは通常、最終操業時のものと考えられる。しかし、最終床面上のものには床面中の破片と接合するものや、二次焼成を受けたと考えられるものが多くあり、あるいは最終操業時に焼台として利用されたものが、その大半である可能性もある。器種としては蓋坏・椀・高坏・脚付椀・提瓶・平瓶・短頸壺・長頸壺・甕・横瓶・焼台などがある。甕の破片の多くは焼台として利用されたもののようである。以下にその詳細を示す。

坏蓋(1～19)　上層の流土中から出土した1は、窯の廃絶後に流入したものである。外面天井部の調整が回転ヘラケズリで直径が13.7cmと他のものより若干大きめである。2～18は床面上およびその上下の層から出土しており、最終操業時から窯内に残されていたものである。外面天井部の調整はヘラ切り後ナデあるいは無調整である。2が直径13.3cmとやや大きいのを除いて、直径12cm前後に収まるようである。2・3・7・8は完形で床面形成土に埋め込まれた状況で出土した。特に2は杯身21と一組で出土している。10は残存率1/2弱の破片であるが、天井部に穿孔の痕跡が残り、焼台に転用されていると考えられる。

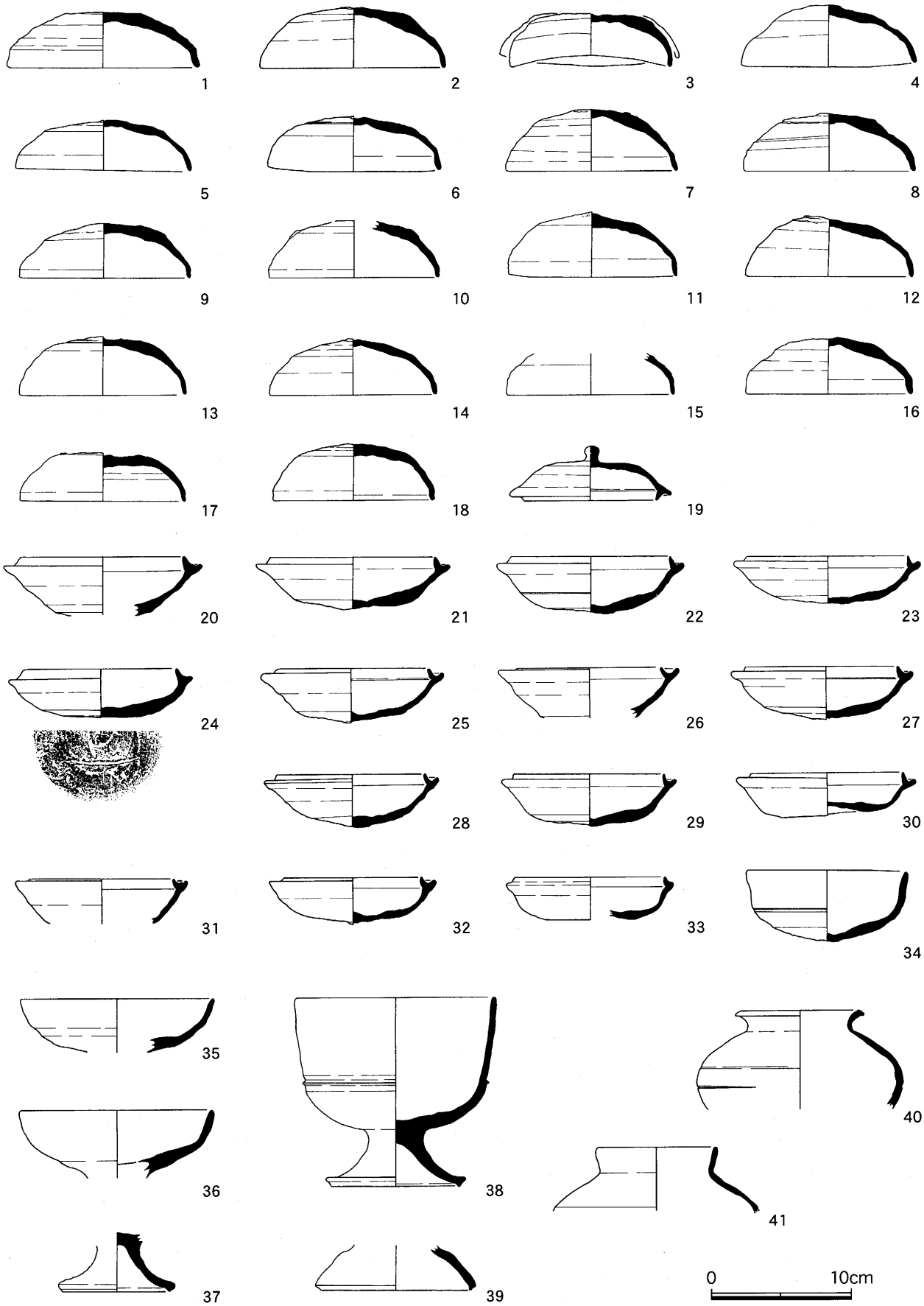
また、19は球形のつまみを持ち、口縁部にかえりをもつ。若干小振りで、いわゆる坏Gの蓋の可能性が考えられる[1]。しかし、つまみの形状が球形で宝珠形でないことなどから、他の器種の蓋の可能性も捨てきれない。

坏身(20～33)　20・21は直径14cm程度と若干大振りで、21は坏蓋2と一組で床面形成土に埋め込まれた状況で出土しており、外面底部の調整はヘラ切り後にナデである。24も確認調査時にトレンチ4の床面近くから伏せた状態で出土しており、床面形成土中に埋め込まれていた可能性がある。24は外面底部の調整が粗雑な回転ヘラケズリで、ヘラ記号が認められる。その他の個体の外面底部調整はヘラ切り後ナデであり、直径は12cm～13cm前後に収まる。32は直径12.0cmと今回の調査で確認された杯身の中では最も小型のものである。33はかえりの極度に退化した形態である。

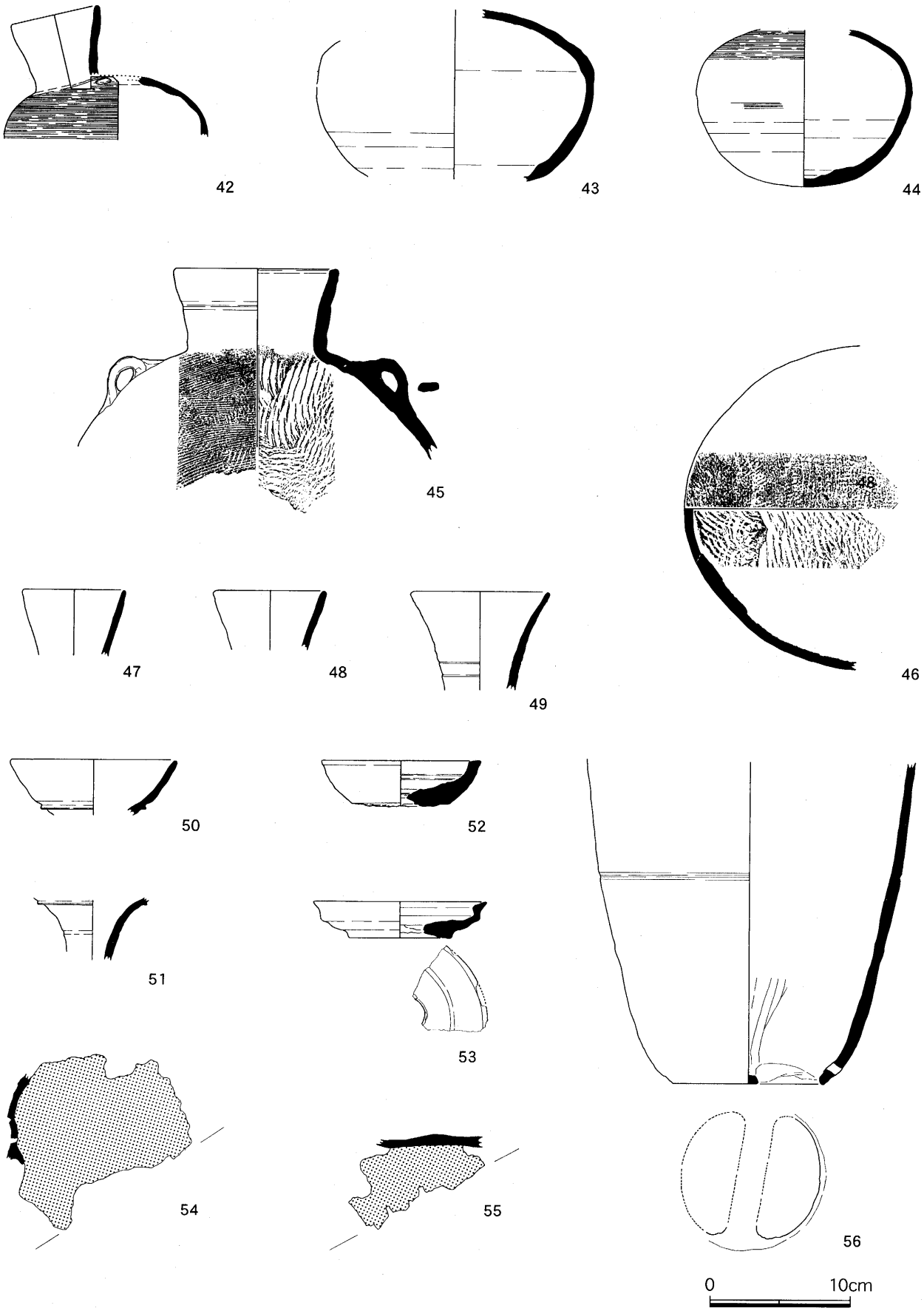
椀(34)　やや浅めの椀で、体部下半に沈線が1条めぐる。伏せた状態で床面形成土に埋め込まれており、完形の状態で出土した。

高坏(35～37)　35・36は口径14cm程度の高坏坏部である。37は短脚の高坏脚部で、端部を下方に拡張している。上方の流土中から出土しており、窯の廃絶後に流れ込んだものである。

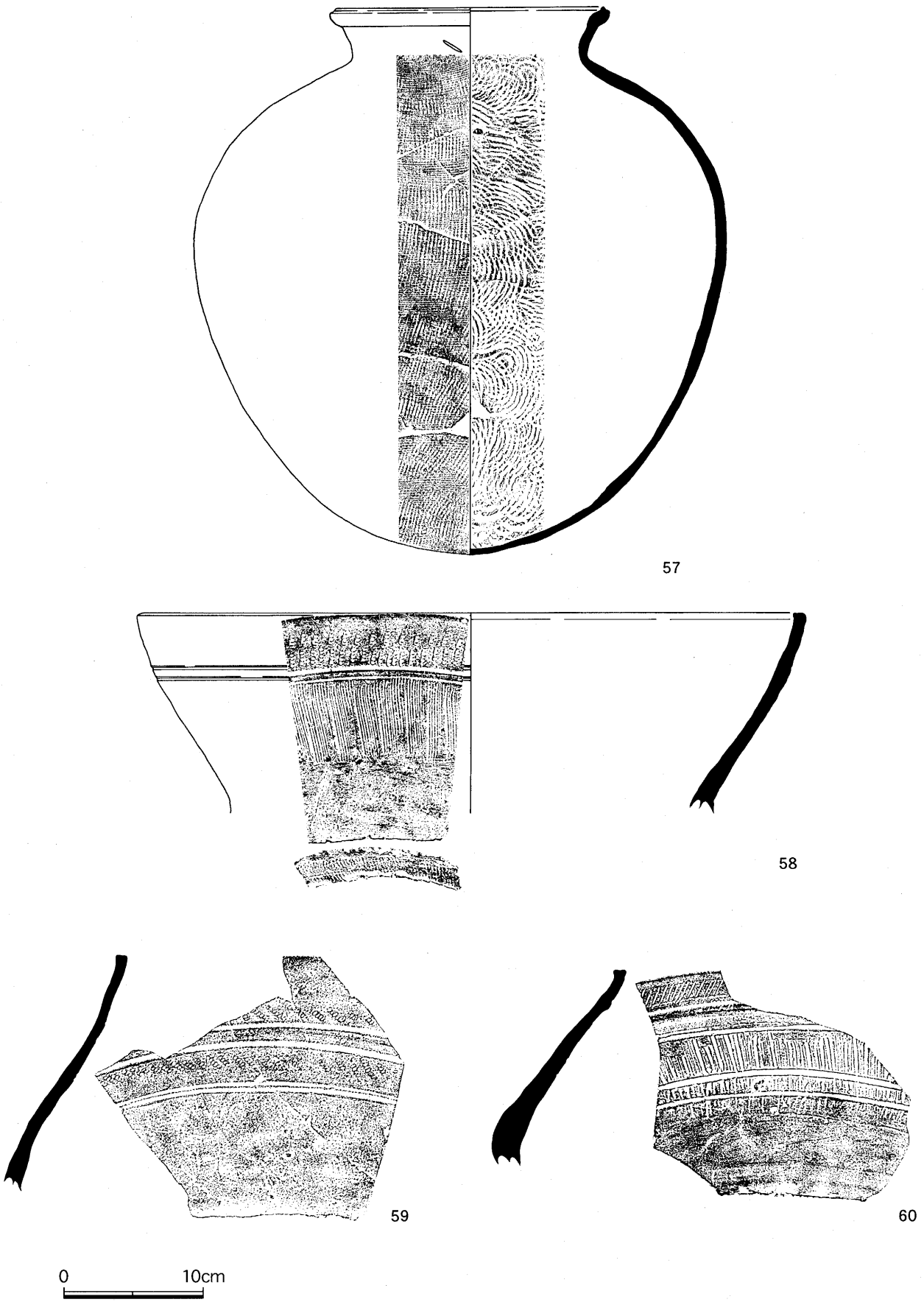
脚付椀(38・39)　38は口径14.4cmと大型・深身で、体部下半に1条の細い突帯がめぐる。脚部は高坏の脚と同様で、端部を下方に拡張し、端面は外反している。39も脚付椀の脚と考えられる。類似の形状のものが、寒田窯跡群5号から出土している。2点とも最終床面直上から出土した。



第13図　窯内出土遺物１（S＝1／4）



第14図　窯内出土遺物２（S＝1／4）



第15図　窯内出土遺物３（S＝1／4）

壺(40)　小型の壺である。口頸部が外反し、端部が外側に拡張する。肩部に1条の浅い沈線がめぐる。

短頸壺(41)　口頸部のたちあがりはしっかりしており、肩部に浅い沈線を施す。最終床面上より出土している。

平瓶(42～44)　42はボタン状の把手を持ち、閉塞部が天井にくる。43は把手を持たず、天井部がやや平らになり、わずかに肩が張った形状となる。閉塞部はやはり天井にくる。44は口の位置が不明なので確証はないが、その形状から平瓶の体部ではないかと考えられる。

提瓶(45)　大型の提瓶である。把手は細い板状の粘土紐を用いて輪状にしている。口縁部端面は内傾し、口頸部に1条の浅い沈線がめぐる。最終床面上から出土した。

横瓶(46)　横瓶の体部と考えられる。大型で、閉塞部が残っている。上層の流土から出土しており、窯の廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

(口縁部)(47～49)　器種不明の口縁部である。おそらく平瓶か提瓶のものであろう。ただ、49は口縁部の開き具合から長頸壺の口縁部である可能性が高い。

甕(50・51)　甕の口頸部である。2点とも頸部と口縁部の境に1条の突帯がめぐり、50では明瞭な段を持つ。文様は施されていないようである。

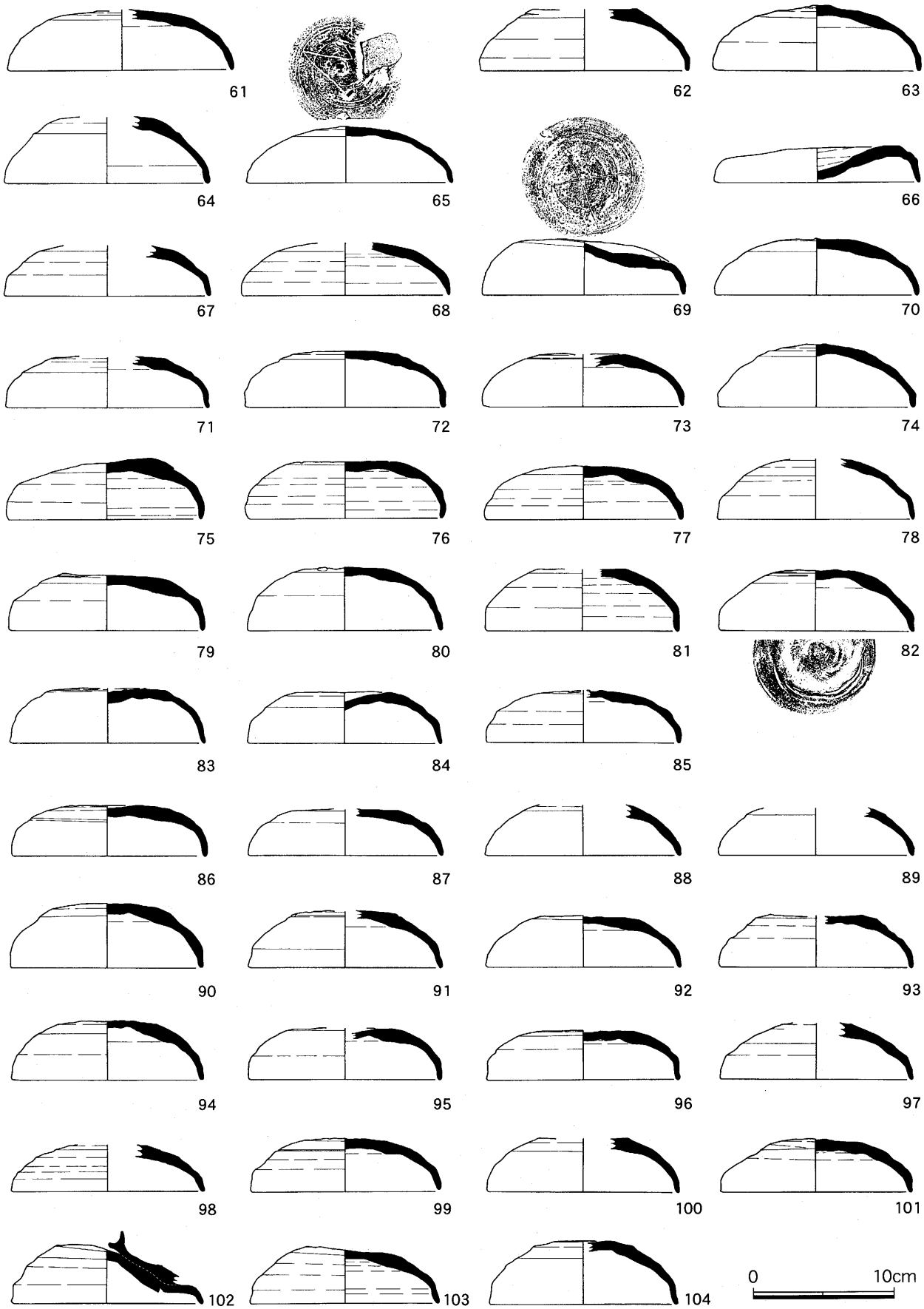
焼台(52～55)　52・53はいずれも専用焼台であるが、流土中より出土したものである。52は器壁が厚手、胎土はやや砂っぽく底部にヘラ切りの穿孔が行われている。一方、53は、胎土が精良で底部の穿孔は、穿孔後に指で押さえている。54・55は窯壁の破片を焼台に転用したものである。54は第49層直上に据え付けられていたもので、坏身が融着している。

甑(56)　口縁部の形態および把手の位置は不明であるが、体部中程に1条の浅い沈線がめぐる。底部には幅約2㎝の粘土板が中央に渡され、粘土板と直交する位置に紐孔も開けられている。傾斜した床面に対し水平に据えられてた破片があり、焼台として利用されていたと考えられる。

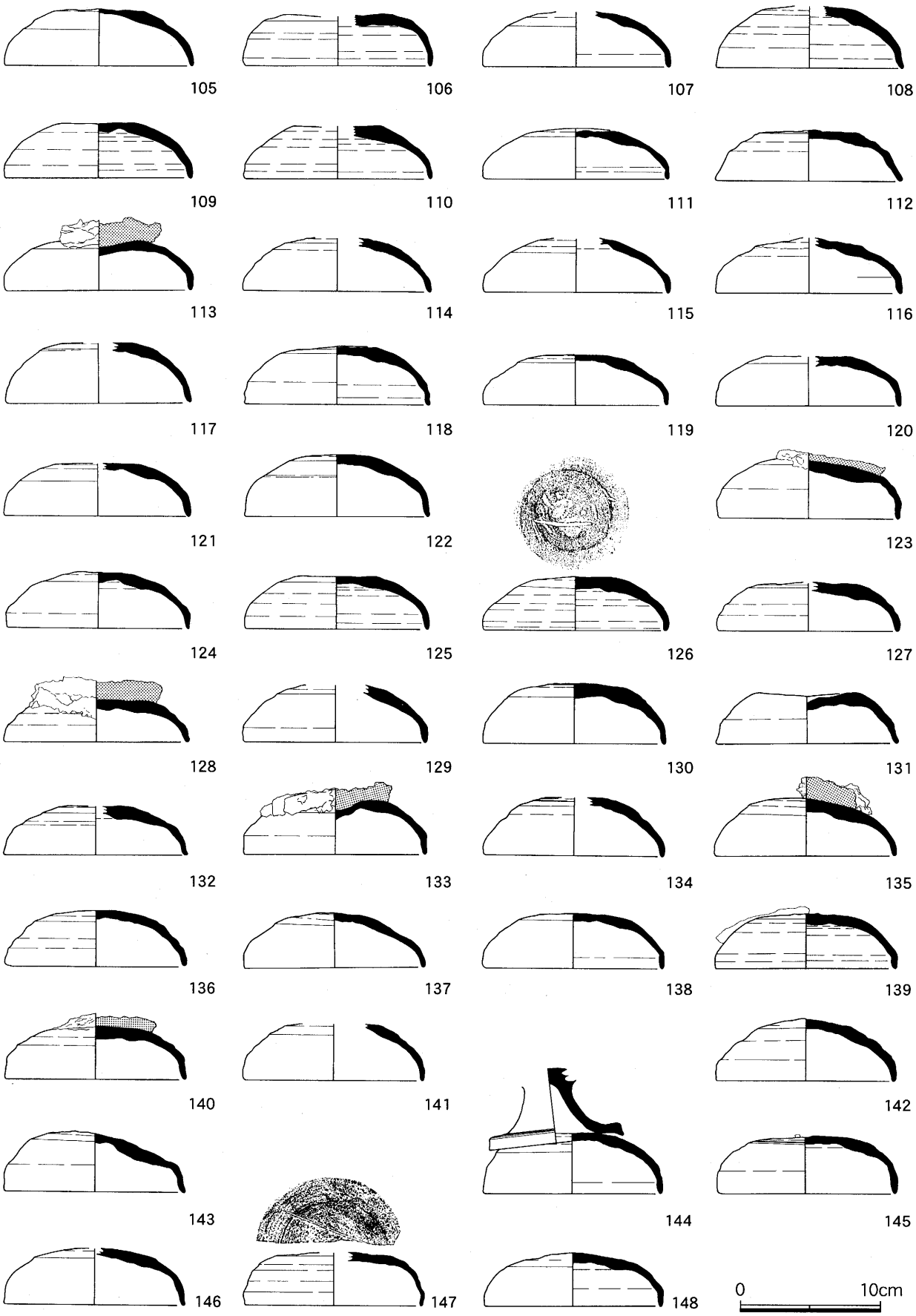
甕(57～60)　57は中型の甕で口縁端部を外側に肥厚し、内側を上方に拡張するものである。口頸部外面にヘラ記号を持っている。58～60は口頸部から口縁部にかけて文様を施す大型の甕で、いずれの個体も焼台として転用されていたようである。58は口縁帯部と口頸部の境が2条の沈線によって区切られるだけで、口縁端部は若干内側に拡張する。口縁帯部外面には櫛状工具による刺突文、口頸部には縦方向のカキメが施されている。体部との接合面には体部外面の平行タタキが反転圧痕として残っている。59は口縁帯部と口頸部の境が不明瞭で、口縁部は若干内湾する。口頸部外面に4条の沈線を施し、櫛状工具によって斜め方向の刺突文を二段に施している。体部との接合面にはやはり体部外面の平行タタキが反転圧痕として残っている。60は口縁帯部と口頸部の境が明瞭で後述する灰原出土の甕に近い。口縁帯部にはカキメ工具の小口による斜文を施し、口頸部には3条の沈線で分割されたヘラ描直線文を施している。

2　灰原出土の遺物

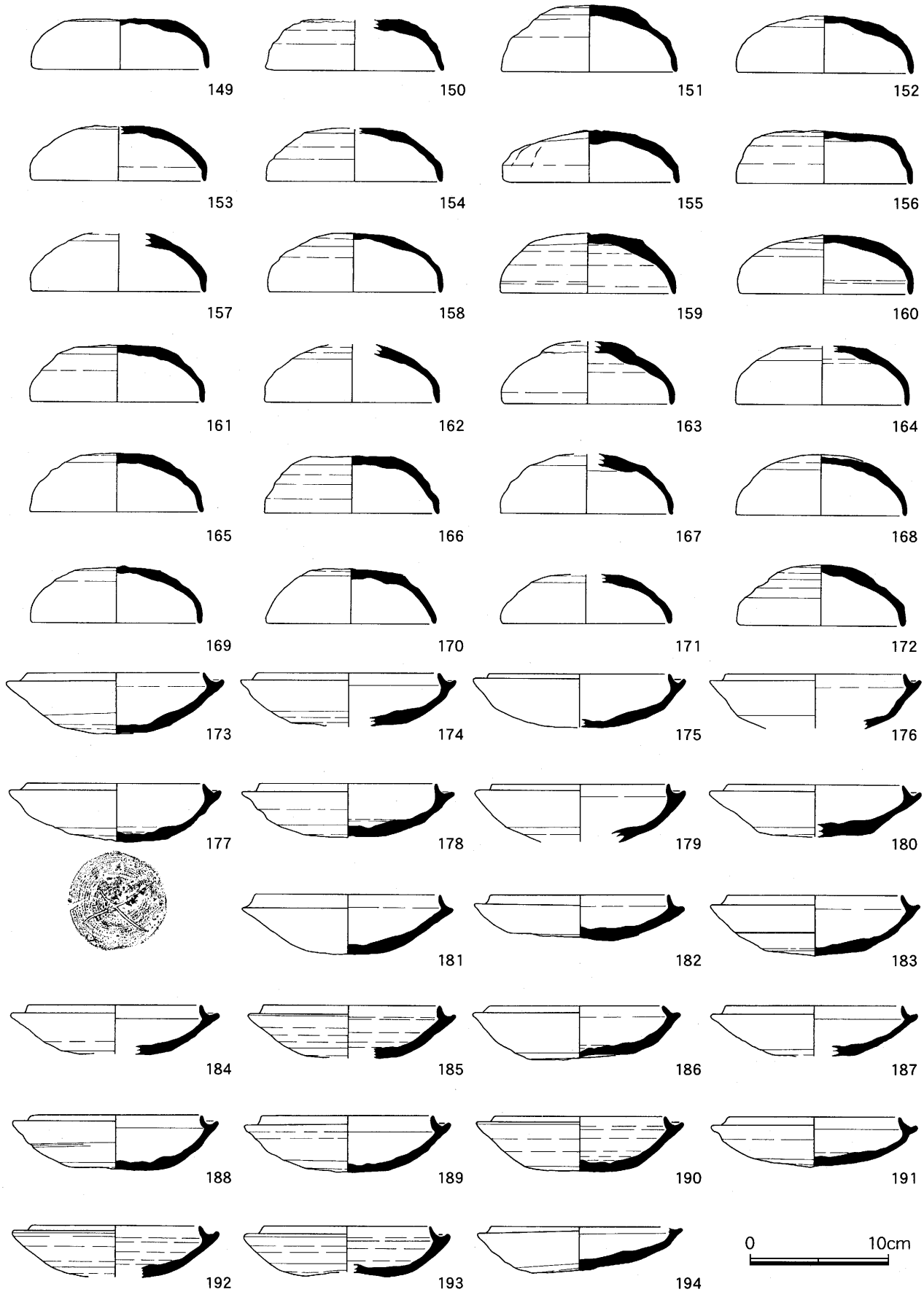
灰原からは多量の須恵器が出土したが、その他にも窯の南に接する土器だまりや、後世の造成土



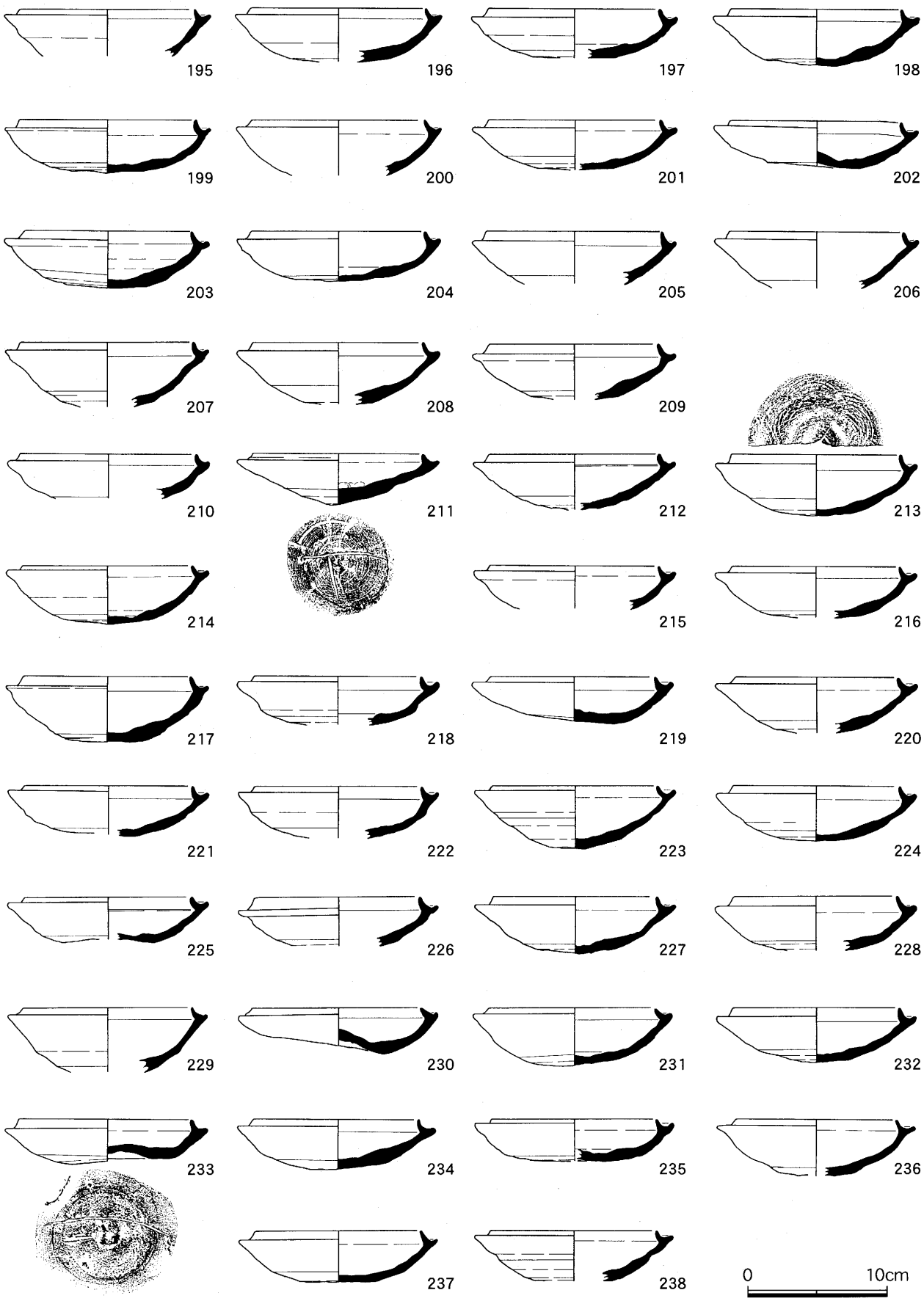
第16図　灰原出土遺物１（S＝1／4）



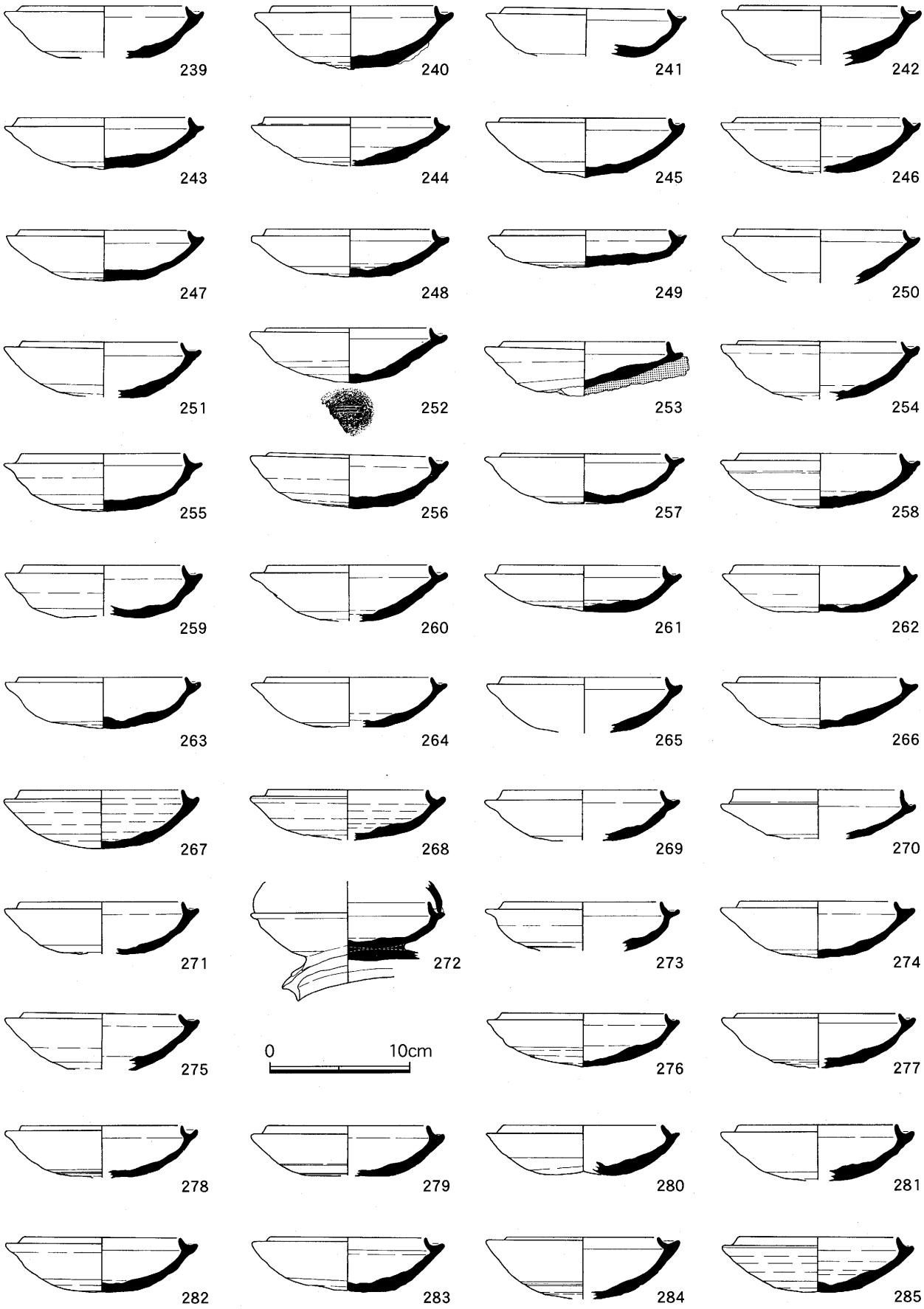
第17図　灰原出土遺物２（S＝1／4）



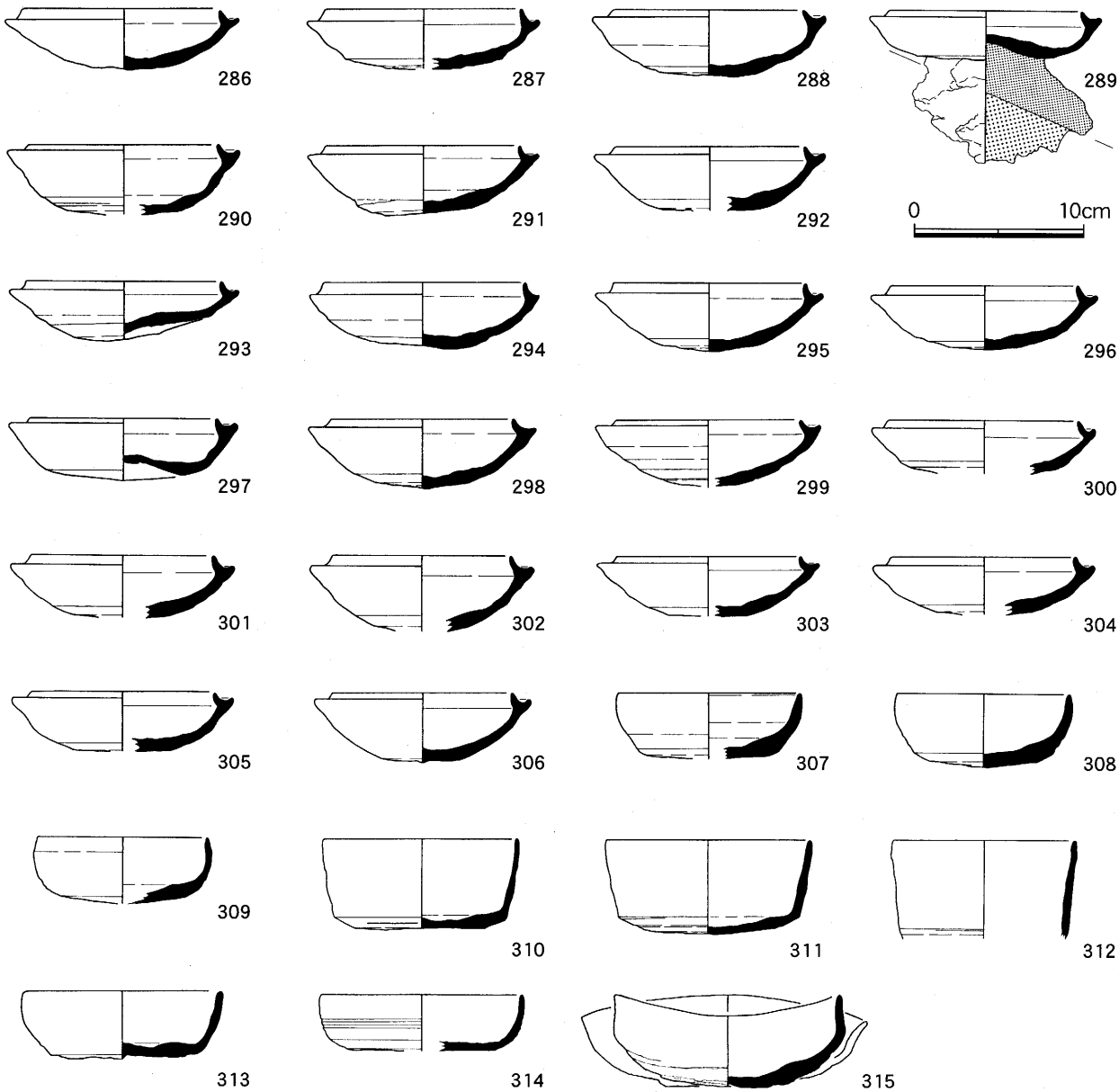
第18図　灰原出土遺物３（S＝1／4）



第19図　灰原出土遺物４（S＝1／4）



第20図　灰原出土遺物５（S＝1／4）



第21図　灰原出土遺物６（S＝1／4）

中からも須恵器が出土している。これらの中には灰原出土のものと接合するものが認められることから、ここで同時にとりあげることとする。灰原から出土した須恵器の器種は、蓋坏・椀・高坏・脚付椀・提瓶・平瓶・短頸壺・長頸壺・鉢・捏鉢・甕・横瓶・焼台などがある。また、陶棺やわずかではあるが製塩土器片も出土している。

坏蓋（61～172）　口径および坏身との対応から口径14.5cm前後、13.5cm前後、12.5cm前後に大別できる。口径が13.5～14.5cm前後のものは天井部外面に回転ヘラケズリが行われている。12.5cm前後の群からはヘラ切り無調整あるいはヘラ切り後ナデの個体が現れ始める。

82には内面に同心円のあて具痕跡が残っている。155は外面に放射状の細線が施されているが、その目的は不明である。天井部外面に砂礫塊の付着する個体（113・123・128・133・135・139・

140)は焼台に転用されたものと考えられる。また、天井部に高坏465の融着した144もやはり焼台に転用されたと考えられる。102は坏身233、121は坏身250とそれぞれ一対となる。

ヘラ記号は4種類以上が認められる。

坏身(173～306)　やはり坏蓋との対応から、受け部の径で分類すると、蓋と同様の径で3群にまとまっている。蓋との受け部径が13.5～14.5cm前後のものは天井部外面に回転ヘラケズリが行われており、12.5cm前後の群からはヘラ切り無調整あるいはヘラ切り後ナデの個体が現れ始めるのも、蓋と同様である。直径の大きな個体でもたちあがりが比較的低いのが特徴である。

213には内面に細かい同心円のあて具痕が残っている。253・289には焼台として使用された砂礫塊が融着しているが、あるいは自身も焼台に転用されたものである可能性もある。

ヘラ記号はやはり4種類以上が認められる。

坏(307～315)　307～309は坏Gである。直径10cm程度、器高4cm程度である。307・308はやや器壁が厚手である。対応する宝珠形つまみの付く蓋は確認されていないが、窯内から出土した蓋19の合わせ目の径が近く、対応する可能性がある。

310～312は底部と側部の境に明瞭な稜線を持つ坏である。底部外面は回転ヘラケズリによって丁寧に仕上げられている。312は口径に比してやや深めである。

313は坏蓋とも考えられるが、手づくねで作られたかと見間違うほど粗雑な作りのものである。底部外面は平らで、外面調整はヘラ切り後無調整である。314は外面に2条の沈線をめぐらす。金属器を模倣したものかもしれないが、壺などの蓋の可能性もある。底部外面は平らで回転ヘラケズリで丁寧に仕上げられている。315は高坏の脚を外した形態の坏と考えられる。大きくひずんでいるが、口縁部はやや外反し、底部はヘラ切り後ナデて仕上げている。

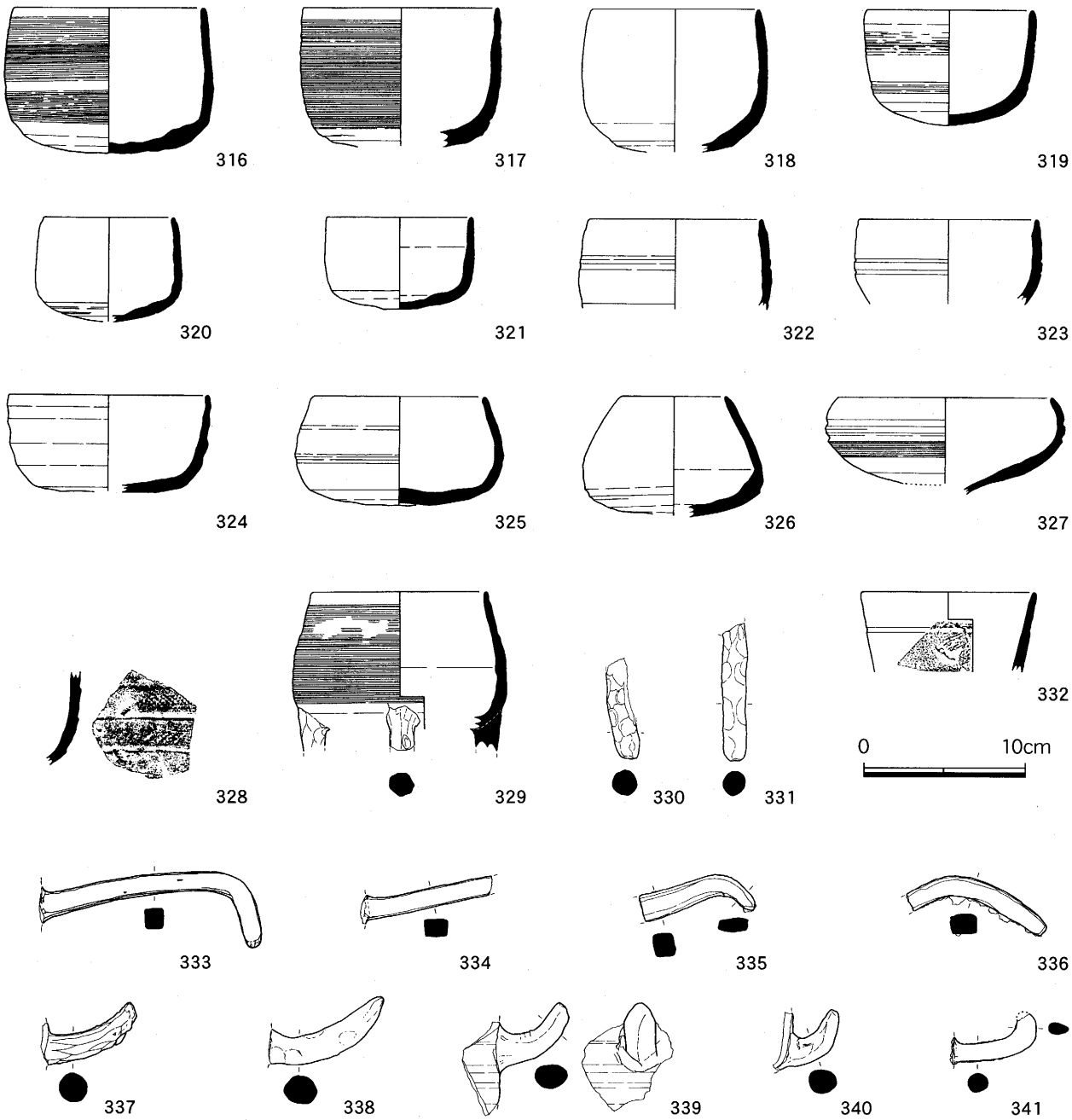
椀(316～341)　やや深めの椀(316～321)と浅めの椀(323～325・327)がある。なお、322・323・328・332については脚が付く可能性は捨てきれない。

316・317はやや大型で、320と321は若干小型である。324は外面に回転ナデの単位がよく残っている。325～327は口縁部が狭まる形態を持つ。326は口縁部が著しく狭まることから無頸壺としたほうがよいかもしれない。327は外面に2条の沈線をめぐらせ、金属器を模倣したものかもしれない。328は破片であるが、体部に櫛状工具による刺突文が二段に施されている。

329は四足椀である。口縁部が若干狭まり、底部に4ヵ所付くと考えられる足の内、3ヵ所の痕跡を確認することができる。330・331は329の足と考えられるが、直接接合はしない。断面は円く、表面に指圧痕が残る。3本足の須恵器は壺などに類例が認められるが、4本足のものは他に類例を確認することができなかった。

332は把手の剥離した痕跡が残る。把手は体部に斜方向の擦痕を穿って、剥離しにくくした上で貼りつけられていたと考えられる。

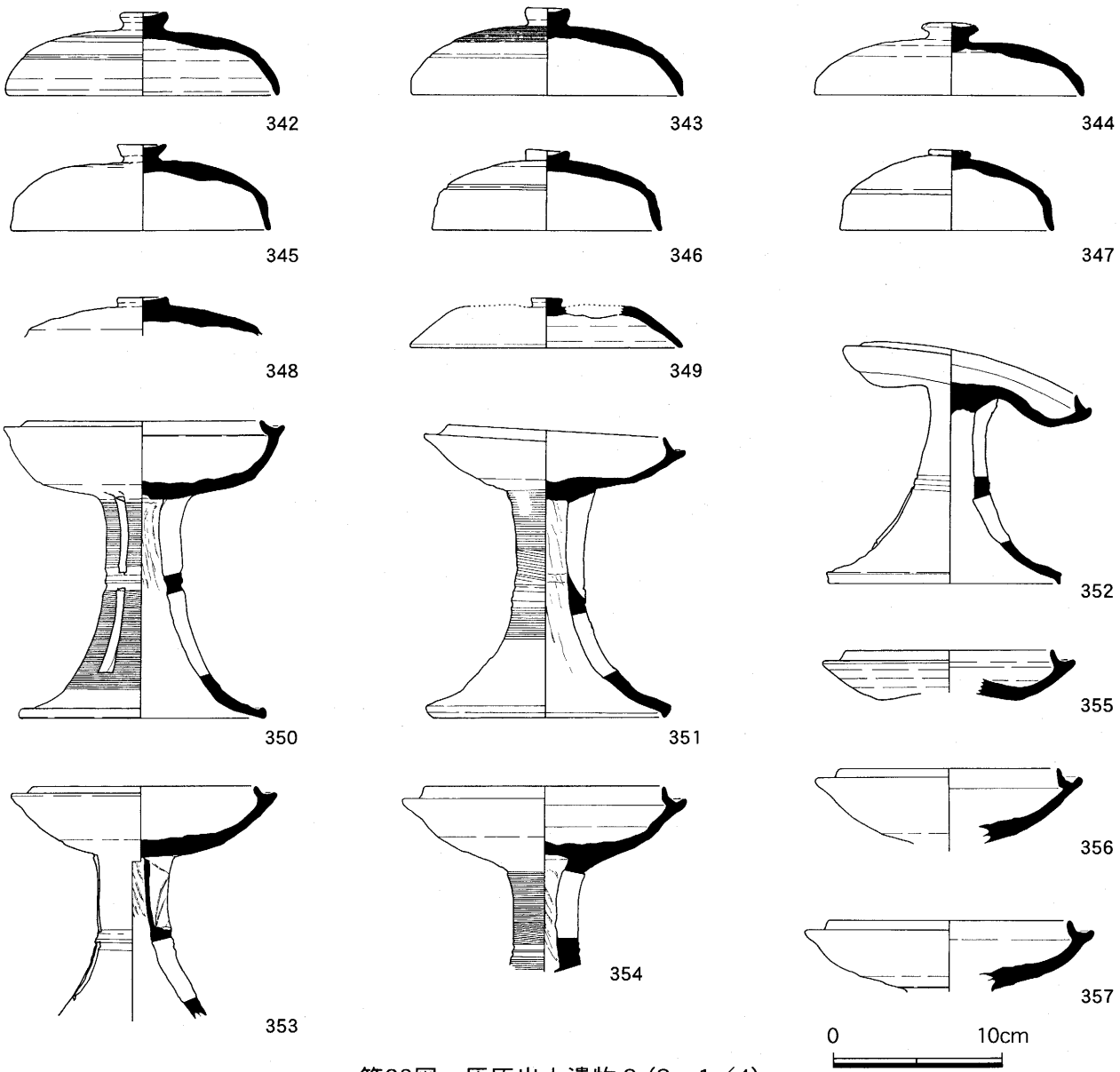
333～341は椀に付く把手と考えられる。断面が方形のもの(333～336)は先端で下に屈曲すると考えられる。基部から先端方向に向かうヘラケズリで仕上げられており、コーナー部も面取がなされている。333は把手部分としては完形で、断面はほぼ正方形で精緻な作りである。体部との剥離面



第22図　灰原出土遺物７（S＝1／4）

は平滑で、擦痕などの剥離防止措置を行った形跡は認められない。335は面取がやや雑で、屈曲した先端部は断面が扁平になっている。屈曲した先端部が短く、三足壺の足の可能性もある。

断面が円くなるもの（337～341）は、把手全体が上向きに湾曲すると考えられる。337は表面が基部から先端方向に向かうヘラケズリで仕上げられている。一方、338～341は表面がナデで仕上げられている。338の先端は尖っているが、339・340は丸くおさめている。339・340はいずれも体部片に付いた状態であるが、339が体部の中ほどに付く把手であるのに対し、340は底部に近い位置に取り付けられている。341は先端が縦方向につぶされ、平べったくなる。338・341には体部との剥離面が残るが、やはり平滑であり、擦痕などの剥離防止措置を行った形跡は認められない。



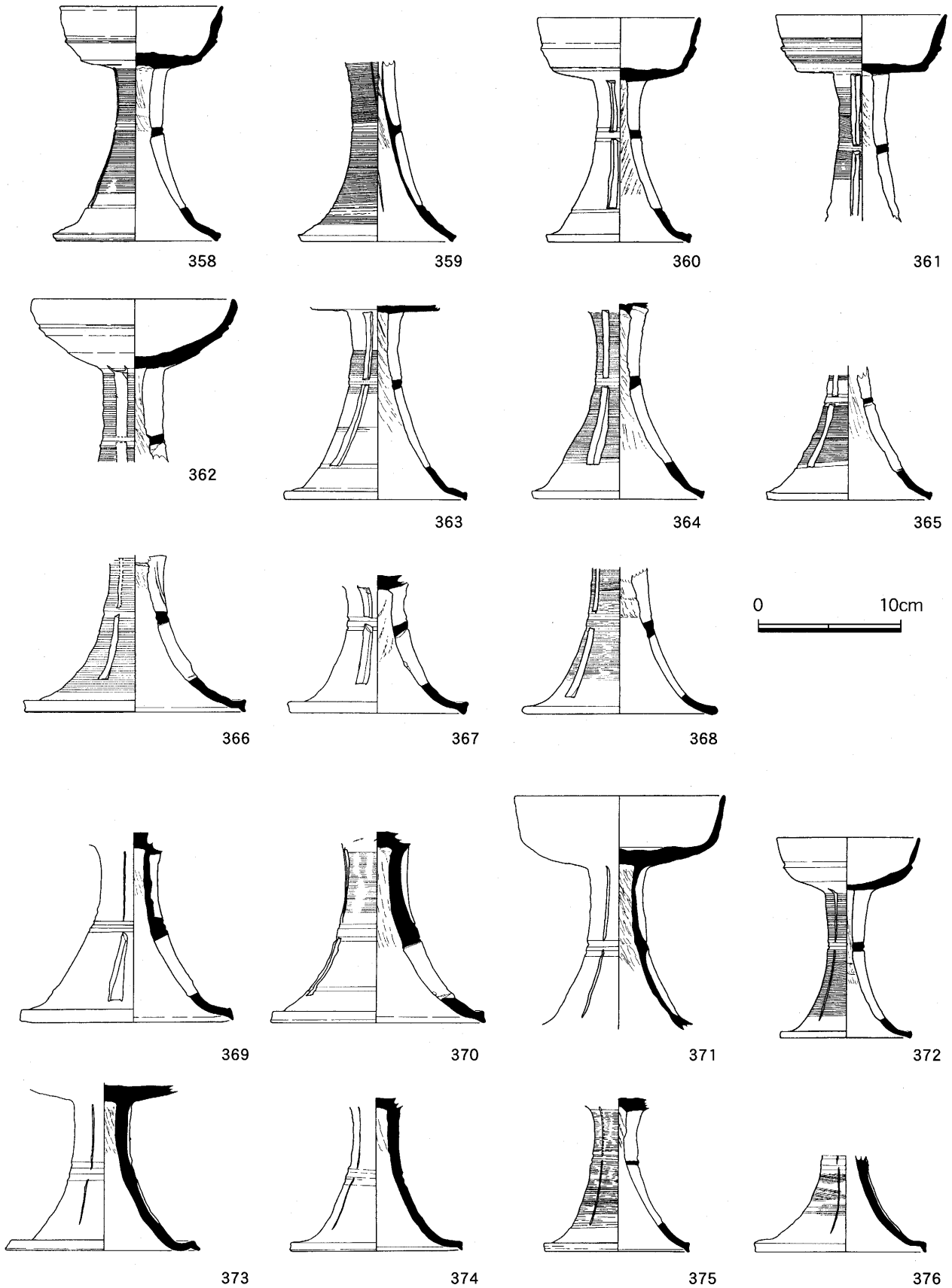
第23図　灰原出土遺物８（S＝1／4）

有蓋高坏（342～357）　有蓋高坏の蓋には342～345のように直径15cmを越えるものと、346・347のように若干小振りのものが存在する。大型のものはつまみの外周がしっかりと張り出している。342と343は肩部に1条の沈線がめぐり、343は天井部にカキメが施されている。小型の346・347はつまみの外周の張り出しが弱く、肩部に1条の沈線がめぐる。348のつまみは外周部が全く張り出さず、扁平である。349は若干ひずんでいるが、つまみが小振りで全体にのっぺりした形態である。

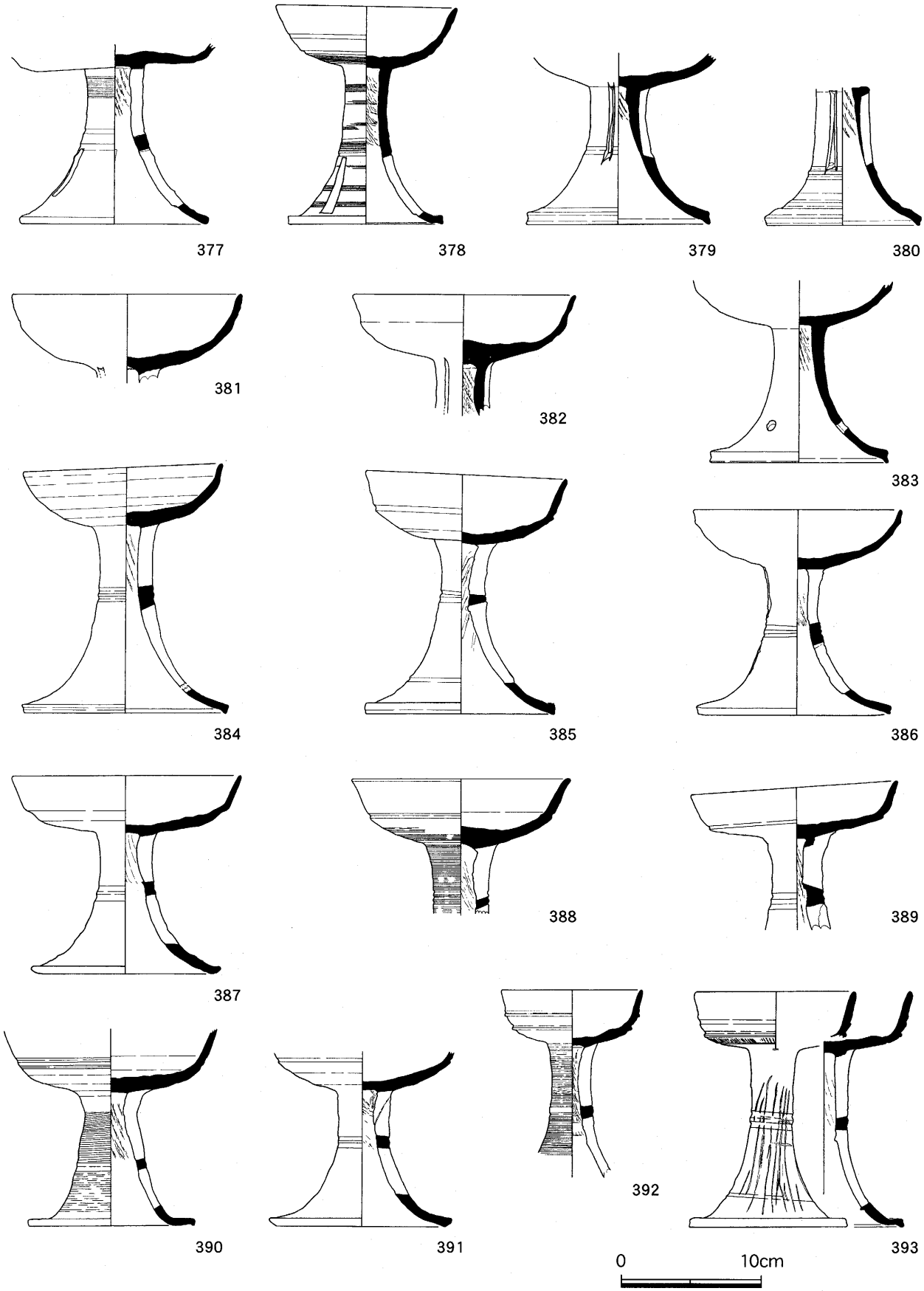
有蓋高坏で脚部の確認できるものは長脚の個体だけで、短脚の個体は確認されなかった。三方透かしのもの（350）と二方透かしのもの（351～354）があり、三方透かしのものは比較的少ないようである。

350は三方二段透かしの脚を持ち、脚端部は上方に若干折り返されている。坏部は大きくひずんでおり、正確に図化しがたい。

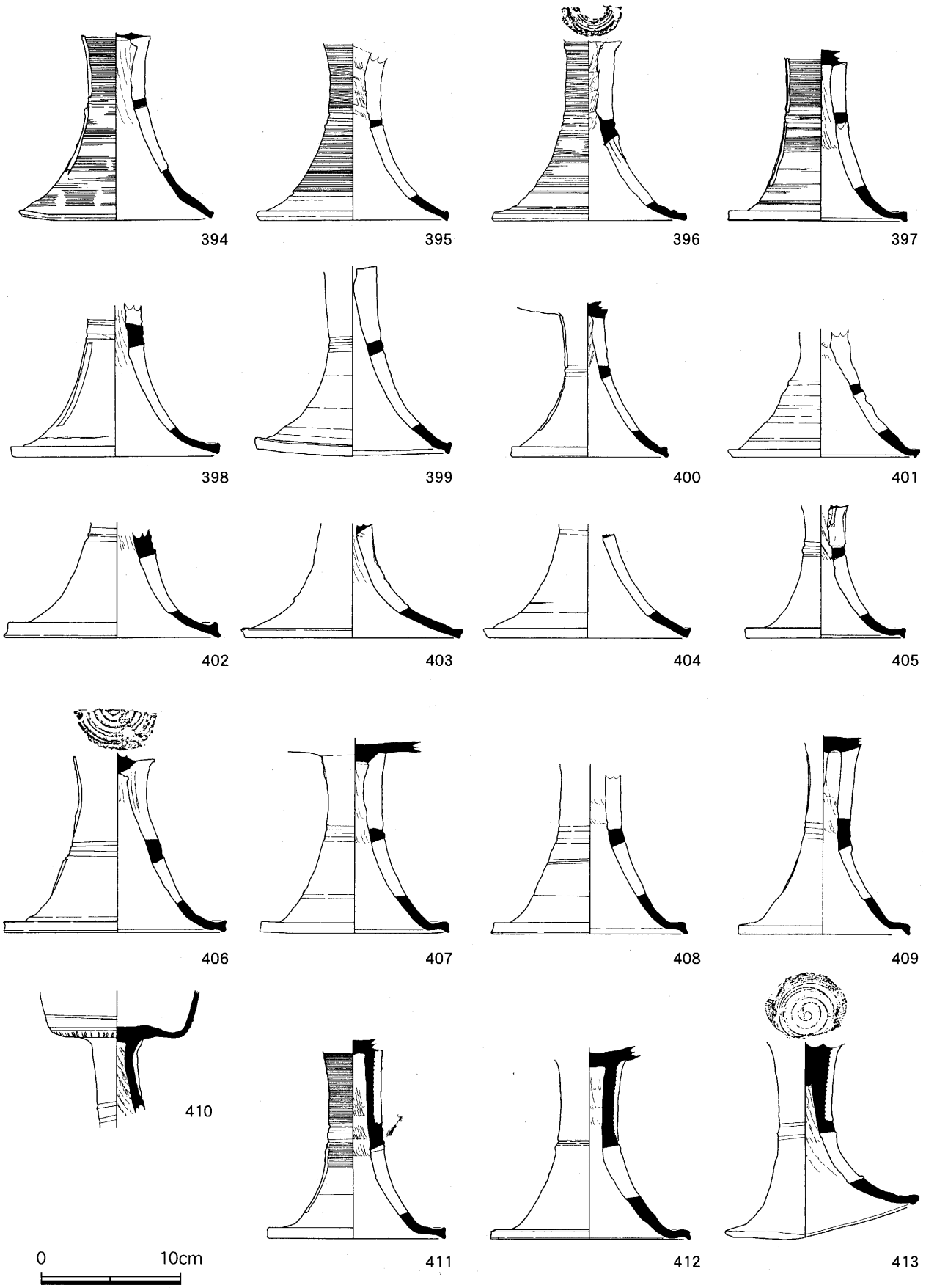
351～354は二方二段透かしの有蓋高坏である。351は上段の透かしが切り込みで、脚端部は下方



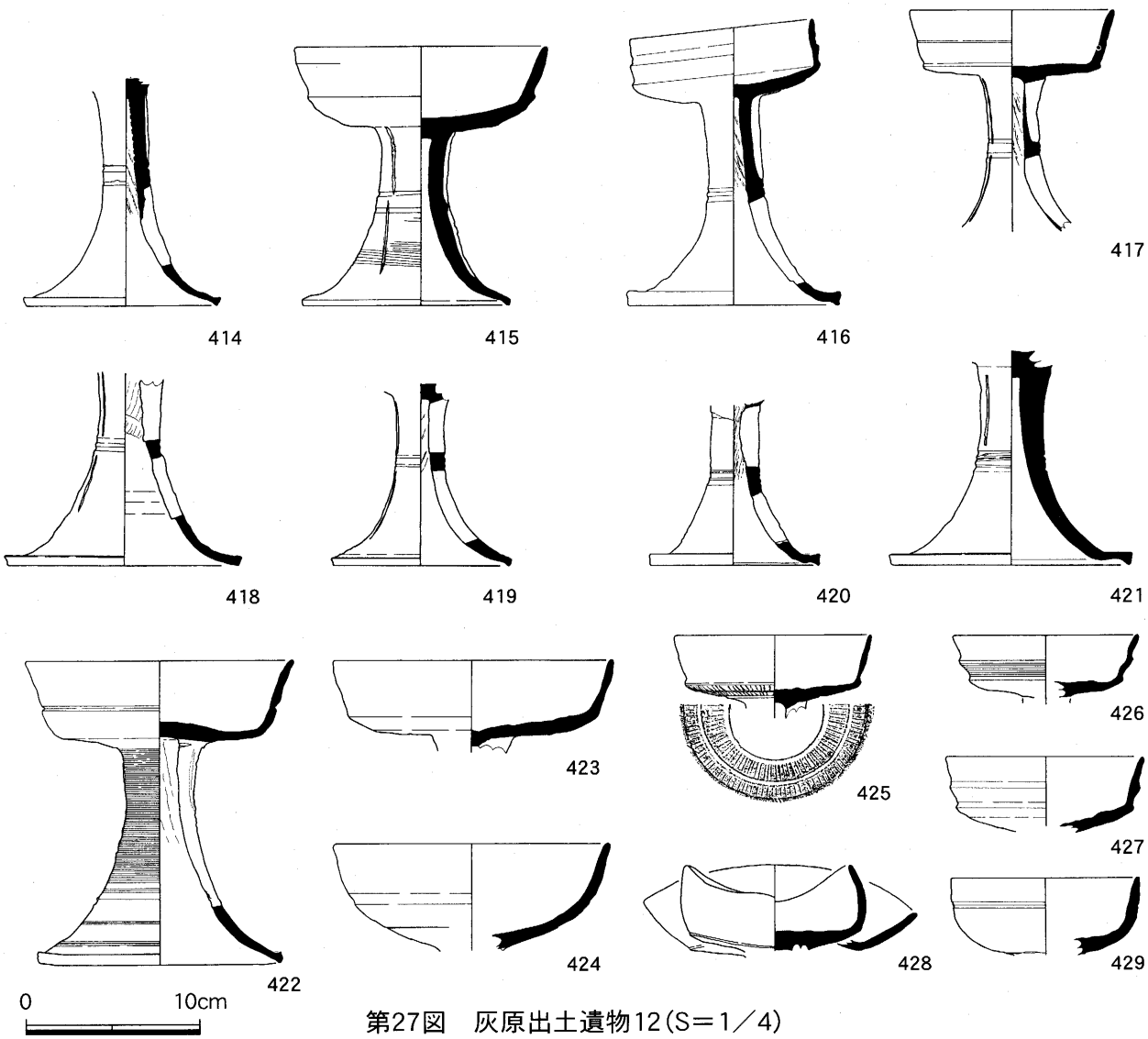
第24図　灰原出土遺物９（S＝1／4）



第25図　灰原出土遺物10（S＝1／4）



第26図　灰原出土遺物11(S＝1／4)



第27図　灰原出土遺物12（S＝1／4）

に拡張されている。352も脚端部を下方に拡張している。353は上段の方形透かしが内面にまで十分に達していない。354は坏部の作りが他と比較してしっかりしており、たちあがりも顕著である。

355～357は有蓋高坏の坏部である。355はやや小振りで、356・357は直径が大きくしっかりした作りである。

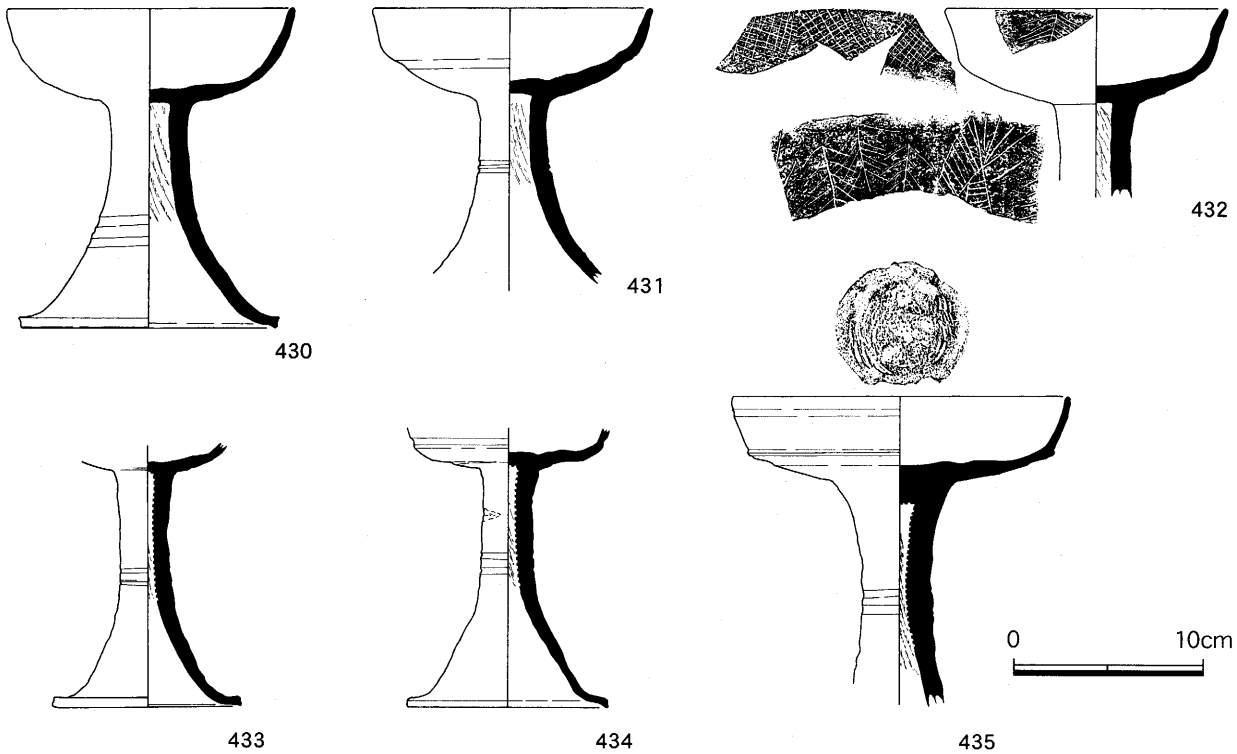
高坏（358～531）　358～435は長脚の高坏である。脚部の透かしで分類すると、二方透かしが最も多く、次いで三方透かし、透かし無しと続き、四方透かしは少ない。また、方形透かしとともに、その省力化形態とも考えられる切り込みが入る個体が多く存在する。極端な個体ではこの切り込みも浅い線刻になってしまっている。透かしについては、方形透かしと切り込みの組み合わせを次のように分類して以下の解説を行いたい。

1類・・・・上下段とも方形透かし

2類・・・・上段は切り込みで、下段は方形透かし

3類・・・・上下段とも切り込み

358・359は四方二段透かし、透かしは3類である。358の切り込みはすべて内側に達しているが、



第28図　灰原出土遺物13(S＝1／4)

359では内側に達していないものも認められる。358の坏部には1条の稜線がめぐり、底部と側部の境にも明瞭な稜線を持つ。両個体とも脚部外面に細かいカキメを施し、脚端部は外傾している。

360～383は三方透かしの高坏である。二段透かしのものでは、1類(360～368)がもっとも多く、3類(371～376)がそれにつぎ、2類(369・370)は少ないようである。3類はさらに、372・375のように切り込みが内面まで達するものと、374・376のように線刻となっているもの、中間的なものに分類できる。また、二段透かしであるが上段の方形透かしは一方向のみにしか開けられていない個体(377)、脚部にめぐる2条の沈線より下側にだけ方形透かしを施すもの(378)、逆に脚部にめぐる1条あるいは2条の沈線より上にだけ方形透かしを施すもの(379・380)がある。脚端部の形状は、透かしの形態と対応するようである。1類では外傾し上あるいは上下に拡張するもの(360・363～367)が多く、下段透かし下に沈線を施すものも多い。2類では内傾し上下に拡張する。3類では下方に拡張するもの(373～376)が多い。坏部は口径によって形態がわかれる。口径10～12cm程度の小型のものでは底部と側部の境に明瞭な稜線を持ち、360の坏部には1条の稜線、361では1条の突帯がめぐる。口径15cm程度の大型のものでは稜線を持たない坏形を呈する。362・372では1条の沈線がめぐる。378は側部に1条の沈線がめぐり、底部にはカキメが施されている。脚部を欠いているが、381は1類、382は2類あるいは3類と考えられる高坏の坏部である。

383は脚部の三方に円孔をあけた長脚の高坏である。脚部に沈線はなく、脚端部は下方に拡張されている。

384～420・422は二方透かしの高坏である。二段透かしのものも三方透かしと同様に、1類(384～409)がもっとも多く、3類(415～420)・2類(410～413)の順になるようである。3類が内面まで

切り込みが達するものと、415のように線刻となっているもの、中間的なものに分類できるのも三方透かしのものと同様である。また、二段透かしではあるが上段の一方向のみに切り込みを入れる個体(414)、基部から下方に縦長の方形透かしを一段だけ施す個体(422)がある。脚端部の形状はバラエティに富んでいるが、下方に拡張するものが多い。坏部はやはり口径によって形態がわかれるようである。口径の小さいものでは底部と側部の境に明瞭な稜線を持ち、側部に1条の稜線あるいは突帯を持つもの(392・393・416・417)が多く、口径の大きいものでは1条の沈線か稜線を持つ坏形のものが多い。393の坏部は底部外面には1条の沈線がめぐり、その外側にヘラ状工具によるキザミを施す。脚部の透かしによって分けられた片面には数条の条線が施されているが、ヘラ記号ではないようである。410は坏部の底部外面に2条の沈線をめぐらせ、底部と側部の境付近にヘラ状工具による求心状のキザミを施す。坏部と脚部の接合面に、接合沈線の反転圧痕が認められる個体(396・406・413)も存在する。接合沈線はすべての個体で行われたものではないようで、例えば394も接合面で坏部と剥離しているにも関わらず、渦巻き状突線は認められない。

421は一方透かし？の高坏である。脚部にめぐる2条の沈線のより上に1条の切り込みを入れている。切り込みは内面に達していない。脚端部は若干下方に拡張される。

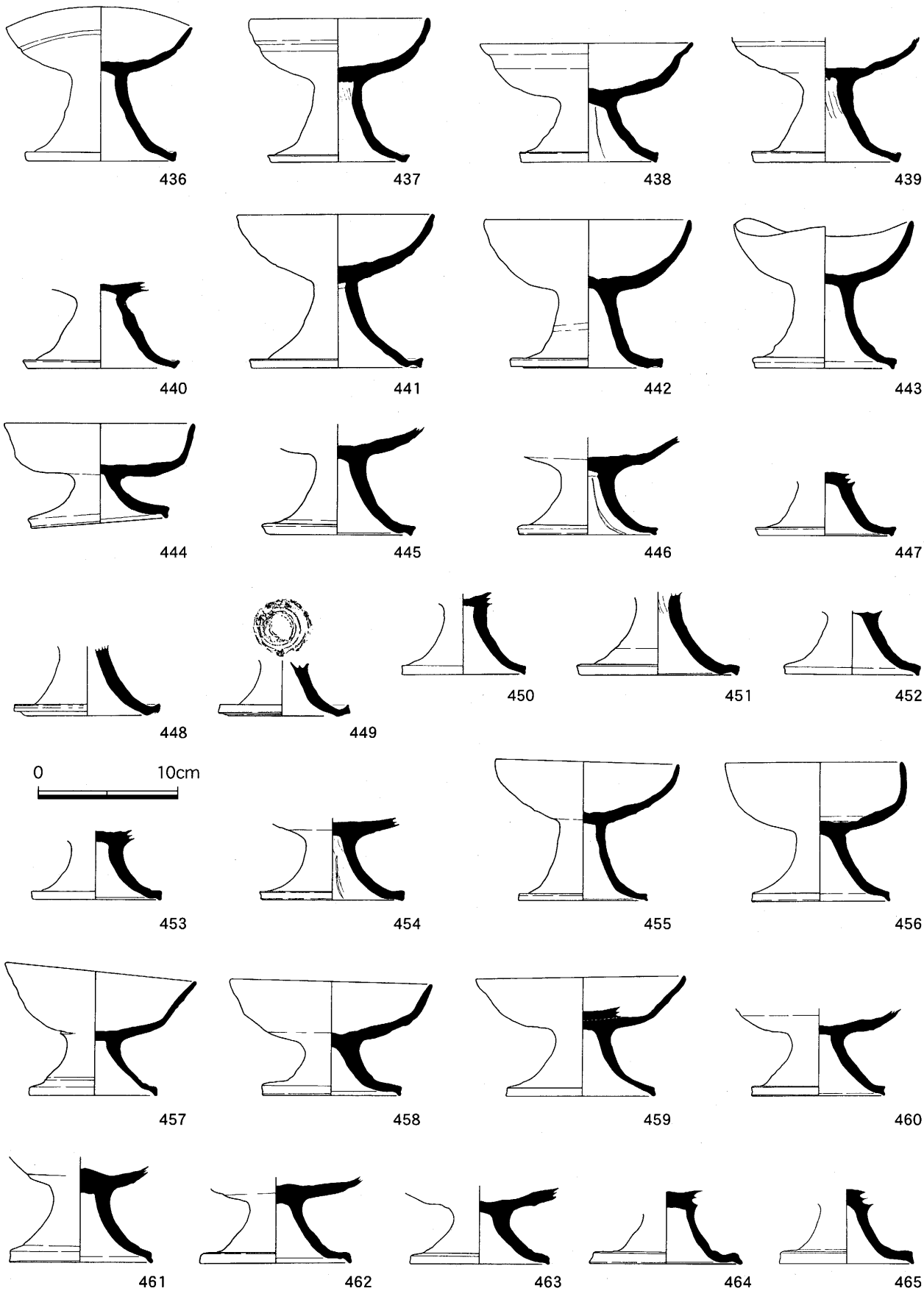
423～429は底部に透かしの痕跡があり、長脚の高坏の坏部と考えられる。423・425は二方透かしである。425の底部外面には2条の沈線をめぐらせ、ヘラ状工具による二重のキザミを施す。内と外のキザミは連続するものを沈線で分割したのではなく、別々に施されている。426～428は二方透かしの可能性が高い。426・427は外面に2条の稜線を持つ。424・429の透かしの数は不明である。

430～435は透かしの無い長脚の高坏である。430と431は形態・焼成ともによく類似しており、430の脚端部は外傾する。432は外面に線刻文様を施した特殊な個体である。坏部の残存部には葉脈状の文様1ヵ所と格子目の文様が3単位分確認できる。脚部は下半が失われているが、全周囲に文様が刻まれており、葉脈状の文様が3単位、そして鋸歯文状の文様が1ヵ所に刻まれている。433・434は脚部が非常に細く仕上げられている。脚端部は若干下方に拡張する。434の坏部には1条の沈線がめぐり、その上方に刺突文が施されている可能性がある。435の坏部はかなり大きく、側部と底部の境に1条の稜線を持つ。また、内面底部に同心円あて具痕跡が残っている。脚部は厚手である。

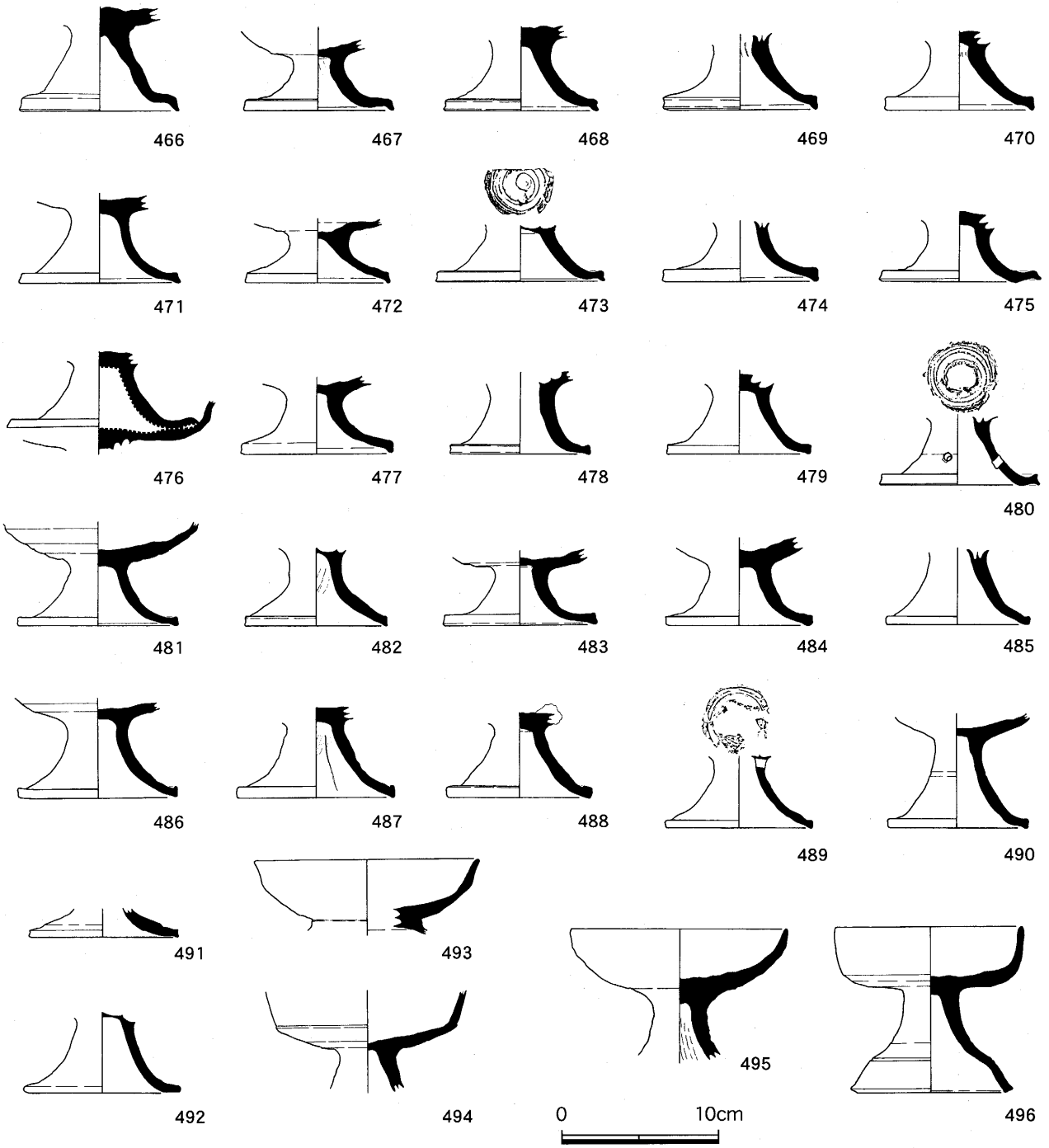
長脚の高坏には確実なヘラ記号は認められない。

436～496は短脚の高坏である。ただし坏部の接合していない個体については、脚付椀・脚付壺の脚の可能性を否定できない。

方形透かしを持つものは確認できないが、円孔を持つ個体(480：三方・489：二方)が存在する。脚端部の形状で分類すると、脚端部が外傾し上方に拡張するもの(436～440)、脚端部が外傾し下方に拡張するもの(441～454)、脚端部が内傾し下方に拡張する個体(455～484)、脚端部が内傾し上方に拡張するもの(485～487)がある。そのほかにも、端部断面が正方形状に肥厚されるもの(488)、丸く収めるもの(492)などがある。坏部は通常の坏形のものが多いが、1条の沈線をめぐらせるもの(436・437・439)、側部が底部からわずかに屈曲して開くもの(457～459)、494のように底部と側部の境に明瞭な稜線を持っているものなどがある。438は口縁部が一度屈曲して外側に拡がる特異な



第29図　灰原出土遺物14（S＝1／4）



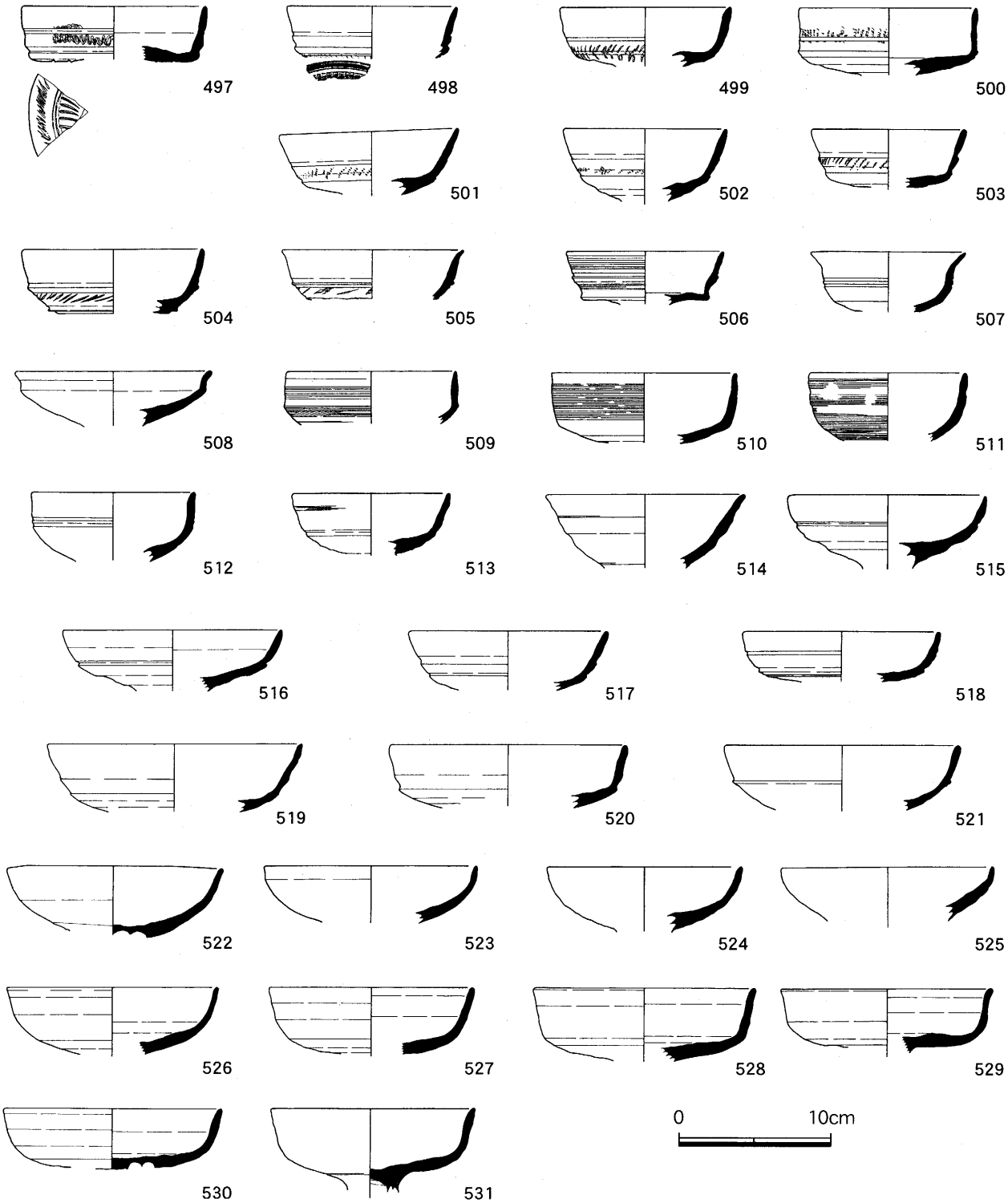
第30図　灰原出土遺物15（S＝1／4）

形状である。

442・490は脚部に1条の浅い沈線がめぐる。444は脚が著しく低く、坏部は底部から側部が比較的明瞭に立ち上がる。

476は長脚三方透かし（2あるいは3類）の高坏坏部の上に融着している。長脚の高坏が同時に製品として焼成されたものか、単に焼台として流用されたものかは判断できない。

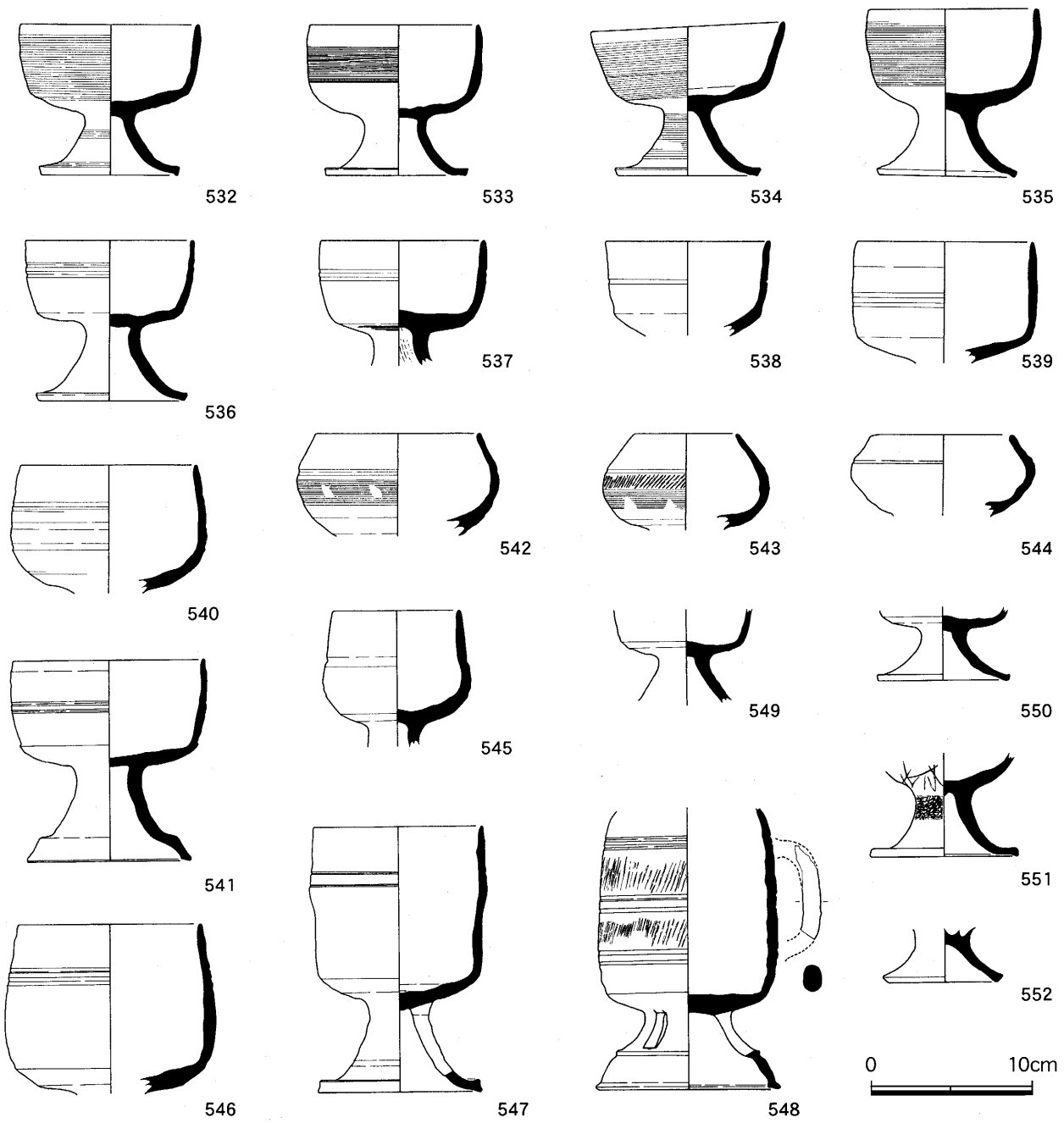
491は脚端部を下方にわずかに拡張する。下方で急に開く形状の脚と考えられるが、高坏のものかどうかははっきりしない。



第31図　灰原出土遺物16(S＝1／4)

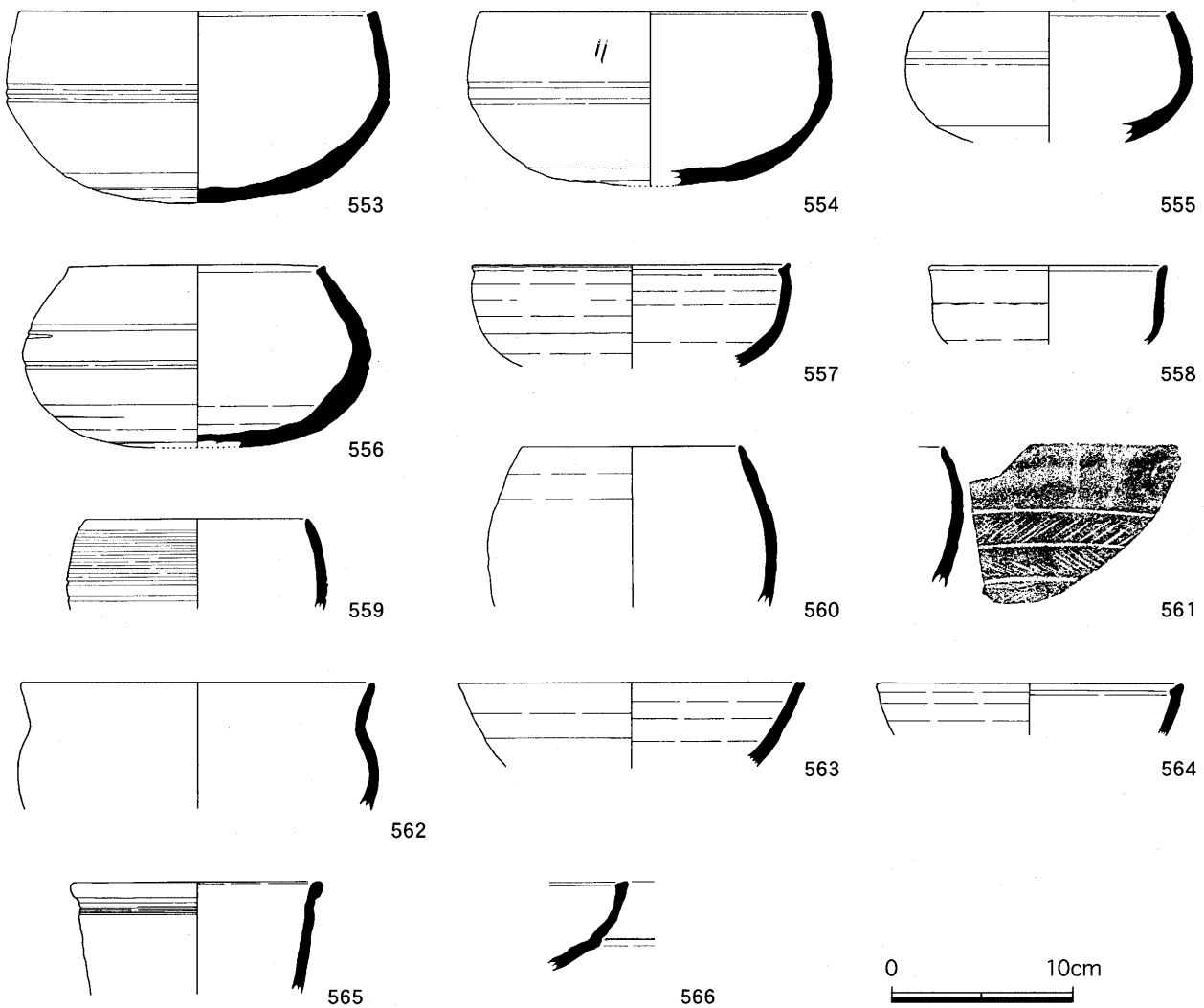
493は他と比較して基部径の大きなものである。脚端部の形状は不明である。496の脚部は1条の沈線を境に屈曲し、端部が面取りされている。坏部との接合面に、長脚の高坏にも見られる接合沈線の反転圧痕が認められる個体(449・473・480・489)も存在する。

ヘラ記号と考えられるものとしては、438・446・454・487の脚部内面に1～2条の線刻が認められる。



第32図　灰原出土遺物17(S＝1／4)

497～531は高坏の坏部である。497～521までは長脚の可能性が高く、口径10～12cm程度のものは装飾性に富んだものが多い。497は外側面にヘラ状工具による粗雑な波状文を施した後、2条の沈線を入れている。また、外面底部をやはり2条の沈線で区画し、ヘラ状工具による二重のキザミを施している。498は外側面に2条の稜線を持ち、外面底部には櫛状工具による刺突文を施す。499～503は外面に櫛状工具による刺突文を施した後、1～2条の沈線を施している。504・505はカキメ工具小口による刺突文を施している。507・508は口縁部が屈曲して外側に開く形態である。516～521はやや大型で、外面に1～2条の沈線あるいは稜線を持っている。522～531は長脚か短脚か判断できない。527～531は底部から側部がやや明瞭に立ち上がる。



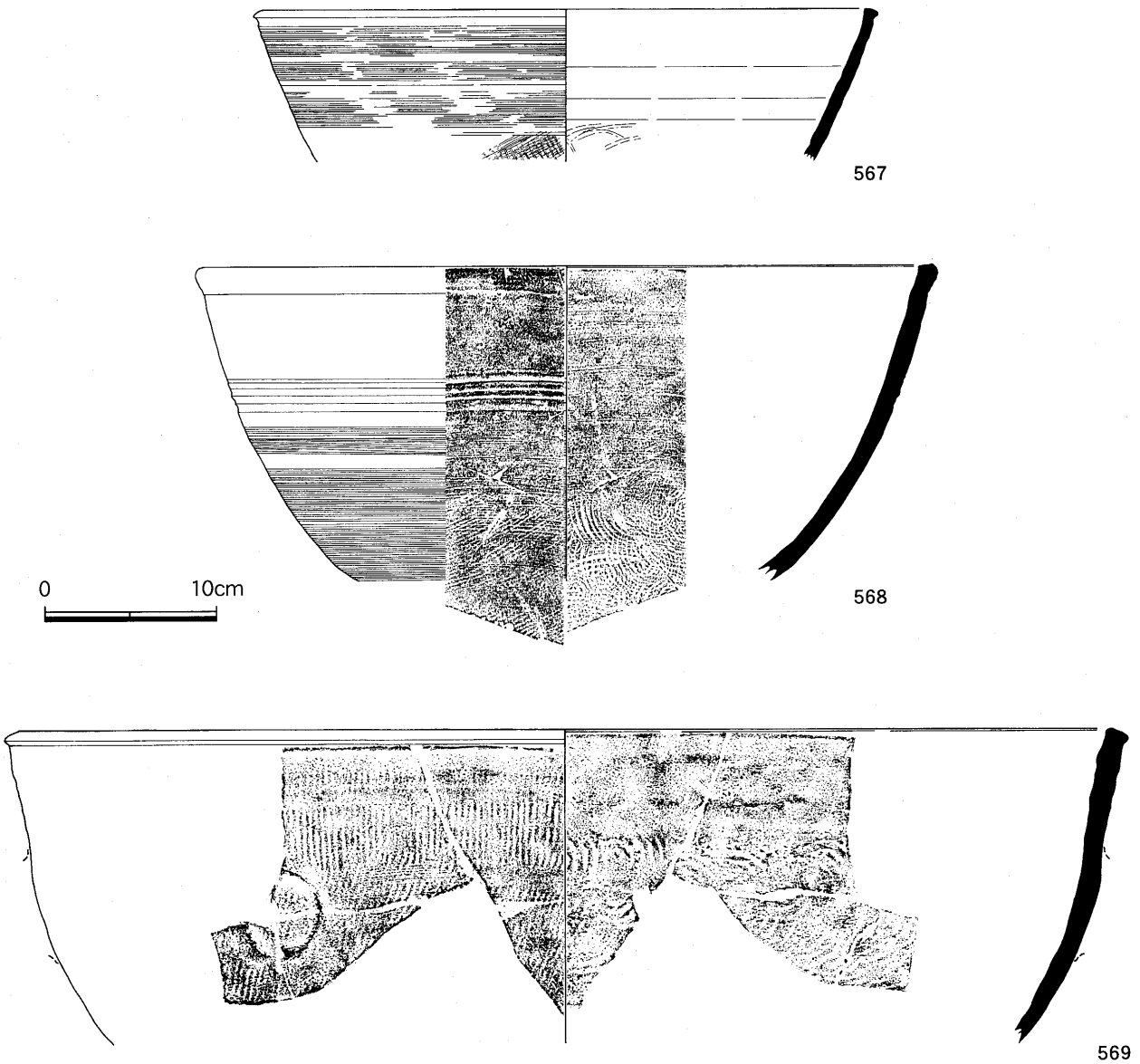
第33図　灰原出土遺物18(S＝1／4)

脚付椀(532～552)　532～541は椀部径に対して椀部の高さの低い脚付椀である。532～535は外面にカキメを施し、537～541は1～2条の沈線を施す。脚端部は外傾するもの(533・534・536)と下方に拡張するもの(532・535)が認められる。また、541の椀部は底部と側部の境に稜線を持ち、脚も途中で屈曲している。

542～544は口縁部が内傾するものである。543は外面に2条の沈線を施し、その間にカキメ工具小口による刺突文を充填している。

545～548は椀部径に対して椀部の高さの高い脚付椀である。547の脚部は二方に方形透かしをあけ、端部は内傾し上下にわずかに拡張する。548は坏部外面に輪状の把手の剥離した痕跡が残る。把手として図化した破片は直接接合しないが、焼成等が類似しており同一個体の可能性が高い。椀部外面を2条一組の沈線3単位によって区画し、カキメ工具小口による二段の刺突文を充填している。また、脚部は三方透かしで屈曲している。

549～552は脚付椀の脚と考えられるものである。とくに551は脚部に串状工具による刺突、坏部外面にはヘラ描の条線が施されるなど特異である。

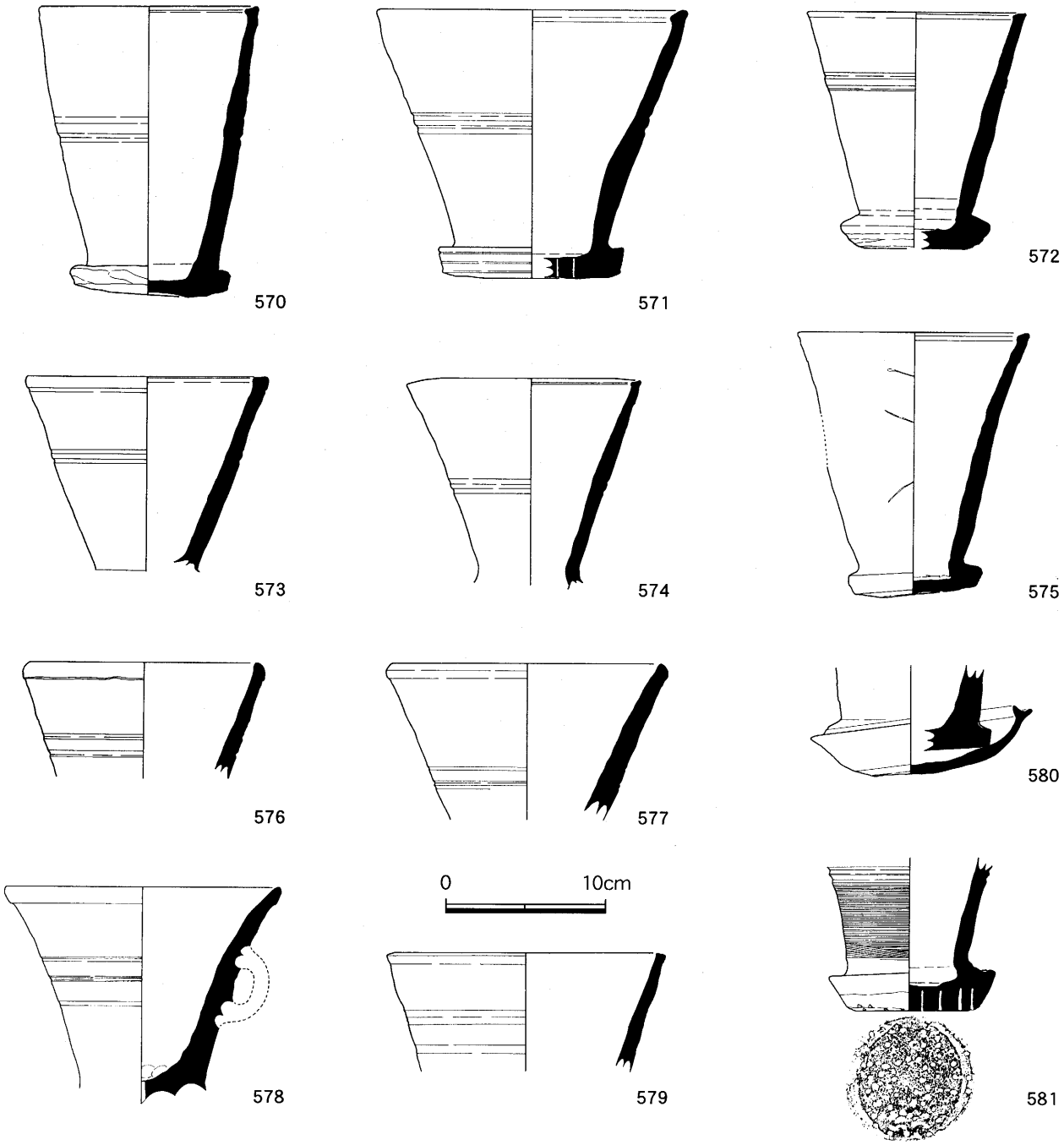


第34図　灰原出土遺物19(S＝1／4)

鉢(553～569)　553～555は、555が一回り小振りなことをのぞけば形態的によく似ている。外面に2条の沈線がめぐり、口縁部がわずかに内傾し、端面をもつ。もとになった銅椀の形状をよく写していると言える。556は断面がやや厚手で、553～555と比較して作りが粗雑な印象を受ける。

557～566は小破片から復元したもので、形態もさまざまである。557・558は浅めで口縁端部をやや斜上方に引っ張る。大型の短頸壺の蓋の可能性もある。559～560は口縁部が狭まる形態のものである。561はひずみが著しく、形状が復元できないが、外面に3本の沈線を施し、その間をカキメ工具小口による刺突文で充填している。562は口縁部が一度屈曲して外側に開く形態である。565は口縁部を肥厚している。

567～569は大型の鉢と考えられる。568は作りが丁寧で、器台の受け部の可能性が高いが、脚になる可能性のあるものが確認されていない。569には径5cm程度の把手の剥離した痕跡が残っている。盤の可能性もあるが、底部が不明である。



第35図　灰原出土遺物20(S＝1／4)

ヘラ記号は554に認められる。

捏鉢(570～581)　口縁部の形状から3種類に分類できる。口縁端面が内傾しやや内側に拡張するもの(570～575)、口縁部外面にわずかに厚くし、端部をやや内側上方に尖り気味にするもの(576～578)、口縁端面が外傾するもの(579)がある。575以外の個体は外面に2～3条の沈線をめぐらせている。底部に串状工具で孔を開けるもの(571・578・581)と開けないものがある。578は輪状把手の剥離した痕跡が残り、底部内面も丸底状を呈すなど他と異なっている。

壺(蓋)(582～624)　582～596は何の蓋かは確認できない。直径が13～15cmであることから長頸壺か椀の蓋ではないかと推定される。つまみを持つもの(582～586)と持たないもの(590・593～

596)があり、また、側面観では真っ平らなものと若干ふくらみを帯びたものがある。582～585はつまみを持ち、平面的な形態のものである。586はつまみを持ち、若干ふくらみを帯びている。587～592はつまみの有無がはっきりしない個体である。588は身の口縁部分が融着しているが、わずかであり器種を確認はできない。590は若干ふくらみを帯びており中心部を欠失しているが、おそらくつまみは持たないと考えられる。593～596は平面的な形態で、つまみを持たない。

595・596にヘラ記号が認められるが、その全形は不明である。

つまみの有無にかかわらず、こうした平面的な形態の蓋ついては他に類例を確認することができなかった。

短頸壺(597～649)　597～624は短頸壺の蓋である。口縁端部を外側に拡張するもの(597～610)、外側に拡張しないが端面を持つもの(611～617)、丸くおさめるもの(618～624)がある。597・611などは若干大型で、610・616などのような小型のものもある。天井部と側部が比較的明瞭に屈曲するものがほとんどであるが、623・624は坏蓋と同様に断面のカーブが緩やかである。

短頸壺は概して器形の変化に乏しいが、肩部に1～2条の沈線を施すもの(626・629・630・641)、カキメを施すもの(626・635・639)などがある。625は底部の内外面にタタキ痕が残っている。627の底部内面には突締痕が残っている。632は口頸部に明瞭な稜線が存在する。636・637・640は口頸部のたちあがりが貧弱で、焼成もよく類似していることから、同時に焼成されたものである可能性がある。

646・647は器形が小振り、口縁部のたちあがりがやや大きく、無蓋の可能性が高い。648は口縁部に受け部を持つ独特の器形である。

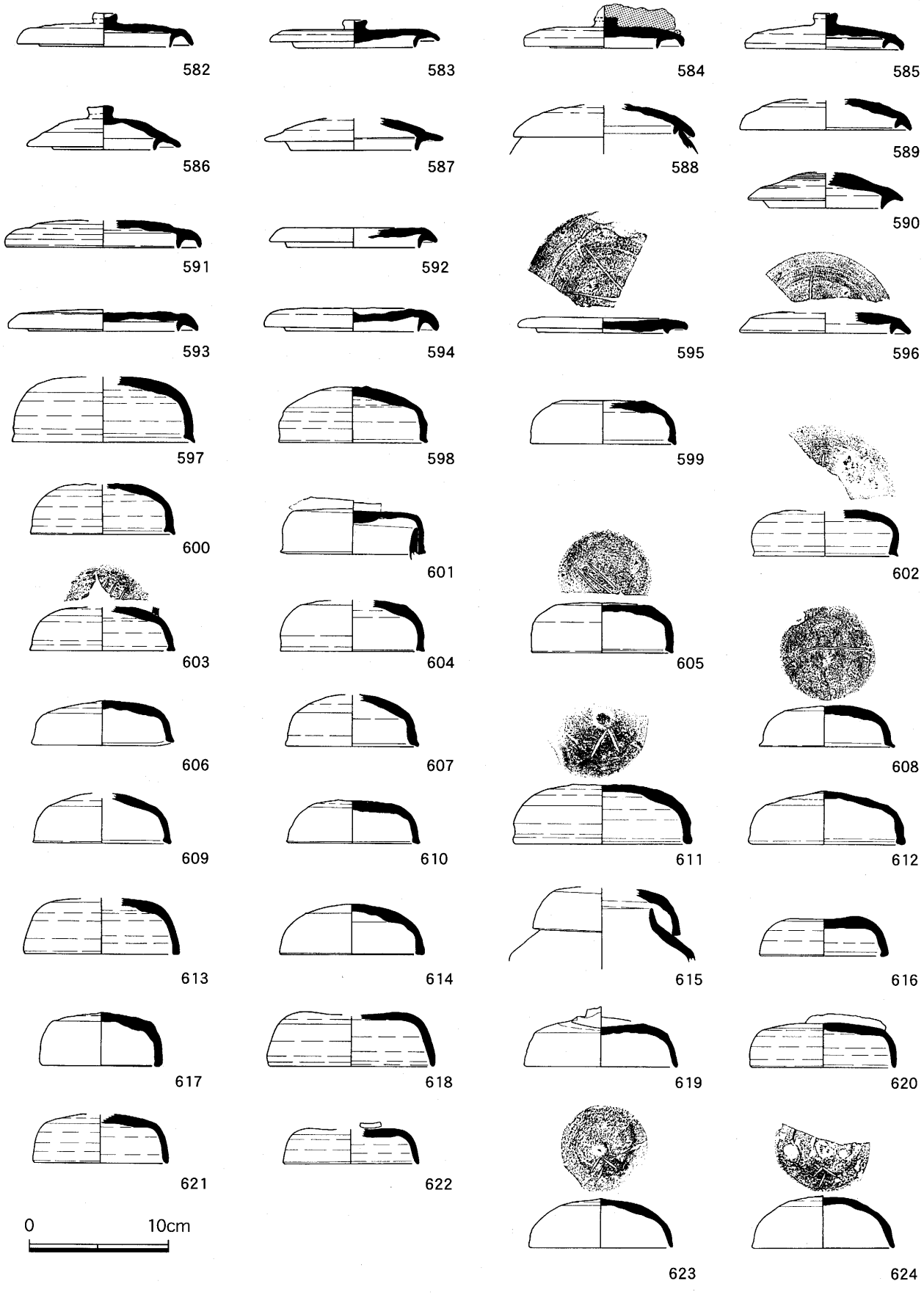
649は大型の短頸壺で、口縁端部に面を持ち、若干外側上方に拡張する。口頸部と肩部にそれぞれ2条の沈線を持ち、有蓋である可能性が高い。

ヘラ記号は蓋・身共に4種類以上が認められる。

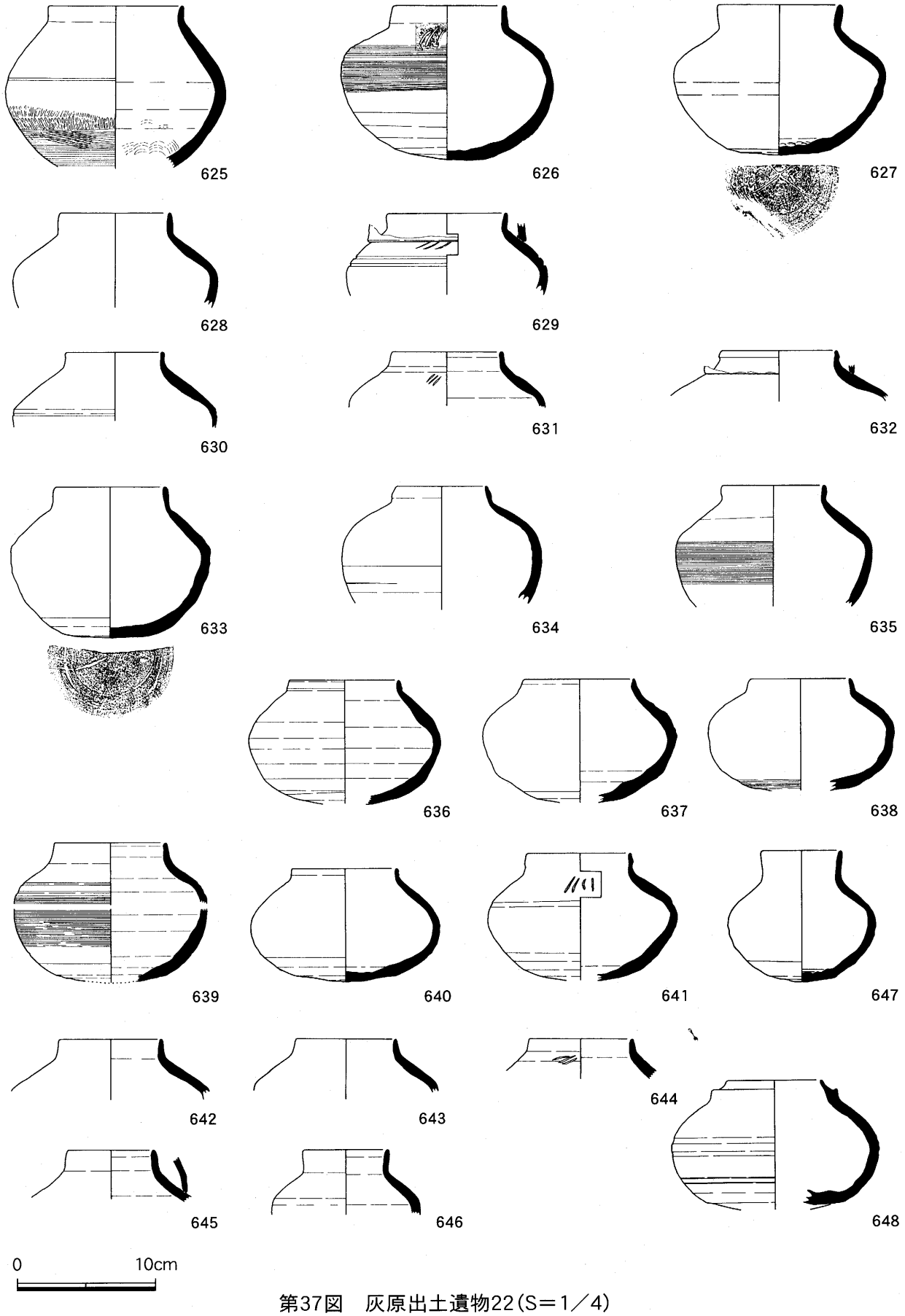
壺(650～677)　650～657は口頸部が「く」字状に外側に開く形態の壺である。端部を内側上方に拡張するものが多いが、652・657のように丸くおさめるものもある。650・651・655は肩部に数条の沈線を施し、その間をカキメ工具の小口による施文で充填している。654・656は体部にタタキ痕を残しており、特に656の内面ではあて具痕を回転ナデによってナデ消していることがわかる。656では口頸部が大きく開き、肩部が明瞭に屈曲しているのも特徴である。

658～662は口縁端面が内傾し、若干内側に拡張する形態の壺である。658は肩部に2条の沈線を施し、その間をヘラ状工具による施文で充填している。660は内面底部に底部叩き出しの同心円タタキ痕を残し、外面はカキメ調整が施されている。661の体部には1ヵ所だけ内外面にタタキの痕跡を残すが、その意図するところは理解できない。662はほぼ球形に近い体部を持つ。肩部に2条の沈線を施し、その間をカキメ工具小口による刺突文で充填している。

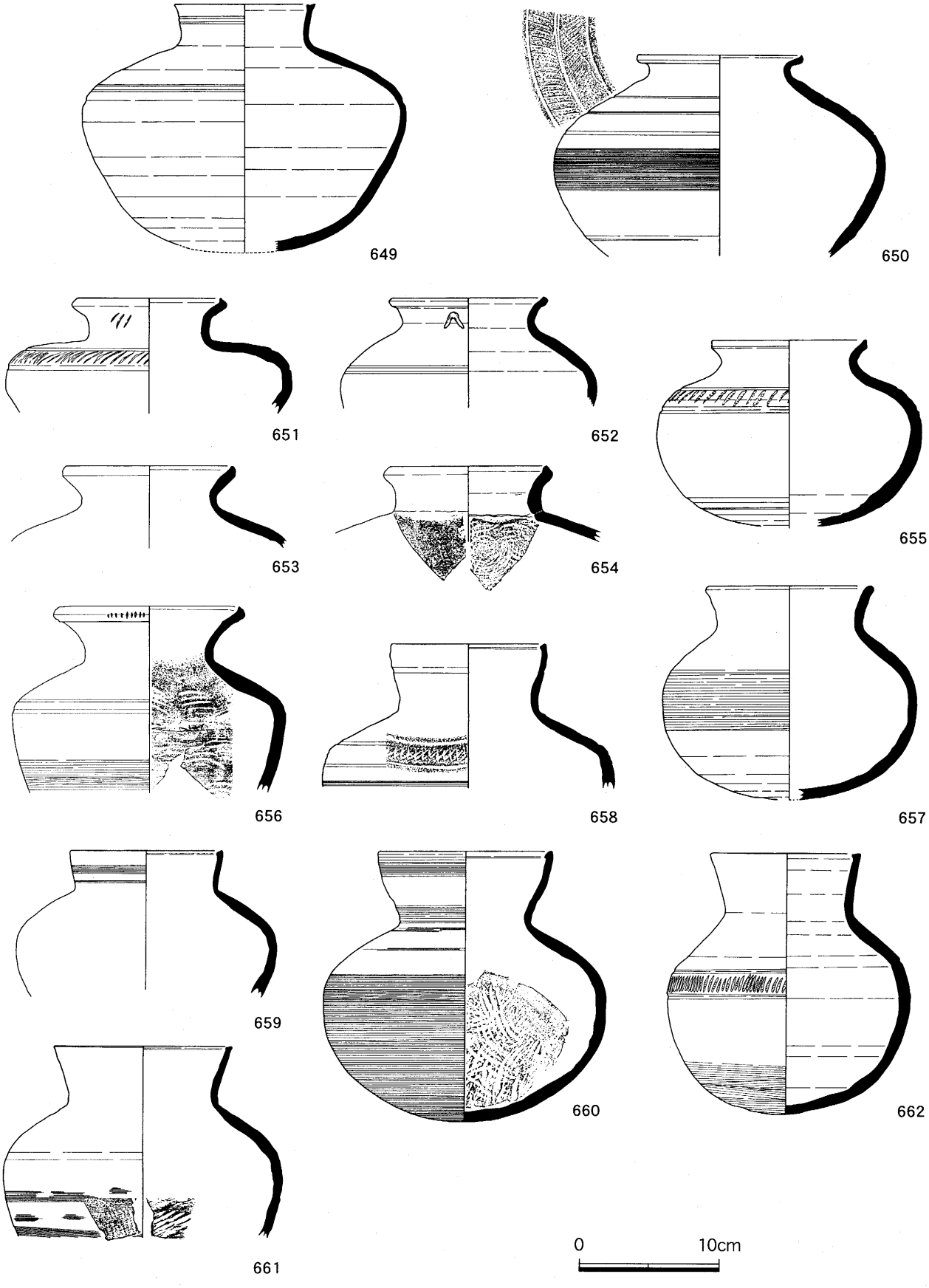
663～667は肩部に文様を施した壺の破片である。663は肩部に2条の沈線を施し、その間を櫛状工具による刺突文で充填している。664は櫛描波状文を施している。壺・甕を含めて櫛描波状文を施す個体はこれと、器種不明の破片1点のみで、他の窯では多数が認められる施文方法が寒田窯跡群4号



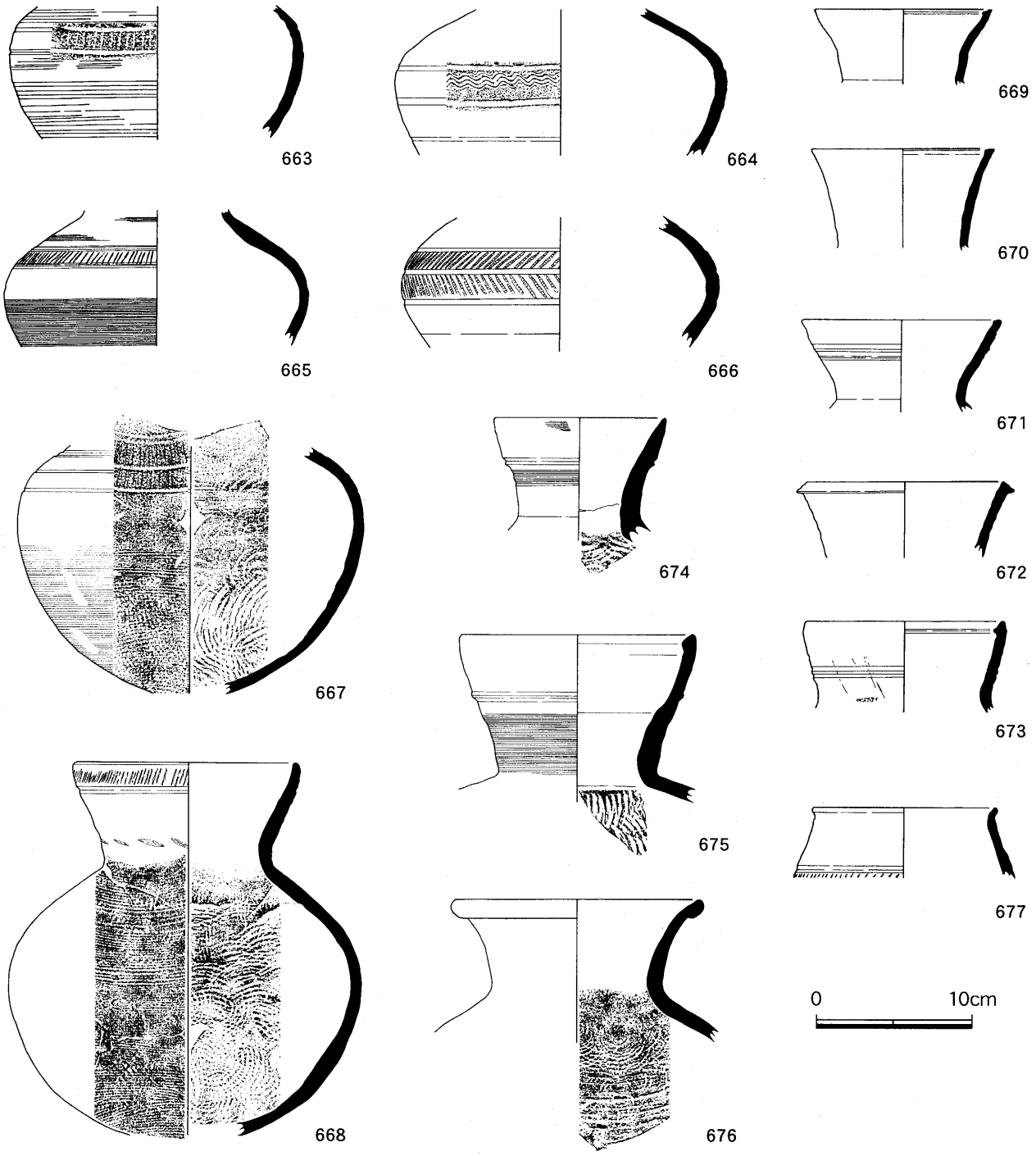
第36図　灰原出土遺物21(S＝1／4)



第37図　灰原出土遺物22（S＝1／4）



第38図　灰原出土遺物23（S＝1／4）

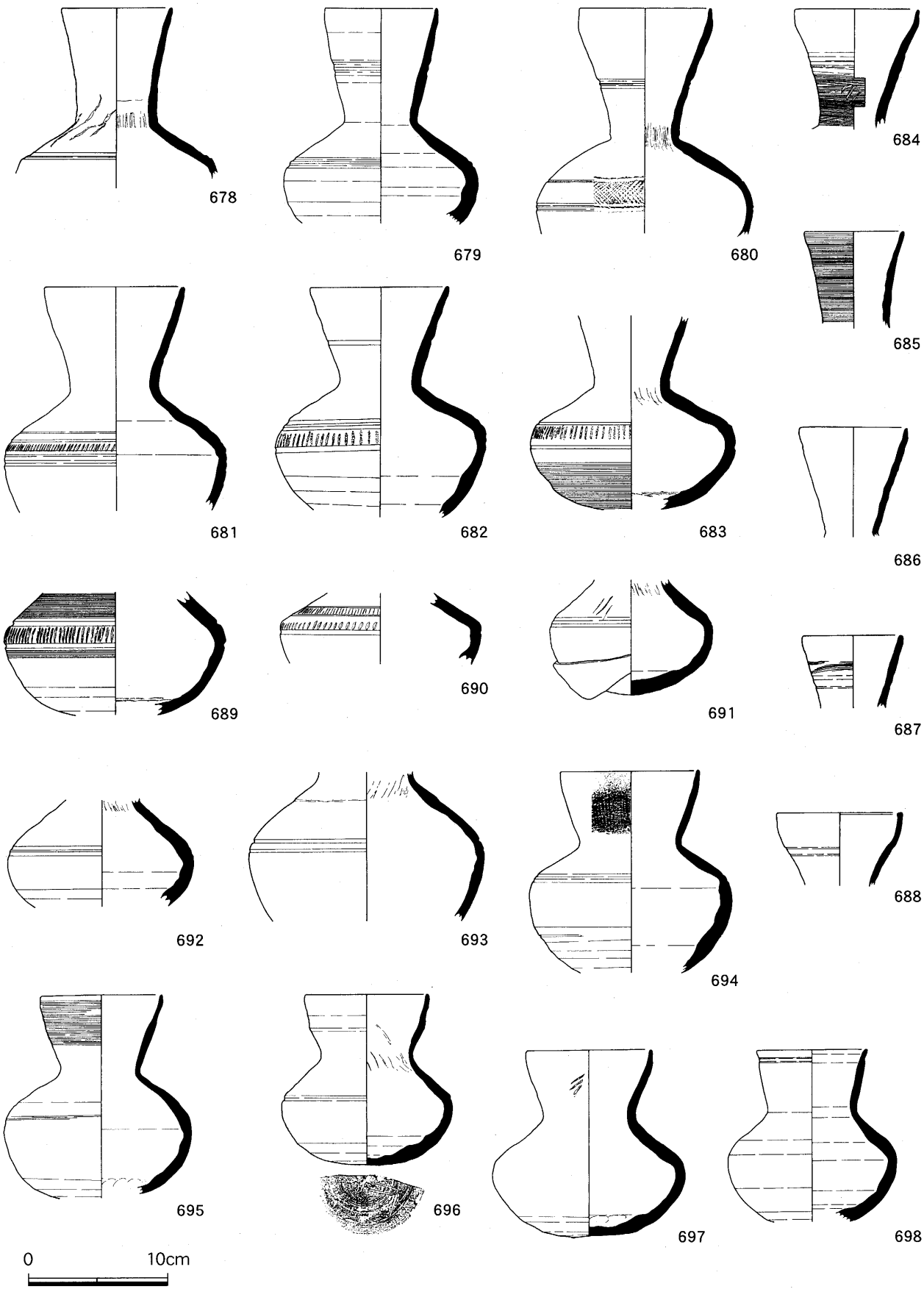


第39図　灰原出土遺物24(S＝1／4)

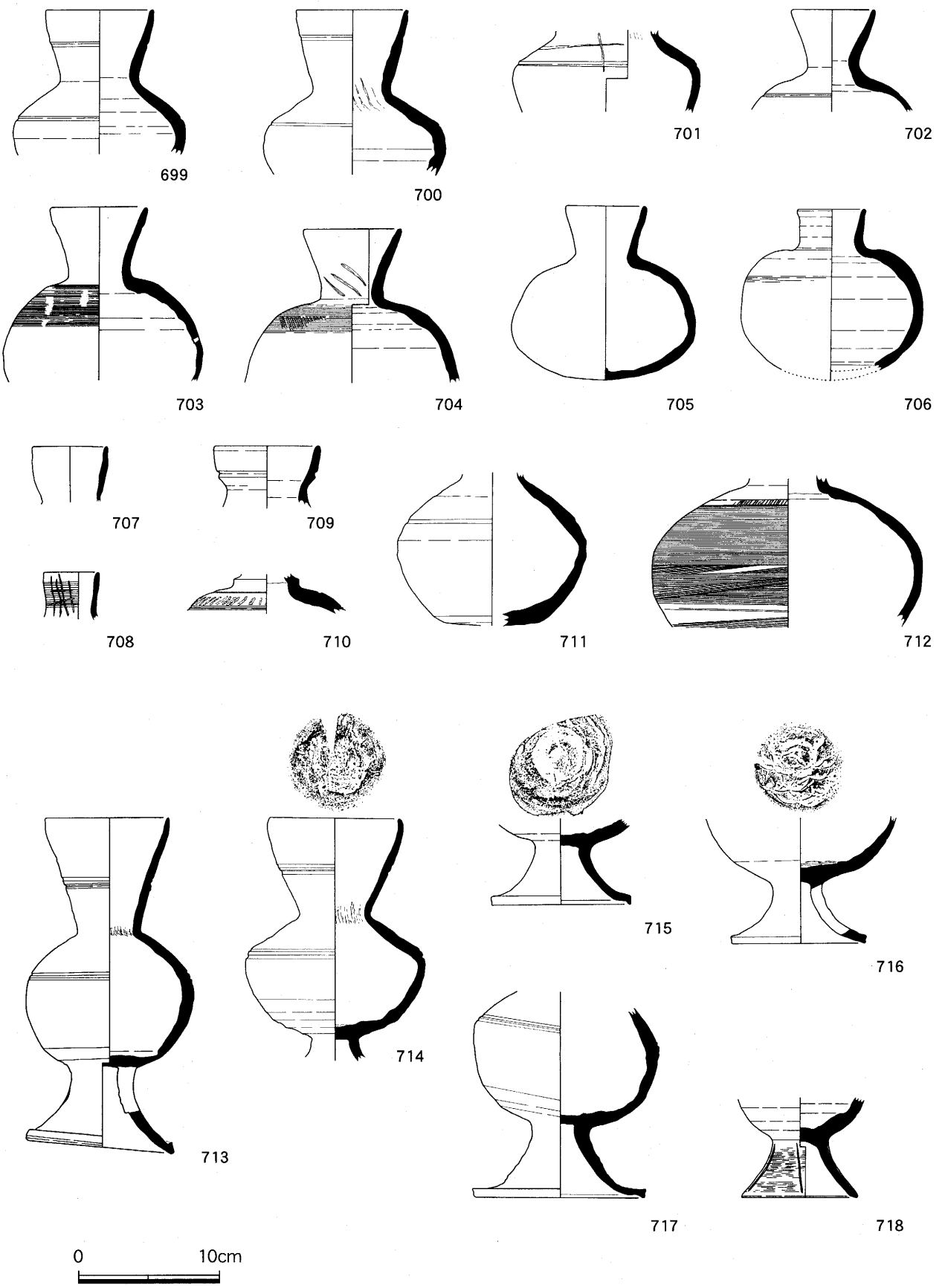
では少数派であると言えるだろう。665・666はカキメ工具の小口による刺突文を施している。667は体部下半にタタキ痕を残し、肩部には櫛状工具による刺突文を二段に施している。

668は広口壺である。口縁端部は丸くおさめ、口縁部外面に1条の沈線を施し、その上にカキメ工具の小口による刺突文を施している。

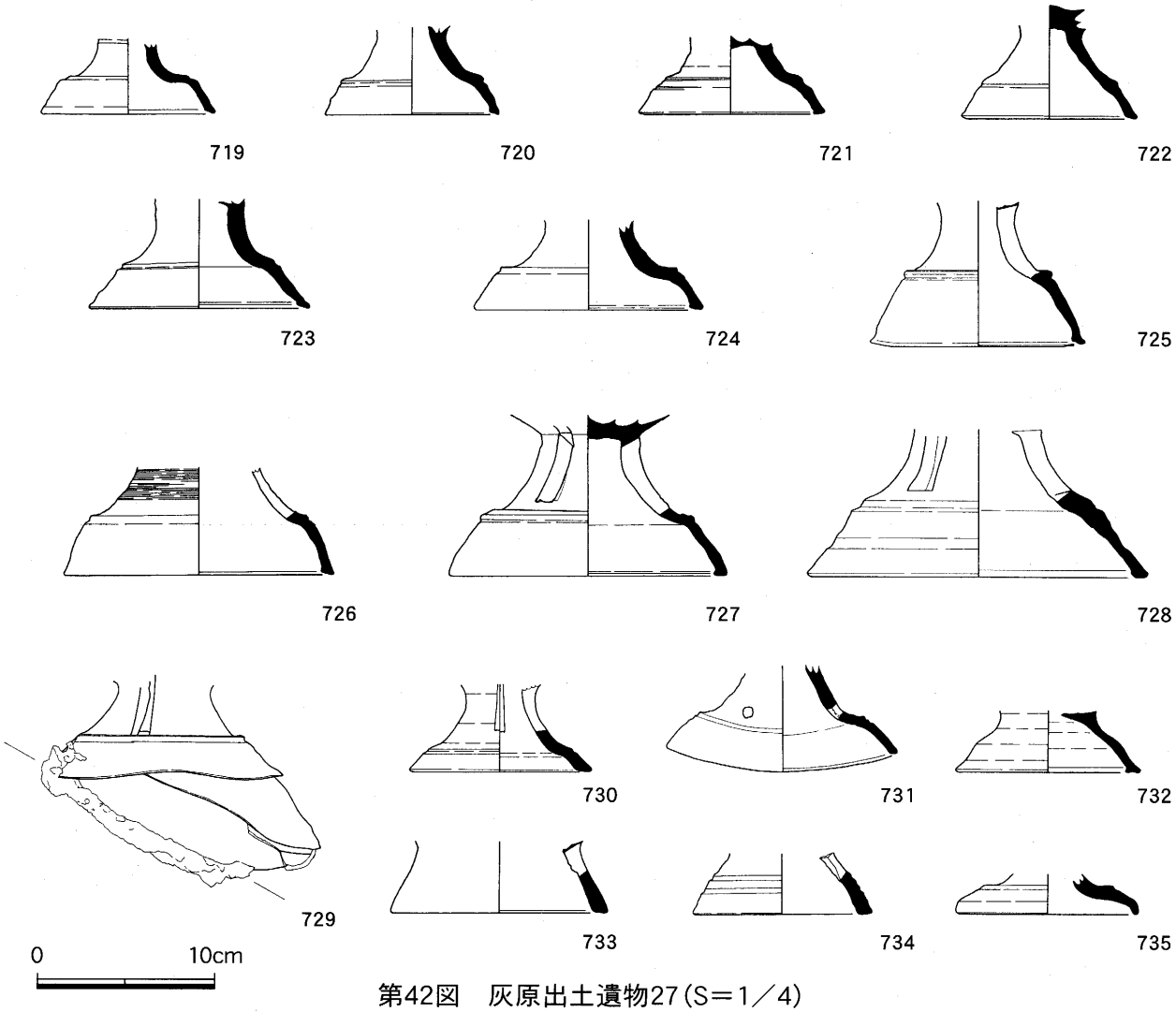
669～676は壺の口縁部である。669・670は口縁端面が内傾し、若干内側に拡張する。671は2条の沈線をめぐらせている。672は口縁端面が外傾し、外側に拡張する。673は基部近くにタタキ工具



第40図　灰原出土遺物25（S＝1／4）



第41図　灰原出土遺物26（S＝1／4）



第42図　灰原出土遺物27(S＝1／4)

の当たった痕跡が残る。直口甕の口縁部である可能性もある。674・675は口頸部にカキメを施す。674は沈線と組み合わされた突線をめぐらし、端部はやや尖り気味である。675は1条の突線をめぐらせ、口縁端面が内傾する。体部に若干のふくらみがあり、把手を持つ可能性がある。676は口頸部が大きく開き、口縁部を肥厚する。

677は口縁部を若干外側に折り曲げる無頸壺である。胴部に沈線を施し文様を刻んでいるが、小破片のため全容は不明である。

ヘラ記号は650～652・656に認められる。650のヘラ記号は欠損のため全形が不明だが、比較的複雑な形のようである。656の口縁部のキザミ目もヘラ記号の一種と考えられる。

長頸壺(678～701)　底部が不明なものについては、脚が付く可能性は否定できない。基部径に比して口頸部の高いもの(678～686)とやや低いもの(694～700)が認められる。口頸部には1～2条の沈線を施すものが多く、基部内面にはシボリ痕を残すものがある。680・684では口縁部が若干、内側に屈曲している。体部は肩の張った形状のものが多く、697・698以外は肩付近に1～3条の沈線を施している。680～683・689・690では肩部の沈線間を文様で埋めている。680はヘラ状工具によって斜格子文を施す。その他はカキメ工具の小口による施文を行うもの(681・689・690)と、櫛状工

具による刺突文を施すもの(682・683)に分かれる。683・689・695・697の底部内面には突締痕が認められる。

ヘラ記号は4種類以上が確認できる。

細頸壺(702～709・711・712)　702～706は頸の細い壺である。703は空気抜孔が残り、風船技法で成形されていることがわかる。705・706は閉塞部を底部に持ち、705が回転絞り閉塞、704が円盤閉塞を行っている。

707～708は細頸壺の口縁部と考えられる。707の基部は厚さ2㎜弱と極めて薄い。708は外面にカキメを施した後、縦4条・横2条の線刻を施しているが、ヘラ記号ではないようである。709は外面に1条の沈線を施し、やや屈曲している。

711・712は細頸壺の体部と考えられるが、長頸壺の体部である可能性も否定できない。711は体部に1条の沈線を持ち、ややタマネギ形の器形を呈す。712は基部に閉塞円盤の痕跡を残し、三段構成の壺である可能性が高い[(2)]。カキメ調整範囲の上端付近にカキメ工具小口による刺突文を施すが、一周しない。

ヘラ記号は704に認められる。

脚付長頸壺(710・713～718)　710は基部に段を持ち、体部上面に櫛状工具による刺突文を施す。他遺跡の例から脚付長頸壺の基部付近と考えられる[(3)]。

713・714は口縁部と体部に2条の沈線を施し、基部内面にシボリ痕を残す。713の体部は球形に近く、脚部は二方に切り込みを入れ、脚端部は上方に拡張する。714の体部はそろばん玉形に近く、底部内面に突締痕を残す。口縁部はひずみが著しく正確に図化しがたい。715・716は底部内面に突締痕があることから、脚付長頸壺の下半部と推定される。715は脚端部を下方に拡張する。716は切り込みを一方向にのみ施している。717は脚部に対して体部が傾いている。脚端部は外傾し、下方にやや拡張する。718は脚端部があまり開かず、外面の五方向に線刻を施す。

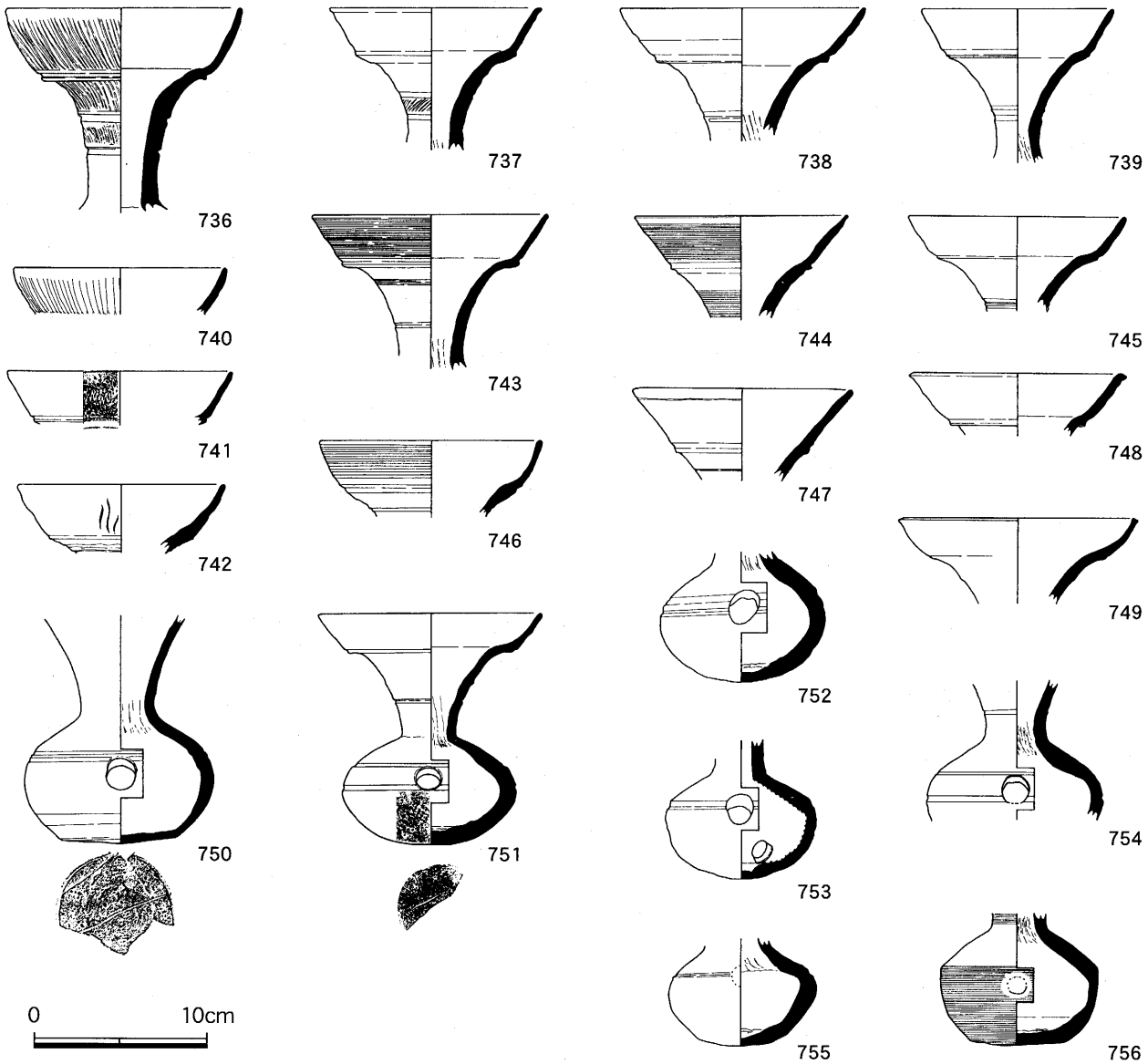
脚台(719～735)　719～731は一度屈曲して接地するもので、多くは壺の脚と考えられる。透かしを持つものはすべて一段透かしで二段以上のものは存在しない。

719～722・730は小型のもので、高坏496・脚付椀541・548などのような個体の脚の可能性もある。730は三方以上の方形透かしを持っているが、その他のものは透かしを持たない。723～725・729・731は中型である。725が二方、729が三方に方形の透かしを持つ。731は三方に円孔を開けている。726～728は大型で、すべて三方に方形透かしを持っている。728は装飾付壺の脚の可能性もある。729は窯の中に水平に据えるために、蓋坏を焼台として利用している状況がよくわかる。

732～734はしっかり踏ん張る形の低い台である。732には透かしがない。733は三方以上の透かしを持つが、その数・形状は不明である。734は外面に2条の沈線をめぐらせる。透かしを持つが、やはりその数・形状は不明である。

735は脚裾部で、途中に1条の稜線を持ち、端部は下向きに丸くおさめている。

甕(736～756)　口縁部の形状には端部を丸くおさめるものと端面を持つもの(737・748・749)がある。外面に文様を持つものは比較的少ない。736は出土品の中では最も派手で縦方向のヘラ描斜文



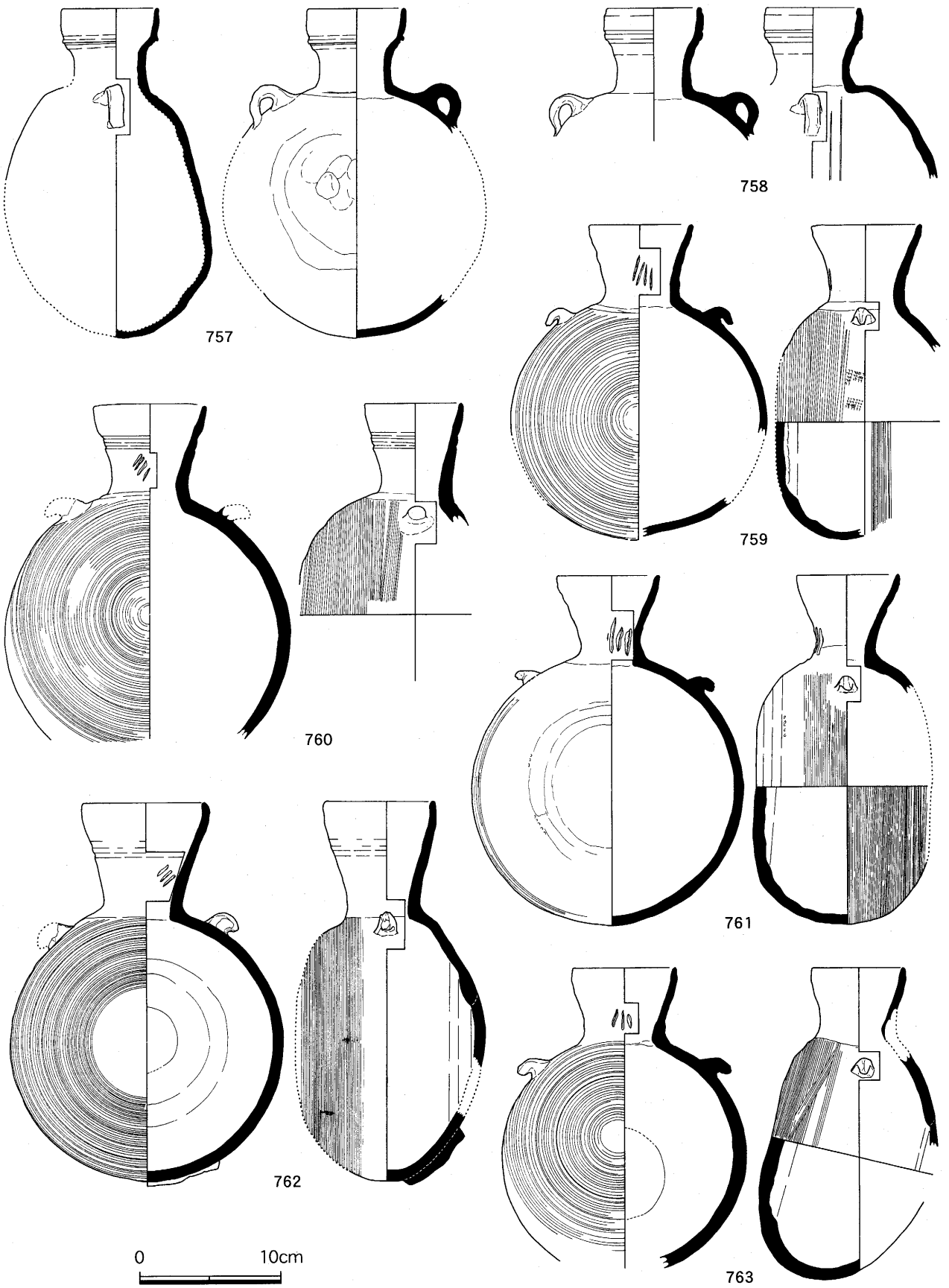
第43図　灰原出土遺物28(S＝1／4)

を施す。737は頸部の2条沈線の間にヘラ描斜文を充填する。740・741は口縁部上方のみの破片であるが、740は外面にヘラミガキに類似する技法で縦方向の文様を施し、741はヘラ描きの粗雑な波状文を施している。744・747は頸部の屈曲が顕著でなく特徴的である。

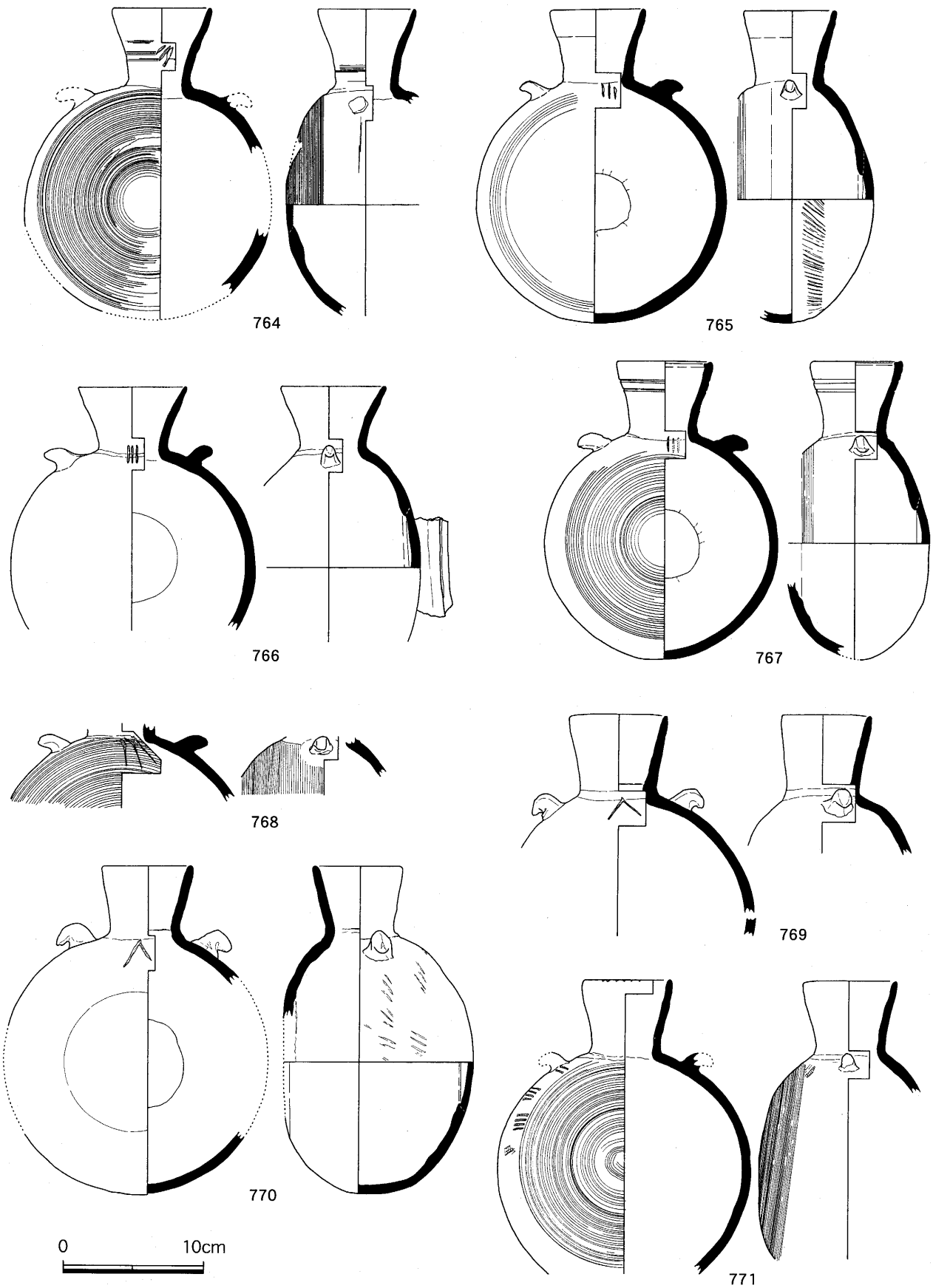
体部は穿孔部の上下に1～2条の沈線を施すものが多い。体部外面下半の調整はナデ仕上げのもの(751～753・755)が多いが、750は回転ヘラケズリ、756は回転ヘラケズリ後カキメで仕上げている。とくに750は基部がやや太めで、やや古い様相を示している。753は底部に閉塞円盤が認められ、閉塞部を底部にしていることがわかる。また、内部に穿孔の粘土屑を残している。底部内面に突締痕を残すもの(750・752・755・756)もある。

ヘラ記号は2種類以上が認められる。

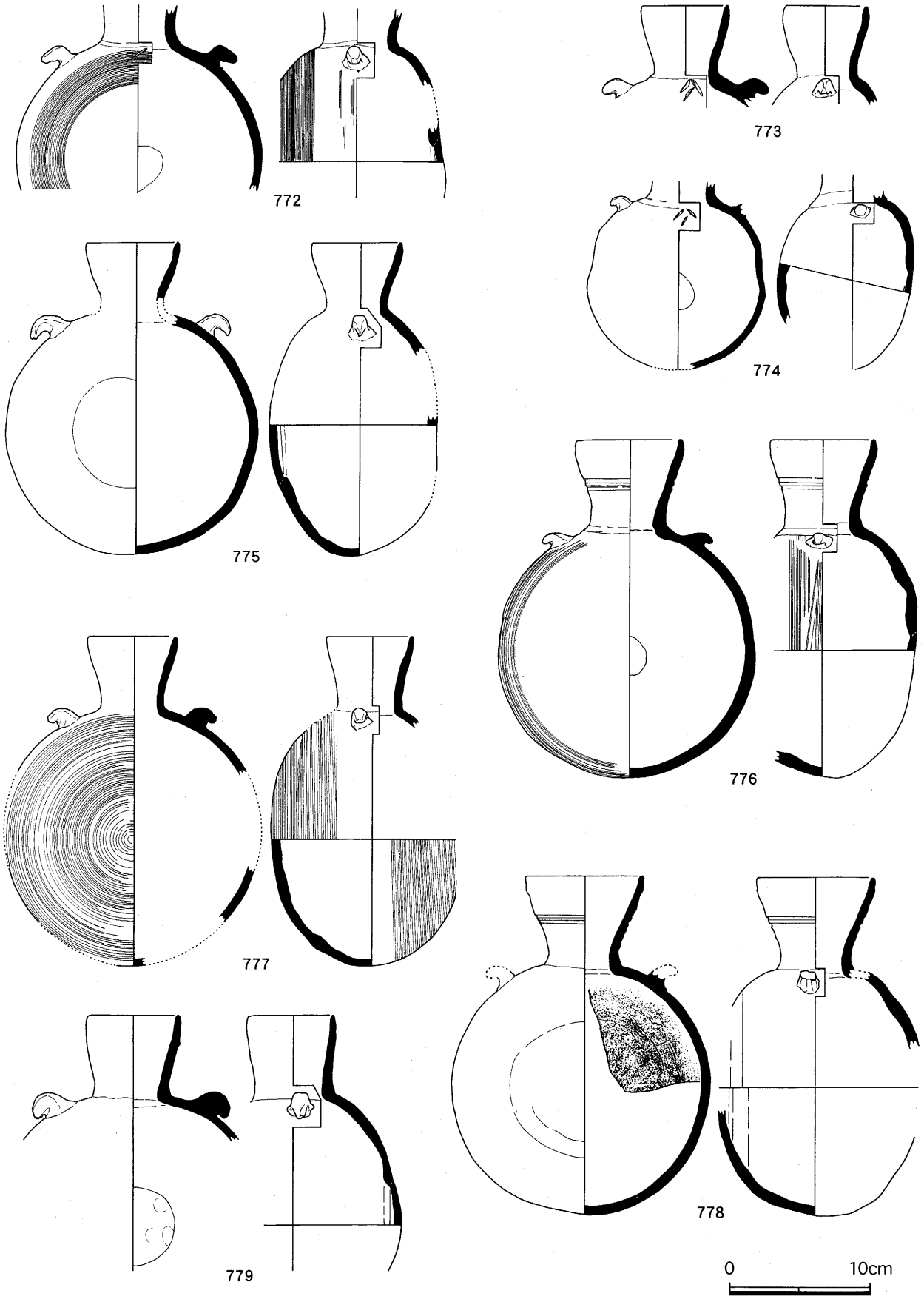
提瓶(757～795)　把手の形状には輪状・鉤状・ボタン状の三種類があり、把手の消滅したものは確認できなかった。法量によっては小型・中型・大型に分けられる。また、玉縁状を呈する口縁部



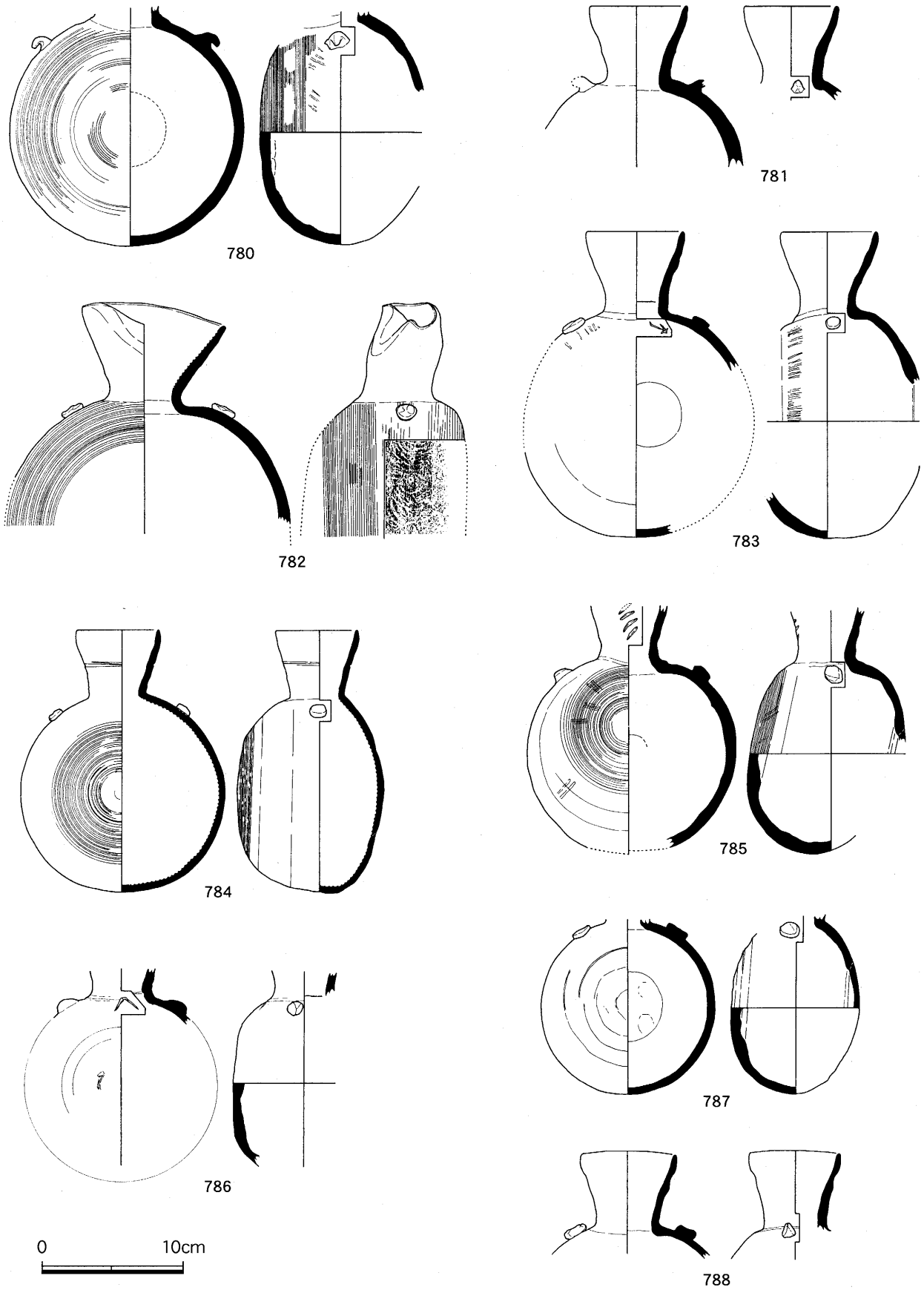
第44図　灰原出土遺物29（S＝1／4）



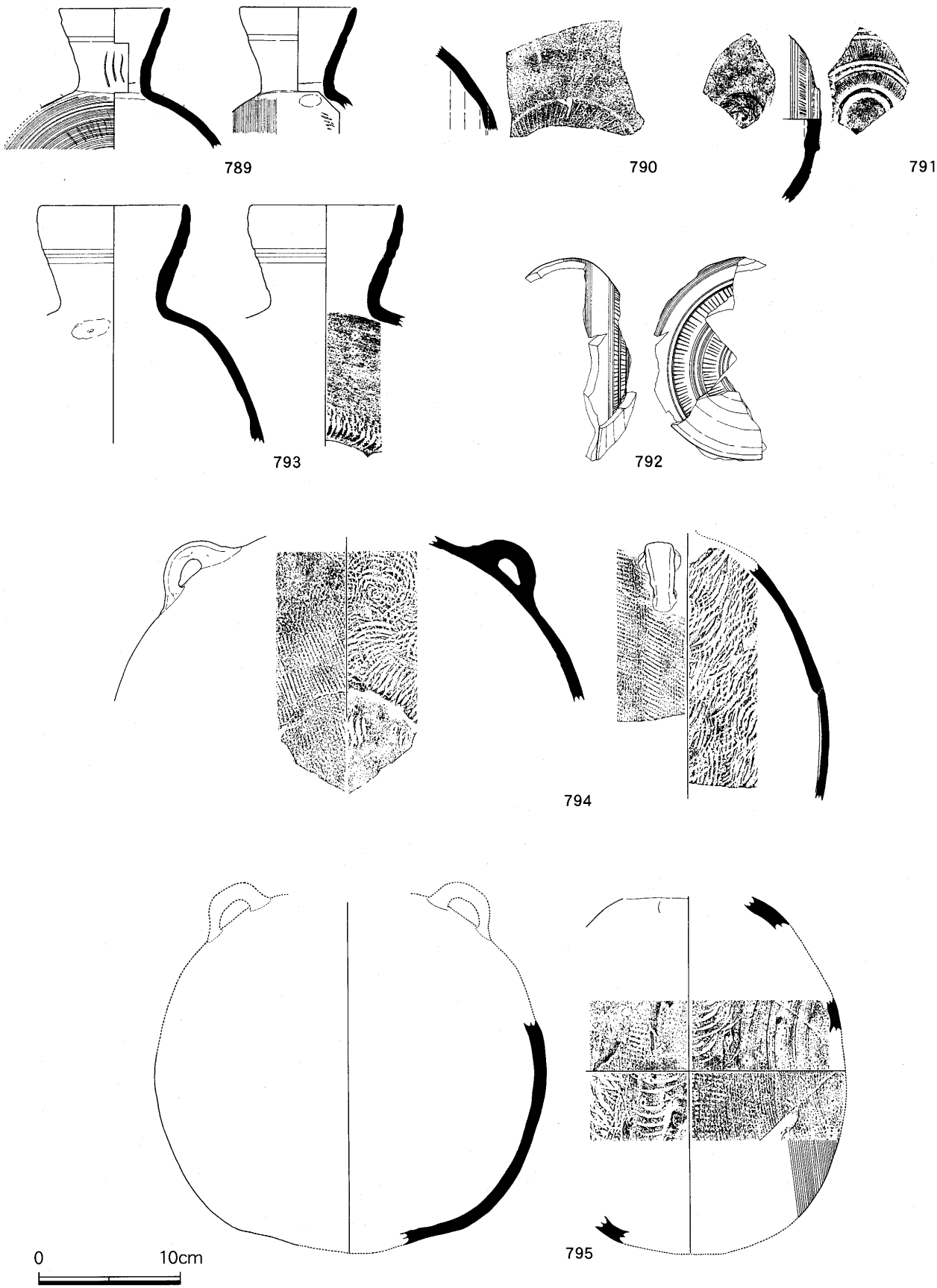
第45図　灰原出土遺物30（S＝1／4）



第46図　灰原出土遺物31(S＝1／4)



第47図　灰原出土遺物32（S＝1／4）



第48図　灰原出土遺物33（S＝1／4）

を持つ確実な個体が確認できないことも注意する必要があるだろう。

輪状の把手を持つもの(757・758)は、大型のもの(793～795)を含めても10個体未満しか確認できなかった。757は口頸部が屈曲し、そこに1条の突帯がめぐる。758は口頸部の屈曲がやや弱く、突帯は2条の沈線に挟まれた稜線に変わっている。両個体とも把手は板状の粘土紐を使用しており、基部に近い部分をまず十分に固定した後、もう一方を下方に引っ張るように貼りつけている。

鉤状の把手を持つ個体(759～781)が数量的には最も多いようである。口縁部に2条の沈線をめぐらせるものと、そうでないものがある。767は口縁部に内傾する端面を持つ。把手は横に広がって寸詰まりになるもの(765～768)、太く寸胴なもの(769・770・779)、小振りで貧弱なもの(774・776・780・781)などがある。ヘラ記号と対応しているものもあり、工人差を示す可能性がある。778の側面形は丸みが強く、提瓶として回転絞り閉塞が確認できる唯一の個体である。

782～788はボタン状の把手を備える。782は中型でもやや大きめで、内面に同心円タタキ具の痕跡が残っている。784は口縁部に1条の浅い沈線を施す。ボタン状の把手の中には円いものばかりでなく、やや角張ったもの(785)、楕円形のもの(786)、縦方向につぶされたもの(788)などもある。

789の把手は剥離痕から、おそらく鉤状かボタン状と考えられる。口頸部に1条の沈線をめぐらせ、沈線と基部との間にヘラ記号が刻まれている。

790～792は施文された提瓶の体部片と推定される。790は円盤閉塞された閉塞部の外面に沈線を施し、櫛状工具による施文を行っている。一方、791・792は回転絞り閉塞された閉塞部外面に沈線をめぐらせ、カキメ工具小口による施文を二重に充填している。また、791は施文の中心に径4cm程の突帯を作り出している。

793～795は大型の提瓶である。793は口縁部に2条の沈線を施す。794はやや板状の粘土紐を用いた輪状把手を持つ。閉塞円盤にも同心円あて具痕が残り、口頸部接合位置を開口した後に整形タタキが行われたことがわかる。

ヘラ記号は13種類以上と豊富だが、そのほとんどは鉤状把手のものに刻まれている。成形底部[4]側に刻まれるものが圧倒的に多いが、閉塞部側に記入される個体(764)もわずかに存在する。771の口縁部のキザミ目もヘラ記号の一種と考えられる。

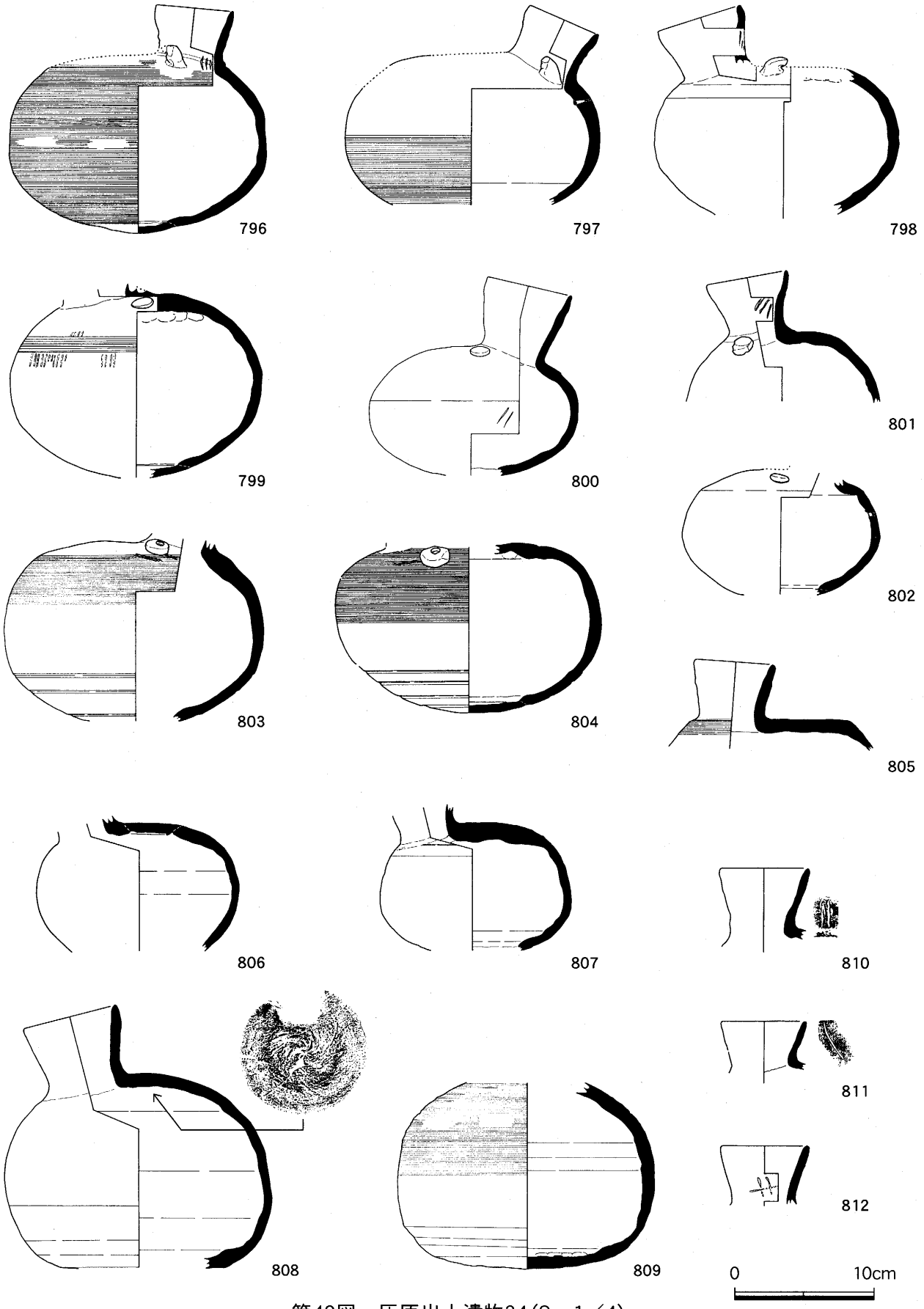
空気抜孔を基部直下に残す個体も多い。768などでは空気抜孔を塞いだ後にカキメを施し、その上にヘラ記号を記入していることがわかる。

平瓶(796～812)　提瓶と比較すると個体数は少ない。把手の形状には鉤状・ボタン状の二種類があり、把手の消滅したものもある。法量によって小型・中型に分けられる。

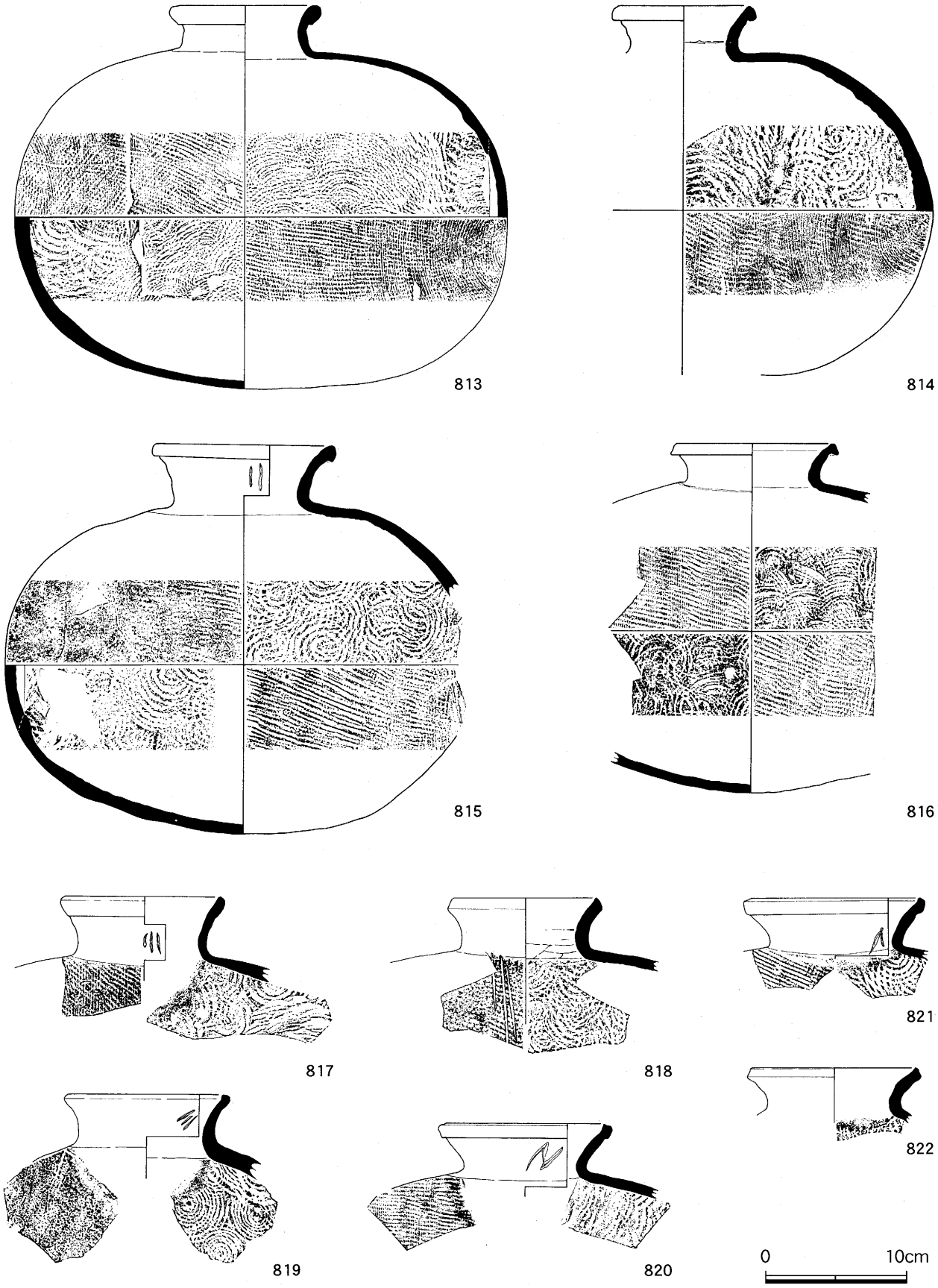
鉤状把手のもの(796～798)は5個体以上は確認できず、ボタン状把手を持つ個体(799～804)が最も多い。803・804は口縁部の形状が不明であるが、ボタン状把手の中央に竹管状工具による穿孔を行い、底部外面に数条の沈線をめぐらせる。

805～809は把手無しのものである。808は回転絞り閉塞を行っている。809は口の位置が不明だがおそらく回転絞り閉塞で成形された平瓶と考えられる。

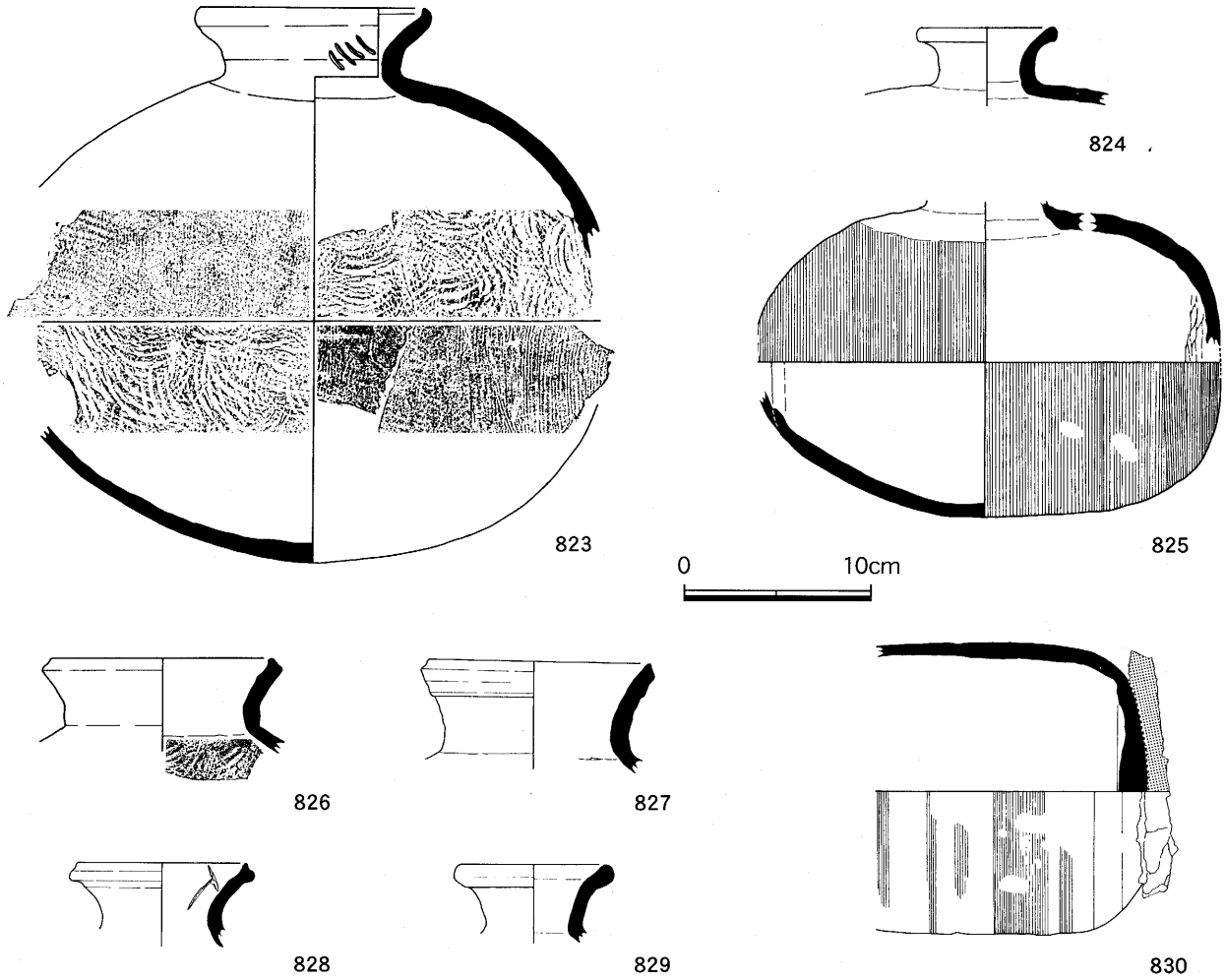
成形技法の特徴としては、閉塞部を底部にもってくる個体が多いと言える。図化したなかでは窯



第49図　灰原出土遺物34（S＝1／4）



第50図　灰原出土遺物35（S＝1／4）



第51図　灰原出土遺物36(S＝1／4)

内から出土した2点(42・43)と806・808が閉塞部を天井にしている。

ヘラ記号は6種類以上が認められる。810～812はヘラ記号を持つ平瓶の口縁部である。

体部に空気抜孔が残存している個体(796・797・802・808)も存在する。空気抜孔は粘土粒を詰めた後、表面をナデて埋めている。

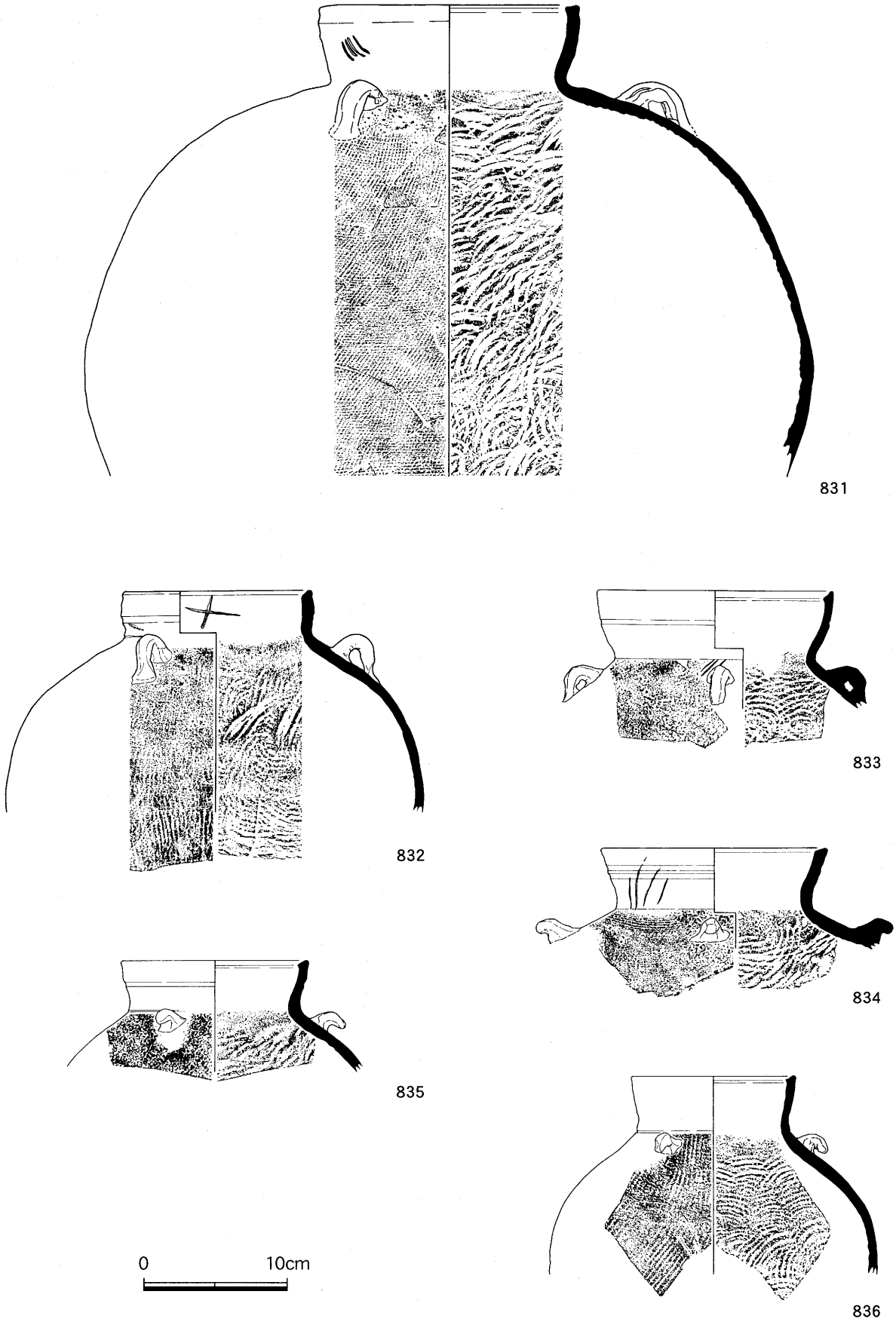
横瓶(813～830)　大型のもの(813～823)と小型のもの(824・835)に分けられる。口縁端部は肥厚するもの(813～816・820・821)としないものがあり、また端部を内側上方に拡張するもの(818～823)が多い。

大型のもので閉塞部を残すもの(813・815)については、閉塞円盤内面に体部と一連の同心円あて具痕が残ることから、口縁部開口後に整形タタキを行っていることがわかる。815は同形のヘラ記号を持つ甕860の上に融着しており、窯での焼成の状況がうかがえる(図版19参照)。

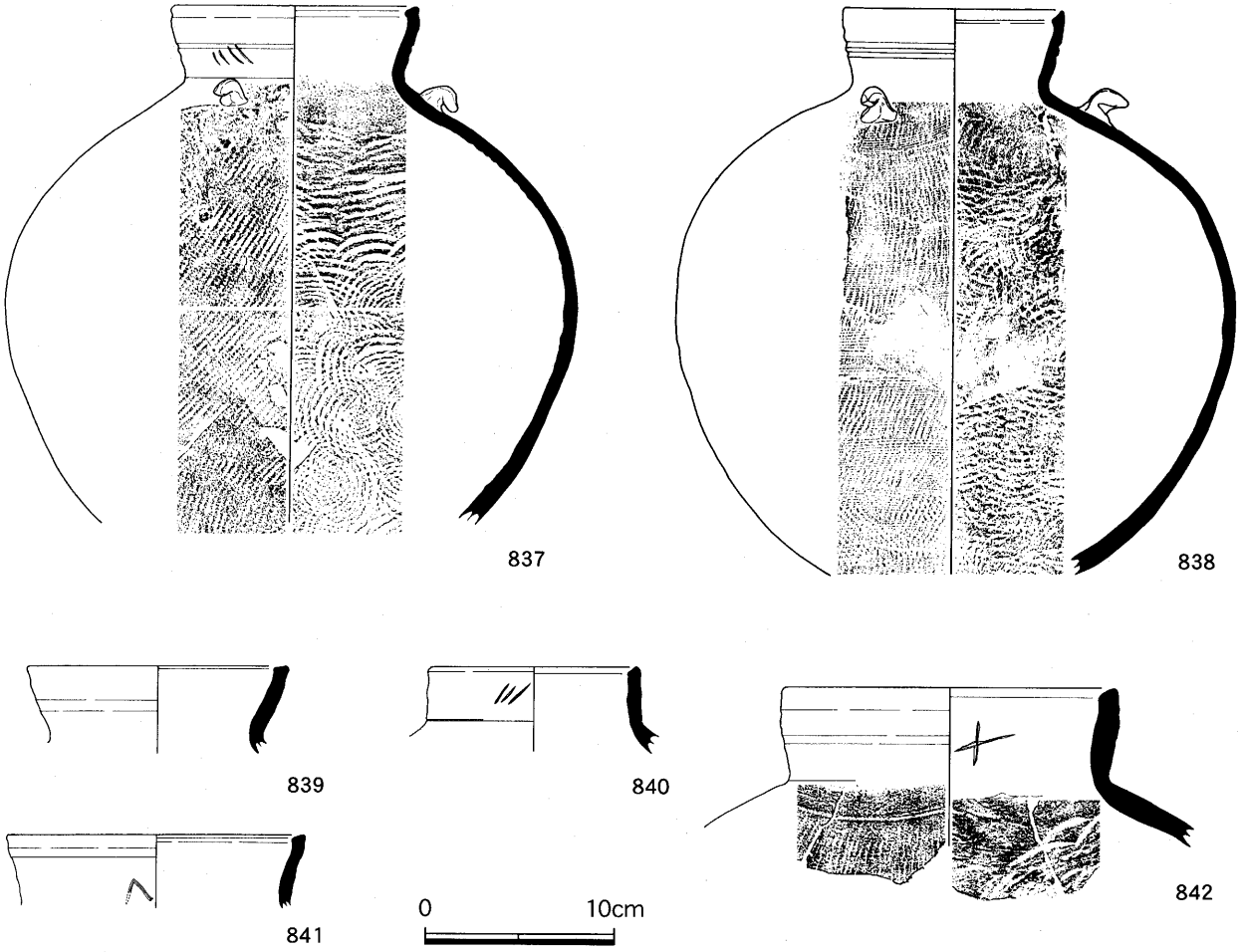
826～829は横瓶の口縁部の可能性が高い個体である。829は体部が若干残存し、提瓶か横瓶の口縁部であるのは間違いない。

830は824と焼成・色調が類似しており、同一個体の可能性があるが接合しない。この場合、825のような小型の横部の体部となるが、別形態の壺などの可能性もある。

ヘラ記号は6種類以上が確認できる。



第52図　灰原出土遺物37（S＝1／4）



第53図　灰原出土遺物38(S＝1／4)

直口甕(831～842)　口が狭く、基部と肩部の間に3～4個の把手をもつ甕である。口頸部は上方で内側に若干狭まり、口縁端面は内傾する。中型のもの(831・842)と小型のもの(832・835～838)がある。把手は輪状のもの(831～833)と鉤状のもの(834～838)がある。834は残存する把手が約90°離れて配置されているため、四耳の可能性がある。

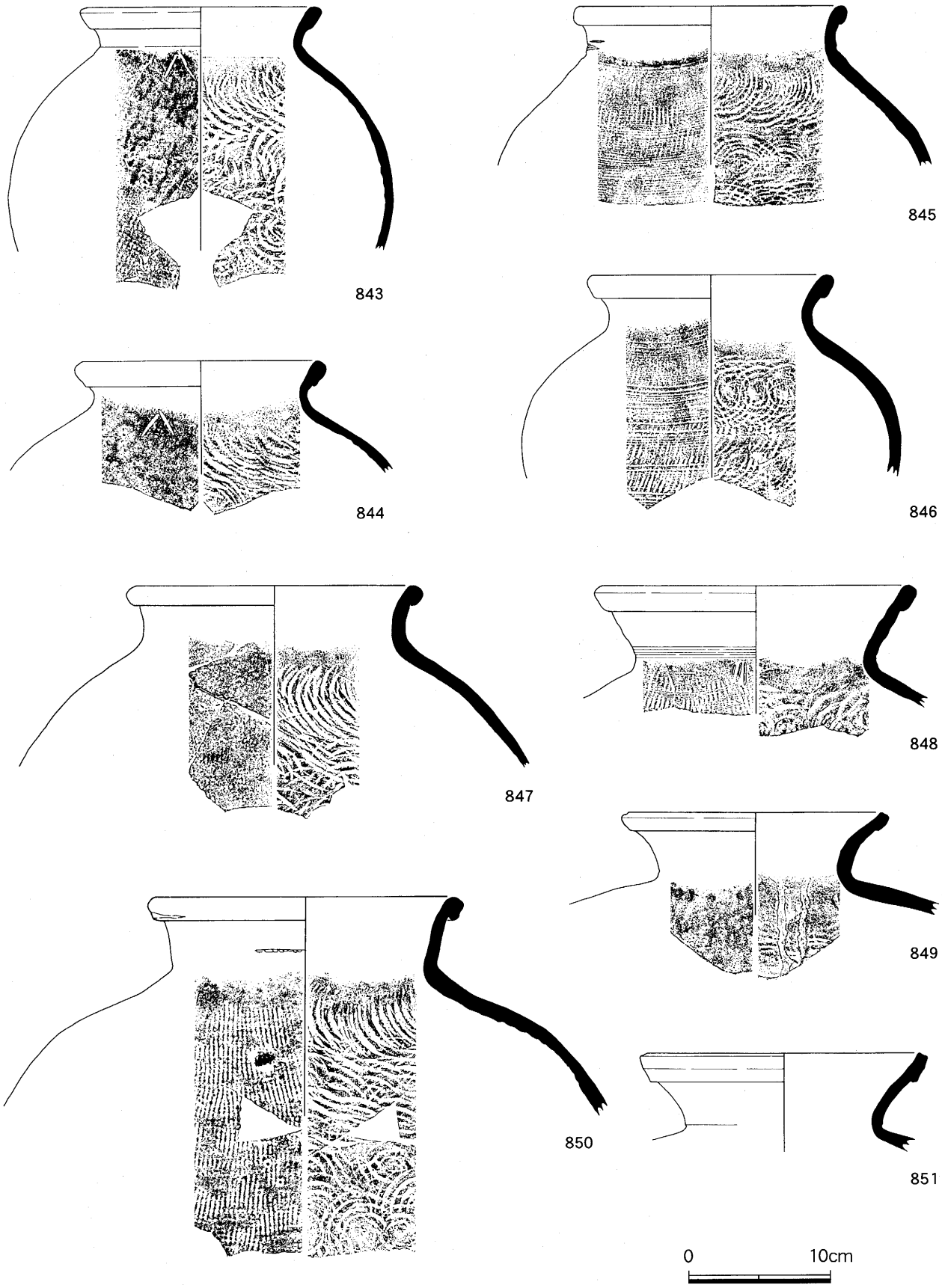
839～842も直口甕と考えられる口縁部の破片である。

ヘラ記号は7種類以上が認められる。

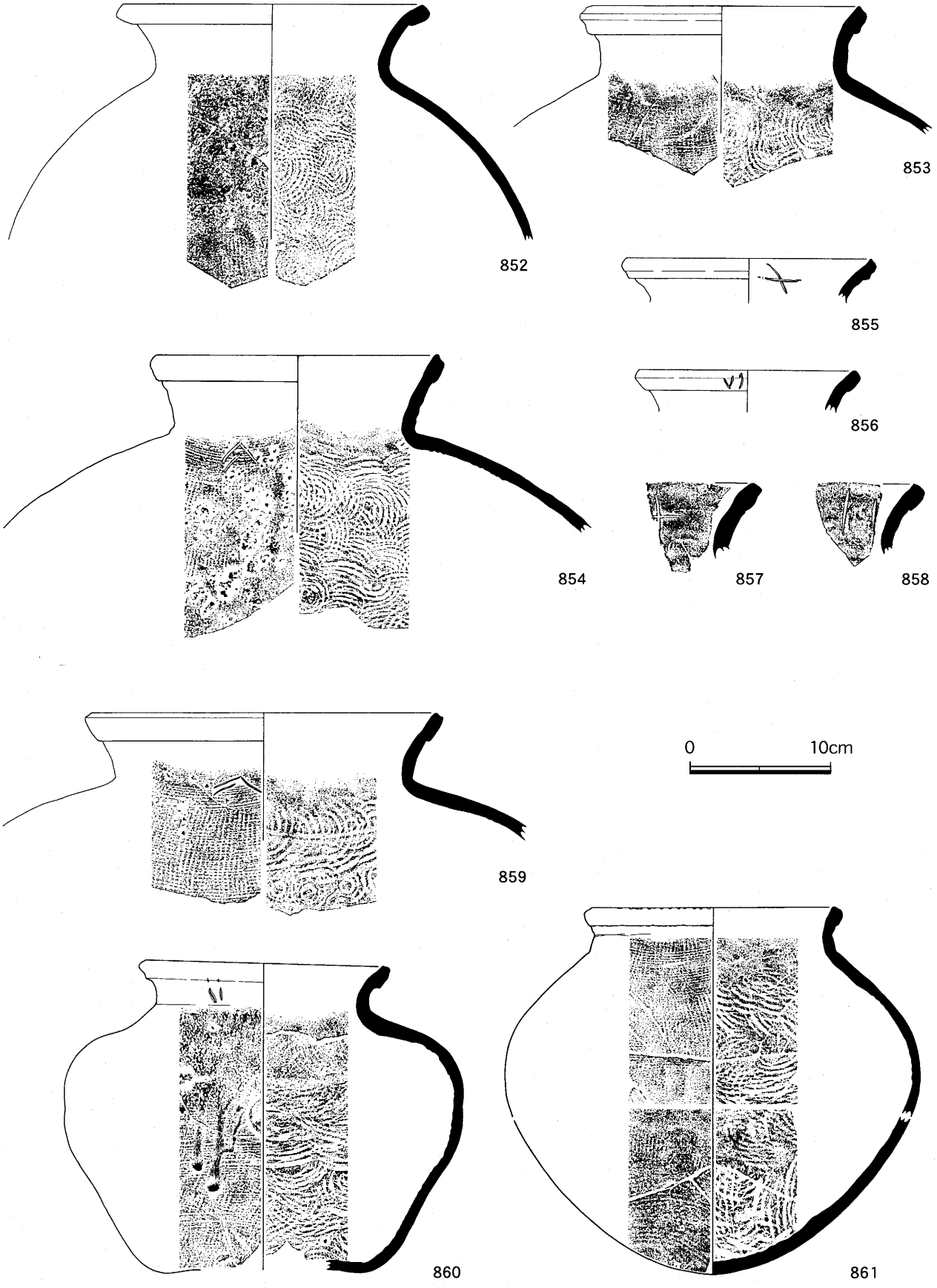
甕(843～914)　843～889は通常の甕で、小型のものと中型のものがある。843～871は口縁部を肥厚する甕である。端部を丸くおさめるもの(843～850)、やや角張り、外傾する端面を作り出すもの(851～866)、外側に鋭くつまみ出すもの(867～871)などがある。871では口縁端部を外側に折り返して肥厚していることが観察できる。

872～875は口縁部にやや幅の広い帯状部分を作り出し、その下方に1条の沈線をめぐらせるものである。肥厚してはいないようである。

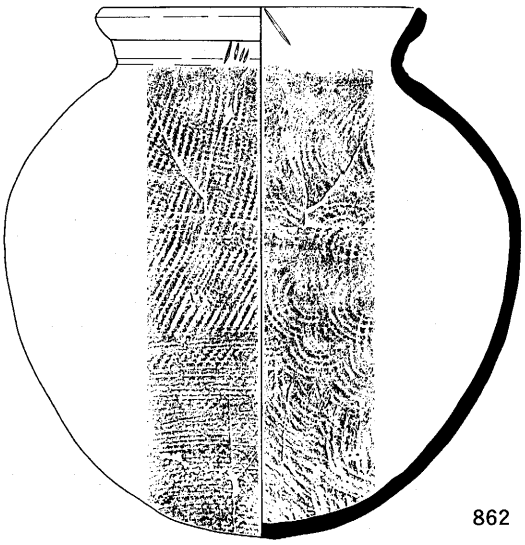
876～887は口縁部を肥厚しない甕である。876・877・884・885は口縁部を若干屈曲させることによって、外観上は肥厚したのと同じ視覚的効果を得ようとしたものである。881は1条の浅い沈線をめぐらせることによって同様の効果を得ようとしている。また、882～887は口縁端部を内側上方

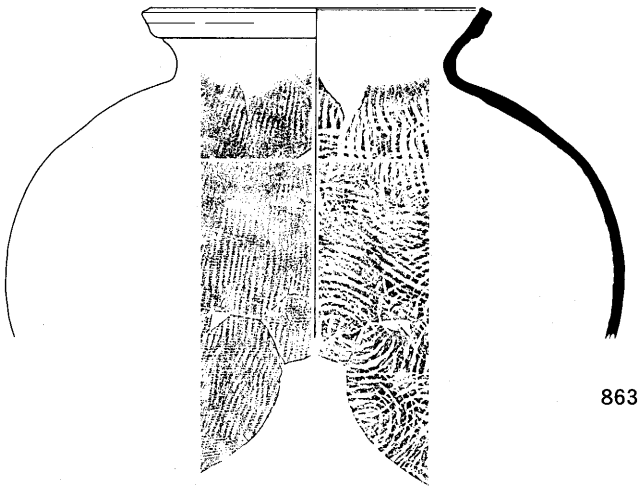


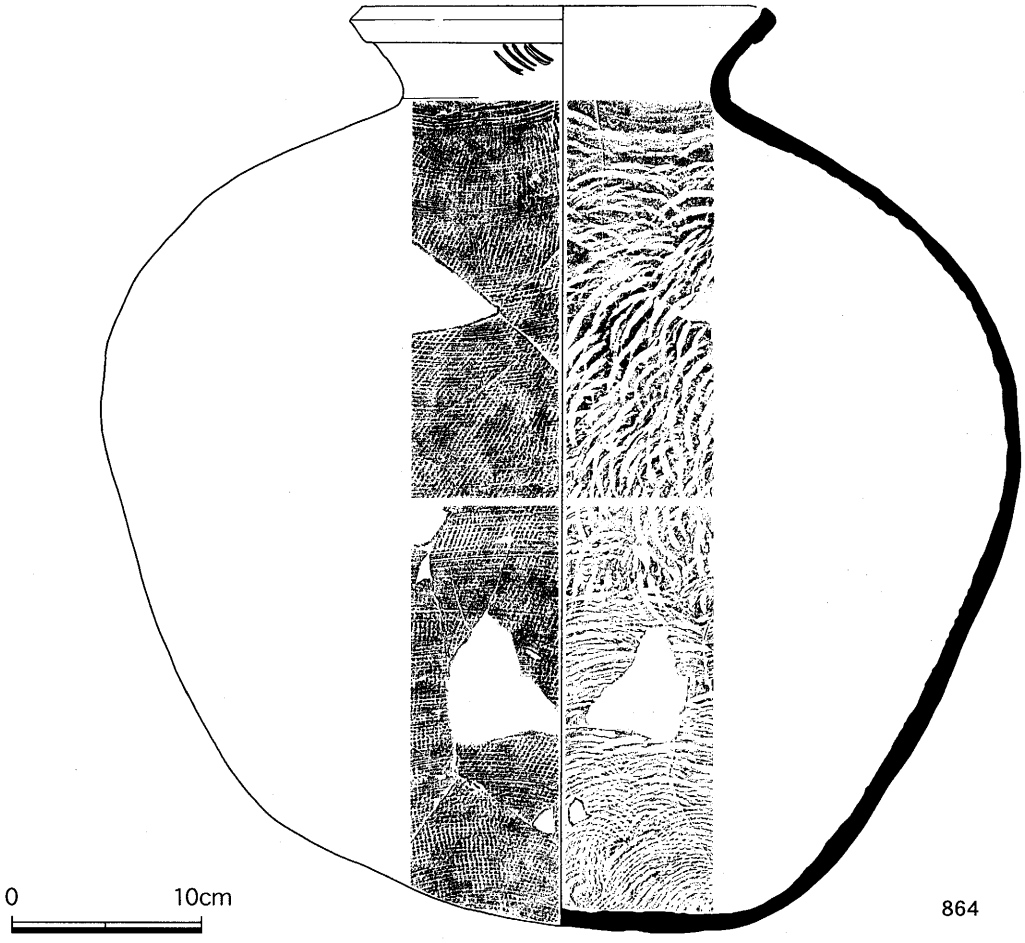
第54図　灰原出土遺物39（S＝1／4）



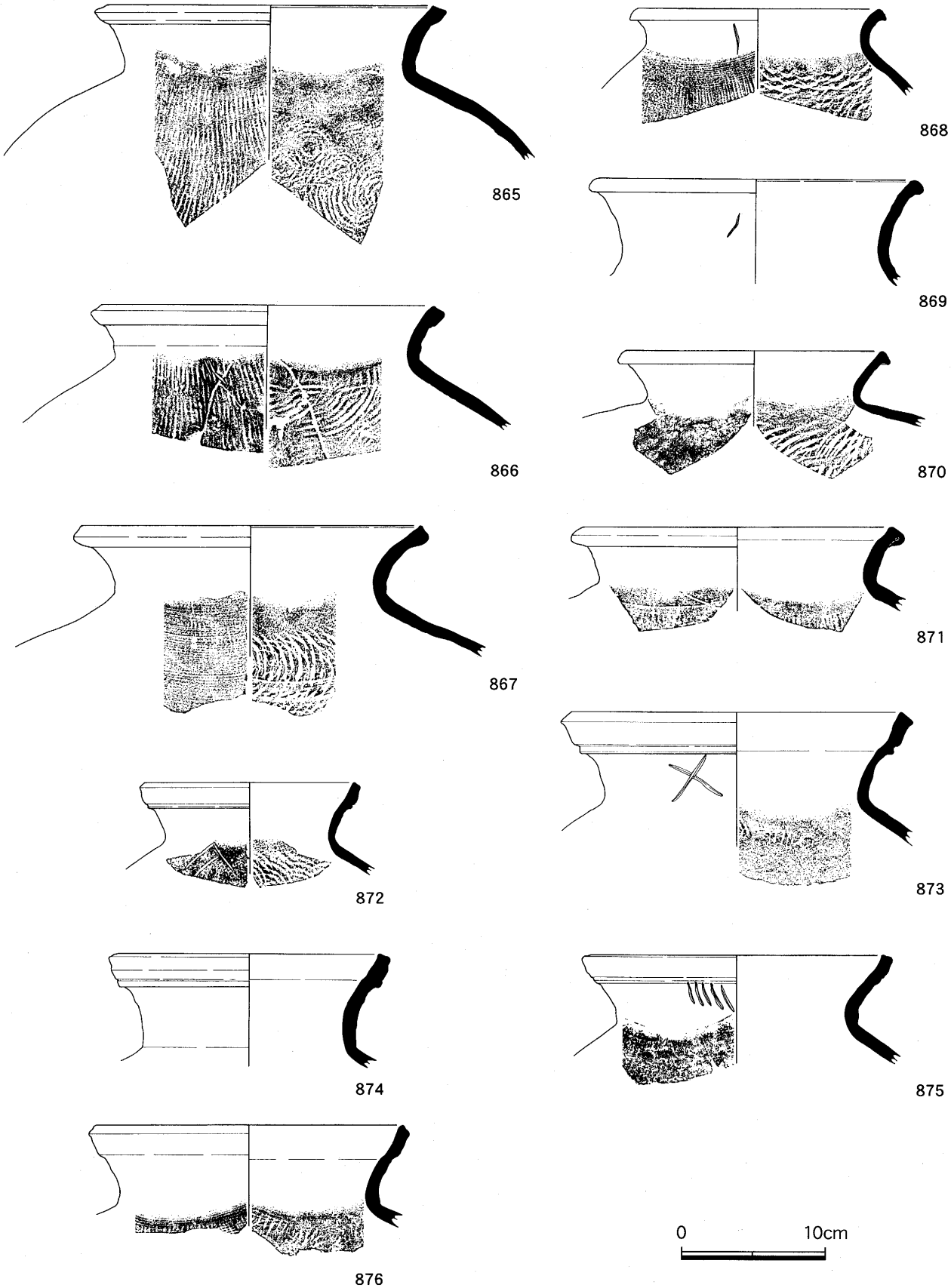
第55図　灰原出土遺物40（S＝1／4）



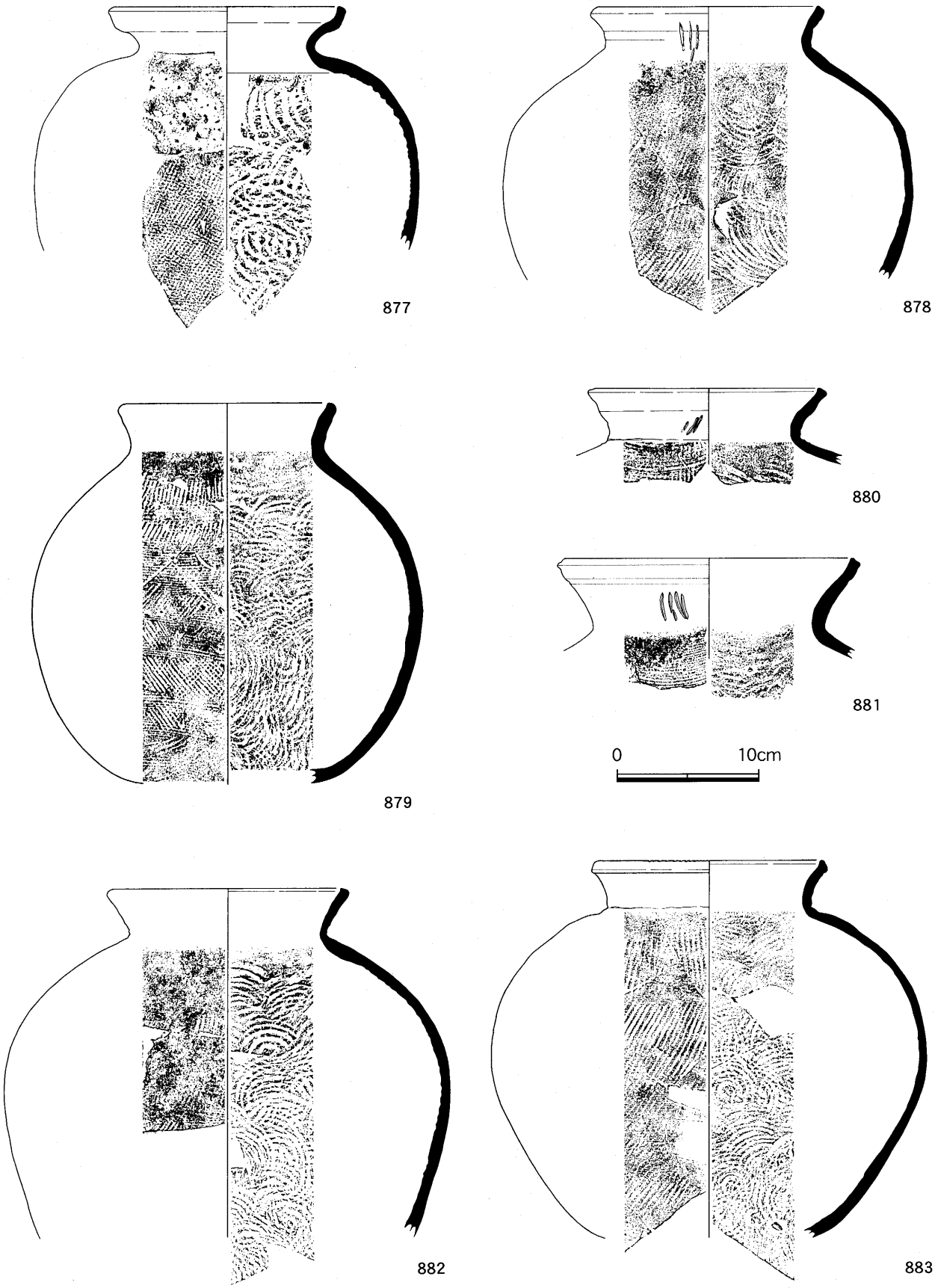




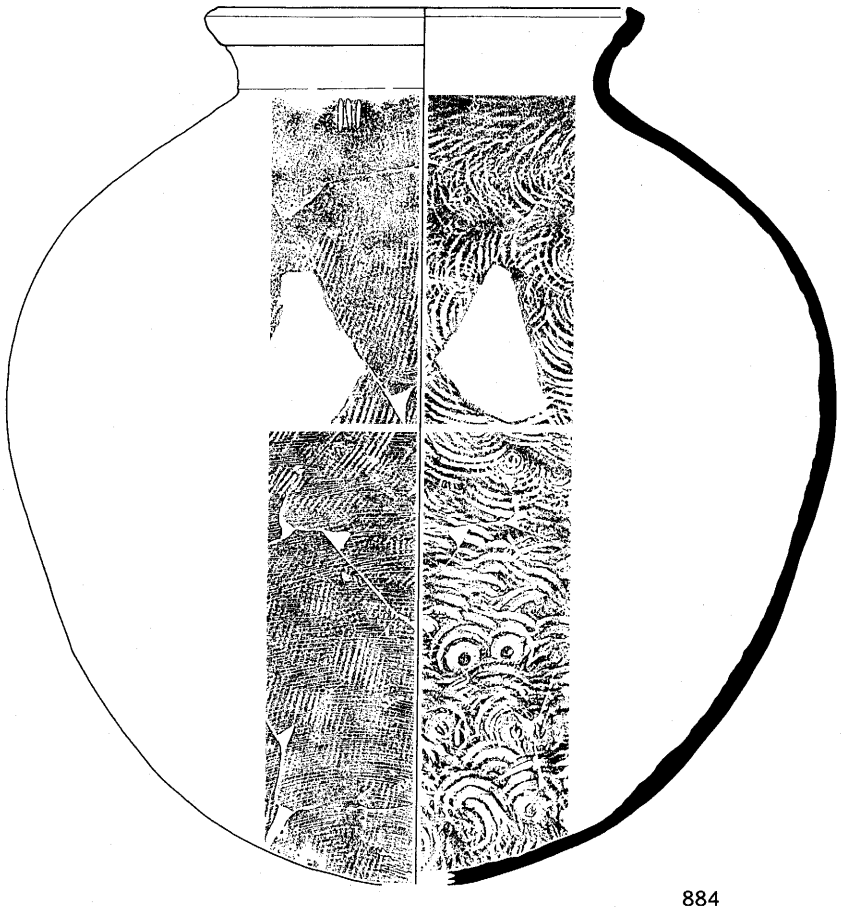
第56図　灰原出土遺物41(S＝1／4)



第57図　灰原出土遺物42（S＝1／4）

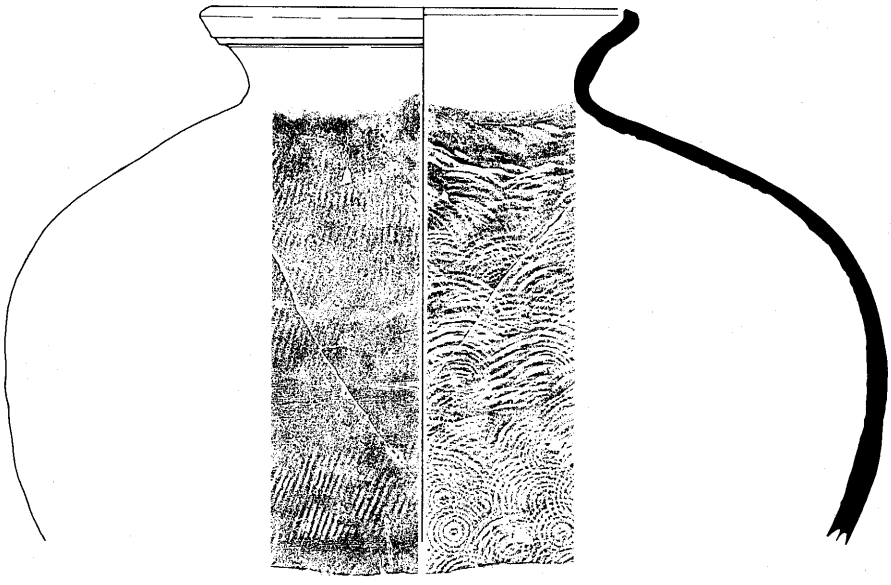


第58図　灰原出土遺物43（S＝1／4）



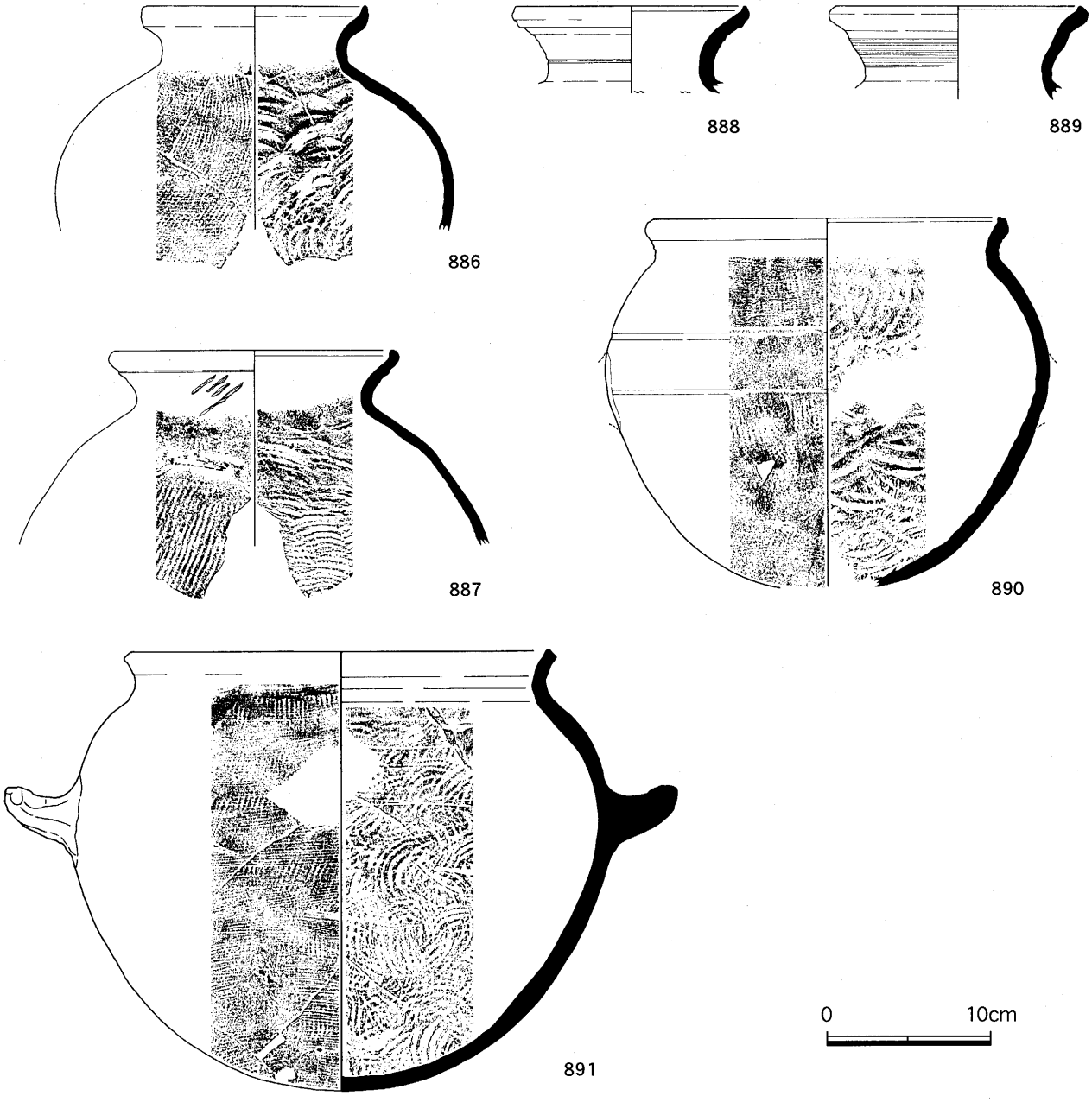
884

0　10cm



885

第59図　灰原出土遺物44（S＝1／4）



第60図　灰原出土遺物45（S＝1／4）

に拡張している。

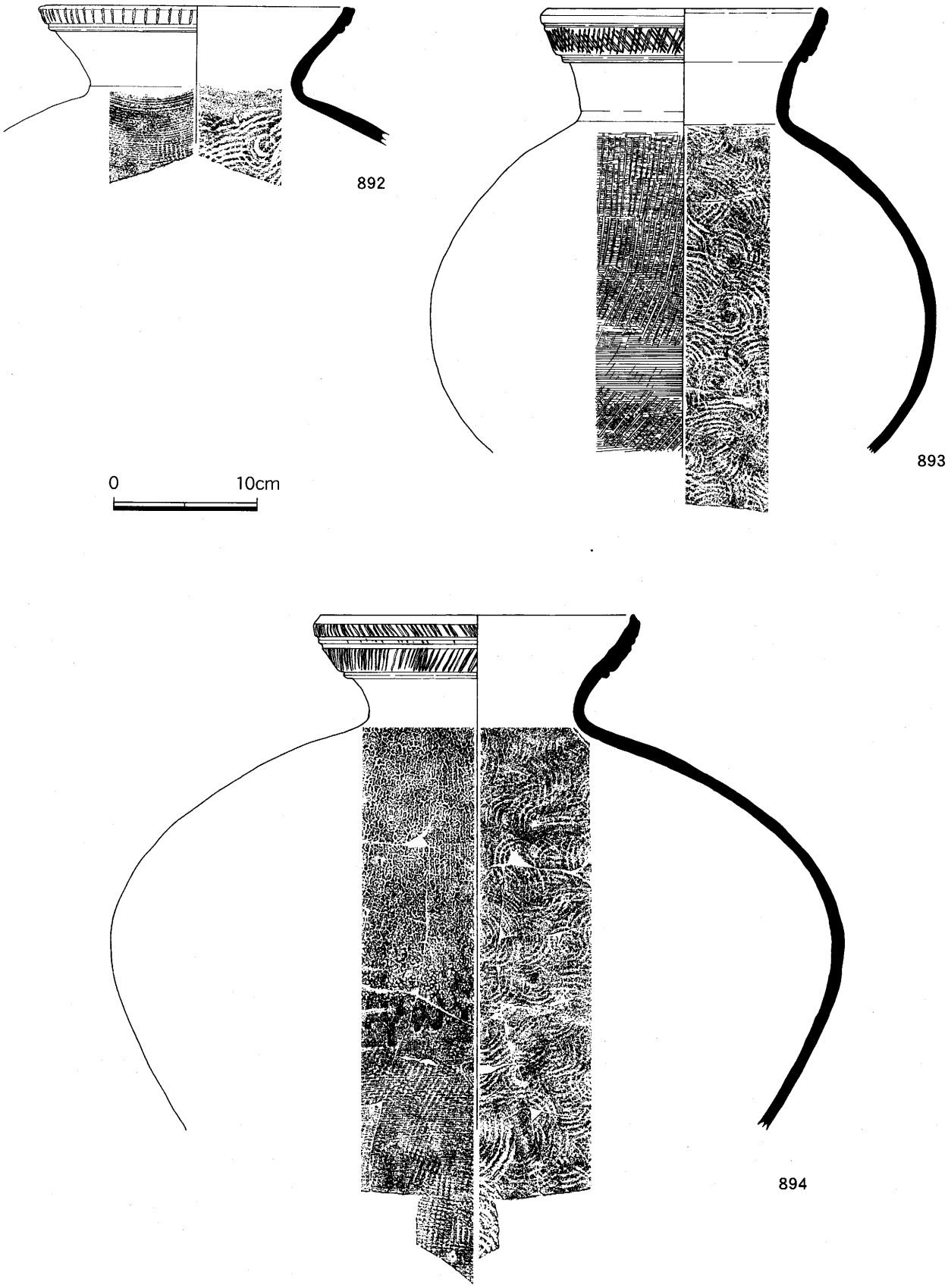
864の内面を観察すると、胴部上方では比較的目の大きな同心円で、下半は同心円の目が細かい。胴部成形タタキの内面あて具と底部叩きだし時の内面あて具が異なっていることがわかる。

甕の内面のあて具痕には、同心円文の他に車輪文も認められるが、わずかである。

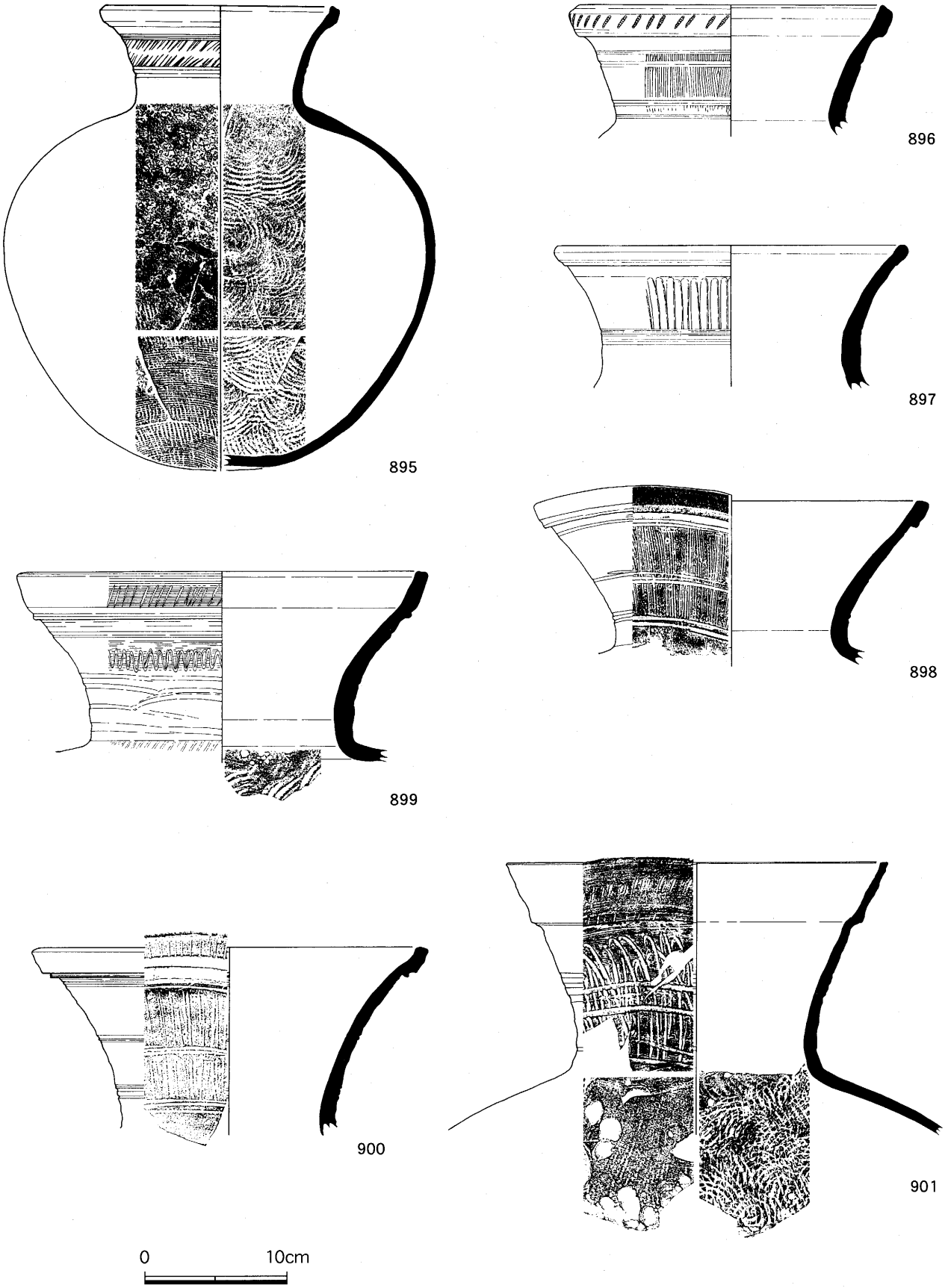
通常の甕のヘラ記号は18種類以上が確認できる。

890・891は二方向に把手を持つ甕である。890は口縁部を若干肥厚し、口縁端部を内側上方につまみあげる。体部には2条の浅い沈線がめぐり、下方の沈線にかかる位置に把手の剥離痕跡が認められる。891の口縁部端面は外傾し、肥厚は行われていない。

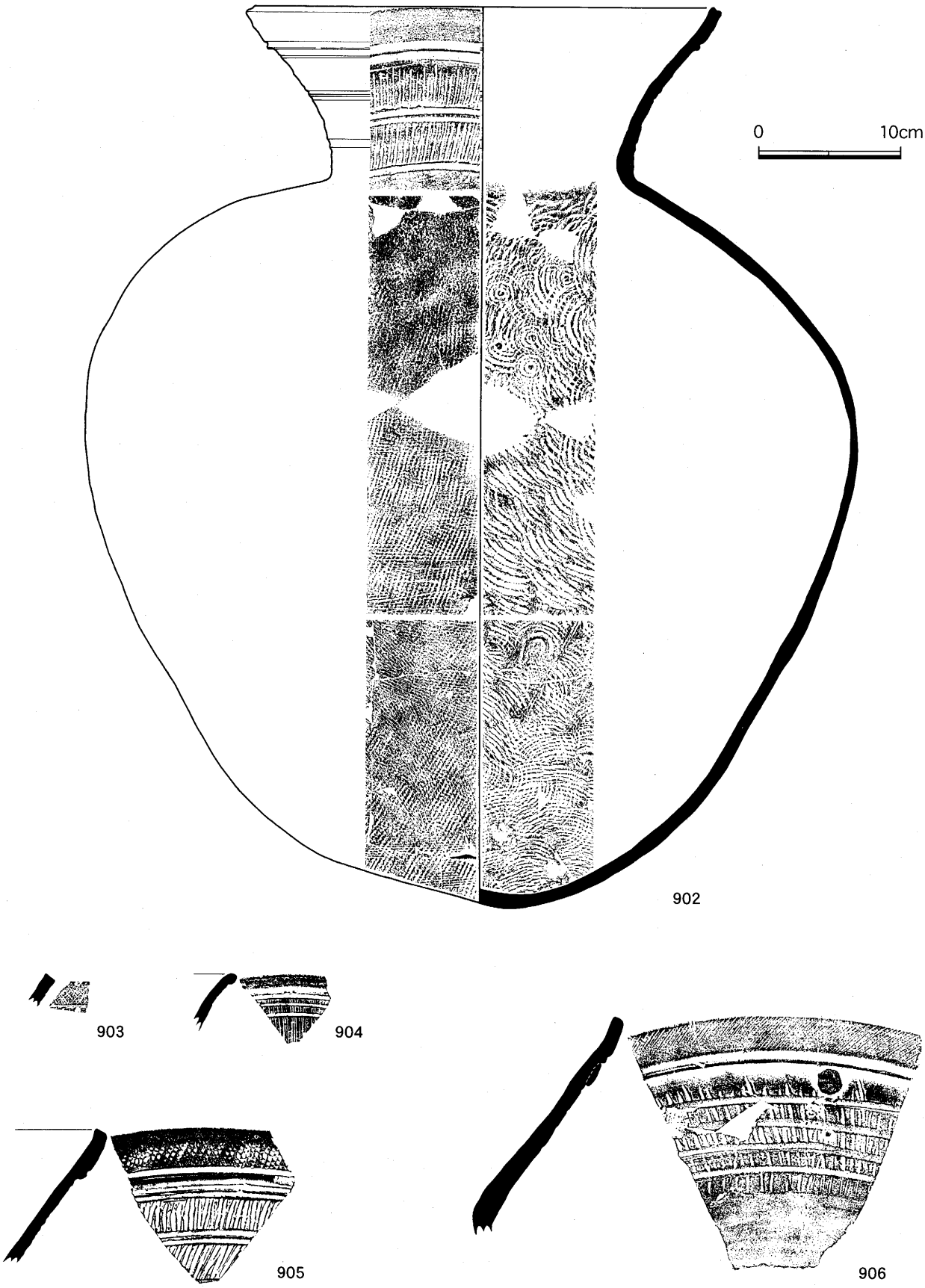
892～914は通常の甕と比べて頸部が長く、その頸部あるいは口縁部に帯状の張り出し（以下、口



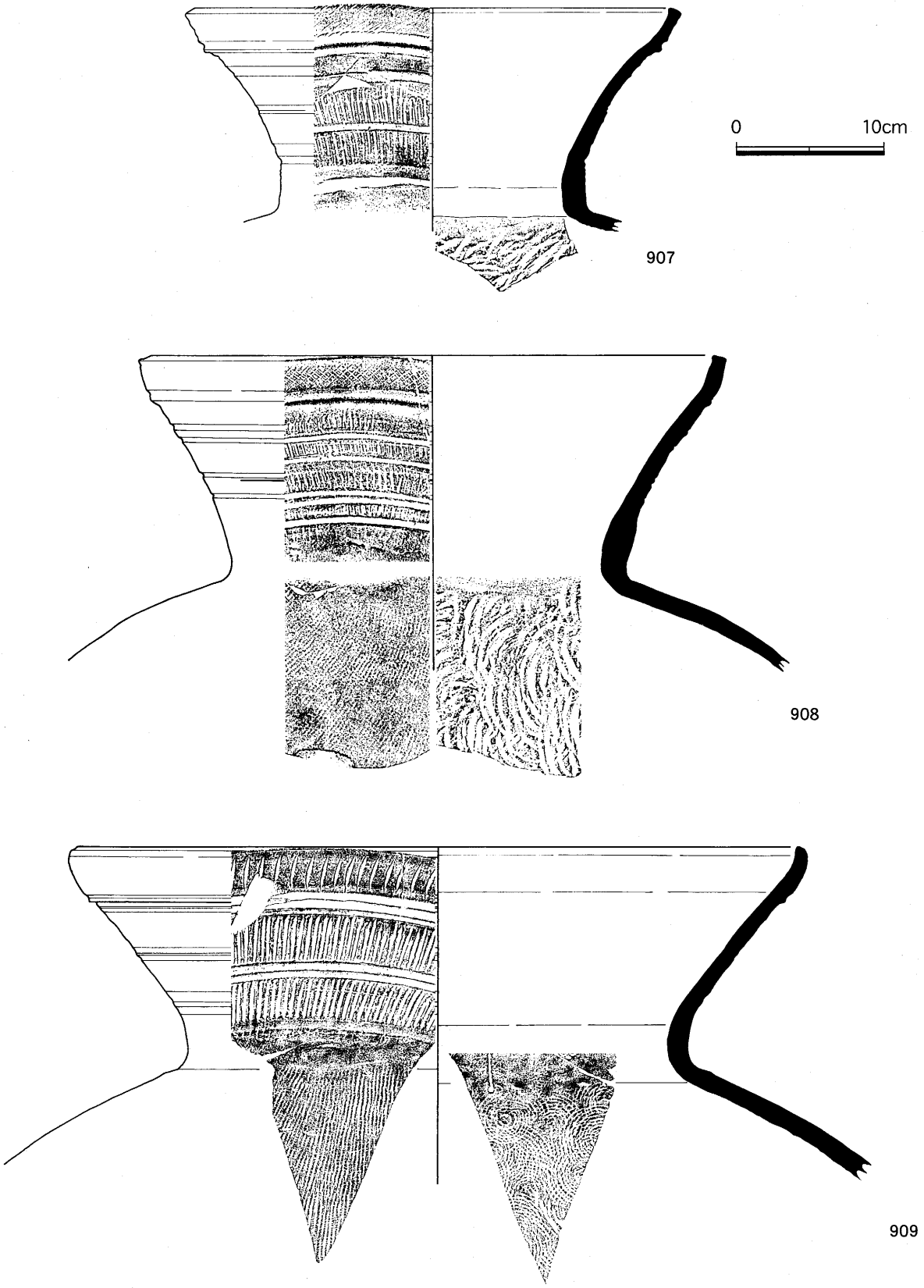
第61図　灰原出土遺物46（S＝1／4）



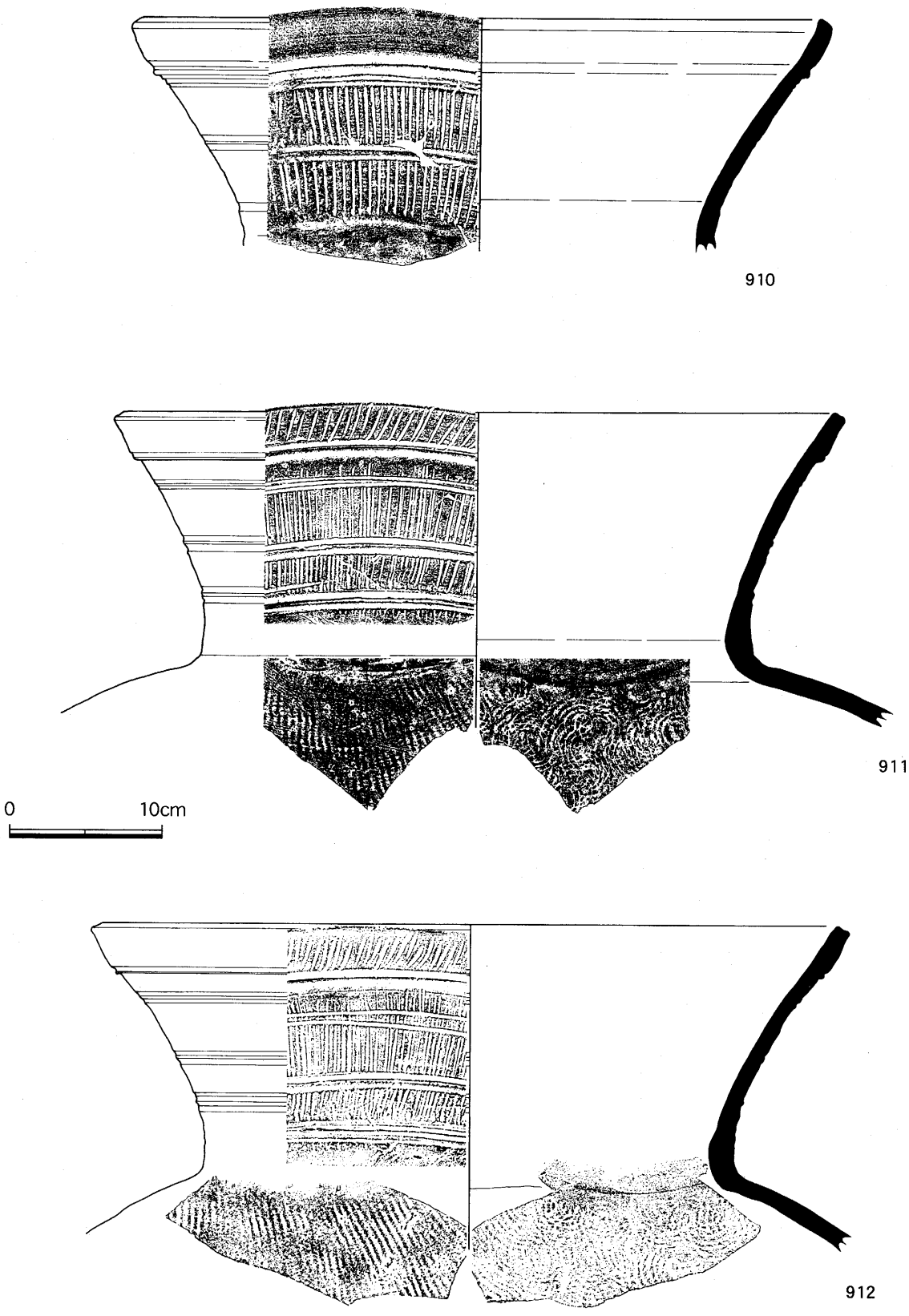
第62図　灰原出土遺物47（S＝1／4）



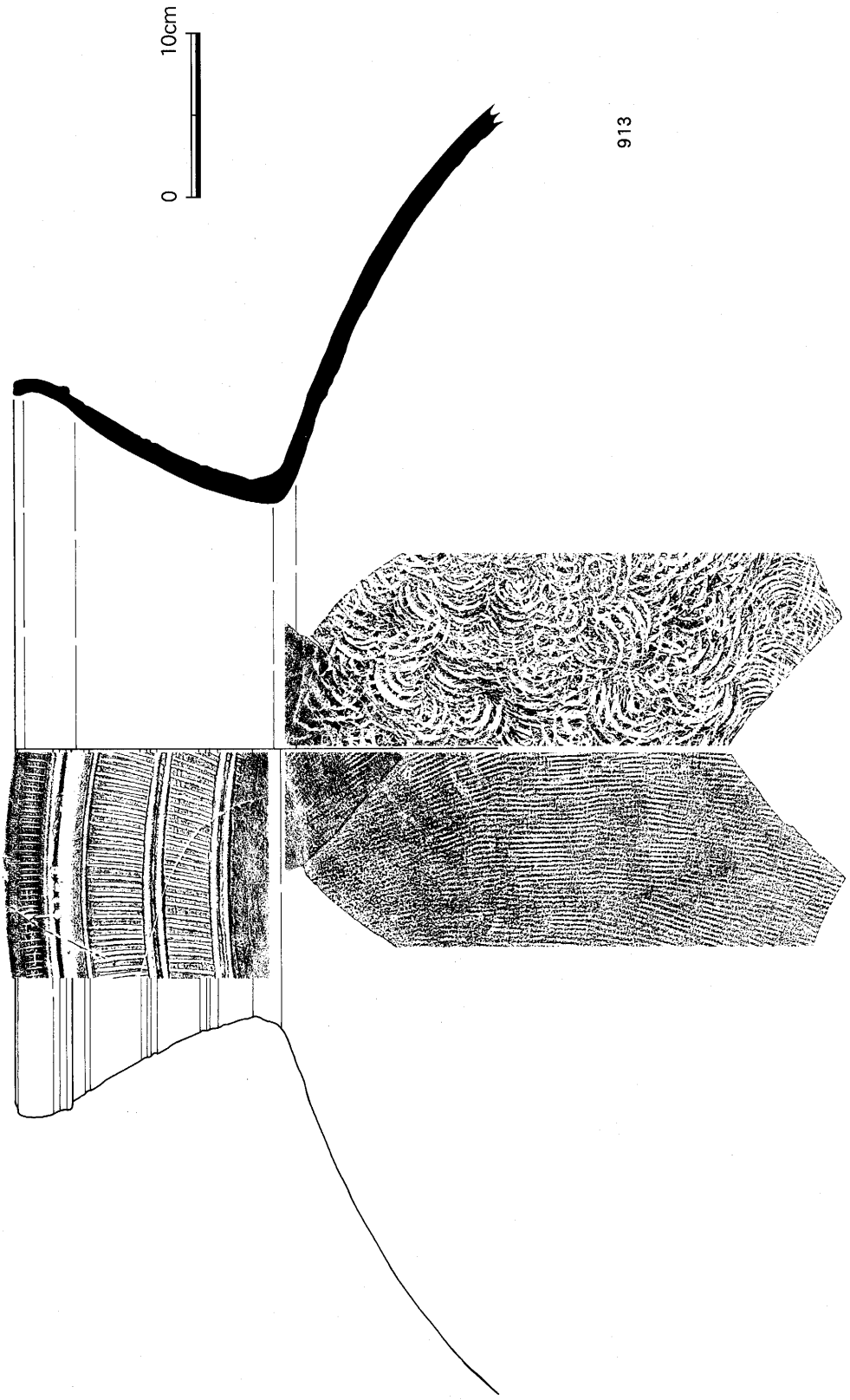
第63図　灰原出土遺物48（S＝1／4）



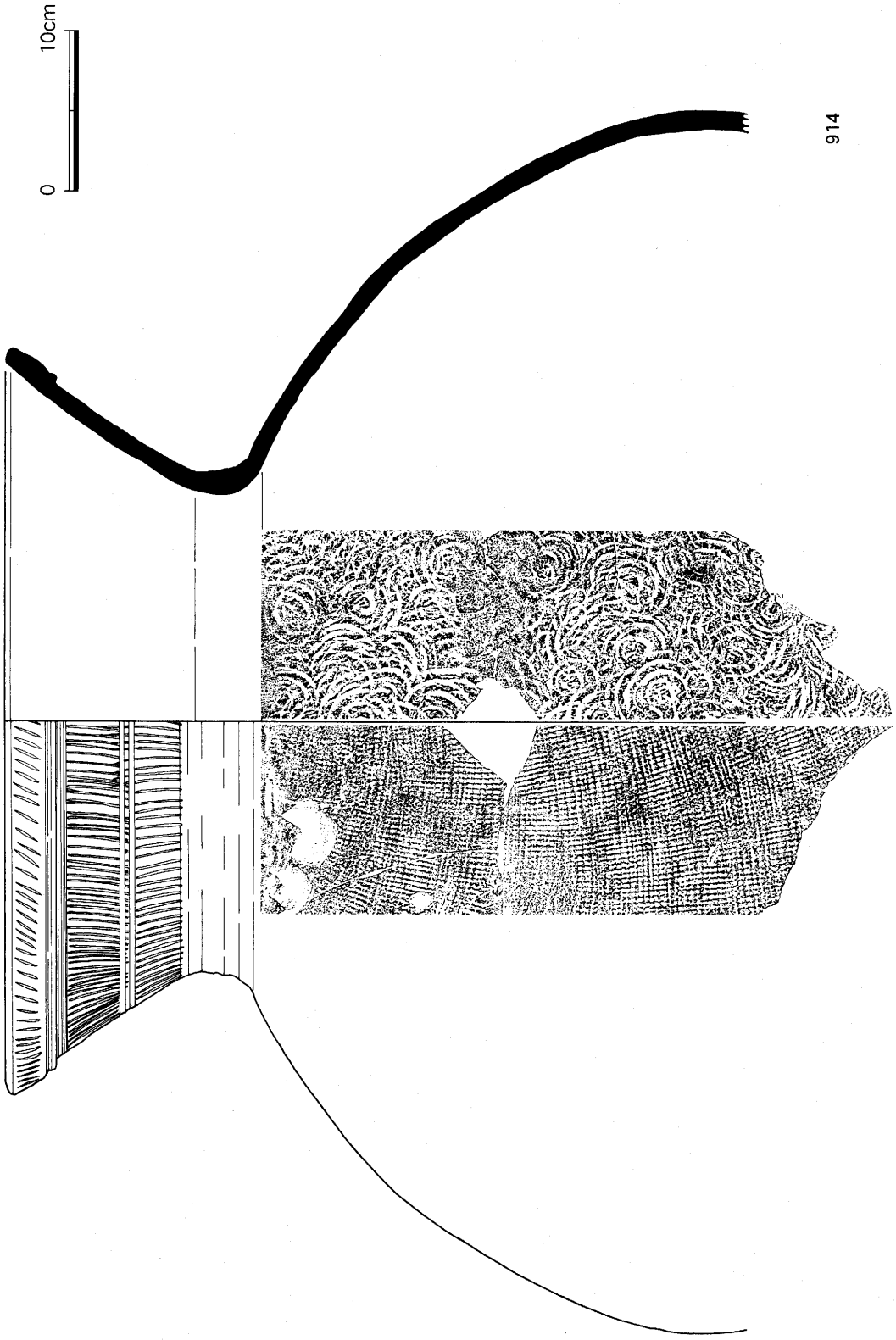
第64図　灰原出土遺物49（S＝1／4）



第65図　灰原出土遺物50（S＝1／4）



第66図　灰原出土遺物51（S＝1／4）



第67図　灰原出土遺物52（S＝1／4）

縁帯と呼ぶことにする[5])をめぐらせ、文様を施している。小型のものから大型のものがある。全体の特徴としては、口縁部が大きく外側に開き、上方で若干内側に狭まるようである。

892～894は口縁帯部にのみ文様を施すものである。892は口縁帯部にカキメ工具による施文を行っている。893は小型で、口縁帯部に2条の沈線を施し、その間にヘラ描斜格子文を充填している。894は中型の甕で、口縁帯部に3条の沈線を施し、その間を対抗するヘラ描斜文二段で充填している。

895～914は口頸部に文様を施す甕である。895は小型で、口頸部に4条の浅い沈線を施し、その間をカキメ工具の小口による文様で充填している。その他は中型か大型と考えられる。口縁帯部の文様はカキメ工具による刺突文が最も多く、櫛状工具による刺突文(901・905)、ヘラ描斜文(911・912)も認められる。カキメ工具による刺突文には個体によって粗密がみられ、斜めに施すものや斜格子文となるもの(903・908)もある。口頸部の文様にはヘラ描直線文が最も多く、その他に縦方向のカキメ(896・898)、ヘラ描波状文(899)がある。ヘラ描直線文は水平方向の沈線によって分割されるが、縦に上から下まで一連のものと、二段に施したもの(908・910・913・914)が認められる。910では直線文が縦に上から下まで一連の部分と、二段に施した部分が存在する。

897は、口頸部の文様が弥生土器のヘラミガキに近い方法で施文されており、口縁部も丸く収まるなど、やや特異である。899は口頸部に非常におおざっぱなヘラ描波状文を施している。901の口頸部のヘラ描直線文も非常におおざっぱな描き方である。904はやや薄手で口縁帯部も丸く肥厚するだけである。広口壺の口縁部の可能性もある。906は口頸部に粗いヘラ描直線文が施され、その上にボタン状の粘土を貼りつけている。

908～914は容量の大きな特大甕[6])である。911と912はよく似ており、同一個体の可能性も捨てきれない。914の肩付近には粘土を薄く貼りつけた痕跡があり、乾燥時にひび割れた部分を補修したものかもしれない。

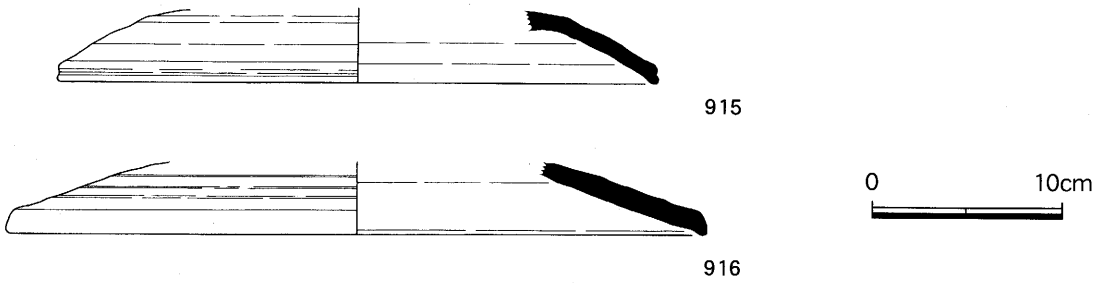
ヘラ記号を持つ個体は確認できなかった。また、櫛描波状文が全く認められないことも注意する必要があるだろう。

大型蓋(915・916)　甑あるいは甕などの蓋と考えられるが、全体形、特に中心部分がはっきりしない。916の上面には数条の沈線がめぐり、口縁端部は下方に若干拡張する。

装飾須恵器・特殊須恵器(917～929)　917は子持器台の子坏である。直径13cm程度と通常の坏身よりやや小型である。親器の器台鉢部は浅いものと考えられる。親器の鉢部外面は平行タタキ後カキメ調整である。鉢部の口縁端部は上方に拡張し、内側に三角形に粘土塊を貼りつけ、その上に子坏を取り付けている。

918・919は装飾付壺の子器と考えられる。918は口縁部が失われているが、長頸壺を模したものと考えられる。底部に孔は開いておらず、親器からの剥離痕が認められる。919は有蓋短頸壺を模したものと考えられる。蓋にはつまみの剥離した痕跡が残り、口縁端面を持っている。体部に1条の沈線をめぐらせる。

920～923は装飾付須恵器の子器などの蓋の一部と考えられる。920はつまみを有し、919と同様

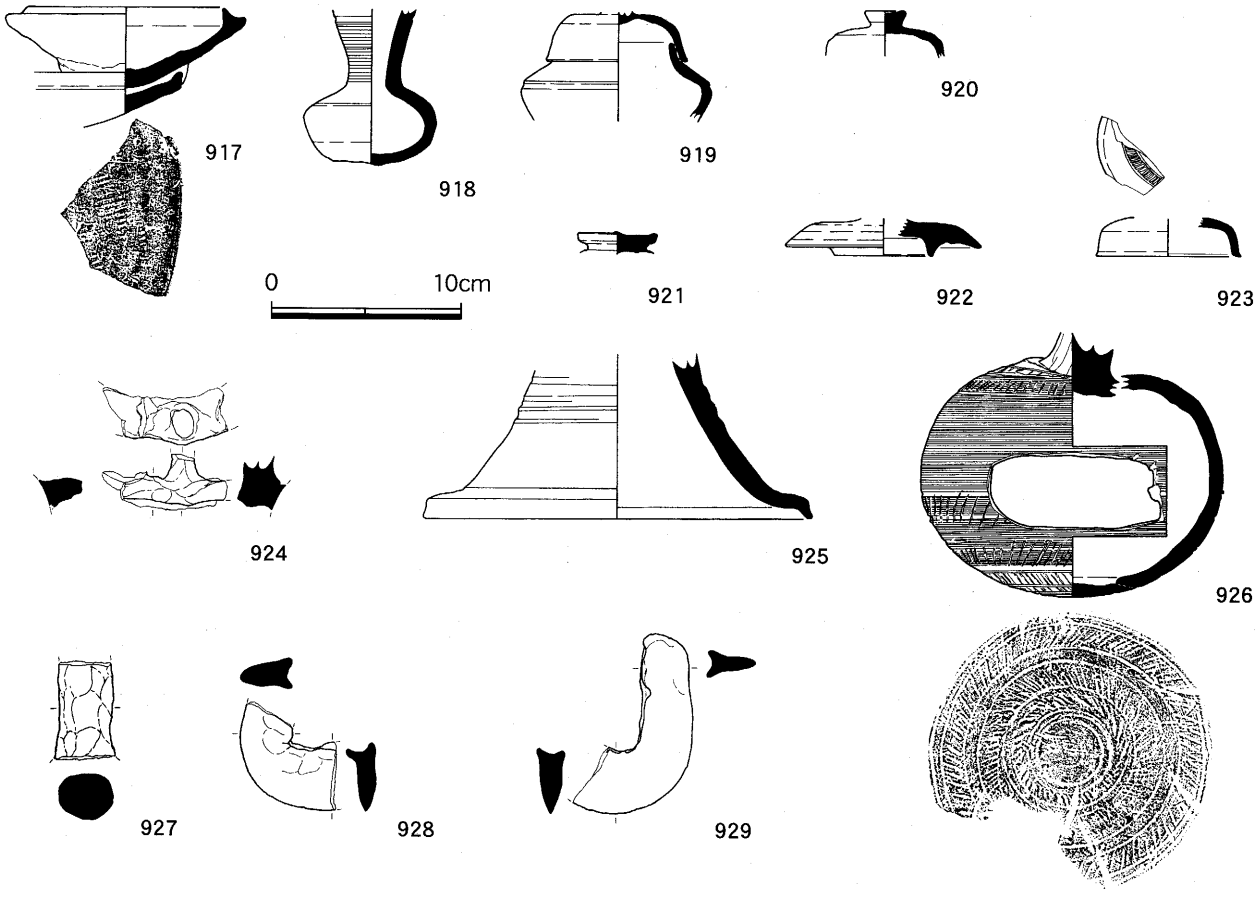


第68図　灰原出土遺物53(S＝1／4)

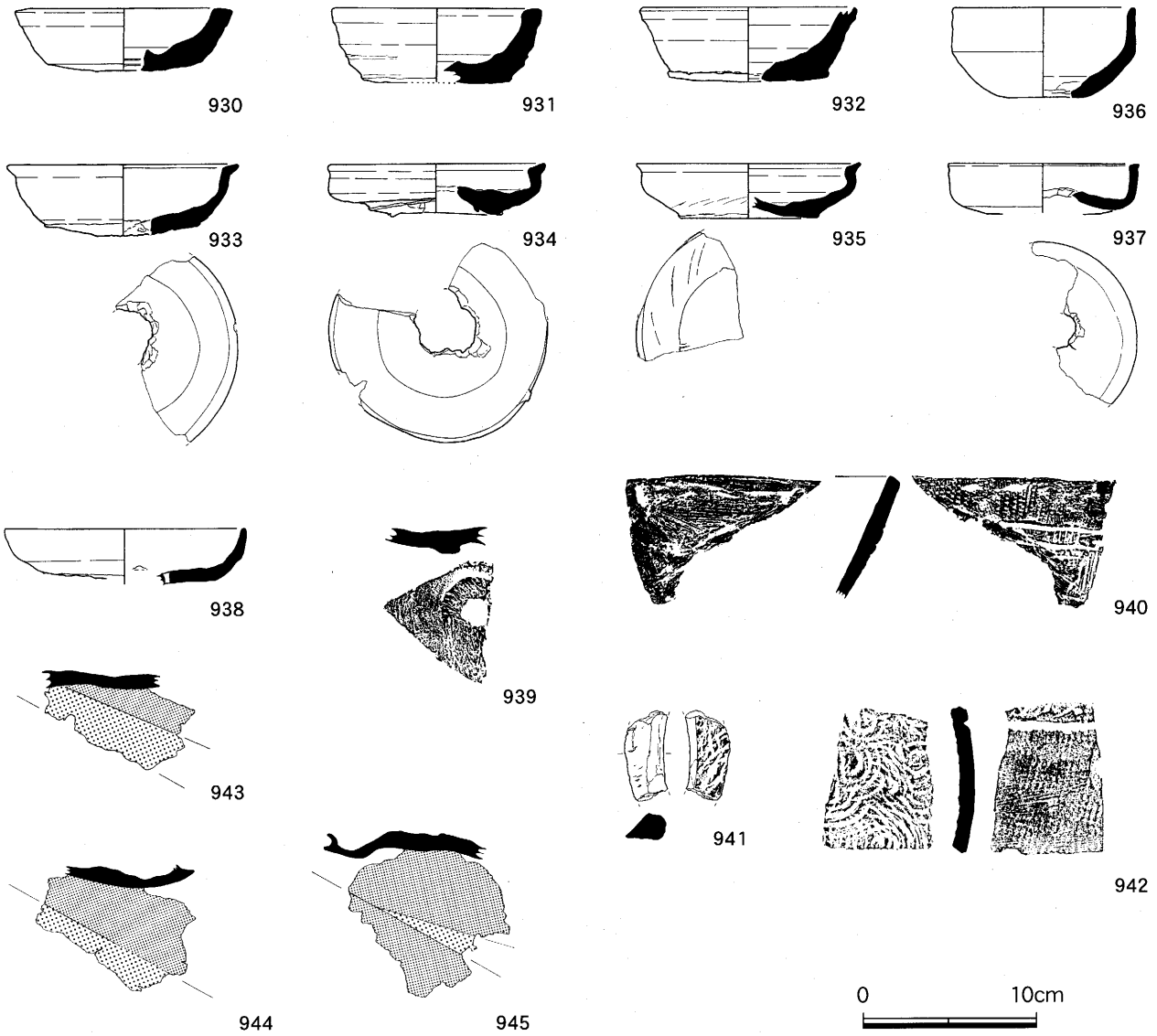
の子器の蓋の可能性がある。921は扁平で大型のつまみである。寒田窯跡群4号で出土した有蓋高坏や壺類の蓋のつまみの中では最も大きい。922は返りとつまみを持つ。直径に比して返り径がやや小さい。長頸壺の蓋の可能性も考えられる。923は天井部外面に2条の沈線を施し、その間にキザミ目を施している。口縁端部は外側に拡張されている。

924は装飾付壺の小像基部である。胴部突帯ごと剥離している。小像は上方が欠落しており、全体形は不明である。

925は子持器台や装飾付壺などの脚裾部と考えられる。高坏の脚よりかなり大型である。透かしなどは認められず、脚端部は下方に拡張している。



第69図　灰原出土遺物54(S＝1／4)



第70図　灰原出土遺物55（S＝1／4）

926は特殊扁壺である。隅丸方形に近い形の口を側部に開口する。体部の中央にある長い棒状の柄は、途中で折れているが、中実で表面は縦方向のヘラケズリで仕上げられている。体部外面のほぼ全体にカキメを施している。天井部と底部の外面には同心円の沈線を幾重にもめぐらせ、その間にカキメ工具の小口による刺突文を充填している。閉塞部は底部となっている。県内では岡山市百間川原尾島遺跡からも特殊扁壺が出土している[7]が、これとは別形式のものである。同型式のものは近畿から四国にかけて10点ほどが出土している[8]。

927は外面に指圧痕を残す柄状の製品である。特殊扁壺926の柄部分と類似するが、926の柄はヘラケズリで成形されている点が異なっている。

928・929は鍬先を模した須恵器と考えられる。断面は凹基鏃形を呈し、鉄製鍬先であれば木製部分をはめ込む溝は、指押さえで成形されている。刃に当たる部分はナデており、耳部と刃部の先を比較すると、刃部の方がよりシャープに作られている。兵庫県相生市那波野丸山1号窯跡から類似品が出土している[9]が、本窯跡のものより本来の鉄製鍬先に近い形状をしている。

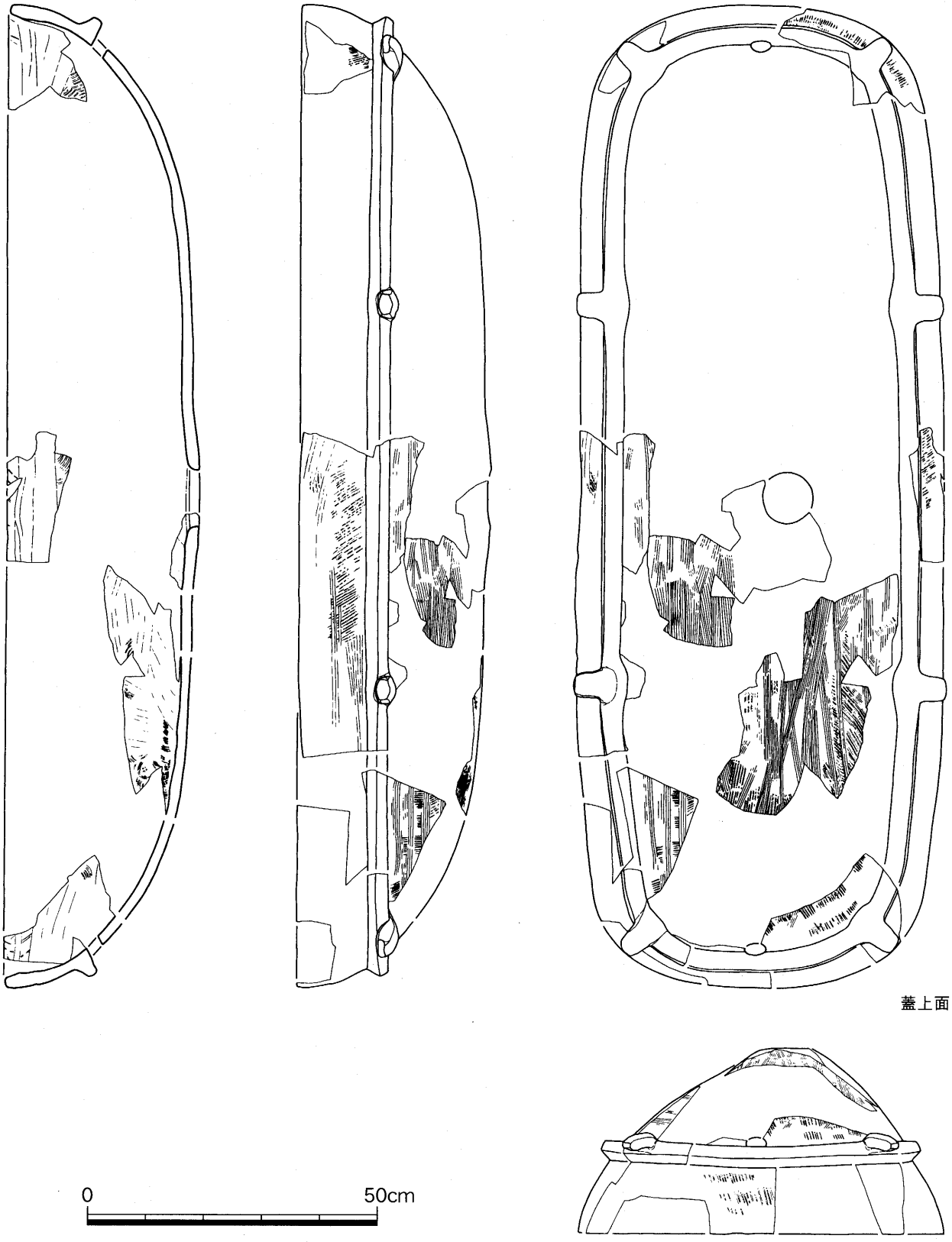
焼台(930～945)　930～935は専用の焼台として製作されたもので、大きく2種類に分類できる。930～932は器壁が厚手、胎土はやや砂っぽく底部にヘラ切りの穿孔が行われている。一方、933～935は、胎土が精良で底部の穿孔は、穿孔後に指で押さえている。後者は寒田窯跡群5号からも同形のものが出土している。専用の焼き台として焼成されたと考えられるが、この2種類に入らないものとしては936～938がある。936は椀に似た器形で、底部の穿孔は、穿孔後に指で押さえている。937は短頸壺の端面を持つ蓋に類似しており、底部の穿孔はやはり穿孔後に指で押さえている。938は坏蓋と同じ器形で、底部に串状工具による外面からの穿孔を数ヵ所行っている。穿孔は貫通するものとしないものがある。

939～945は焼成に失敗したと考えられる他器種の破片を焼き台として転用したものである。939は高坏の坏部片を転用したもので、脚部を削り落としている。脚部を削り落とした際の擦痕が残っている。この他にも、図化はしなかったが、脚部を削り落とした後、底部に金属工具による穿孔を行った痕跡のある焼台(高坏転用・図版22参照)なども存在する。940は甕の口縁部片を転用したものである。口縁部外面に櫛状工具による刺突文を施し、その下に2条沈線に区画された縦方向のヘラ描直線文を施す。乾燥中にひびが入ったようで、補修用粘土を塗りつけた痕跡が残る。941は甕の体部上端の切り落とし陶片[10]を、焼台に転用したものと考えられる。同心円あて具痕を残す面、ヘラ状工具によるシャープな切り取り面と指ナデによる面を持つ。942は甕の破片を転用したと考えられるが、図の上方に金属工具によって施されたと考えられるV字状のシャープな切り込みを持つ。

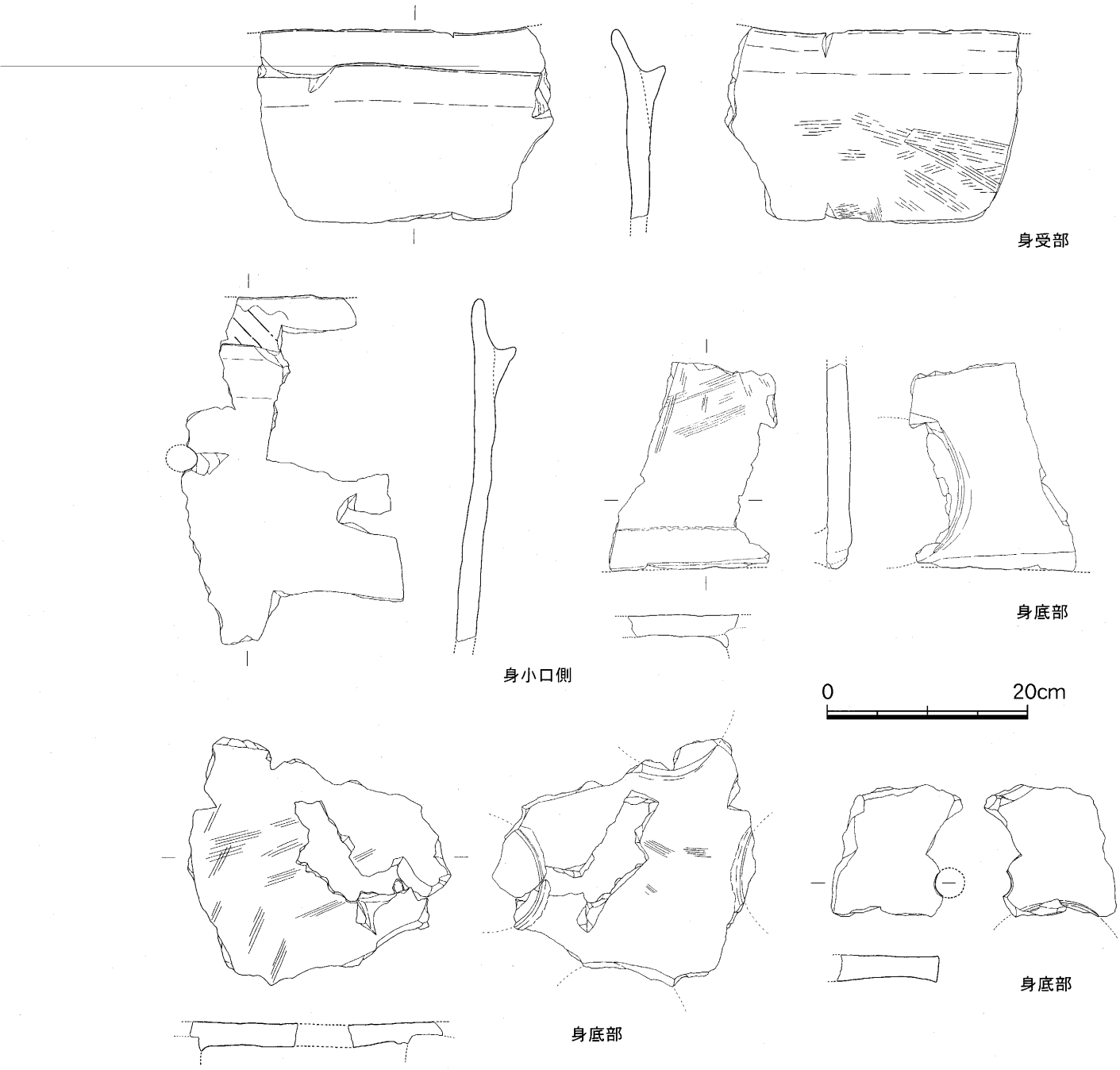
943～945は崩れた窯体片や砂礫塊を焼台として使用した例である。

陶棺　土師質亀甲形陶棺の破片が、整理用コンテナで5箱程度出土している。その多くは4区の北半分に集中しているものの、それらは造成土や土壙内埋土からであり、2次的に移動した状態のものがほとんどと思われる。破片には、部分によって焼成の度合いがかなり違うものが含まれており、一見すると別固体と思えるほどの差が見られるが、胎土や調整、器壁の厚さ等からこれらは同一個体と思われる。出土した破片には、赤褐色を呈する化粧土が認められるものがある。これは、蓋の外面や底部近くの身側壁外面で顕著に認められ、その厚さは3㎜に達する部分もある。この化粧土は、蓋の内面や身の底部、脚部でもその痕跡が確認できることから、製作時には陶棺のほぼ全面に塗られていたと思われ、赤色系の発色を強く意図していたと考えられる[11]。

蓋は全体の1/3程度が残存しており、図上で復原を行うことができた。その規模は、全長約170㎝、幅約60㎝、高さ約32㎝で、ドーム状を呈している。器壁の厚さは、身と接する端部近くで2.5㎝、その他の部分で1.5～2㎝を測る。色調は、全体的ににぶい黄橙色～明黄褐色を呈し焼成は良好であるが、片方の小口は淡黄色を呈し、焼成状態も悪い。この蓋の両小口に対応する、身の小口上半部の色調や焼成状態がそれぞれ一致しており、蓋を身に乗せた状態で焼成した可能性が考えられる。蓋の天井部中央には直径約9㎝の封じ孔が1ヵ所認められるほか、片側の小口中央部にも幅3㎝程度の小孔があけられている。蓋が身と接する部分から蓋の内面にかけては、カシワの葉と思われる葉脈の痕跡が明瞭に残っている。身の上端部にも同様の葉脈痕が見られることから、一旦身を作っ



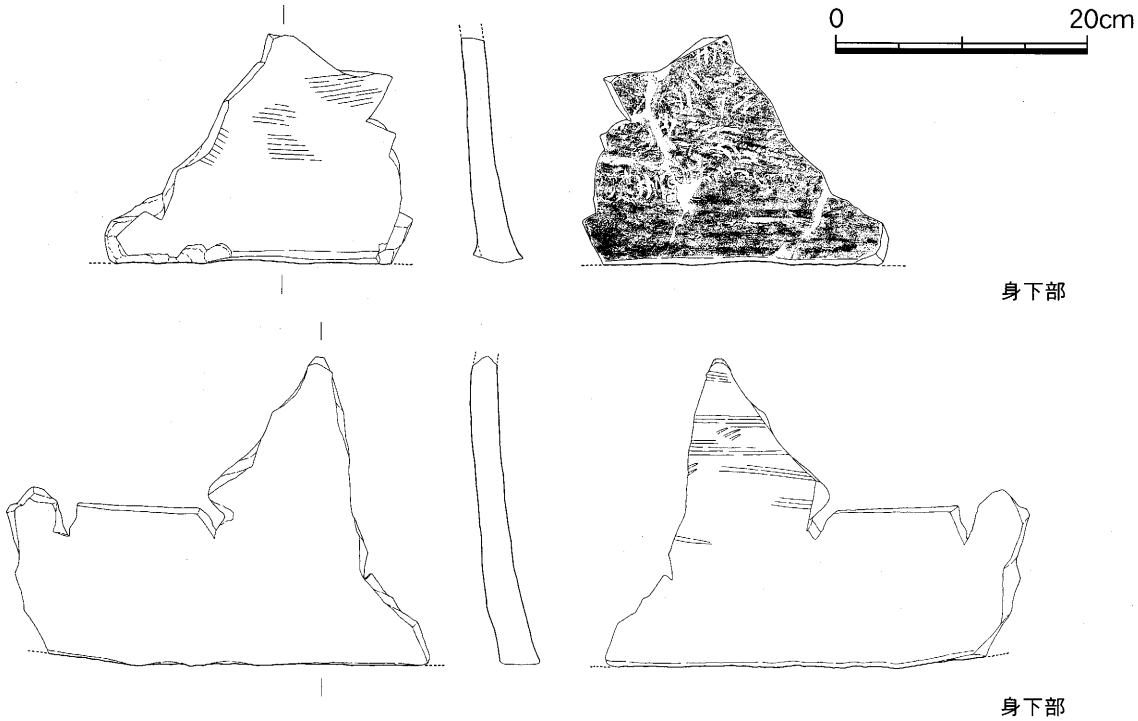
第71図　陶棺１（S＝1／10）



第72図　陶棺２（S＝1／6）

た後、木の葉をはさんでその上に直接蓋を作りあげる、いわゆる別づくりにより製作されたことがわかる。葉脈の窪みは、身よりも蓋のほうが深いことから、カシワの葉は裏側を上にして敷かれたものと思われる(12)。

蓋の下端部から上へ15cm程の位置に、横位突帯が1本認められる。残存する破片には、他の横位突帯や縦位突帯の痕跡が全く見られないことから、おそらく蓋に付く突帯はこの横位突帯のみであると思われる。突帯の断面は、埴輪のタガに似た台形状を呈し、上辺約2cm、下辺約3.5cm、高さ約3cmを測る。剥離した突帯の裏面の観察から、まず直径2cm程度の粘土紐を突帯の位置に貼り付け、その上から厚さ5mm程度の薄い粘土板を巻いた後、台形状に形を整えていったことがわかる。この突



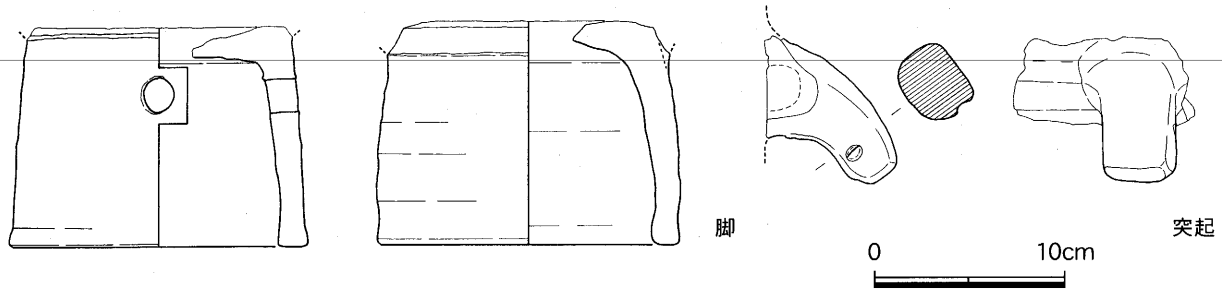
第73図　陶棺３（S＝1／6）

帯には鉤状の突起が付く。突起が認められる破片は3個体のみであるが、蓋に付いた剥離痕の位置等から、蓋の四隅とそれぞれの長側面に2ヵ所の合計8個であった可能性が高い。突起の断面はややいびつな隅丸長方形で、その幅は、突帯と接合する部分で4～5cm、先端部で3.5～4cmを測る。なお、突起は突帯形成後に貼り付けによって接合されている。

蓋外面の調整は、突帯より下の部分は主として横方向のナデを、突帯より上の部分については目の粗い横方向のハケ目調整をそれぞれ主とするが、どちらもそれほど丁寧なものではなく、整形時の平行タタキの痕跡が多くの部分で認められる。蓋内面は、葉脈痕が残る部分から突帯の裏側にかけては横方向のナデが施され、そこから上の部分にかけては不定方向の粗いナデにより仕上げられている。また、上半部を中心に同心円あて具の跡が明瞭に残っている。

身は全形を推定できる程の破片がないため、その規模については明らかではないが、幅と長さについては蓋のそれと大きく異なることはないと思われる。身の側面及び底部の厚さは2cm前後であるが、身側面が底部と接する部分は補強のため内外に粘土が貼り付けられており、3～4cmの厚さを測る。出土した身側面の破片には、突帯あるいはその剥離痕を有するものが全く認められないことから、身には突帯が存在しない可能性が高い。なお、底部の破片で円孔を有するものが1点存在する。

身上端部には、蓋受けと立ち上がりを有する。蓋受け部は、身上端部を作った後に粘土を貼り付け、高さ2～2.5cmの断面直角三角形状に整形している。また、立ち上がり部と蓋受け部が接する部分にはナデが施され、なだらかな曲線を呈している。立ち上がりの高さは約5cmを測り、先端は丸くおさめている。その厚さは1～1.2cmと薄く、身側面の厚さの半分程度しかない。これは、蓋受け部を貼り付けた後、そこから上の部分をつまみ上げながら全体的に形を整えていったためと思われる。立ち上がり部の外面には、蓋下端部内面と同様の葉脈痕が認められる。小口のほぼ中央部、身上端



第74図　陶棺４（S＝1／4）

から下へ約16cmの位置に、蓋の小口にある小孔とほぼ同形同大の孔が1ヵ所認められる。

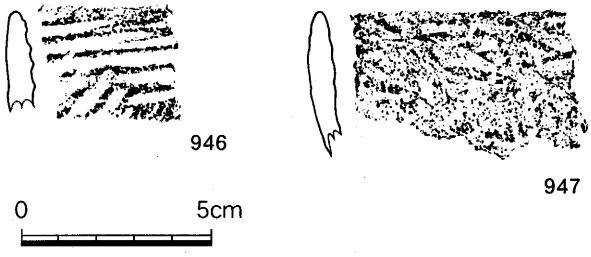
身外面の調整は、上端部から小孔付近までは主としてヨコナデが行われ、そこから下の部分については平行タタキの後粗いナデが施されている。側面下端部付近では、粗い不定方向のハケ調整の後ナデにより仕上げられている破片が多い。また、脚部以外の底部外面には粗いナデ調整が行われている。身内面の調整は、側面上端部と下端部付近ではヨコナデが施され、それ以外の側面では主としてハケによる調整がなされているようである。また、底部近くの側面の破片には、同心円あて具の跡を残しているものが多い。底部の内面は、不定方向のハケとナデによる調整が行われている。

脚部の破片は少なく、全て底部から剥離した状態で出土している。したがって、脚の数については明らかではないが、底部外面に4ヵ所の脚部剥離痕を有する破片があり、その間隔と蓋の規模から考えれば、3列7行の脚が想定できる。

図上で復元できた脚は2個体で、それぞれ1/2と1/3程度が残存している。脚の大きさはほぼ同じで、下端部径16cm、高さ約11.5cm、厚さ1.2～1.6cmを測る。どちらも上端部から下端部に向かってわずかに開き、下端部が内外に少し肥厚するが、一方は直線的に開くのに対して、もう一方は中央部にやや膨らみを有している。下端部から上へ7cmの位置に、径約1.6cmの円孔が1ヵ所穿たれているが、全ての脚に存在したかどうかは不明である。脚はロクロによって成形されており、内外面とも丁寧なナデが施されている。脚上端部は内側に折り曲げられ、幅5cm程度のドーナツ状の平坦面を形成している。この平坦面の一部が中心部に向け下がっていることから、脚の中心の隙間に上から粘土塊を充填した後、脚部と底部の接合が行われたと思われる。

製塩土器　灰原からは、窯で焼成された須恵器・陶棺の他にわずかだが製塩土器が検出された。

946・947は口縁部の破片である。946の外面には平行タタキが施されている。947も表面の劣化が著しいが、平行タタキのようである。



第75図　製塩土器（S＝1／2）

註

(1)　本書で須恵器杯H・Gの記号は奈良国立文化財研究所の用例に従う。

(2)　古代の土器研究会編『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東６ 須恵器の製作技法とその転換－』 2001

(3)　勝央町畑の平9号墳に類例がある。
弘田和司編『西大沢古墳群 畑ノ平古墳群 黒土中世墓 虫尾遺跡 茂平古墓 茂平城　新勝央中核工業団地建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111　岡山県教育委員会　1996

(4)　提瓶の部位名称は横瓶に準ずる。須恵器観察表末の「横部の部位名称」参照。

(5)　単に肥厚したのみで幅の狭いものについて「口縁帯」と呼ぶのは不適当であろうが、ここでは説明の煩雑さを避けるため、すべて「口縁帯」と呼ぶことにする。

(6)　対象時期は異なるが、甕の容積による分類は、北野博司「須恵器貯蔵具の器種分類案」『須恵器貯蔵具を考えるⅠ つぼとかめ』北陸古代土器研究　第8号　北陸古代土器研究会　1999 を参考にした。

(7)　宇垣匡雅編『百間川原尾島遺跡3　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅸ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88　建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会　1994

(8)　山田邦和「須恵器特殊扁壺に関する覚書」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1992

(9)　松岡秀樹「土製U字型鍬先について」『古代学研究』第81号　古代学協会　1976

(10)　望月精司「須恵器甕の製作痕跡と成形技法」『須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究 第9号 北陸古代土器研究会　2001

(11)　岡山理科大学自然科学研究所 白石 純氏の御教示による。陶棺の胎土分析については、附編 自然科学的分析１を参照。

(12)　倉敷市立自然史博物館 狩山俊悟氏の御教示による。

第４章 まとめにかえて

第１節　窯の構造

4号窯は地下式無段無階の窖窯構造をとる登窯で、規模は長さ9.68m、幅1.72mである。焼成部の傾斜は約30°である。崩落した窯の天井部塊に残る窯壁の重ね塗りの痕跡から7回以上の操業が行われていることがわかり、焚口の側壁や床面の状態から数回の改修を受けていることも判明した。以下にその変遷過程の概略を述べる。

まず、4号窯は地下式窯であり、斜面に等高線と直交するトンネルが掘削される。その排出土は窯前面の斜面下方に廃棄され、第11・12図83層が形成されたと考えられる。

次に天井部及び床面にスサ入りの粘土が貼られる。検出された最初期の床面が第8・9図51層である。こののち最初の操業が行われる。当然、須恵器を詰めた状態での本操業の前に、壁や天井部の粘土を固めるための燃焼も行われたと考えられる。床面上には傾斜した面に須恵器を安定して固定するために使用されたと考えられる粘土塊・崩落した窯壁などが残っていた。

最初期の床面(第8・9図51層)とその後に貼られた床面(第8・9図49層)との間には、自然堆積層(第8図50層)が存在することから、しばらく操業を停止していた期間があることがわかる。また、この2層の床面は本来は窯の床全面に貼られていたものと考えられる。

窯内に落下した天井部の塊には数度の操業に伴う補修のため、粘土が7層以上に貼りつけられており、その厚さは約28cmに達している。これよって内部空間が圧迫されたことは、容易に想像できる。このため製品を置く空間及び作業空間を確保する必要から、床面の掘削が行われている。この掘削は確認調査時のトレンチ4付近から煙道に至る部分にはおよんでおらず、初期の床面である第51・49層が残されている。この部分には岩脈が走っているため、あえて掘削を行わなかったものと考えられる。

掘削した部分には砂質の強い床面形成土が貼られ、数回の操業が行われる。この間に蓋坏2・21等が埋め込まれたと考えられる。さらに砂質の床面形成土には甕の破片などが水平に近い状態で食い込んでおり、焼台に転用されたものと理解される。

焚き口の南側の側壁は操業を重ねるにつれて、徐々に内側に狭められており、燃焼効率をあげる改良が行われていると考えられる。その側壁の底部も床面の掘削に伴って、徐々に下方に下がっていることも観察できた。

ところで岡山県における古墳時代窯跡の調査例は比較的少なく、窯の構造が把握できるものは限られている。しかし、4号窯に近い時期の窯跡は備中においては5ヵ所が調査されており、資料的には恵まれているほうだろう。窯の全容が判明しているものに総社市くもんめふ2号窯跡[1]と倉敷市二子御堂奥3号窯跡[2]があり、金光町上竹西の坊1号窯跡[3]・倉敷市寒田窯跡群5号[4]は煙道部分を含む上方が削平されていた以外は残りが良かった。

どの窯も、構造的には地下式無段無階の窖窯構造をとる登窯である[5]。規模は長さ9～10mのものと7m前後の二種類に区分できそうである。寒田窯跡群4・5号及びくもんめふ2号窯跡は前者で、比較的細長い葉巻形の平面形を呈しているのに対し、二子御堂奥3号窯跡は後者で短く寸詰まりの平面形である。縦断面を見ると前三者の床面は最大傾斜角30°前後とかなり急傾斜なのに対し、二子御堂奥3号窯跡は傾斜角15°と緩やかである。また、二子御堂奥3号窯跡は直立煙道を持ち、構造上、前三者と異なっている。上竹西の坊1号窯跡は、煙道部が削平されていて全容が不明であるが、全長は7m前後と推定され、床面の傾斜角は残存部で18°とやはり緩やかである。二子御堂奥3号窯跡と同様の構造と推定できる。

これまでの研究では、この時期の窯の規模については小型化する傾向が指摘されている[6]。二子御堂奥3号窯跡・上竹西の坊1号窯跡を見る限りでは備中でも窯が小型化すると言えそうである。しかし、くもんめふ2号窯・寒田窯跡群5号は二子御堂奥3号窯跡・上竹西の坊1号窯跡と併行する時期に操業していると考えられるが、寒田窯跡群4号と同様の形態をとる。寒田窯跡群4・5号及びくもんめふ2号窯跡は坏Hを主体とし、坏Gをほとんど生産しない窯であるのに対して、二子御堂奥3号窯跡・上竹西の坊1号窯跡は坏Gを一定量生産しているようである。窯の規模の相違が時期的なものか、坏Gの導入にかかわる工人集団の差であるかは、なお検討の余地が残る。

また、床面の傾斜に関しては陶邑及び広島県などでは緩傾斜から急傾斜に移行することが指摘されており、備中南部は様相を異にしていると言える[6・7]。この時期の窯において緩傾斜化が指摘されているのは加賀の古窯跡群であり[8]、その関係については今後の検討課題である。

附属施設としては、煙道背後の排水溝が寒田窯跡群4号で確認されており、また上竹西の坊2号窯跡で確認されている土壙がこれに相当する可能性がある。また、時期はさかのぼるが奥ヶ谷窯跡[9]でも確認されている。

註

(1) 武田恭彰編『奥坂遺跡群　鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15　総社市教育委員会　1999

(2) 葛原克人・池畑耕一「第Ⅴ部　二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 第2集　岡山県教育委員会　1974

(3) 武田恭彰・井上 弘「上竹西の坊遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69　岡山県文化財保護協会　1988

(4) 柳瀬昭彦編『黒土窯址・寒田窯址〔広域営農団地農道整備事業(備南地区)に伴う発掘調査Ⅰ〕』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(31)　岡山県教育委員会　1979

(5) 上竹西の坊1号窯跡は半地下式と推定されているが、構築時には地下式であった可能性が指摘されている。

(6) 中村 浩「窯体構造の問題」『陶邑』Ⅱ　大阪府文化財調査報告書第29輯　1977

(7) 河瀬正利・藤野次史「Ⅳ. まとめ」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅺ　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会　1993

(8) 北野博司「「加賀」の須恵器生産における7世紀初頭の画期」『北陸古代土器研究』第3号　1993
望月精司「須恵器窯構造から見た7世紀の画期－特に南加賀古窯跡群の様相を中心として」『北陸古代土器研究』第3号　1993

(9) 柴田英樹「第5章 奥ヶ谷窯跡」『藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡 中山古墳群 西山遺跡 西山古墳群 服部遺跡北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121
日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会　1997

第２節　須恵器の編年

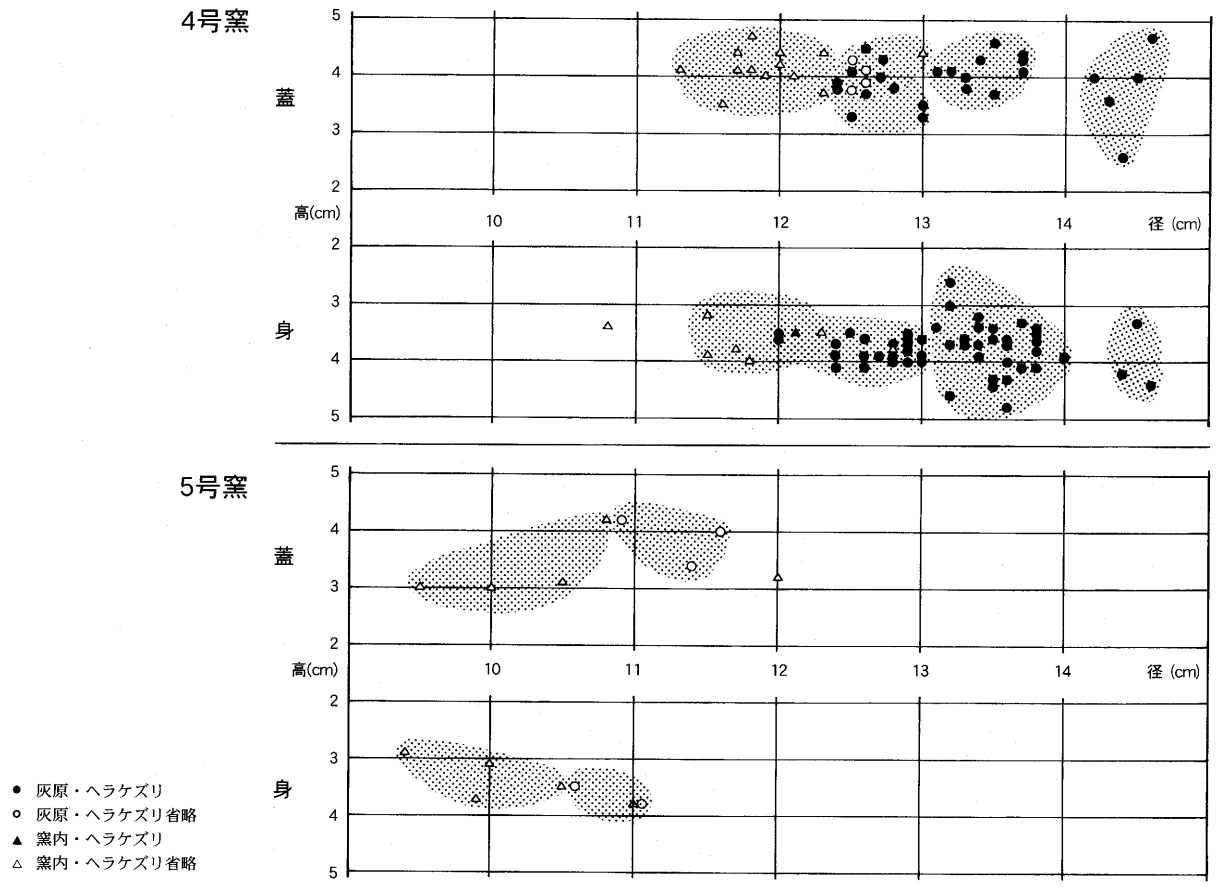
１　寒田窯跡群の蓋坏

寒田窯跡群では7基の窯跡が確認されているが、このうち1～3号の3基は奈良時代の瓦窯である。須恵器窯は4～7号の4基で、このうち今回調査された4号窯と岡山県によって調査された5号窯について実態がわかっているにすぎない[1]。

まずは4・5号窯出土の須恵器について、形態と法量の変化が把握しやすい蓋坏を中心に分類し、編年的な位置付けについて考えてみたい。

灰原から出土した蓋坏については、本来のセット関係を重視して坏蓋の口径と、坏身の受部の口径を計測して対応させ、さらに調整による区分を加えると、1～4類に分類できる[2]。1類は坏蓋の口径が14.5cmを中心とする。数量的には少なく、径に比して高さの低い扁平な形態のものが多い。2類は坏蓋の口径が13.5cmを中心とする。1類との間に若干の間隙があり、第9図第50層の窯が放置された期間に対応する可能性がある。3・4類は坏蓋の口径が12.5cmを中心とする。調整が回転ヘラケズリのものを3類、ヘラケズリを省略したものを4類とする。

4号窯の窯体内から出土した蓋坏については、出土状況を検証し若干の資料操作を行う必要がある。これらは最終操業時の床面直上に残っていた一群と、床面形成土に埋め込まれていたものにわ



第76図　坏・坏蓋法量相関図

けられる。最終操業時の床面直上に残っていた一群は二次焼成を受けたものが多く、とくに坏蓋10には天井部に穿孔の痕跡があり、焼台に転用されたことがわかる。このことから最終操業時の床面直上に残っていた一群は最終操業時及び焼台に転用された最終操業直前の操業時のものと考えられる。これらは坏蓋の口径が12cm前後に集まり、調整もヘラケズリを省略したものばかりと灰原出土の蓋坏と区別でき、1グループとして認識できるので5類とする。また、坏Gの蓋と考えられるもの(19)が1点共伴している。

床面形成土に埋め込まれていた蓋坏は、最終操業よりさかのぼる時期のものと考えられる。やや口径が大きい坏蓋2・坏身21などは灰原のものと同じ4類に属し、径の小さい坏蓋7・8などは窯内の5類に属する。坏身24も床面形成土に埋め込まれていた可能性が高く、回転ヘラケズリ調整から、3類としてよいだろう。

次に5号窯の蓋坏についても同様に区分すると、2グループに区分できる[3]。主に灰原出土のもので坏蓋の口径が11cmを中心とする6類と、主に窯内出土のもので坏蓋の口径が10cmを中心とする7類である。

4号窯跡の1～3類までは回転ヘラケズリ調整、4・5類がヘラ切り後無調整あるいはナデ、5号窯跡では6・7類ともヘラ切り後無調整あるいはナデと、口径の縮小と調整の転換が読みとれる。5号窯は4号窯に続いて操業が行われたと考えられる。

以上、7類に区分したが3・4類は回転ヘラケズリ省略の過渡期と見て、ここでは一時期として認識すると、細かくは6時期の変遷が認められる。これらを畿内の編年と対比させると、1・2類は陶邑編年のTK209型式の範疇に入る。3～5類は陶邑TK209型式とTK217型式の間に該当すると考えられ、回転ヘラケズリを省略した個体が現れ始める[4]。また、5類は川原寺SD02[5]・山田寺下層SD619[6]に近い口径値を示す。

6・7類は陶邑TK217に併行すると考えられ、6類は山田寺整地層[6]・飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層[7]に近い口径値を、7類は坂田寺SG100[8]に近い口径値を示す。

以上から寒田窯跡群4号は6世紀末から操業を開始し、7世紀第1四半期まで継続されたと考えられ、同5号はそれに続いて7世紀第2四半期まで操業したと考えられる[9]。また、以後の記述の簡素化のため、1・2類を寒田Ⅰ期、3～5類を寒田Ⅱ期、6・7類を寒田Ⅲ期と呼ぶこととする。

2　備中南部における消費地の須恵器

蓋坏以外の器種については、窯内からの資料が限られており、また灰原から出土した資料について各器種の併行関係・型式間の重なりなどは明確にしえないのが実状である。そこでまず消費地における動向を確認するために周辺古墳出土資料による編年を行ったのが第77・78図である[10]。これを参考としながら、寒田窯跡群の須恵器編年を行うこととする。なお、取り上げる資料は分類の煩雑さを避けるため、寒田窯跡群4・5号と併行期と考えられる陶邑編年TK43～TK217の時期に限定した。この前後の時期の資料については必要に応じて取り上げることとする。蓋坏については4・5号窯の分類[11]と陶邑編年に依拠しているので、以下はその他の各器種ごとの変遷について述べる。

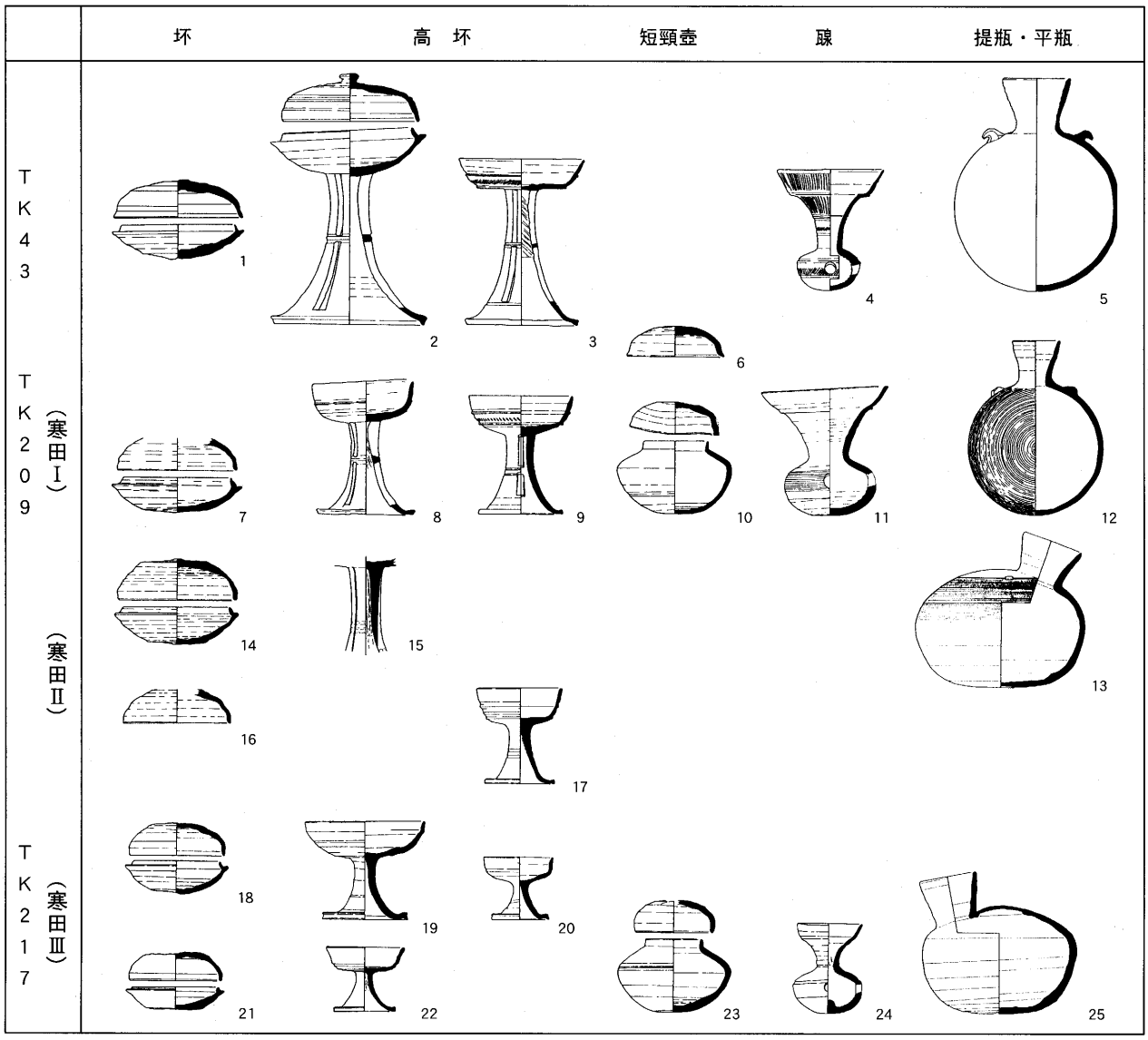
有蓋高坏　長脚のものと短脚のものが存在する。まず長脚の有蓋高坏はTK43で最も大型化する。総社市江崎古墳の有蓋高坏などがこれに当たる。また、真備町箭田大塚古墳の有蓋高坏には一回り小型のものがあり、若干時期が下る可能性がある。

次に短脚の有蓋高坏は、美作を中心とする県北で多く出土しており、県南、特に備中南部での出土例は少ない。これらは県北の例と同様に脚部の形状から2種類に分類できる。まず、脚部の屈曲する形状のもので1類とする[12]。倉敷市王墓山古墳・同矢部38号墳・真備町鵜越遺跡[13]などから出土している。通常の短脚高坏と同様の脚を持つものは2類とする。2類は倉敷市矢部南向遺跡の竪穴住居70[14]から出土した例が確認できる。これらはTK209と続く時期に確認できる。

高坏　やはり長脚のものと短脚のものが存在する。長脚の高坏がTK43で最も大型化するのも有蓋高坏と同様である。そしてやはりTK209にはやや小型化するようである。高坏の分類のうち、長

遺跡名	所在地	遺構	時期							坏G	有蓋高坏		無蓋高坏					提瓶					平瓶		短頸壺(蓋)		
			TK43	TK209				TK217					長脚有透		長脚無透		短脚										
				1	2	3・4	5	6	7		長脚	短脚	1	3	1	2		A1	A2	B2	B3	B4	3	4	1	2	3
こうもり塚古墳	総社市		■	■	■				■				○		○					○							
江崎古墳	総社市		■	■	■						○		○								○						
箭田大塚古墳	真備町		■	■	■						○		?														
赤井西2号墳	倉敷市	玄室	■	■	■								○											○			
赤井南3号墳	倉敷市		■	■	■			■	■				○		○		○			○			○	○			
段林古墳	鴨方町		■	■																					○		
金子石塔塚古墳	総社市		■	■	■										○					○							
王墓山古墳	倉敷市		■	■								○	○		○					○							
千引2号墳	総社市			■	■								○						○								
甫崎天神山8号墳	岡山市			■	■								○				○	?				?			○		○
雲山5号墳	岡山市			■		■		■							○									○	○		
竜王塚古墳	岡山市			■	■	■															○	○				○	
赤井南4号墳	倉敷市			■	■																			○			
半俵3号墳	倉敷市			■	■								?														
大池上2号墳	倉敷市				■			■	■							○	○							○			
矢部38号墳	倉敷市				■	■		■	■			○					○			△				○			
赤井西4号墳	倉敷市				■								○				○										
緑山17号墳	総社市				■			■	■				○				○				○		△				○
赤井西2号墳	倉敷市	羨道			■	■									○									○			
沖田奥2号墳	総社市				■				■						○									○			
藤原2号墳	総社市				■	■		■	■				○							○				○			
沖田奥3号墳	総社市				■					○					○									○			
野宮東平1号墳	総社市				■	■	■	■	■	○			?				○										
板井砂奥6号墳	総社市				■		■	■																			
前池内3号墳	岡山市				■	■	■	■	■							○				○			○	○			
古池奥1号墳	総社市					■								△													
宮の脇古墳	鴨方町					■									○									○			
沖田奥1号墳	総社市					■		■	■																		
阿阪古墳	鴨方町					■		■	■	○					○		○							○			
前池内4号墳	岡山市					■	■	■	■	○					○	○	○							○			
緑山6号墳	総社市	羨道					■	■	■															○			○
真宮5号墳	倉敷市						■	■																○			
千引6号墳	総社市						■			○						○	○										
宮山24号墳	総社市						■		■	○							○							○			
千引8号墳	総社市						■	■																○			
板井砂奥10号墳	総社市						■	■	■						○	○	○							○			
すりばち池5号墳	総社市							■	■																		
薮田3号墳	総社市							■	■							○	○							○			
塚地古墳	鴨方町							■	■															○			○
板井砂奥5号墳	総社市							■	■							○								△			
高津池北古墳	真備町							■	■						○	○								○			
又五郎谷2号墳	総社市								■								○										
沖田奥6号墳	総社市								■							○	○							○			
薮田4号墳	総社市								■								○							○			
板井砂奥15号墳	総社市									○						○											
矢部36号墳	倉敷市									○							○							○			

第77図　備中南部古墳出土須恵器組成表（時期の数字は寒田窯跡群の蓋坏分類に対応）



第78図　備中南部古墳出土須恵器編年(S＝1／8)

1・2. 江崎古墳　3・4. 赤井南3号墳　5. 金子石塔塚古墳　6. 段林古墳　7・8・11. 藤原2号墳
9・10・12. 緑山17号墳　13. 前池内3号墳　14・15. 古池奥1号墳　16・17. 板井砂奥10号墳
18・19・20・24. 高津池北古墳　21・22・25. 沖田奥6号墳　23. 塚地古墳

脚高坏の透かしについては第3章の事実記載に従った。TK209とTK217の間の様相は良好な資料が少なく、不明な点が多い。総社市古池奥1号墳からは透かしが省力化され切り込みとなったものが確認されており、板井砂奥10号墳などは、透かしを省略した長脚の高坏のみを伴っている。透かしをもつものが減少し、無透かしの高坏が優勢になっていくようである。透かしの無い長脚高坏は高さが10cm以上のものを1類、10cm以下のものを2類とした。高坏無透かし2類は脚部に1、2条の沈線をめぐらせることから長脚高坏の小型化したものと考えられる。TK217になると透かしを持つものは確認できない。長脚の高坏は脚部が極めて細く、高さが低くなる。脚端部は低脚のものも含めて、下に拡張するものばかりとなる。

短頸壺　短頸壺自身については変化に乏しく各時期の特徴を明確にできない。時期が下るにしたがって口縁部のたちあがりが若干弱くなるようである。これに対して蓋は3種類に分類可能である。

まず口縁端面を持ち、端面の外側のコーナーが外側に突出するものを1類とする。次に突出がなくなり端面を持つだけのものを2類とし、坏蓋と同じく口縁部を丸くおさめるものを3類とする。1類は鴨方町段林古墳・岡山市甫崎天神山8号墳・同雲山5号墳などTK43～TK209を初葬とする古墳から出土している。2類はTK209を初葬とする総社市緑山17号墳から、そして3類は鴨方町塚地古墳などTK217の古墳から出土している。このことから1類→2類→3類の流れが想定できる。また、MT10の総社市すりばち池2号墳出土の短頸壺の蓋は、同時期の坏蓋と同様に口縁端部内側に1条の沈線を持っており、これがTK10の同すりばち池3号の短頸壺蓋のような端面に変化していったと考えられる。

鴟　TK43では基部が細く絞り込まれ、外面にヘラ描斜文が刻まれる。TK209では体径に対する口径の比率がやや小さくなり、口頸部の文様が消滅する。TK217では体径と口径の比率が１：１に近くなる。

提瓶　まず把手の形状から分類する。輪状のものを1類、鉤状のものを2類、ボタン状のものを3類、把手無しのものを4類とする。また、口縁の形状では玉縁状のもの(A類)とまっすぐに立ち上がって、端部を丸くおさめるもの(B類)がある。

MT15からTK10にかけては、口縁部が外側に広がり玉縁状を呈するA類が卓越する。把手形状は1類と2類が認められる。TK43からはA類は少なくなる。把手は2類から3類に変化していくようである。4類はあまり多くは認められない。また、第77図からもわかるように寒田Ⅱ併行期以降、備中南部の古墳副葬品に認められなくなる。

平瓶　把手形状の分類は提瓶に準じて呼称することにするが、輪状の1類は存在しない。出現時期については、TK209がその出現期とされる[12]。備中南部の古墳から出土する平瓶は圧倒的に4類が多く、2類は確認できず、3類も少ない。3類がTK209までの古墳からしか確認されないことから、2類が出現して、4類までの変遷が極めて短期間であったことが推定される。

以上が備中南部の消費地における主な須恵器の変遷である。寒田Ⅱ併行期に、提瓶・透かしを持つ高坏が消滅し、蓋坏における回転ヘラケズリが省略されるようになるなど、大きな画期が設定できるようである。ただ、寒田Ⅱ併行期については良好な資料が少なく、高坏などの様相もいまひとつ把握できない。この時期の備中南部においては須恵器を豊富に副葬すると考えられる有力首長墓が確認できないことも一因であろう。

このほか甕や長頸壺なども主要器種ではあるが、古墳等からの出土資料は比較的限られており、今回は十分な編年ができなかった。

3　寒田窯跡群出土須恵器の編年

それでは生産地である寒田窯跡群ではどうであろうか。消費地と想定した備中南部の編年を参考としながら、生産地である寒田窯跡群の須恵器編年を行ってみたい。

有蓋高坏　寒田窯跡群からは短脚の有蓋高坏は確認されない。これまでに発掘された備中南部の窯にも出土例はなく、備中南部での生産はなかった可能性が高い。

次に長脚の有蓋高坏は、江崎古墳出土のものと比べると小型であると言える。透かしも三方透かしより二方透かしのほうが優勢で、351の透かしなどは2類となっており、全体に省力化の傾向がうかがえる。しかも、高坏全体に占める割合もそれほど多くないようで、器種として消滅直前の様相と言えるかもしれない。透かし3類及び透かしの無いものは確認できず、寒田Ⅱ期には生産が停止していた可能性が高い。

高坏　長脚の無蓋高坏も、TK43の赤井西2号墳出土例などと比べるとやはり小型化しているようである。透かしの方向で分類すると、二方透かしと三方透かしが大部分を占めている。これらにはそれぞれに第3章第2節で解説した透かし1～3類が存在し、そのまま透かしの省力化の方向を示していると考えられる[15]。3類の脚端部は下に拡張するものが多いのも新しい傾向と言える。つまり、1類→2類→3類の変遷過程が考えられる。しかし、透かし2・3類は備中南部の古墳出土資料のなかでは極めて限られている。しかも4号窯の窯体内からは高坏の良好な資料が確認されていないため、寒田蓋坏4類併行の高坏について明確にしえない。古池奥1号墳の高坏や、5号窯に1点のみ確認できる四方に切り込みを持ち、脚中程に1条の沈線を巡らせる高坏など、わずかな資料からではあるが推定すると、寒田Ⅱ期を通して透かし3類が存続していたと考えられるだろう。寒田Ⅰ期には透かし1類が優勢で、寒田Ⅰ期から寒田Ⅱ期にかけて2・3類が出現し、寒田Ⅲ期には透かしのないものが優勢で、透かし3類が細々と存続していたのであろうか。

短脚の高坏は4号窯の灰原から多量に出土している。その出現時期は明確にしえないが、4号窯の創業当初より存在していたと考えるほうがいいかもしれない。

5号窯では透かしの無い長脚高坏2類と短脚の高坏がほとんどである。

捏鉢　第3章で3類に分類したが、口縁部外面をわずかに被厚するような感じで丸くおさめるものを1類、口縁端面が内傾しやや内側に拡張するものを2類、口縁端面が外形するものを3類とする。

捏鉢は古墳に副葬されることが少なく、県内の集落などからの出土例もそれほど多くない。これまでのところ、3類は類例を確認できず、位置付けが困難である[16]。2類は比較的多く類例が認められ、TK43～217に属する。また、寒田窯跡群5号からも出土している。最後に1類であるが、厳密に一致する類例を確認できなかった。しかし、578のように把手を持つ捏鉢はTK10の陶邑TG51号窯[17]、さらにさかのぼって陶邑MT84号窯[4]などに認められる。このことから1類は古い時期の寒田Ⅰ期に属すると考えるほうが妥当であろう。

なお、上竹西の坊1号窯跡からは口縁部を丸くおさめるものが出土している。同様のものが寒風古窯址群からも採集されており、2類に後出する型式と考えられる。

短頸壺　やはり短頸壺自身については変化に乏しく各時期の特徴を明確にできない。蓋は4号窯灰原出土資料に1～3類がすべて存在する。先述の消費地の編年に当てはめるなら、1類が寒田Ⅰ期、2類が寒田Ⅰ～Ⅱ期以降、3類が寒田Ⅲ期以降に位置づけられる。

瑞　4号窯からの瑞の出土は少ない。消費地の編年にあてはめれば、TK43の名残である外面にヘ

ラ描斜文を刻む736は寒田Ⅰ期に属すると考えられる。750は基部が若干太めで、頸部に文様は無いが、同様のものが倉敷市王墓山古墳から出土しており、やはり寒田Ⅰ期に属するだろう。体径に対する口径の比率がやや小さくなり、口頸部の文様が消滅した751は寒田Ⅱ期に属すると考えられる。最後に寒田窯跡群5号からも瑞は出土しているが、全体形のわかるものがなく残念である。

提瓶　把手の形状では1～3類が存在する。1類については近年、2・3類とは別系譜の可能性が指摘されている[18]。4号窯出土の757・758は口頸部に突帯、稜線を持ち、他の提瓶と異なる点がある。また、把手の断面もやや板状を呈するなど、この把手が断面円形の2類に変化していったとは考えにくい。系譜が異なると考えた方が妥当であろう。

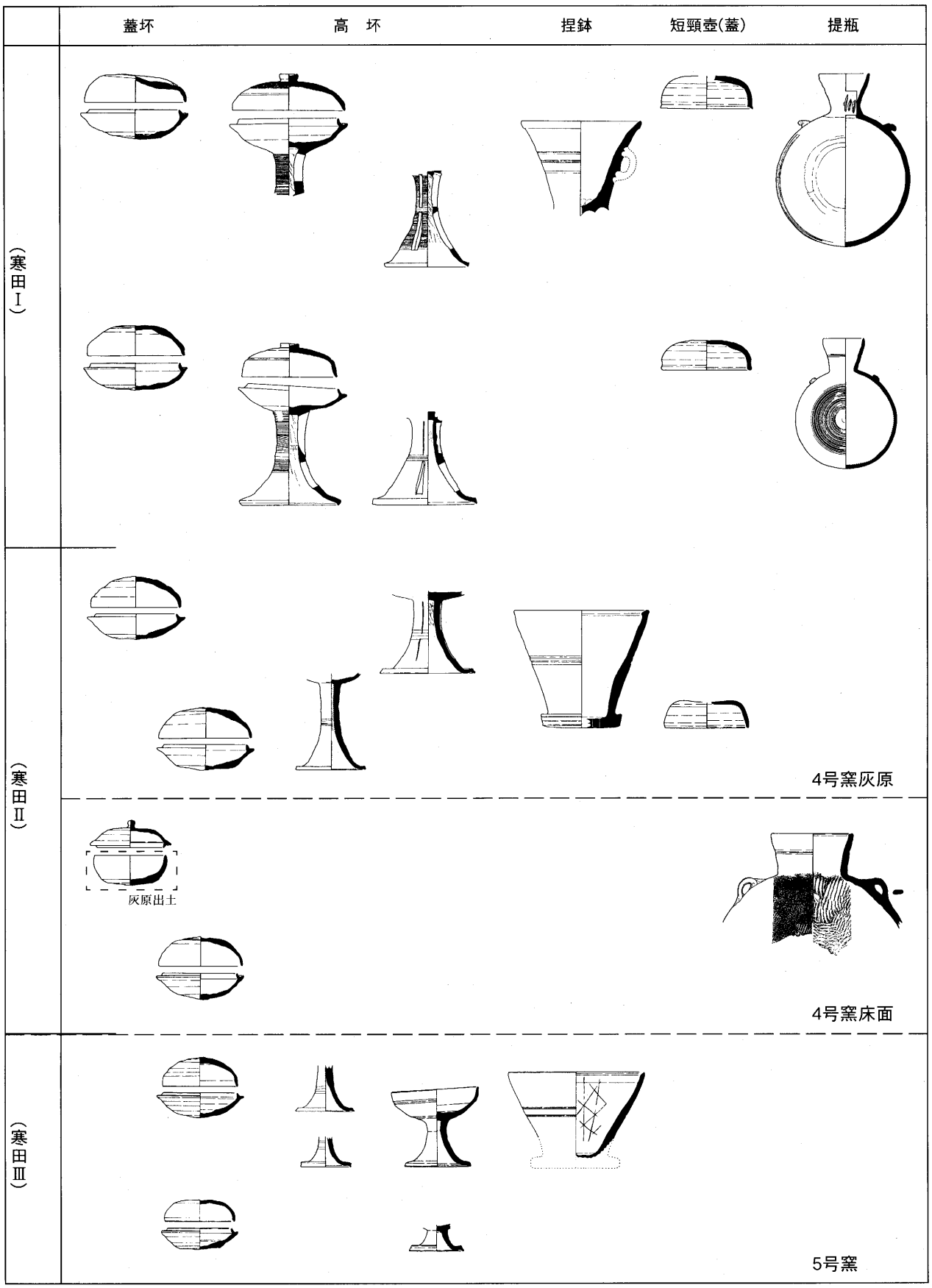
これに対し2・3類については、2類から3類への把手の形骸化の方向で把握できる。2類は窯の創業当初より存在したと考えられる。また消費地の編年によると3類は寒田Ⅰ併行期初葬の古墳に副葬されてはいるが、それ以降に認められないことから消去法でいくと3類も寒田Ⅰ期となる。

ただ、大型の提瓶については、窯内から出土しており寒田Ⅱ期に存在したことわかる。この大型の提瓶には鉤状・ボタン状の把手は存在しないことから、中・小型の提瓶とは系譜が異なると考えられる。

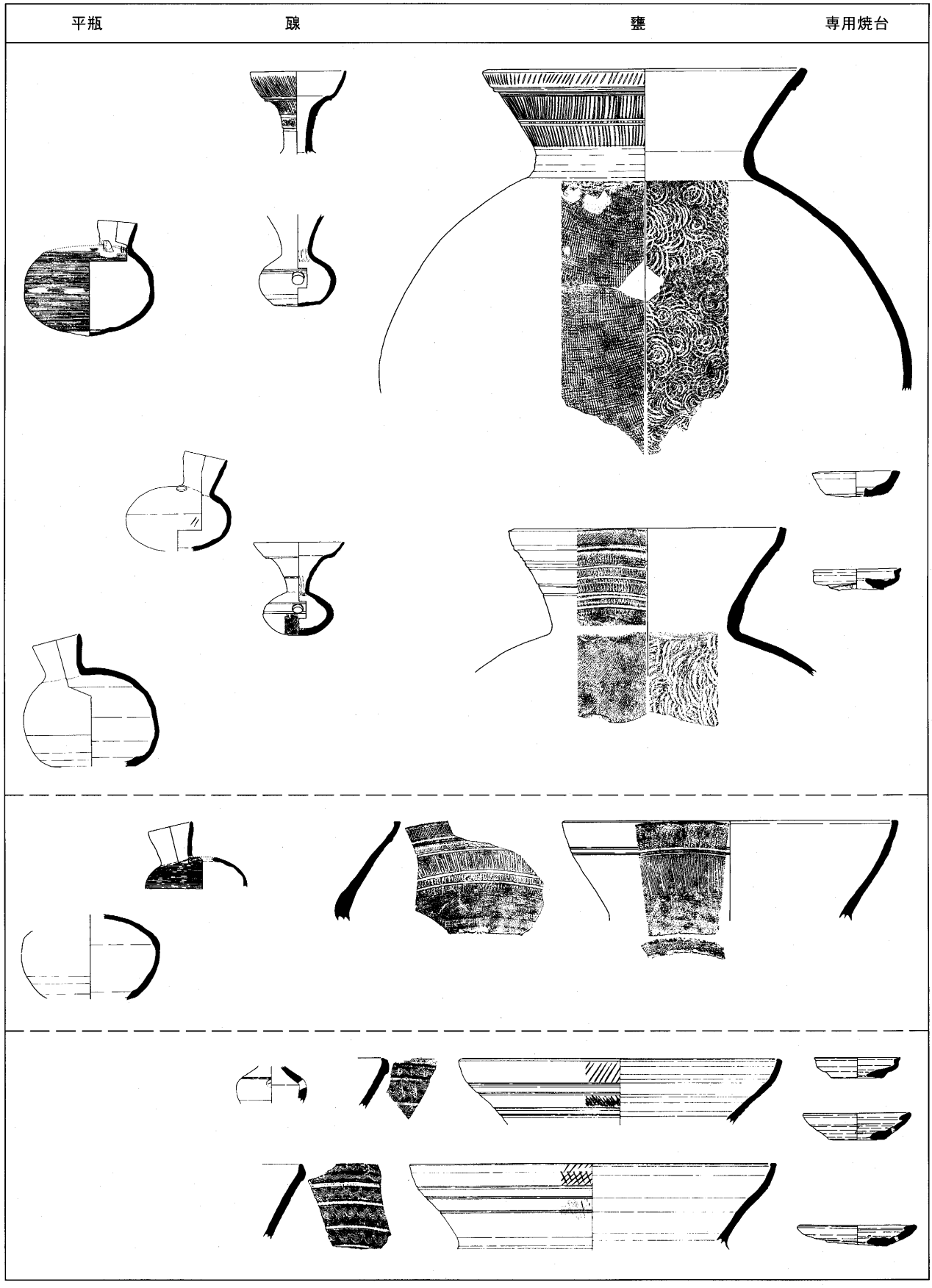
平瓶　把手は2～4類が存在する。平瓶は提瓶からの変化が唱えられている[19]。提瓶との併行関係から推定すると、その出現は寒田Ⅰ期までさかのぼると考えられる。4号窯灰原からは2～4類が出土しており、4号窯窯内には3・4類が残されていた。5号窯の資料は確認できたものは4類のみであった。このことからおおよそ2類→3類→4類の変化が追えると考えられる。各類の存続期間については、2類は備中南部で類例を確認することができなかったことから、寒田Ⅰ期における極めて短期間の生産ではなかったかと考えられる。3類は備中南部の寒田Ⅱ期以降の古墳に副葬が確認できないが、4号窯内に存在するので寒田Ⅰ～Ⅱ期に生産されたとしてよいだろう。4類は寒田Ⅱ期以降に生産されたと考えられる。

また、閉塞の位置を見ると、2類は全て閉塞部を底部にしている。3・4類では灰原には閉塞部を底部にするものが多く、窯内の2点はいずれも閉塞部を天井にしている。また、5号窯のものは閉塞部を底部にしているものは確認できなかった[20]。寒田Ⅱ期に閉塞部を底部から天井部に移す転換がおこっている。

甕　甕の中では口頸部に文様を施す甕について時期的な変化が追える。すなわち、4号窯の灰原出土例、同窯内出土例、そして5号窯灰原からの出土例とでは、施文方法等に変化が認められる。まず、4号窯跡の灰原出土品は明瞭な口縁帯を作り出すものが多い。口頸部にはヘラ状工具による縦方向の直線文を施し、横方向の沈線で分割する。次に4号窯跡の窯内には、口縁帯の不明瞭なものが出現してくる。施文も灰原出土品より、簡略化されたものが認められるようになる。甕58は口頸部の文様が縦方向のカキメとなり、横方向の沈線による分割は省略されている。甕59では櫛状工具による刺突文が二段に施され、さらに簡略化された感がある。最後に5号窯出土の特大甕では口縁帯の明瞭なものは認められなくなる。また、櫛描波状文が採用されていることも4号窯出土品との大きな違いである。4号窯跡では灰原・窯内ともに櫛描波状文が全く認められない。櫛描波状文を施す甕の口



第79図　寒田窯跡群須恵器編年１（S＝１／８）



第80図　寒田窯跡群須恵器編年２（Ｓ＝１／８）

縁部形状はそれまでのものと若干異なっており、新来の工人が生産に参加したことも考慮する必要があるかもしれない。

さらに後続する型式の坏を出土する上竹西の坊2号窯跡灰原では、口縁端部を丸くおさめ、櫛描波状文を数段に施すものや文様の全く省略されたものなども認められるようになるなど、簡略化の傾向がいっそう明瞭になっている。

その他の甕類については、時期的な変化を把握することはできなかった。

焼台　専用焼台については5号窯において比較的多く出土しているのに対し、4号窯では灰原の規模に比してかなり少ないと言える。4号窯の灰原からは2種類の専用焼台が出土している。厚手で底部にヘラ切りによる穿孔が行われたもの(1類)との、やや薄手で底部の穿孔を指で押さえたもの(2類)である。5号窯跡の灰原からは2類が出土している。また、同形状ながら径が一回り大きく側面に小孔を数ヵ所穿つもの(3類)が5号窯の灰原と窯内から出土している。1類→2類→3類の変遷と考えると厚手・ヘラ切り穿孔のものから、薄手・穿孔後指押えに変化し、さらに大型化・多孔化の傾向が推定できる。

また、4号窯の2類は胎土分析によって焼台1類や坏・甕類と胎土が異なることが判明している[21]。見た目にも胎土が精良で、石英・長石などの混和剤をほとんど含まないことがわかる。

4　まとめ

消費地と生産地の編年をあえて別々に概観したため、わかりにくいものとなってしまったが、寒田窯跡群における各時期ごとの様相をまとめてみたい。寒田Ⅰ期の蓋坏は回転ヘラケズリ調整を行う坏Hのみからなる。蓋の直径は13～14.5cmに収まる。高坏は長脚二段透かしの有蓋・無蓋高坏は前段階のTK43のものよりはやや小型化している。提瓶は鉤状把手が主体で、ボタン状把手のものが出現している。平瓶は出現したばかりで、鉤状把手のものから短期間にボタン状把手ものが登場しているようである。甕はTK43の名残で口頸部にヘラ描斜文を施すものが若干認められるが、文様は消滅し口縁部径と体部径の比率が小さくなっていくようである。口頸部に文様を施す甕は口縁帯を明確に造り出し、口頸部に縦方向のヘラ描直線文を施す。

寒田Ⅱ期では蓋坏Hのヘラケズリを省略したものが現れるとともに、新来の器種である坏Gが現れる。坏H蓋の直径は11.5～13cmに収まる。高坏の様相が不明瞭であるが、有蓋高坏は消滅している可能性が高い。長脚の高坏は透かしが切り込みになっているか、無透かしのものが主体になっている可能性がある。提瓶も消滅している可能性が高いが、大型の提甕は存在している。平瓶はボタン状把手のものと把手無しのものが存在しており、閉塞部が底部から天井部に移る。口頸部に文様を施す甕の口縁帯が不明瞭なものが出現する。

寒田Ⅲ期は5号窯の資料であるが、坏Gは確認できず、再び坏Hのみの構成となる。蓋の直径は9.5～11.5cmに収まる。長脚の高坏は小型化し、短脚の高坏との区別が明瞭でなくなっている。平瓶に把手のあるものは存在せず、閉塞部を天井にするものばかりになっている。口頸部に文様を施す甕に口縁帯の明瞭なものは無くなり、新たに櫛描波状文が導入される。また、編年表には掲げていな

いが、硯の出現は律令的土器様式形成の萌芽と捉えられるであろう。

寒田Ⅰ期と寒田Ⅱ期の間には有蓋高坏・提瓶が消滅し、新来の器種である坏Gが現れるなど、大きな画期が設定できそうである。ただ、寒田Ⅱ期と寒田Ⅲ期については、寒田Ⅰ期と寒田Ⅱ期の間ほどの画期を設定する根拠がなく、一時期としてしまう考え方もできる。寒田Ⅱ期の内容については、今後も検討していく必要があるだろう[22]。

また、岡山県におけるこれまでの須恵器編年上の問題点で、寒田窯跡群と関連すると考えられるものが二つある。まずは坏G出現時期の問題が挙げられる。主に県北部の事例から、坏Gの出現が遅れる[23]、あるいは少量生産[24]ということが指摘されていた。しかし定東塚・西塚古墳の調査成果から、坏Gの出現は畿内とほぼ対応していることが指摘されるようになっている[25]。

寒田窯跡群でも寒田Ⅱ期の蓋坏5類に伴って坏G蓋と考えられるものが1点、灰原からも数点の坏G身が出土している。蓋坏5類は飛鳥Ⅰ[26]に対応すると考えられ、数は極めて少ないが、備中南部でも畿内とそれほど遅れずに坏Gが出現していると言える。しかし、寒田窯跡群5号からは坏Gが確認されておらず、寒田窯跡群を形成した集団においてはその導入に消極的であり、極めて限定的な生産であったと考えられる。その要因については今後の検討課題であるが、北部九州における無鈕蓋坏の逆転現象から、蓋と身の両方を容器に使用していたことを推定し、「蓋を容器に使う伝統の継続」を指摘した内山の論も示唆的である[27]。備中南部において坏Hは逆転しなかったが、この「伝統」に規制され、容器として坏Gの生産が拡大しなかったとも考えられる。また、坏Gは本来仏具である金属器を模倣したものであり、古墳祭祀とは思想的に異なる出自の器である。坏G導入に対する消極性はこのあたりに起因するのかもしれない。

今一つの問題点として、1992年の山本らによる編年(以下山本・土井編年)のなかで、TK209とTK217の間に一時期設定できる可能性が指摘されている[28]。山本・土井編年ではTK209の該当資料として、総社市江崎古墳の資料をあげているが、本稿では同資料をTK43と認識している[29]。また、TK217としてあげられている鴨方町阿坂古墳の蓋坏については本稿でも同様に考えている。つまり、陶邑との併行関係はさておき、山本・土井編年の言うTK209とTK217の間の一時期に寒田Ⅰ・Ⅱ期が該当すると考えられる。

註

(1)　柳瀬昭彦編『黒土窯址・寒田窯址〔広域営農団地農道整備事業(備南地区)に伴う発掘調査Ⅰ〕』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(31)　岡山県教育委員会　1979

(2)　客観性を持たせるため、法量相関図には残存率が1/2以上のものを採用した。

(3)　本来なら4号窯の相関図と同様に残存率が1/2以上のものを採用するべきであろうが、良好な残存率の個体数が少ないことから1/3以上のものを採用している。

(4)　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966

(5)　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「川原寺西南部の調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報10』　1980

(6)　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「山田寺第7次調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報20』　1990

(7)　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編『飛鳥藤原宮発掘調査概報22』　1992

(8)　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「坂田寺の調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報3』　1973

(9)　陶邑編年及び飛鳥編年などは近年の研究によって、絶対年代との関係が動いているため、この部分に関しては将来的に修

正を要するだろう。

畑中英二「陶邑TK43号窯の年代観に関する再検討－出土陶硯からのアプローチ－」『瓦衣千年－森 郁夫先生還暦記念論文集』森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会　1999

小森俊寛「概説」『古代の土器5-1　7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会　1997

(10) 周辺古墳出土資料としては、備中南部地域の古墳から出土した須恵器を主に利用することとする。寒田窯跡群で生産された須恵器を副葬していることが確実な例は現段階では不確定である。

(11) 本来なら調整や坏身返りの立ち上がりなども考慮に入れて検討すべきであろうが、報告書によっては観察結果を記述していないものがあり、また、煩雑にもなるので、今回は坏の径だけから編年を行っている。筆者の怠慢である。

(12) 大谷晃二・伊藤聖浩「第6章 副葬品 須恵器」『美作 塚ヶ成古墳』美甘村教育委員会　1994

(13) この資料は真備町歴史民俗資料館に展示されている。

(14) 島崎 東編『足守川河川改修工事に伴う発掘調査 足守川加茂A遺跡 足守川加茂B遺跡 足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94　岡山県教育委員会　1993

(15) 方形透かしと単なる切り込みでは、幅の違い以上に、生産に要する労力の違いが存在したと考えられる。方形透かしを一つ開けるには、製品に工具を4度差し込まなければならない。これに対して切り込みの場合は1度だけである。

(16) 雄山閣出版株式会社『須恵器集成図録』を主に利用した。

(17) 中村 浩他『陶邑』Ⅱ　大阪府文化財調査報告第29輯　大阪府教育委員会　1977

(18) 小池 寛「須恵器・直口甕の基礎的検討」『京都府埋蔵文化財情報』第65号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997

(19) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根県考古学会誌』第11集　島根県考古学会　1994

(20) 資料の実見については岡山県古代吉備文化財センターの平井泰男氏・小林利晴氏のお世話になった。

(21) 附編1参照

(22) 寒田窯跡群5号の高坏・瓶類の再整理を行い、寒田Ⅲ期の様相をはっきりさせることも必要である。

(23) 横田美香「第4章 考察 4 須恵器の年代」『定北古墳』岡山大学考古学研究室　1995

(24) 弘田和司「第4節 まとめ（2）須恵器について」『西大沢古墳群 畑ノ平古墳群 黒土中世墓 虫尾遺跡 茂平古墓 茂平城　新勝央中核工業団地建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111　岡山県教育委員会　1996

(25) 田中 学「第6章 考察　7 土器の編年」『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会　2001

(26) 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社　1986

(27) 内山敏行「手持食器考－日本的食器使用法の成立－」『HOMINIDS』Vol.001 CRA　1997

(28) 山本悦世・土井基司・田代健二「集成12　須恵器」『吉備の考古学的研究』下巻　山陽新聞社　1992

(29) 本稿脱稿後、2003年3月8日の考古学研究会岡山例会において、江崎古墳の資料についてはTK209の範疇と考えたほうがよいとのご教示を賜った。今後の検討課題としたい。

第77・78図で引用した古墳に関する文献は以下のとおりである。

間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・山本雅晴『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974

葛原克人編『備中こうもり塚古墳「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35　岡山県教育委員会　1979

伊藤 晃・浅倉秀昭・江見正己『山陽自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42　建設省岡山国道工事事務所 岡山県教育委員会　1981

平井 勝『高津池北古墳』岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会　1982

中野雅美『箭田大塚古墳』真備町教育委員会　1984

福田正継『龍王塚古墳－新岡山空港建設に伴う発掘調査－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告58　岡山県教育委員会　1984

村上幸雄編『緑山17号墳 すりばち池3号墳 山津田遺跡 清水角遺跡』総社市埋蔵文化財発掘調査報告1　総社市教育委員会　1984

総社市史編さん委員会編『総社市史 考古資料編』総社市　1987

近藤義郎・北條芳隆編『緑山古墳群』総社市文化振興財団　1987

谷山雅彦編『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告9　総社市教育委員会　1991

浅倉秀昭編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会　1993

高田明人編『すりばち池古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告13　総社市教育委員会　1993

中野雅美編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会　1994
江見正己編『藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡・中山古墳群 西山遺跡・西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会　1997
小林利晴・内藤善史『段林遺跡・段林古墳 県道矢掛寄島線改良工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告132　岡山県教育委員会　1998
岡本寛久『道面遺跡・塚地古墳 県道矢掛寄島線改良工事に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告147　岡山県教育委員会　1999
武田恭彰編『奥坂遺跡群 鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15　総社市教育委員会　1999

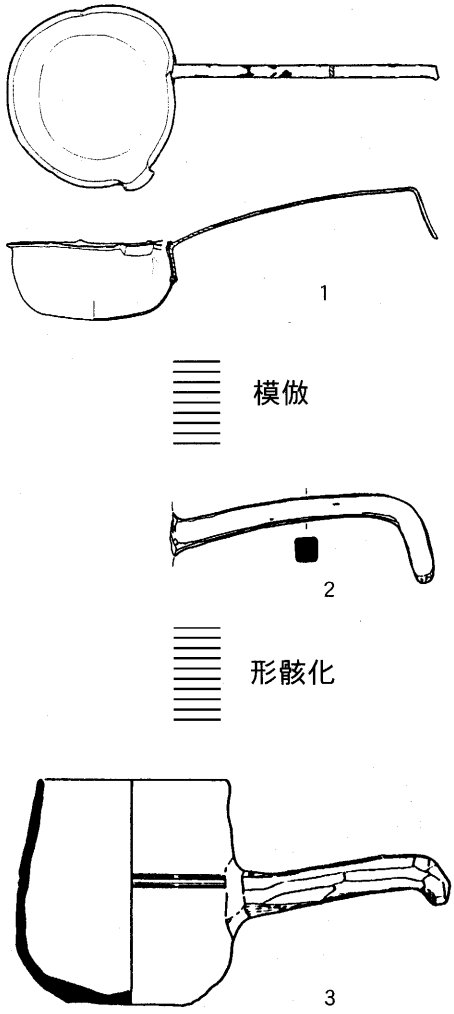
第3節　金属器模倣

坏Gが金属器模倣から始まったことはよく知られている[1]が、寒田窯跡群4号ではこの他にも金属器模倣のものが認められる。灰原出土の鉢553～554は銅鋺の形態をよく写しているし、脚付椀51・541も胴部に沈線をめぐらせており、脚付銅鋺の形態を写したものである可能性が高い。

さらに、椀に付くと考えられる把手333も金属器を模した可能性がある。長さ13.6cmと非常に長く、断面形は正方形で四面ともヘラケズリによって丁寧な面取が行われている。先端は大きく屈曲しているが、椀への取り付け角度などから下向きに屈曲していると考えられる。

通常、椀の把手は底部がわかる把手340のように上向きに屈曲するものが多く、長さもそれほど長くない。把手333の類例としては大阪府陶邑TG68窯の把手付椀があげられる[2]。把手333ほどではないが比較的長く、先端が下方に屈曲している。時期はⅡ型式6段階、寒田蓋坏7類に併行する時期と捉えられ、灰原出土の把手333より後出すると考えられる。

それではこれらの祖形となった金属器はどのようなものであろうか。柄が先端で下に屈曲する金属器の例としては茨城県武者塚古墳出土の鉄柄付青銅製杓がある[3]。古墳の時期も6世紀末～7世紀前半と考えられており、寒田窯跡群4号と近い年代である。この杓は径19.6cmの青銅製の本体に長さ30cm程度の板状の鉄柄が付くもので、柄



第81図　把手の変遷
（S＝1／4、1のみS＝1／8）
1. 茨城県武者塚古墳　2. 把手333
3. 大阪府栂68号窯

の先端は6cmほどがほぼ直角に下に折れ曲がっている。下に折れ曲がっているのは、江戸時代の燭台などに見られるように、空の状態で置いた時に柄の重さによって杓が傾いてしまわないようにする支柱の役を果たす構造と考えられる[4]。

把手333は武者塚古墳の杓と比較すると長さで約1/2と大きさが全く異なり、断面が正方形と板状という相違も認められる。このことからこうした杓を直接模倣したとは考えがたいが、同様の構造の柄を持つ金属器を模倣した可能性は高いと考える。

また、TG68窯出土の把手付椀であるが、把手の断面形状にシャープさがなく、先端の屈曲も貧弱である。原型の柄の構造からかけ離れ、形骸化してしまったものと考えられる。

註

(1)　西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986

(2)　中村 浩他『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告第29輯 大阪府教育委員会 1977

(3)　増田精一編『武者塚古墳』茨城県新治村教育委員会　1986

(4)　東京国立博物館蔵の鵲尾形柄香炉の柄も同様の構造であり、7世紀のものとされる。
東京国立博物館『御在位六十年記念　日本美術名宝展』 1986

第４節　ヘラ記号

寒田窯跡群4号では、比較的多種類のヘラ記号が確認できた。以下、器種毎に概要を記述する。

蓋坏(H1～H11)　ヘラ記号は、蓋に4種類・身に5種類が認められる。H1～H5は蓋、H6～H11は身に刻まれたヘラ記号である。H1とH2のような一文字のヘラ記号については、短く力強いものと細長く繊細なものに分けられる可能性もある。しかし、単純な形状だけに判別は難しい。坏蓋102と坏身233(H7)は一対であり、両方とも一文字のヘラ記号を刻んでいる。

ヘラ記号を刻む部位は坏蓋では天井部外面、坏身では底部外面であるが、H10のように中央ではなくやや側部によせるものもある。

高坏　短脚の高坏の脚部内面に1～2条のヘラ記号を施すものが数個体確認できる。これに対し長脚の高坏には確実にヘラ記号と言えるものは確認できなかった。

鉢　鉢554の側部外面に縦二本線のヘラ記号が認められる。

短頸壺(H12～H23)　蓋に施すものと本体に施すものがある。蓋には4種類が確認できる。いずれも天井部外面に施すものである。身には6種類以上が確認できる。基部直下の体部に施すもの(H16～H21)と、底部外面に施すもの(H22・H23)がある。H16は欠損のため全体形がはっきりしない。H20はヘラ記号の上端部分に蓋の口縁が重なっていて全体形がやや不明確である。平行三本線のもの(H17～H20)、特にH20は他と雰囲気が異なっており、細分できる可能性がある。

蓋と身の両方にヘラ記号を施すセットは確認できなかった。

その他の壺(H24～H26)　長頸壺・細頸壺他にも平行三本線のヘラ記号(651・684・691・697・704)が多いようである。やはり口頸部に施すものと、基部直下の体部に施すものがある。そのほか

に、口頸部に八の字を刻む壺(652)、口縁部にキザミ目を入れる広口壺(656)、基部直下の体部に十字を刻む長頸壺？(701)、底部外面にH15と同形のキザミ目をいれるもの(696)がある。

H24～H26は壺の一部の可能性が高い個体である。H24は基部直下の体部に施すもので、平行二本線の下にさらに一本の線を刻んでいる。H25・H26は底部外面に刻むものである。

瓶　3種類が確認できる。742は口縁部外面に温泉マークの湯気のような三本線のヘラ記号を施す。750・751は共に底部外面に一本線を刻むが、750のものは長さが体部直径と同じくらいなのに対し、751のヘラ記号は短い一本線である。

提瓶(H27～H39)　12種類以上が確認できる。口頸部に施すもの(H27～H31)、基部直下の体部に施すもの(H32～H39)がある。また、771のように口縁部に施されるキザミもヘラ記号の可能性が高い。口頸部に施される平行三本線には数種類のバリエーションがあるようである。H38は中軸線上ではなく、若干把手に近づく位置に刻まれている。

平瓶　6種類以上が確認できる。口頸部に施すもの(798・801・810～812)、基部直下の体部に施すもの(796)、体部に施すもの(800)が存在する。798はおそらく三本線を刻むものであろうが、欠損のため全体形がはっきりしない。812も提瓶H39と類似のヘラ記号と考えられるが、やはり欠損している。

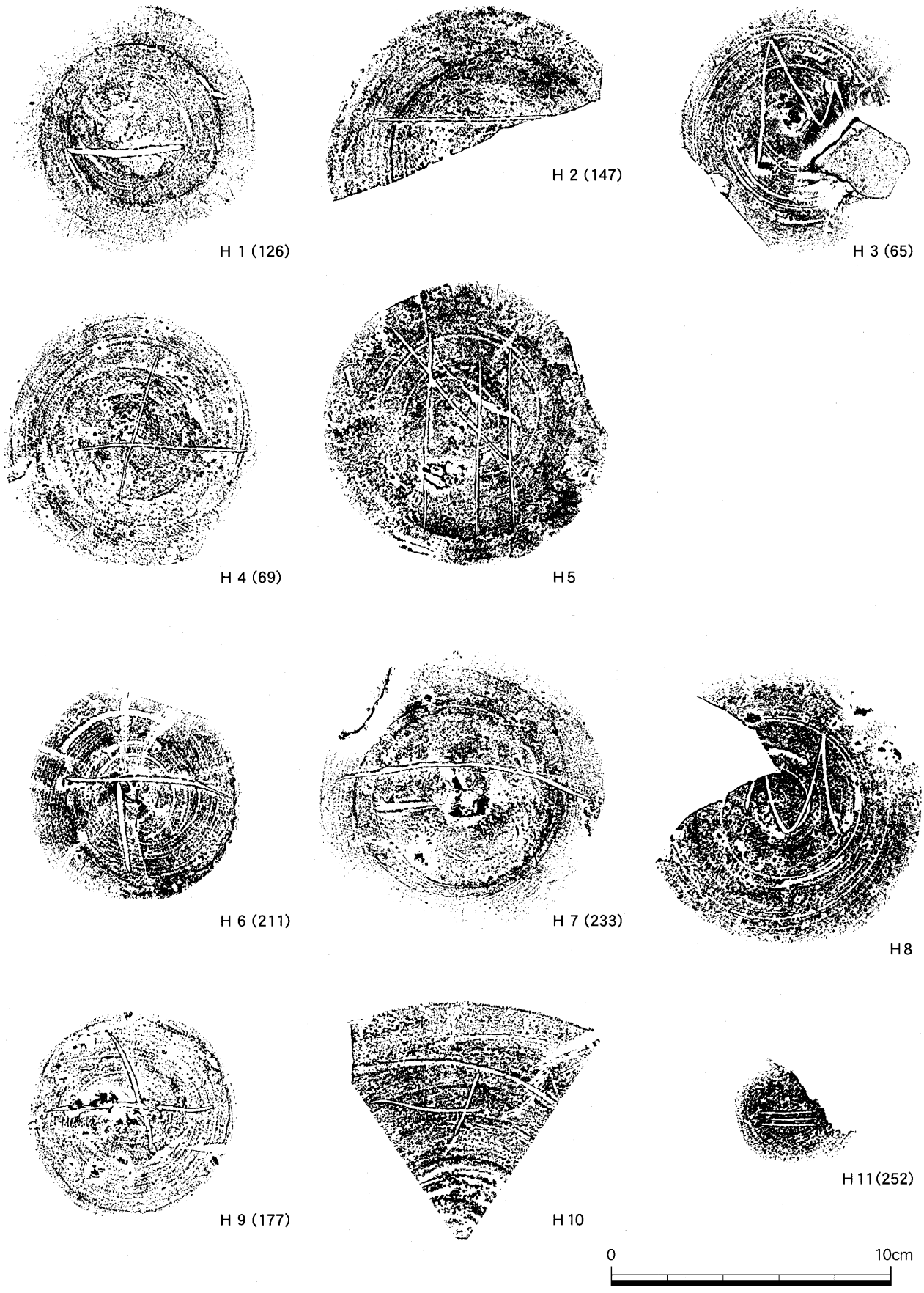
横瓶(H40～H47)　8種類が確認できる。口頸部内面に施すもの(H40)と、口頸部外面に施すもの(H41～H46)、そして基部直下の体部に施すもの(H47)がある。

直口甕(H48～H54)　7種類が確認できる。口頸部内面に施すもの(H48)と口頸部外面に施すもの(H48～H53)、そして基部直下の体部に施すもの(H54)がある。H54のヘラ記号は把手を貼りつけた後に、把手の際に刻まれている。

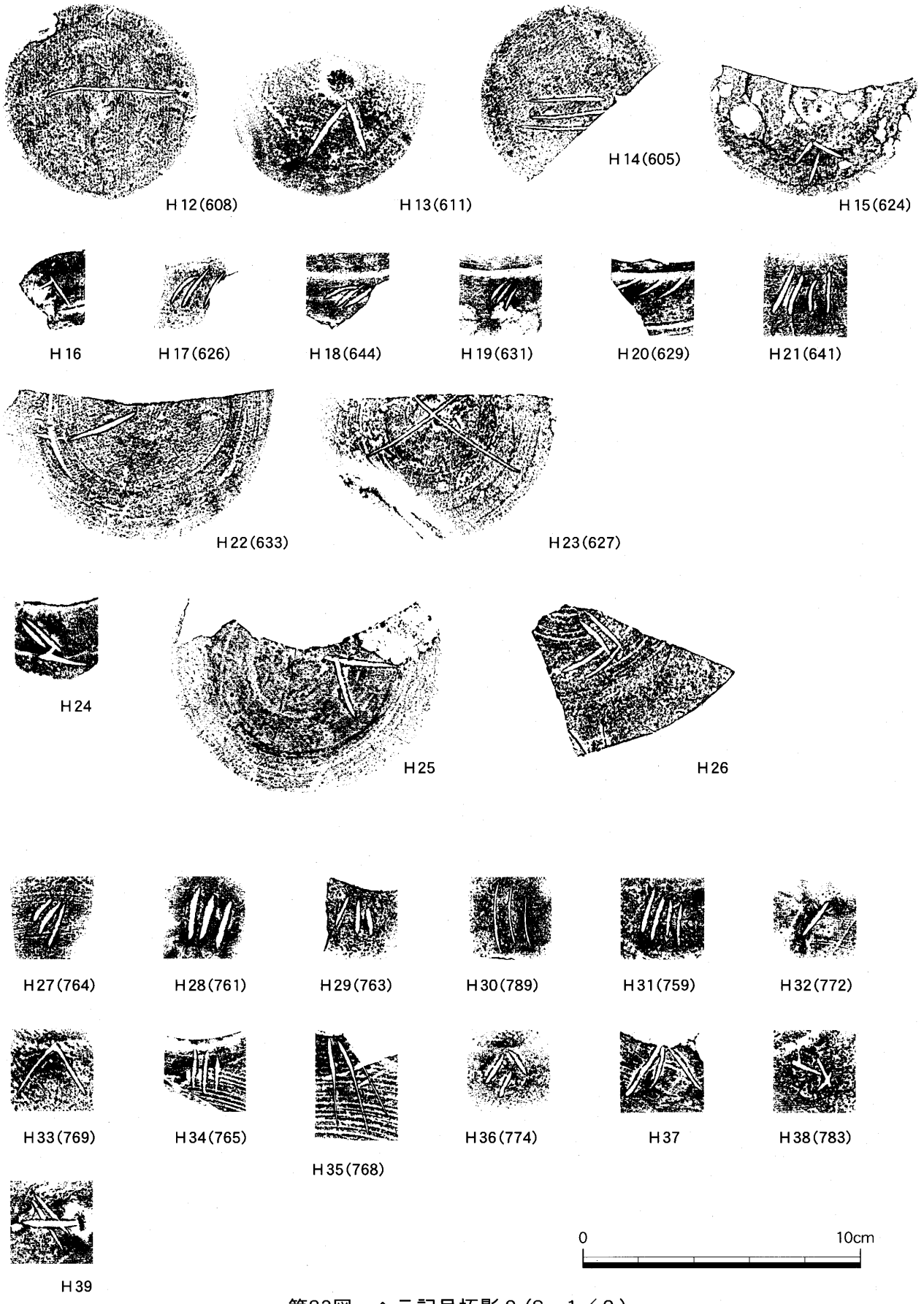
甕(H55～H72)　各器種の中では最多の18種類が確認できる。口頸部内面に施すもの(H55～H57)と口頸部外面に施すもの(H57・H59～H65)、口縁肥厚部に施すもの(H58)、そして基部直下の体部に施すもの(H66～H72)がある。H57は口頸部の内外面にヘラ記号を持っている。この他に861・883のように口縁部に施されるキザミもやはりヘラ記号の可能性が高い。

ヘラ記号はこれまでの研究では工人が各自の製品を識別するために付けたとする意見が有力である[(1)]。寒田窯跡群4号の場合、特に提瓶において工人差が抽出できそうである。提瓶765～767は基部直下の体部に三本線のヘラ記号(H34)を持つ。この3点の把手に注意すると、先端が真横に向き、やや寸詰まりの感を呈するなどよく類似している。また提瓶769・770も共通のヘラ記号(H33)を持ち、把手の太くずんぐりした形状が共通している。把手の形状は製作工人の癖を表し、これとヘラ記号とがよく対応した例である。

また、複数の器種にわたって同形のヘラ記号が存在するものについては、刻み方の癖によって工人差を抽出できる可能性もある。例えば、平行三本線の壺651、短頸壺H17・H18、提瓶H27、横瓶H45は、最初の一画の書き出しが二画目の書き出し方向によっているという癖が認められそうである。



第82図　ヘラ記号拓影１（S＝1／２）

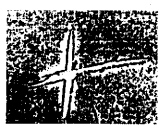


第83図　ヘラ記号拓影２（S＝1／２）

H40(828)

H41(815)

H42(821)

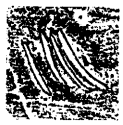

H48(842)

H49(841)

H50(840)

H43(820)

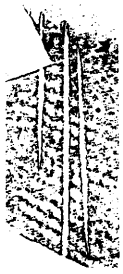
H44(819)

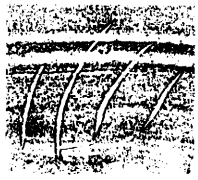

H51(831)

H52(837)

H45(817)

H46(823)


H47(818)

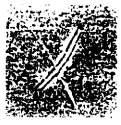

H53(834)

H54(833)

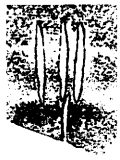
H55(858)

H57(862)

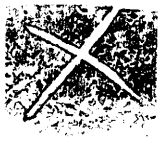
H58(856)


H59(869)

H60(860)

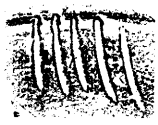

H62(878)

H56(857)


H61(873)

H63(881)

H64(887)


H65(875)

H66(843)

H67

H68(884)

H69(866)

H70(859)

H71

H72

第84図　ヘラ記号拓影３（S＝1／２）

最後に、横瓶H41は甕H60の上に載せて焼成されており、口頸部に同形の二本線のヘラ記号が刻まれていることとあわせて同一工人の製作と言ってよいだろう。

このヘラ記号を編年に利用し、器種ごとの併行関係を明らかにできないかと試みた。しかし、器種によってヘラ記号の種類に多寡が認められ、なによりも蓋坏のヘラ記号の種類が少ないことが致命的であった。多く認められるのは壺類・瓶類・甕である。また、ヘラ記号の形が単純なこともあいまって、上述の例以外では、別器種のものを同一工人のヘラ記号と見極めるのは困難であり、編年への利用は断念せざるを得なかった。

註

(1)　大川 清「栃木県益子町栗生滝ノ入窯址調査概報」『古代』19・20　1956

第５節　陶棺

備中南部における陶棺の出土例は十数例が知られている。これらのなかで4号窯の陶棺に形態的に最も近いと考えられるものは山手村ササラ谷古墳出土の陶棺である[(1)]。まずは4号窯の陶棺の特徴を抽出したうえで、ササラ谷古墳の陶棺との比較を行ってみたい。

4号窯出土陶棺の特徴としては、以下の点があげられる。

1. 全体の製法として、身と蓋は別づくりで、中央分割はしない。
2. 器壁は厚さ約2～3cmと薄い。
3. タタキ痕を持つ。
4. 蓋の封じ孔は中央にあり、開口したまま。
5. 身の上端には蓋受けを持つ。
6. 横方向の細い突帯を1条のみ持つ。突帯は幅約2～3.5cm。
7. 突起は鉤状で8ヵ所か？
8. 蓋と身の小口側に直径3cm程度の孔を持つ。床面にも同様の孔がある。
9. 脚は3列7行？、径1.6cm程度の孔を持ち、ロクロ造り。

これをササラ谷古墳の陶棺と比較してみたい。ササラ谷古墳には大小2基の陶棺が埋葬されていたが、それぞれについて4号窯の陶棺との共通点をあげると、まず、特徴１～３の基本的な製作技法が3棺ともに共通している。特徴4の封じ孔については確認できなかった。特徴５についてはササラ谷の小棺が蓋受けを持つという点で共通しているが、大棺は身に軸受けを持たず、逆に蓋に返りがあるなど相違している。特徴８については大棺の身部小口に同様の孔がある。特徴９における脚の数は3棺とも異なるが、脚自体はロクロ成形で、円孔を持つ点は3棺とも共通である。

次に相違点であるが、特徴５の蓋の受部については先述のとおり、ササラ谷(大棺)と相違している。そして特徴６・７の突帯・突起はそれぞれ全く異なっている。特徴９における脚の数もそれぞれ異なっている。

以上のように共通点と相違点を見てきたが、特徴１～３・９の基本的な製作技法に共通点が多く、相違点より重視すべきと言える。

ササラ谷の陶棺については、これまでにも横田美香・光本順などによる定東塚古墳1号陶棺との共通点を重視する見解がある[2]。特に光本の論では、「裾広がりの台形状の脚、タタキ技法の使用、2cm前後の薄手の器壁厚、突帯構成を特徴とし、高梁川を軸とする備中地域に分布する」として「ササラ谷グループ」を設定している。このグループに属する陶棺としては7例があげられているが、そのうち、全形のわかるものはササラ谷古墳の2例と北房町内出土の3例(定東塚1号陶棺・定西塚2号陶棺・土井2号墳2号陶棺)である。ササラ谷の2例は光本も指摘するように中央分割を行っていない。一方、北房町内出土の3例は中央分割を行っている。ここに中央分割を行っていない寒田4号窯の陶棺を加えると、中央分割の有無で2類に分類できるようである。これをもってただちに「ササラ谷グループ」を二つのグループに区分するかどうかは、さらに検討する必要があるが、少なくとも高梁川下流域の備中南部と北房盆地との地域性を視野に入れた検討を、今後行っていく必要があるだろう。

また、この他の備中南部出土須恵質陶棺も、倉敷市穂井田出土の切妻形陶棺を除くと、いずれも器壁の薄いものである。管見の限りでは倉敷市矢部堀越遺跡[3]・山手村出土(吉備考古館蔵)[4]・倉敷市生坂出土の陶棺片[5]があげられる。これらも同様に「ササラ谷グループ」に含まれる可能性が高いと考えられる。こうしてみるとその分布範囲が、時期は下るが備中式軒丸瓦の分布とほぼ重なるものであることがわかる。備中式軒丸瓦の分布については「「吉備」の独自性を共通にする郡司層の地域的な連帯」を示すという意見がある[6]。一方、畿内の陶棺との系譜関係において「ササラ谷グループ」は山城を中心に分布する「芝12号グループ」と関連づけられている[7]。

時期がずれ、しかも性格の全く異なる陶棺と瓦の分布を一律に論じるのははばかられるが、須恵器工人あるいは瓦工人の動向を考える上で重要な意味を持つと考える。また、6世紀後半の浪形石製家形石棺、白鳳期の備中式軒丸瓦によってその独自性が強調される地域で、7世紀前半に畿内の系譜につながる陶棺が分布する点は、その意味も含めて今後様々な面から検討する必要があるだろう。

最後に、4号窯から出土した陶棺は、その焼成からは土師質としか考えられないが、須恵器窯跡から出土したことを重視すれば須恵質と言うべきかもしれない。内面に同心円あて具の痕跡を残し、脚も轆轤成形であるなど、製作技法的にも須恵器の系譜を引いていると考えられる。では4号窯の陶棺は須恵質とすべきであろうか。

4号窯の蓋坏などの中にはひずみもひびもない完形でありながら、還元炎焼成に失敗し、赤褐色に発色してしまったために廃棄されたものが存在する。これらは本来、青灰色の発色を期待して生産されたにもかかわらず、赤褐色に発色した失敗品であるため、須恵器と呼ぶべきである。

しかし、この陶棺では表面を赤色系の色にするために成分の異なる化粧土が使用されているという白石氏の指摘から、この陶棺は青灰色の発色を期待して製作されたものではないことがわかる。つまり、意図的に酸化炎焼成を行って赤色系の発色をさせているのである[8]。灰原に廃棄された要因は発色の失敗ではなく、蓋の天井部に見られる大きく上方にはじけたようなひびとひずみと考えら

れる。

須恵質・土師質という言葉の本来的な意味を用いるならば、この陶棺は土師質陶棺である。また、須恵器的な技法を用いて造形され、須恵器窯で焼成されていることを重視すれば、須恵質陶棺とする意見も当然出てくるであろう。しかし、意図的に酸化炎焼成を行って赤色系の発色を望んだものなら、須恵器窯で焼いたものであっても土師質陶棺と呼んだほうがよいのではないだろうか。

最近、岡山県古代吉備文化財センターが調査を行った熊山町土井遺跡の埴輪窯でも陶棺が出土している[9]。2基が確認された埴輪窯は須恵器窯と同様の登窯である。現地説明会で見た限りでは、焼成された埴輪の中に須恵質のものは見あたらず、陶棺も典型的な土師質陶棺である。この例も窯で焼成しながらも土師質に焼成しているものと考えられる。

註

(1)　鎌木義昌・間壁忠彦「都窪郡山手村宿の陶棺墳」『吉備考古』第91号　吉備考古学会　1956

(2)　横田美香「第6章 考察 4 北房町出土陶棺の編年」『定東塚・西塚古墳』　岡山県北房町教育委員会　2002
光本 順「第6章 考察 5　6・7世紀における陶棺の変容とその特質－定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて－」『定東塚・西塚古墳』　岡山県北房町教育委員会　2002

(3)　浅倉秀昭編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6　1.矢部古墳群A　2.矢部古墳群B　3.矢部大坑遺跡　4.矢部奥田遺跡　5.矢部堀越遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993

(4)　間壁葭子「岡山の陶棺－白猪屯倉への一私見－」『岡山の歴史と文化』藤井 駿先生記念論文集　福武書店　1983

(5)　間壁忠彦「第五章 後期古墳の展開 第三節 内陸部の後期古墳」『新修倉敷市史』　第1巻　考古　倉敷市　1996

(6)　出宮徳尚・葛原克人・河本 清「第七章 古代」『岡山県の考古学』　吉川弘文館　1987

(7)　前掲註(2)光本論文
なお、ササラ谷(小棺)や寒田4号窯の身部蓋受け形状や、寒田4号窯陶棺の突帯形状などから、摂津を中心に分布するとされる「中井山3号グループ」との関係も考慮する必要があると考える。

(8)　土師質亀甲形陶棺から須恵質陶棺への変遷を考えるうえで重要な点である。

(9)　岡山県古代吉備文化財センター『土井遺跡現地説明会資料』　2002

第６節　備中南部における須恵器生産の展開

備中地域では最古の須恵器窯跡として総社市奥ヶ谷窯跡[1]が存在する。5世紀前半の小規模な窯跡で、単発的な創業であると考えられている。この後、6世紀後葉の倉敷市江田池窯跡群[2]まで、150年近くの空白期が存在する。江田池1号窯跡では蓋坏や千鳥透かしを持つ長脚の高坏が採集されており、TK43に併行すると考えられる。寒田窯跡群4号は先述のとおり、TK209に併行する時期に操業を開始しており、江田池窯跡群に続く時期のものである。また、備中南部では金光須恵窯跡群もTK43の操業開始と言われている[3]が、公表された資料が少なく、詳細は不明である。

江田池窯跡群、寒田窯跡群が操業開始した6世紀後半から7世紀初頭にかけて、吉備では総社市こうもり塚古墳・江崎古墳と最後の前方後円墳が築造される。この時期の吉備は井原市浪形で産出する浪形石製の家形石棺によって示される紐帯で結びつけられている[4]。

また、その被葬者が寒田窯跡群の操業開始に重要な役割を演じたと考えられる真備町箭田大塚古

墳は、吉備中枢地域へ浪形石製石棺を運ぶルート沿いに位置すると考えられるにも関わらず、浪形石の石棺は納められていない。しかし、その墳丘直径は約45mと吉備中枢の盟主墳である江崎古墳(墳長45m)を体積で大きく上回っている。これは、前方後円墳ではないが、吉備中枢を凌駕する墳丘を築けるほど、小田川流域の勢力が大きく成長していたことを示すものであろう。備中南部には高梁川東岸の吉備中枢勢力と、その風下に位置しながらも興勢途上の高梁川西岸(小田川下流域)勢力が並立していたと考えられる。

こうした政治情勢のなか、まず吉備中枢勢力により江田池窯跡群が操業を開始し、若干遅れて高梁川西岸勢力の主導によって寒田窯跡群が小田川の支流真谷川沿いに操業を開始したと考えられる。

寒田窯跡群4号に続く時期、正確には寒田Ⅱ期以後、窯の数は格段に増加し、生産の拡大をうかがわせる。総社市くもんめふ2号窯[5]の坏蓋は口径13cm前後から始まり、ヘラケズリが省略されたものばかりである。金光町上竹西の坊1・2号窯[6]、倉敷市道口窯[7]、同二子御堂奥3号窯[8]は坏蓋の直径が12cm前後で、上竹西の坊1号窯、道口窯はヘラケズリが確認でき、上竹西の坊2号窯・二子御堂奥3号窯ではヘラケズリが省略されている。蓋坏の直径及び調整とあわせて、これら5基の窯跡からは長脚二段透かしの高坏や提瓶が確認できず、寒田Ⅱ期以降の操業開始と考えられる。こうした窯の増加の背景は、やはり前方後円墳廃絶後の群集墳形成に伴う需要増大にあったことは想像に難くない。

また、この時期以後、つまり7世紀前半以後、吉備中枢地域において有力首長墓は知られていない。須恵器も集中した生産は行われず、二子御堂奥窯跡群、くもんめふ窯跡群、末の奥窯跡群など、数基単位の操業に分散する。瓦生産を行うところもあるがいずれも8世紀前半には操業されなくなる。

対する高梁川西岸では、7世紀中葉に切石に近い横穴式石室を持つ大型方墳、矢掛町小迫大塚古墳が築かれる。高梁川西岸(小田川下流域)勢力と吉備中枢勢力の力関係が逆転した結果と考えることも可能であろう。寒田窯跡群を含む玉島陶古窯跡群は備中最大の須恵器生産地となっていく。もちろん須恵器の生産には土や燃料となる木材の問題もあろうが、玉島陶地域が備中最大の須恵器生産地になっていく背景には、奈良時代の吉備真備輩出につながる高梁川西岸勢力の興勢があったと考えられる。

註

(1)　柴田英樹「第5章 奥ヶ谷窯跡」『藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡 中山古墳群 西山遺跡 西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会　1997

(2)　阿部泰久・中岡敬善「倉敷市矢部・江田池周辺の窯跡と陶板」『古代吉備』第9集　古代吉備研究会　1987

(3)　武田恭彰「備中に於ける律令的土器様相の諸問題－地方の律令的土器様式の成立と変質－」『古代吉備』第18集　古代吉備研究会　1996

金光須恵窯跡群の資料としては、金光町立吉備小学校校庭拡張工事の際に出土した須恵器4点が岸名遺跡出土遺物として註(6)文献に掲載されている。図を見る限り杯身の直径はひずんだ状態の最大径が15cm以下で、底部外面に回転ヘラケズリを施すとされる。実際には直径は13cm程度考えられる。また、間壁忠彦先生の御厚意で岡山県古代吉備文化財センター

に保管されている同遺跡出土須恵器の写真を見せていただいたが、その中には長脚二方二段透かしの高坏や提瓶などが存在している。これらを見る限りでは寒田Ⅰ期の範囲におさまりそうである。

(4)　この件については後日、別稿を予定している。

(5)　武田恭彰編『奥坂遺跡群　鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15　総社市教育委員会　1999

(6)　武田恭彰・井上 弘「上竹西の坊遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69　岡山県文化財保護協会　1988

(7)　武田恭彰「倉敷市玉島道口窯址採集の須恵器」『古代吉備』第9集　古代吉備研究会　1987

(8)　葛原克人・池畑耕一「第Ⅴ部　二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 第2集　岡山県教育委員会　1974

窯内須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
1	蓋坏(蓋)	A・B区8層	直径 13.7 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ 天井部内面に仕上げナデ	右	0.1～1.5	淡黄色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/1	不良	1/4		19
2	蓋坏(蓋)	E・F区55層	直径 13.3 器高 4.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	不良	1	坏身21と一対	1
3	蓋坏(蓋)	E・F区43層	直径 12.7 器高 3.8	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 7.5Y8/1 灰色 N4/	良	1		5
4	蓋坏(蓋)	C・E区最終床面直上	直径 12.5 器高 4.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	黒色 10YR2/1 赤黒色 10R2/1	良	1		9
5	蓋坏(蓋)	E・F区最終床面直上	直径 12.5 器高 3.7	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	黒色 N2/ 暗灰色 N3/	良	1		12
6	蓋坏(蓋)	E・F区最終床面直上	直径 12.4 器高 3.95	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰褐色 5YR5/1 灰褐色 5YR5/2	良	1	破片によって焼成状態が異なる	10
7	蓋坏(蓋)	E・F区45層	直径 12.3 器高 4.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N6/ 灰白色 N7/	不良	1		4
8	蓋坏(蓋)	E・F区45層	直径 12.3 器高 4.15	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰白色 N7/	不良	1		3
9	蓋坏(蓋)	C・E区最終床面直上 E・F区42層	直径 12.2 器高 4.0	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	褐灰色 5YR4/1 褐灰色 5YR5/1	良	1/8		18
10	蓋坏(蓋)	E区最終床面直上	直径 12.2 器高 4.0	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	褐灰色 7.5YR5/1 暗赤灰色 5R3/1	良	1/2		16
11	蓋坏(蓋)	E・F区最終床面直上 E・F区45層 F区43層	直径 12.1 器高 4.7	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	赤灰色 2.5YR4/1 褐灰色 7.5YR4/1	良	1		11
12	蓋坏(蓋)	F区最終床面直上 E・F区42層	直径 12.0 器高 4.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	明青灰色 5B7/1 暗青灰色 5PB4/1	良	1/2		17
13	蓋坏(蓋)	E区最終床面直上	直径 12.0 器高 4.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	暗青灰色 5PB4/1 紫灰色 5PB5/1	良	1		13
14	蓋坏(蓋)	C区床面直上	直径 12.0 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	黄灰色 2.5Y6/1 褐灰色 5YR5/1	良	1/2		14
15	蓋坏(蓋)	E区最終床面直上 F区43層 E・F区42層	直径 12.0 器高 －	天井部外面は不明 回転ナデ	右	0.5～3	灰色 N6/ 灰色 N5/	良	1/2		20
16	蓋坏(蓋)	E・F区44・45層	直径 11.9 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	青黒色 7.5B2/1 暗青灰色 5PB4/1	良	1		6
17	蓋坏(蓋)	E・F区最終床面直上	直径 11.8 器高 3.5	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	赤黒色 7.5R2/1 黒褐色 5YR3/1	良	1		8
18	蓋坏(蓋)	C区最終床面直上	直径 11.6 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り無調整 ヘラおこし痕有り? その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	紫黒色 5P2/1 暗青灰色 5PB3/1	良	1/2		15
19	蓋坏(蓋)	E・F区42層	直径 11.6 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青黒色 5B2/1 灰色 N5	良	1		7
20	蓋坏(身)	D・F区最終床面直上	口径 11.6 直径 14.3 器高 －	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～2	灰色 10Y4/1 灰色 10Y5/1	不良	1/2		24
21	蓋坏(身)	E・F区56層	口径 11.8 直径 14.0 器高 3.9	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	にぶい赤褐色 5YR5/4 橙色 5YR7/6	不良	1	坏蓋2と一対	2
22	蓋坏(身)	G区流土 E区最終床面直上	口径 11.5 直径 13.4 器高 4.1	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	暗紫灰色 5RP3/1 紫灰色 5P5/1	良	1/3		32
23	蓋坏(身)	F区最終床面直上 E・F区42・44層	口径 11.5 直径 13.4 器高 3.45	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰色 N4/	良	1		49
24	蓋坏(身)	トレンチ4 床面直上?	口径 11.1 直径 13.2 器高 3.5	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	1	年報4－1(No.34) ヘラ記号	611
25	蓋坏(身)	E区最終床面直上 E・F区42・56層	口径 10.8 直径 13.1 器高 3.95	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～5	褐灰色 5YR5/1 褐灰色 5YR5/1	良	1	破片によって焼成状態が異なる	26
26	蓋坏(身)	C区床面直上	口径 10.4 直径 13.0 器高 －	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	橙色 2.5YR6/6 にぶい赤褐色 2.5YR5/4	不良	1/4		33
27	蓋坏(身)	E・F区最終床面直上	口径 10.8 直径 12.9 器高 3.8	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 5YR5/2 灰色 5YR4/1	良	1		25
28	蓋坏(身)	F区最終床面直上 E・F区42層	口径 10.5 直径 12.5 器高 3.9	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～2	紫灰色 5P6/1 赤灰色 10R5/1	良	1		23
29	蓋坏(身)	E区最終床面直上	口径 10.8 直径 12.4 器高 3.8	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y5/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		31
30	蓋坏(身)	C区床面直上 E区最終床面直上 E・F区56層	口径 10.9 直径 12.3 器高 3.2	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N5/ 暗青灰色 5PB4/1	良	3/4		34
31	蓋坏(身)	F区最終床面直上 F区43層 C・D区52層	口径 10.3 直径 12.2 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N6/ 灰色 N5/	良	1/2		27
32	蓋坏(身)	C区床面直上 E・F区最終床面直上	口径 9.8 直径 12.0 器高 3.4	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	明青灰色 5B7/1 暗青灰色 5PB3/1	良	2/3		50

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　　調	焼成	残存	備　　考	整理番号
33	坏	55・57層	口径　10.8 直径　12.0 器高　3.1	底部外面はヘラ切リ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	暗灰色　N3/ 灰色　N6/	良	1/3		57
34	椀	E・F区56層	直径　11.6 器高　5.1	底部外面はヘラ切リ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	橙色　2.5YR7/6 橙色　5YR7/6	良	1		22
35	高坏	E・E区流土	口径　14.0 脚径　－ 器高　－	回転ナデ	右	0.5～1	灰褐色　7.5YR4/2 灰褐色　7.5YR5/2	良	1/2		21
36	高坏	流土 B区49層直上	口径　14.0 脚径　－ 器高　－	坏部は回転ナデ 脚部は不明	右	0.1～0.5	灰白色　2.5Y8/1 灰白色　2.5Y8/2	不良	1/3		48
37	高坏	流土	口径　－ 脚径　8.4 器高　－	回転ナデ	右	0.5	黒色　10YR2/1 オリーブ黒色　7.5Y2/2	良	1		53
38	脚付椀	E区最終床面直上	口径　14.4 脚径　10.0 器高　13.6	底部内面は仕上げナデ 椀部底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	にぶい赤褐色　2.5YR4/4 赤黒色　2.5YR2/1	不良	1/3		51
39	脚付椀	C区床面直上 E・F区42層	口径　10.2 直径　11.6 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	暗赤灰色　7.5R4/1 暗赤灰色　7.5R4/1	良	1/2		38
40	壺	E・F区42層	口径　8.7 直径　14.7 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰色　N5/ 紫灰色　5RP5/1	良	1/3		28
41	短頸壺	C区床面直上 F区最終床面直上 55層	口径　8.4 直径　－ 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰褐色　7.5YR4/2 灰白色　7.5Y8/1	良	1/2		30
42	平瓶	最終床面直上 C区床面直上	口径　6.5 直径　14.6 器高　－	外面上方はカキメ 底部は不明 その他は回転ナデ 閉塞部は天井	右	0.5～2	灰白色　N7/ 灰白色　7.5Y7/2	不良	1	ボタン状把手	46
43	平瓶	トレンチ3　床面直上 C区床面直上 E・F区55層	口径　－ 直径　19.9 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ 閉塞部は天井	右	0.1～1	褐灰色　5YR5/1 褐灰色　5YR6/1	良	1	把手無	42
44	平瓶？	流土	口径　－ 直径　15.4 器高　－	体部外面上方は回転ナデ後カキメ、底部は回転ヘラケズリ 内面は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰色　7.5Y6/1 灰白色　10YR5/1	不良	1/3		41
45	提瓶	最終床面直上	口径　11.8 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	口縁部は回転ナデ 体部は内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ後カキメ	左	0.5～1	灰色　N6/ オリーブ灰色　2.5GY5/1	良	1	輪状把手	45
46	横瓶	流土	口径　－ 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ	－	0.5～1	オリーブ黒色　7.5Y3/2 灰色　N6/	良	1/3		44
47	(口頸部)	E・F区42・45層	口径　7.4 直径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	1	赤灰色　7.5R6/1 赤灰色　7.5R5/1	良	2/3		36
48	(口頸部)	E・F区最終床面直上 E・F区56層	口径　8.1 直径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰赤色　10R4/2 赤褐色　10R5/3	良	1/2		37
49	(口頸部)	C区床面直上 55層	口径　10.0 直径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～1	暗赤灰色　7.5R3/1 にぶい赤褐色　7.5R4/3	良	2/3	長頸壺？	35
50	瓮	F区最終床面直上	口径　12.0 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	浅黄橙色　7.5YR8/3 灰白色　2.5Y8/2	不良	1/2		39
51	瓮	トレンチ3　床面直上 F区	口径　－ 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1	灰白色　7.5Y8/1 灰白色　7.5Y8/1	不良	1		40
52	専用焼台	E区流土	直径　11.4 器高　3.3	底部はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/4		55
53	専用焼台	流土	直径　12.4 器高　2.75	回転ナデ	右	0.1	暗青灰色　5PB4/1 暗青灰色　5PB4/1	良	1/8		54
54	焼台	A・B区49層直上					灰白色　7.5Y7/2 暗青灰色　5B3/1				56
55	焼台	流土	直径　－ 器高　－	回転ナデ	右	0.5	青灰色　5PB5/1 青灰色　5PB5/1	良	－		52
56	甑	C区床面直上 55層	口径　－ 底径　10.8 器高　－	口縁部は不明 底部内面に縦方向のナデ その他は回転ナデ	右	0.1～2	灰白色　7.5Y8/1 灰白色　N7/	不良	1/2		43
57	甕	C区床面直上 E・F区最終床面直上	口径　21.2 直径　40.3 器高　41.6	口縁部は回転ナデ 体部は内面　同心円タタキ 外面　平行タタキ後カキメ	右	0.5～5	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	不良	1	ヘラ記号	47
58	甕	C区床面直上 F区最終床面直上	口径　50.6 直径　－ 器高　－	口縁外面上方に櫛描刺突文、下方に縦方向のカキメ 口頸部は内外面ともにナデ その他は回転ナデ	右	1～5	褐灰色　7.5YR4/1 褐灰色　5YR4/1	良	1/8		29
59	甕	C・D・E区床面直上 トレンチ3　床面直上 55層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 口頸部は内外面ともにナデ その他は不明	右	1～2	黒褐色　7.5YR3/1 黒褐色　7.5YR3/1	良	－		793
60	甕	C区床面直上 55層 F区最終床面直上	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 口頸部は内外面ともにナデ 体部は不明	右	1～2	青黒色　5PB2/1 暗紫灰色　5P3/1	良	小片		842

灰原須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
61	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 16.2 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	浅黄色 2.5Y7/3 淡黄色 2.5Y8/3	不良	1/3		213
62	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 15.0 器高 4.4	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		265
63	蓋坏(蓋)	3区 i-j アゼ	直径 14.9 器高 4.7	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 2.5Y8/1	不良	1/2		429
64	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 14.8 器高 4.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3	不良	1/6		111
65	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 14.8 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	暗灰色 N3/ 灰色 N6/	良	2/3	ヘラ記号	317
66	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.8 器高 2.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1	ひずみ有	465
67	蓋坏(蓋)	4区灰原下層(北端)	直径 14.8 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/2	良	1/4		173
68	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.8 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		506
69	蓋坏(蓋)	2区灰原直上層 2区灰原	直径 14.6 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	2/3	ヘラ記号	318
70	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 14.6 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色 5Y5/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		319
71	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 14.6 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/2		374
72	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 14.4 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4		381
73	蓋坏(蓋)	3区灰原上層	直径 14.4 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		438
74	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 14.2 器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	にぶい黄橙色10YR7/4 浅黄橙色 10YR8/4	良	1/3		210
75	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.2 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	2/3		517
76	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.2 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	暗灰色 N3/ 灰色 N6/	良	1/4		495
77	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.2 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/4		494
78	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 14.2 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N5/ 灰色 N6/	良	1/3		108
79	蓋坏(蓋)	トレンチ1	直径 14.1 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰白色 5Y7/1	良	1/2	年報4－5(No.27)	609
80	蓋坏(蓋)	4区灰原下層(北端)	直径 14.0 器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1	オリーブ灰色 7.5Y5/2 灰白色 2.5Y8/2	良	1/6		172
81	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 14.0 器高 4.4	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	浅黄色 2.5Y8/3 浅黄色 2.5Y8/3	不良	1/4		493
82	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 14.0 器高 4.35	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に同心円タタキ工具痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	浅黄色 2.5Y7/3 浅黄色 2.5Y7/3	不良	1		354
83	蓋坏(蓋)	a-b アゼ	直径 14.0 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1	良	1/3		416
84	蓋坏(蓋)	4区灰原下層(北端)	直径 14.0 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰色 7.5Y7/1	良	1/8		175
85	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 14.0 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y5/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/6		271
86	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 14.0 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		372
87	蓋坏(蓋)	3区灰原上層	直径 14.0 器高 3.3	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		439
88	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 14.0 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N6/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		269
89	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 14.0 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y5/1 灰色 5Y6/1	良	1/3		270
90	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.9 器高 4.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1	良	1		357
91	蓋坏(蓋)	3区 i-j アゼ	直径 13.9 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	不良	1/3		430
92	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.9 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 5Y6/2 灰色 5Y6/1	良	1/3		215
93	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 13.9 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		338
94	蓋坏(蓋)	4区灰原直上層	直径 13.8 器高 4.2	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/6		84
95	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.8 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 10Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		377

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
96	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 13.8 器高 3.4	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		339
97	蓋坏(蓋)	4区灰原直上層	直径 13.8 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	2/3		83
98	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.8 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/5		132
99	蓋坏(蓋)	4区灰原直上層 4区灰原上層	直径 13.7 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰黄色 2.5Y7/2 黄灰色 2.5Y6/1	良	1		82
100	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.7 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		267
101	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.7 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	青灰色 5B5/1 青灰色 5B6/1	良	1		356
102	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.6 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1	坏身233と一対 ヘラ記号	190
103	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.6 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰色 5Y6/1	良	1/2		501
104	蓋坏(蓋)	4区 i-j アゼ	直径 13.5 器高 4.5	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/3		302
105	蓋坏(蓋)	4区 i-j アゼ	直径 13.5 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/2		303
106	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.5 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	暗灰色 N3/ 灰色 N5/	良	1/4		516
107	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.5 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B5/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		209
108	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.4 器高 4.5	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y6/1 灰色 N6/	良	2/5		492
109	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.4 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 N4/ 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/3		507
110	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.4 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	－	1～2	灰色 7.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	2/5		515
111	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.4 器高 3.6	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 浅黄色 5Y7/2	良	1/6		112
112	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.4 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 淡黄色 5Y7/1	良	1/8		214
113	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.4 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	2～5	灰色 5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/4	焼台に転用	133
114	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.4 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.1～5	黄灰色 2.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/6		273
115	蓋坏(蓋)	a-bアゼ	直径 13.4 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y5/1 灰色 5Y5/1	良	1/3		417
116	蓋坏(蓋)	a-bアゼ	直径 13.4 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		418
117	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 13.3 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		340
118	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 13.3 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N6/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		315
119	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.3 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 7.5Y4/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/3		240
120	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.3 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		373
121	蓋坏(蓋)	a-bアゼ	直径 13.3 器高 3.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2	坏身250と一対	425
122	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.2 器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	暗灰色 N3/ 灰色 7.5Y5/1	良	1/3		130
123	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.2 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 N7/	良	1/3	焼台に転用	208
124	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.2 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B5/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		375
125	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.2 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	1/4		508
126	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.2 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	5/6	ヘラ記号	521
127	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.2 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/4		379
128	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.2 器高 －	天井部外面は不明 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4	焼台に転用	224
129	蓋坏(蓋)	3区灰原上層	直径 13.2 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/4		441
130	蓋坏(蓋)	トレンチ1	直径 13.1 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 N6/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3	年報4－8(No.36)	555
131	蓋坏(蓋)	a-bアゼ	直径 13.1 器高 3.6	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1	良	1/4		419

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
132	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.1 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 N5/ 灰色 N4/	良	1/3		376
133	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.1 器高 —	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰黄橙色 10YR6/2 灰白色 10YR7/1	良	1/6	焼台に転用	116
134	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.0 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/6		275
135	蓋坏(蓋)	3区 i - j アゼ	直径 13.0 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y7/1	良	1/2		431
136	蓋坏(蓋)	4区 i - j アゼ	直径 13.0 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰白色 5Y7/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/2		304
137	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 13.0 器高 3.95	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 5Y5/1 灰色 2.5Y7/2	良	1		114
138	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 13.0 器高 3.9	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 N6/ 灰白色 5Y7/1	良	1		371
139	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 13.0 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	3/4		520
140	蓋坏(蓋)	ハイド中	直径 13.0 器高 —	天井部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/6	焼台に転用	157
141	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 13.0 器高 —	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰色 10Y6/1 灰色 N6/	良	1/4		268
142	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.9 器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	2/3		227
143	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 12.9 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 10Y5/1 灰白色 5Y7/2	良	2/3		316
144	蓋坏(蓋)	3区 i - j アゼ	直径 12.9 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰白色 5Y7/1	良	1	高坏465と融着	426
145	蓋坏(蓋)	3区灰原上層	直径 12.9 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		437
146	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.9 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	灰白色 5Y7/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/6		113
147	蓋坏(蓋)	窯跡南土器ダマリ	直径 12.9 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 7.5Y5/1 暗オリーブ色 7.5Y4/3	良	1/4	ヘラ記号	75
148	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 12.9 器高 3.8	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 2.5Y5/1 にぶい黄褐色10YR4/3	良	1		370
149	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.9 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰色 7.5Y6/1	良	2/3		143
150	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.9 器高 3.7	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 2.5Y7/2 灰黄色 2.5Y7/2	不良	1/4		272
151	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.8 器高 4.8	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～5	にぶい黄橙色10YR7/4 明黄褐色 10YR7/6	不良	1/8		110
152	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.8 器高 4.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y8/1	不良	1/2		192
153	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.8 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/2		140
154	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.8 器高 3.85	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰黄褐色 10YR6/5	良	1/4		109
155	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.8 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰オリーブ色 5Y4/2 灰オリーブ色 5Y6/2	良	1	外面に放射状のうすい沈線がはいる	115
156	蓋坏(蓋)	2区灰原	直径 12.8 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	緑灰色 10G6/1 緑灰色 10G6/1	良	1/4		337
157	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.8 器高 —	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 2.5Y8/2 黄灰色 2.5Y6/1	不良	1/6		274
158	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.7 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰色 7.5Y6/1	良	1/4		206
159	蓋坏(蓋)	3区灰原下層	直径 12.7 器高 4.3	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	—	1～2	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	良	4/5		514
160	蓋坏(蓋)	トレンチ2	直径 12.7 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1/2	年報4－13(No.50)	610
161	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.7 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/8		225
162	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.7 器高 —	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B5/1 灰色 N6/	良	1/3		141
163	蓋坏(蓋)	3区灰原上層	直径 12.6 器高 4.5	天井部外面はナデ？ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		440
164	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 12.6 器高 4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色 7.5Y7/1	良	1/6		380
165	蓋坏(蓋)	1区灰原	直径 12.6 器高 4.2	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/4		378
166	蓋坏(蓋)	4区灰原上層(北端)	直径 12.6 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	暗灰色 N3/ 灰色 N5/	良	1/4		163
167	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.6 器高 —	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰白色 N7/ 灰色 7.5Y5/1	良	1/6		131

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
168	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.4 器高 4.4	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		205
169	蓋坏(蓋)	4区灰原上層	直径 12.4 器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	青灰色 5B6/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		142
170	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.4 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y5/1 灰色 5Y6/1	良	1/4		204
171	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.4 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N4/ 灰色 N6/	良	1/3		216
172	蓋坏(蓋)	4区灰原下層	直径 12.2 器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1～3	橙色 7.5YR6/6 にぶい褐色 7.5YR5/4	不良	1/6		207
173	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.8 直径 15.8 器高 4.4	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	橙色 5YR6/6 淡黄色 2.5Y8/4	不良	1		388
174	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 13.1 直径 15.6 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N7/ 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		414
175	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 13.0 直径 15.4 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ？ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		290
176	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 13.0 直径 15.4 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ？ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N7/ 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/4		288
177	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.8 直径 15.4 器高 4.2	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1	ヘラ記号	320
178	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.8 直径 15.4 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰白色 5Y8/1	良	2/3		365
179	蓋坏(身)	3区灰原上層	口径 12.8 直径 15.4 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	1/4		445
180	蓋坏(身)	4区灰原上層 灰原東法面	口径 12.7 直径 15.4 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 10YR7/1	良	1/3		103
181	蓋坏(身)	4区灰原上層 灰原東法面	口径 13.3 直径 15.3 器高 4.4	底部外面は不明 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		101
182	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 13.0 直径 15.3 器高 3.3	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰色 2.5Y8/2	良	5/6		464
183	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.6 直径 15.2 器高 4.4	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰色 5Y7/1	良	1/4		134
184	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.6 直径 15.2 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～1	褐灰色 10YR4/1 灰黄褐色 10YR4/2	良	1/3		148
185	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.8 直径 15.1 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 10Y5/1	良	1/4		523
186	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.5 直径 15.1 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		387
187	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.8 直径 15.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色 7.5Y7/2 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		284
188	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.6 直径 15.0 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	5/6		382
189	蓋坏(身)	トレンチ2	口径 12.5 直径 15.0 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 浅黄橙色 7.5YR8/4	不良	1	年報4－16(No.54)	612
190	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.4 直径 15.0 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y5/1 灰色 N5/	良	1/3		527
191	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.4 直径 15.0 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	青灰色 5B5/1 灰白色 2.5Y8/2	良	1/3		333
192	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.2 直径 15.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	1/4		524
193	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.0 直径 15.0 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	黄灰色 2.5Y5/1 灰黄褐色 10YR6/2	良	1/2		528
194	蓋坏(身)	4区土壙内埋土	口径 12.8 直径 14.9 器高 3.4	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1		300
195	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.6 直径 14.9 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 7.5Y4/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		289
196	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.6 直径 14.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ？ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 7.5Y5/2 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	1/3		467

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
197	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 12.4 直径 14.9 器高 3.5	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰白色 5Y7/2	良	1/2		413
198	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.3 直径 14.9 器高 4.1	底部外面はヘラ切り後ナデ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～3	灰白色 N7/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		479
199	蓋坏(身)	3区灰原上層	口径 12.8 直径 14.8 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰色 7.5Y5/1 灰色 5Y7/1	良	1/2		442
200	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.5 直径 14.8 器高 —	底部外面は不明 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		106
201	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.4 直径 14.8 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰黄褐色 10YR6/2	良	1/2		476
202	蓋坏(身)	4区 i-j アゼ	口径 12.4 直径 14.8 器高 3.4	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N6/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1		305
203	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.0 直径 14.8 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N4/ 灰色 N4/	良	1		355
204	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.7 直径 14.7 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y8/1	良	1		314
205	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.7 直径 14.7 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		107
206	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.5 直径 14.7 器高 —	底部外面はヘラ切り後ナデ？ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y8/1 灰白色 N7/	良	1/3		287
207	蓋坏(身)	3区灰原上層	口径 12.5 直径 14.7 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 N6/ 灰白色 N7/	良	1/4		444
208	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.3 直径 14.7 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 N5/ 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		147
209	蓋坏(身)	4区 i-j アゼ	口径 12.2 直径 14.7 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		306
210	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.7 直径 14.6 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰白色 5Y7/1	良	1/2		285
211	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.4 直径 14.6 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に指頭圧痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1.5	灰色 7.5Y6/1 黄灰色 2.5Y5/1	不良	2/3	ヘラ記号	483
212	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.3 直径 14.6 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/3		473
213	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.2 直径 14.6 器高 4.4	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に同心円タタキ工具痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		469
214	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.2 直径 14.6 器高 4.2	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	2/3		277
215	蓋坏(身)	窯跡南土器ダマリ	口径 12.2 直径 14.6 器高 —	底部外面は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		73
216	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.1 直径 14.6 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ？ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y6/1	良	1/3		396
217	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.0 直径 14.6 器高 4.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 2.5Y7/1	良	2/3		389
218	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.0 直径 14.6 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		471
219	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.8 直径 14.6 器高 3.4	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y7/1	良	1		358
220	蓋坏(身)	3区 i-j アゼ	口径 11.7 直径 14.6 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ灰色 2.5GY6/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		432
221	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.2 直径 14.5 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1		335
222	蓋坏(身)	4区灰原直上層	口径 12.1 直径 14.5 器高 —	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y5/1 にぶい黄橙色 10YR6/4	良	1/2		88
223	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.0 直径 14.5 器高 4.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰白色 N7/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		489
224	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.0 直径 14.5 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色 7.5Y7/1	良	1/6		104
225	蓋坏(身)	窯跡南土器ダマリ	口径 12.0 直径 14.5 器高 3.3	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 N6/ 灰白色 2.5Y8/2	良	1/3		72

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
226	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.0 直径 14.5 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N7/ 灰色 N6/	良	2/3		385
227	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.7 直径 14.5 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 10Y7/1	良	1/8		129
228	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.7 直径 14.5 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰黄色 2.5Y6/2 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		280
229	蓋坏(身)	4区灰原上層(北端)	口径 12.3 直径 14.4 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4		166
230	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.1 直径 14.4 器高 3.3	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	赤灰色 2.5YR4/1 にぶい赤褐色 2.5YR5/3	良	1		366
231	蓋坏(身)	1区灰原	口径 12.0 直径 14.4 器高 4.3	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～10	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい橙色 5YR6/4	良	3/4		383
232	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 12.0 直径 14.4 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	黄灰色 2.5Y6/1 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	1/2		412
233	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.0 直径 14.4 器高 3.25	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y5/1 灰色 N6/	良	1	坏蓋102と一対 ヘラ記号	191
234	蓋坏(身)	水田造成土	口径 11.9 直径 14.4 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		71
235	蓋坏(身)	2区灰原	口径 11.9 直径 14.4 器高 3.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～5	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		336
236	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.5 直径 14.4 器高 4.1	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y5/1 灰色 N5/	良	1/3		105
237	蓋坏(身)	4区灰原上層(北端)	口径 12.0 直径 14.3 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	1	灰色 5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		165
238	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.0 直径 14.3 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/3		466
239	蓋坏(身)	4区灰原直上層	口径 11.8 直径 14.3 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y7/1 浅黄色 2.5Y7/4	良	2/3		85
240	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.7 直径 14.3 器高 4.5	底部外面は回転ヘラケズリ？ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～7	灰白色 7.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	2/3		292
241	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.7 直径 14.3 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰黄色 5Y6/2	良	1/2		279
242	蓋坏(身)	3区灰原上層	口径 11.7 直径 14.3 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ? その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		443
243	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.4 直径 14.2 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰色 7.5Y6/1 灰白色 2.5Y8/1	不良	1/4		261
244	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.2 直径 14.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	青灰色 5BG6/1 青灰色 5B6/1	良	1/4		281
245	蓋坏(身)	ハイド中	口径 12.1 直径 14.2 器高 4.2	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 オリーブ灰色 5Y6/2	良	1/6		156
246	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.0 直径 14.2 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		278
247	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.0 直径 14.2 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 N6/ 灰白色 5Y7/1	良	1/2		330
248	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.0 直径 14.2 器高 3.65	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/2		286
249	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.0 直径 14.2 器高 2.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5PB6/1 灰白色 5Y8/1	良	1		463
250	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 12.0 直径 14.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ灰色 10Y5/2 灰白色 5Y7/1	良	1/3	坏蓋121と一対	428
251	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 11.9 直径 14.2 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y4/1 灰白色 5Y8/1	良	1		411
252	蓋坏(身)	水田造成土 窯跡南土器ダマリ	口径 11.8 直径 14.2 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰白色 5Y8/2	良	2/3	ヘラ記号	70
253	蓋坏(身)	窯跡南土器ダマリ	口径 11.7 直径 14.2 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 7.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1	焼台融着	69
254	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.7 直径 14.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 5Y7/1	良	1/2		294

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
255	蓋坏(身)	北端	口径 11.6 直径 14.2 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰色 N6/	良	1/4		164
256	蓋坏(身)	トレンチ1	口径 11.6 直径 14.2 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y6/1 灰色 5Y6/1	良	3/4		614
257	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.6 直径 14.2 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	良	1/3		472
258	蓋坏(身)	2区灰原	口径 11.5 直径 14.2 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰色 N6/	良	2/3		321
259	蓋坏(身)	4区灰原直上層	口径 11.4 直径 14.2 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	浅黄色 2.5Y7/3 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		86
260	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.6 直径 14.1 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	褐灰色 10YR6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/4		276
261	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.3 直径 14.1 器高 3.4	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	1		220
262	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 12.1 直径 14.0 器高 3.3	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		135
263	蓋坏(身)	2区灰原	口径 12.0 直径 14.0 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 N6/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		332
264	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.8 直径 14.0 器高 3.5	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰白色 5Y7/1	良	1/3		217
265	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.8 直径 14.0 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ灰色 2.5GY6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/4		149
266	蓋坏(身)	2区灰原	口径 11.6 直径 14.0 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	3/4		331
267	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.6 直径 14.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y6/1 灰色 10Y6/1	良	1/2		526
268	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.5 直径 14.0 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N4/ 褐灰色 7.5YR4/1	良	1/4		525
269	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.3 直径 14.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	暗オリーブ色 7.5Y4/3 灰白色 2.5Y7/1	良	1/4		136
270	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 12.0 直径 13.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/4		283
271	蓋坏(身)	a-bアゼ	口径 11.6 直径 13.9 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1	良	1/4		415
272	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.6 直径 13.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1	灰白色 2.5Y7/1 黄灰色 2.5Y5/1	良	2/3		295
273	蓋坏(身)	4区灰原直上層	口径 11.3 直径 13.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 10Y4/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/3		87
274	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.2 直径 13.9 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y6/1	良	1		386
275	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.2 直径 13.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	暗灰黄色 2.5Y5/2 にぶい赤褐色 5YR5/4	不良	1/4		282
276	蓋坏(身)	2区灰原	口径 11.8 直径 13.8 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 10YR7/1 灰色 5Y6/1	良	1/2		334
277	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.6 直径 13.8 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.1	灰色 7.5Y6/1 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	1/6		137
278	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.5 直径 13.8 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4		394
279	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.4 直径 13.8 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～5	暗灰色 N3/ 灰色 N6/	良	1/2		390
280	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.4 直径 13.8 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		293
281	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.3 直径 13.8 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 N7/	良	1/3		211
282	蓋坏(身)	トレンチ1	口径 11.2 直径 13.8 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	オリーブ黒色 5Y3/1 灰色 5Y6/1	良	1/2	年報4－21(No.11)	554
283	蓋坏(身)	窯跡南土器ダマリ	口径 11.1 直径 13.8 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y7/1	良	1		68

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
284	蓋坏(身)	3区 i - j アゼ	口径 10.7 直径 13.8 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	青灰色 5B6/1 灰白色 2.5Y8/1	良	1/4		433
285	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 12.4 直径 13.7 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰黄褐色 10YR4/2	良	1/2		529
286	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.5 直径 13.7 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y5/2 褐色 7.5YR4/3	良	3/4		367
287	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.5 直径 13.7 器高 3.5	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 10Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2		470
288	蓋坏(身)	トレンチ1中	口径 11.3 直径 13.7 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～1.5	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y7/1	良	2/3	年報4－23(No.29)	613
289	蓋坏(身)	水田造成土	口径 11.3 直径 13.7 器高 2.9	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 灰白色 5Y7/1	良	1/6	焼台融着	67
290	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.1 直径 13.7 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 10YR2/1 褐灰色 10YR5/1	良	1/2		474
291	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.6 直径 13.6 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	2/3		384
292	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.1 直径 13.6 器高 3.7	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 N6/ 灰色 5Y6/1	良	1/2		146
293	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.5 直径 13.5 器高 3.5	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～10	灰色 N7/ 灰白色 5Y7/2	良	1		176
294	蓋坏(身)	4区灰原上層	口径 11.8 直径 13.4 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2		102
295	蓋坏(身)	1区灰原	口径 11.3 直径 13.4 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y5/2 褐灰色 7.5Y4/1	良	1/4		393
296	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 11.1 直径 13.4 器高 3.75	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5～1	褐灰色 10YR5/1 赤橙色 10R6/8	良	1/3		475
297	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 11.0 直径 13.4 器高 3.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N5/ 灰白色 2.5Y7/1	良	7/8		291
298	蓋坏(身)	1区灰原	口径 10.7 直径 13.4 器高 4.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～5	にぶい赤褐色 5YR5/3 にぶい黄橙色10YR6/3	不良	1/3		392
299	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 10.8 直径 13.3 器高 3.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	にぶい黄橙色10YR7/2 灰黄褐色 10YR5/2	不良	1/3		490
300	蓋坏(身)	窯跡南土器ダマリ	口径 11.2 直径 13.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰白色 N7/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		74
301	蓋坏(身)	4区灰原下層	口径 10.8 直径 13.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3		260
302	蓋坏(身)	1区灰原	口径 10.5 直径 13.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	浅黄橙色 7.5YR8/4 にぶい橙色 7.5YR7/3	不良	1/3		395
303	蓋坏(身)	1区灰原	口径 10.9 直径 13.1 器高 3.3	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰白色 2.5Y8/2	良	1/3		391
304	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 10.8 直径 13.1 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ? その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰白色 5Y7/1	良	1/3		468
305	蓋坏(身)	3区灰原下層	口径 10.8 直径 13.0 器高 3.5	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2		478
306	蓋坏(身)	4区土壙内埋土	口径 10.6 直径 12.7 器高 4.1	底部外面はヘラ切り後ナデ？ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y5/1	良	1/4		301
307	坏	4区灰原下層	直径 10.8 器高 3.8	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/2		537
308	坏	4区灰原下層	直径 10.6 器高 4.3	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰オリーブ色 5Y6/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/2		221
309	坏	2区灰原	直径 10.4 器高 3.9	底部外面はヘラ切り後ナデ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/3		341
310	坏	1区灰原 4区灰原下層 4区灰原下層(北端)	直径 11.5 器高 5.3	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	明青灰色 5B7/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		699
311	坏	3区灰原下層	直径 12.2 器高 5.5	底部内面に仕上げナデ 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1.5	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	不良	1/4		488

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
312	坏	2区灰原 3区灰原上層 4区造成土 4区灰原下層	直径　11.0 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	不良	1/3		731
313	坏	4区80層	直径　11.8 器高　4.0	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～5	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	2/3		167
314	坏	4区灰原下層 灰原東法面	直径　12.1 器高　3.2	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/6	蓋の可能性有	696
315	坏	4区灰原下層	直径　15.0 器高　－	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	1		199
316	椀	4区灰原下層	口径　11.8 直径　13.0 器高　9.0	外面上部にカキメ 底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/2		189
317	椀	3区灰原上層 3区灰原下層	直径　12.4 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ 体部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	1～2	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3		679
318	椀	3区灰原下層	口径　10.5 直径　11.5 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1～1.5	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/3		453
319	椀	トレンチ1 4区灰原下層	直径　10.2 器高　7.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y5/1 黄灰色　2.5Y5/1	良	1/3		655
320	椀	4区灰原下層	口径　8.0 直径　9.1 器高　6.5	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰色　5Y6/1	良	1/4		698
321	椀	1区灰原	直径　9.3 器高　5.7	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	2/3		364
322	椀	1区灰原	直径　12.0 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色　7.5Y6/2 灰白色　5Y7/1	良	1/2		399
323	椀	トレンチ1 4区灰原下層	口径　11.0 直径　11.6 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰黄色　2.5Y7/2 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/4		744
324	椀	水田造成土 灰原東法面	直径　12.6 器高　6.1	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～2	黄灰色　2.5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3		678
325	椀	4区灰原上層	口径　10.5 直径　13.0 器高　6.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	黄灰色　2.5Y4/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/8		122
326	椀	3区灰原下層 4区灰原下層	口径　6.5 直径　11.2 器高　7.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　10YR7/2 灰色　10YR8/1	不良	3/4		452
327	椀	4区灰原下層	口径　13.2 直径　14.8 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ？ 体部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/6		228
328	椀？	灰原東法面	口径　－ 直径　－ 器高　－	回転ナデ	右	1～2	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	－		746
329	四足椀	3区灰原下層 4区灰原下層 ハイド中	口径　11.0 直径　13.2 器高　－	体部外面にカキメ 底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 足部はナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/3		548
330	足(四足椀)	4区灰原上層	直径　1.5 長　6.2	指圧痕	－	0.1	灰黄色　2.5Y6/2	良	－		127
331	足(四足椀)	2区灰原直上層	長　8.5 径　1.5	指圧痕	－	0.5	黄灰色　2.5Y6/2	良	－		547
332	把手付椀	3区ｉ-ｊアゼ	直径　10.9 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/8		684
333	把手	3区灰原直上層 3区灰原上層	長　13.6 一辺　1.1	ヘラケズリ	－	0.5	青灰色　5B5/1	良	－		502
334	把手	ハイド中	長　－ 一辺　1.4	ヘラケズリ	－	0.5～1	灰色　7.5Y5/1	良	－		544
335	把手	3区灰原下層	長　－ 一辺　1.4	ヘラケズリ	－	1	灰色　7.5Y4/1	良	－		545
336	把手	4区灰原下層	長　－ 一辺　1.6	ヘラケズリ	－	1	灰色　7.5Y4/1	良	－		546
337	把手	4区灰原下層	長　5.8 径　1.6	ヘラケズリ	－	1	青灰色　5B5/1	良	－		540
338	把手	3区灰原下層	長　7.1 径　2.0	ナデ	－	0.5	灰白色　2.5Y8/1	良	－		539
339	把手	3区灰原下層	長　4.4 径　2.0	ナデ	－	1	灰白色　2.5Y7/1	良	－		541
340	把手	4区灰原下層	長　3.3 径　1.6	ナデ	－	0.5	灰白色　7.5Y7/1	良	－		542
341	把手	3区灰原下層	長　5.2 径　1.1	ナデ	－	0.1	灰色　5Y6/1	良	－		543
342	蓋(有蓋高坏)	3区灰原下層	直径　16.0 器高　5.0	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	－	1	灰色　7.5Y6/1 灰黄色　2.5Y6/2	良	1/3		597
343	蓋(有蓋高坏)	1区灰原 3区灰原 3区ｉ-ｊアゼ	直径　16.2 器高　5.2	天井部内面に仕上げナデ 天井部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2		408
344	蓋(有蓋高坏)	a-bアゼ	直径　16.0 器高　4.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色　7.5Y4/2 灰白色　5Y6/1	良	1/4		423

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
345	蓋(有蓋高坏)	水田造成土	直径 5.5 器高 5.2	天井部内面に仕上げナデ 天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/4		61
346	蓋(有蓋高坏)	4区灰原下層	直径 13.7 器高 4.8	天井部外面はヘラ切り後回転ナデ その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1		255
347	蓋(有蓋高坏)	灰原上面 4区灰原直上層	直径 12.7 器高 4.8	回転ナデ	左	0.5	灰色 5Y6/1 灰色 5Y7/1	良	1/4		90
348	蓋(有蓋高坏)	4区灰原直上層	直径 － 器高 －	回転ナデ	左	0.5	灰色 10Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	－		91
349	蓋(有蓋高坏)	3区灰原下層	直径 16.2 器高 3.0	回転ナデ	右	1～2	灰色 5Y4/1 灰色 5Y4/1	良	2/5		596
350	有蓋高坏	トレンチ1 3区灰原下層 4区造成土	口径 － 直径 － 脚径 － 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	暗灰黄色 2.5Y5/2 灰黄色 2.5Y6/2	良	1/8	三方二段透かし	774
351	有蓋高坏	3区ｉ-ｊアゼ 4区灰原下層	口径 12.8 直径 15.6 脚径 14.4 器高 17.5	脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 N7/	良	1	二方二段透かし	703
352	有蓋高坏	4区灰原下層	口径 － 直径 16.0 脚径 14.0 器高 14.4	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面は不明 その他は回転ナデ	左	0.5～2	灰色 5N/ 灰白色 2.5GY8/1	良	1	二方二段透かし	223
353	有蓋高坏	a-bアゼ	口径 13.1 直径 15.8 脚径 － 器高 －	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/8	二方二段透かし	773
354	有蓋高坏	2区灰原 4区灰原直上層	口径 14.2 直径 16.9 脚径 － 器高 －	脚部外面はカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1～2	青灰色 5B5/1 明青灰色 5B7/1	良	1/3	二方二段透かし	349
355	有蓋高坏	3区灰原下層	口径 12.2 直径 15.0 脚径 － 器高 －	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	－	1	黄灰色 2.5Y6/1 灰色 7.5Y4/1	良	1/2		530
356	有蓋高坏	2区灰原	口径 13.0 直径 15.9 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	青灰色 5B5/1 青灰色 5B6/1	良	1/2		350
357	有蓋高坏	2区灰原直上層 3区ｉ-ｊアゼ	口径 14.2 直径 17.2 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	暗灰黄色 2.5Y4/2 灰白色 N7/	良	1/3		772
358	高坏	4区灰原下層	口径 11.4 脚径 11.9 器高 16.5	脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y8/1	良	1	四方二段透かし	197
359	高坏	灰原東法面 灰原北端	口径 － 脚径 11.0 器高 －	坏部は不明 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	2/3	四方二段透かし	727
360	高坏	トレンチ1 4区灰原上層	口径 11.5 脚径 10.2 器高 15.8	坏部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2	三方二段透かし 年報4－35(No.64)	710
361	高坏	3区灰原上層 4区灰原直上層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径 10.9 脚径 － 器高 －	坏部外面にカキメ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1～2	黄灰色 2.5Y6/1 灰色 5Y3/1	良	1/4	三方二段透かし	97
362	高坏	3区灰原上層	口径 14.4 脚径 － 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部外面上方にカキメ 脚部内面にシボリ痕 脚部は不明	左	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2	三方二段透かし	450
363	高坏	2区灰原 4区灰原下層 4区土壙内埋土 4区ｉ-ｊアゼ	口径 － 脚径 13.0 器高 －	脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1/4	三方二段透かし	263
364	高坏	4区灰原上層 4区灰原下層	口径 － 脚径 12.2 器高 －	脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 明青灰色 5B7/1	良	1/2	三方二段透かし	264
365	高坏	トレンチ1 4区灰原下層	口径 － 脚径 11.7 器高 －	坏部は不明 脚部にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	2/3	三方二段透かし	247
366	高坏	トレンチ1 3区灰原下層 4区灰原下層	口径 － 脚径 15.6 器高 －	脚部外面はカキメ 脚部内面に若干のシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	1/4	三方二段透かし	789
367	高坏	1区灰原	口径 － 脚径 12.7 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3	三方二段透かし	788
368	高坏	4区灰原上層 4区灰原下層	口径 － 脚径 13.8 器高 －	坏部は不明 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1	三方二段透かし	829
369	高坏	1区灰原	口径 － 脚径 18.0 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1～2	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色 7.5Y7/1	良	1	三方二段透かし	362

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
370	高坏	3区灰原下層 a-bアゼ	口径　－ 脚径　15.1 器高　－	坏部は不明 脚部外面上方にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/4	三方二段透かし	787
371	高坏	3区灰原下層 4区灰原上層(北端) 4区灰原下層	口径　14.8 脚径　－ 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　7.5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/3	三方二段透かし	791
372	高坏	2区灰原	口径　10.0 脚径　9.2 器高　14.1	坏部底部外面に回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　7.5Y7/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/8	三方二段透かし	712
373	高坏	1区灰原 3区灰原下層	口径　－ 脚径　13.7 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/3	三方二段透かし	768
374	高坏	3区灰原下層	口径　－ 脚径　12.2 器高　－	坏部底部内面はナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	2/3	三方二段透かし	491
375	高坏	4区灰原上層 4区土壙内埋土	口径　－ 脚径　10.2 器高　－	坏部は不明 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y5/1 灰色　N6/	良	3/4	三方二段透かし	828
376	高坏	1区灰原直上層 1区灰原	口径　－ 脚径　12.1 器高　－	坏部は不明 脚部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　10Y7/1 灰色　10Y6/1	良	1/2	三方二段透かし	777
377	高坏	1区灰原 3区灰原下層 灰原東法面	口径　－ 脚径　13.5 器高　－	坏部底部外面・脚部外面上方にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/4	三方二段透かし 上段は一方のみ	786
378	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　11.1 器高　16.7	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面にカキメ 脚部外面はカキメ後回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N5/ 灰色　N7/	良	1/2	三方透かし	246
379	高坏	3区灰原	口径　－ 脚径　13.1 器高　－	脚部内面にシボリ痕跡 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	2/3	三方透かし	837
380	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　11.0 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3	三方透かし	827
381	高坏	1区灰原	口径　16.6 脚径　－ 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ 脚部は不明	右	0.5	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2	三方透かし	405
382	高坏	3区灰原下層 4区灰原下層	口径　16.0 脚径　－ 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　7.5Y7/2 灰白色　7.5Y7/2	良	1/2	三方(二段？)透かし	790
383	高坏	1区灰原 3区灰原下層	口径　－ 脚径　16.8 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y6/1 灰白色　2.5Y6/2	良	2/3	三方円孔	361
384	高坏	2区灰原 4区 i-j アゼ内	口径　14.2 脚径　14.5 器高　17.9	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　N6/ 灰色　5Y6/1	良	1/2	二方二段透かし	824
385	高坏	2区灰原 4区灰原上層 灰原東法面 ハイド中	口径　14.5 脚径　13.7 器高　17.5	坏部底部外面に回転ヘラケズリ後回転ナデ 坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	5	青灰色　5PB5/1 灰白色　7.5Y7/1	良	2/3	二方二段透かし	724
386	高坏	4区灰原下層	口径　15.0 脚径　14.0 器高　14.8	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白　7.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2	二方二段透かし	249
387	高坏	4区灰原上層 灰原東法面	口径　16.4 器高　14.2 脚径　13.6	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	－	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 灰オリーブ色 7.5Y4/2	良	1	二方二段透かし	95
388	高坏	トレンチ1	口径　15.6 脚径　－ 器高　－	坏部底部外面はカキメ 坏部内面に仕上げナデ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y5/1 灰色　N6/	良	1/2	二方二段透かし 年報4－30(No.58)	836
389	高坏	3区灰原下層 3区 i-j アゼ	口径　14.8 脚径　－ 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　N7/ 灰色　N6/	良	1/5	二方二段透かし	792
390	高坏	3区灰原下層 3区ハイド中 4区灰原上層	口径　－ 脚径　11.5 器高　－	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　N4/ 灰褐色　7.5Y6/1	良	1/2	二方二段透かし	825
391	高坏	トレンチ1 4区灰原上層 4区土壙内埋土	口径　－ 脚径　13.1 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　7.5Y8/1 灰白色　7.5Y8/1	良	1/3	二方二段透かし	767
392	高坏	4区灰原上層 4区灰原下層	口径　10.2 器高　－ 脚径　－	脚部底部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	青灰色　5PB6/1 青灰色　5B6/1	良	1/6	二方二段透かし	150
393	高坏	1区灰原 3区灰原下層 4区灰原上層(北端)	口径　11.3 脚径　11.3 器高　16.9	坏部底部内面はナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	5/6	二方二段透かし 片面に条線有	496
394	高坏	トレンチ1	口径　－ 脚径　14.0 器高　－	脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1	二方二段透かし 年報4－33(No.10)	702

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
395	高坏	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層 灰原東法面	口径　－ 脚径　13.8 器高　－	坏部は不明 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y6/1 灰色　N6/	良	1/2	二方二段透かし	779
396	高坏	灰原上面 1区灰原 3区灰原下層	口径　－ 脚径　14.0 器高　－	坏部は不明 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5～3	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/2	二方二段透かし	778
397	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　13.0 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色　5B5/1 明青灰色　5B7/1	良	1/6	二方二段透かし	253
398	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　15.1 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	赤灰色　2.5YR5/1 赤灰色　2.5YR5/1	良	1	二方二段透かし	402
399	高坏	a-bアゼ	口径　－ 脚径　14.0 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y5/1 灰色　7.5Y6/1	良	1	二方二段透かし	830
400	高坏	トレンチ1 1区灰原	口径　－ 脚径　11.4 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1	二方二段透かし	726
401	高坏	3区灰原上層	口径　－ 脚径　15.8 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/2	二方二段透かし	780
402	高坏	2区灰原	口径　－ 脚径　15.6 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　7.5Y5/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1	二方二段透かし	348
403	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　16.0 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	にぶい橙色　7.5YR7/3 灰白色　5Y7/1	良	1	二方二段透かし	403
404	高坏	窯跡南土器ダマリ	口径　－ 脚径　15.0 器高　－	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	褐灰色　7.5YR6/1 褐灰色　7.5YR5/1	良	1	二方二段透かし	78
405	高坏	4区灰原上層	口径　－ 脚径　11.7 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色　7.5Y6/2 灰色　10Y6/1	良	1/3	二方二段透かし	776
406	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　16.0 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1～5	灰白色　5Y8/1 灰白色　5Y8/1	良	1/4	二方二段透かし	769
407	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　13.7 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	明青灰色　10BG7/1 明青灰色　10BG7/1	良	1	二方二段透かし	404
408	高坏	2区灰原	口径　－ 脚径　14.2 器高　－	坏部は不明 脚部外面にわずかにカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　7.5Y8/1 灰白色　7.5Y8/1	不良	2/3	二方二段透かし	347
409	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　12.4 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　N6/	良	1/3	二方二段透かし	782
410	高坏	1区灰原	口径　－ 脚径　－ 器高　－	回転ナデ	右	1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	－	二方二段透かし	816
411	高坏	4区灰原下層 灰原東法面	口径　－ 脚径　12.9 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部外面にカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N6/ 灰白色　N7/	良	1/3	二方二段透かし	252
412	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　14.6 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　2.5Y6/1 灰色　N6/	良	1	二方二段透かし	202
413	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　14.3 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　10YR7/1	良	1	二方二段透かし	218
414	高坏	1区灰原 3区灰原下層	口径　－ 脚径　11.3 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　10Y6/1 灰白色　N7/	良	1/3	二方二段透かし 上段は一方	784
415	高坏	4区灰原下層	口径　14.6 脚径　12.0 器高　14.9	脚部外面下半にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	暗青灰色　5B4/1 青灰色　5B6/1	良	1/2	二方二段透かし	238
416	高坏	4区灰原直上層 4区灰原上層 灰原東法面	口径　10.5 脚径　12.3 器高　16.5	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰白色　N7/ 灰オリーブ色　7.5Y6/2	良	1/2	二方二段透かし	785
417	高坏	1区灰原 2区灰原	口径　11.8 脚径　－ 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/2	二方二段透かし	351
418	高坏	4区灰原上層(北端)	口径　－ 脚径　13.7 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	浅黄色　2.5Y7/3 灰黄色　2.5Y7/2	良	1	二方二段透かし	161
419	高坏	トレンチ1	口径　－ 脚径　10.4 器高　－	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5～4	褐灰色　10YR4/1 灰褐色　7.5YR5/2	良	1	二方二段透かし	558
420	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　9.8 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/8	二方二段透かし	775
421	高坏	4区灰原下層	口径　－ 脚径　14.0 器高　－	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y8/1	良	1	一方透かし？	203

須恵器観察表

番号	器種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎土	色調	焼成	残存	備考	整理番号
422	高坏	2区灰原 4区土壙内埋土	口径 15.5 脚径 14.2 器高 17.6	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部外面はカキメ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4	二方一段透かし	312
423	高坏	3区灰原下層	口径 16.1 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5〜1	灰白色 10Y7/1 灰白色 10Y7/1	良	1/10	二方(二段?)透かし	794
424	高坏	4区灰原下層	口径 15.9 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	左	1	灰色 7.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/6	透かしあり	796
425	高坏	1区灰原 a-bアゼ	口径 11.4 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5〜1	灰色 N6/ 灰色 7.5Y6/1	良	1/6	二方(二段?)透かし	810
426	高坏	水田造成土 4区灰原下層	口径 10.7 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	青灰色 5B6/1 灰色 10Y4/1	良	1/5	二方(二段?)透かし ?	795
427	高坏	2区灰原 ハイド中	口径 11.4 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰オリーブ色 7.5Y6/2	良	1/10	二方(二段?)透かし ?	812
428	高坏	3区灰原下層	口径 − 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰色 7.5Y5/1	良	1	二方(二段?)透かし ?	797
429	高坏	1区灰原	口径 10.8 脚径 − 器高 −	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰色 7.5Y5/1	良	1	透かしあり	815
430	高坏	トレンチ1 2区灰原 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径 15.2 脚径 13.7 器高 16.9	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y4/1 灰色 5Y5/1	良	1/5		771
431	高坏	3区灰原上層 3区灰原下層	口径 14.8 脚径 − 器高 −	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5〜1	暗赤灰色 10R4/1 暗赤灰色 10R4/1	良	1/2		737
432	高坏	4区灰原下層	口径 15.0 脚径 − 器高 −	坏部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5〜1	灰色 5Y5/1 灰色 N7/	良	1/3		847
433	高坏	4区灰原下層 灰原東法面	口径 − 脚径 10.0 器高 −	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 N5/ 灰色 N5/	良	1/3		765
434	高坏	灰原東法面 4区灰原直上層 4区灰原下層	口径 − 脚径 10.6 器高 −	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5〜1	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y7/1	良	−		766
435	高坏	1区灰原 3区灰原下層	口径 18.0 脚径 − 器高 −	坏部底部内面に同心円タタキ痕 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	褐灰色 5YR4/1 灰色 5Y6/1	良	1/3		770
436	高坏	4区灰原下層 灰原東法面	口径 − 脚径 10.9 器高 −	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	2/3		783
437	高坏	4区灰原上層	直径 13.5 器高 10.6 脚径 10.2	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5〜1	灰黄色 2.5Y7/2 灰白色 2.5Y8/2	良	1		93
438	高坏	2区灰原 4区灰原上層 4区灰原下層 灰原東法面	口径 15.2 脚径 10.0 器高 8.6	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	オリーブ灰色 2.5GY6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1	ヘラ記号	180
439	高坏	2区灰原 4区灰原上層	口径 − 器高 10.7 脚径 −	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N5/ 灰色 10Y5/1	良	1		128
440	高坏	4区灰原下層	口径 − 脚径 11.3 器高 −	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1	暗青灰色 5B4/1 青灰色 5B6/1	良	1		200
441	高坏	4区灰原下層	口径 14.2 脚径 12.5 器高 11.0	回転ナデ	左	0.1	灰色 N6/ 灰白色 N7/	良	1/3		230
442	高坏	4区灰原下層	口径 14.2 脚径 11.1 器高 10.7	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.1	青灰色 5B5/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		179
443	高坏	4区灰原下層	口径 − 脚径 10.3 器高 10.7	回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰色 10Y6/1	良	1		183
444	高坏	4区灰原上層(北端)	口径 13.8 脚径 10.2 器高 7.6	回転ナデ	右	0.5〜1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y5/1	良	1		159
445	高坏	4区灰原下層	口径 − 脚径 11.0 器高 −	回転ナデ	右	0.5〜1	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	不良	1		196
446	高坏	4区灰原下層	口径 − 脚径 10.1 器高 −	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 7.5Y5/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1	ヘラ記号	195
447	高坏	3区灰原下層	口径 − 脚径 10.1 器高 −	回転ナデ	右	0.5〜1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y8/1	不良	2/3		459
448	高坏	トレンチ1	口径 − 脚径 10.4 器高 −	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1	年報4−31(No.8)	826

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
449	高坏	2区灰原	口径 － 脚径 9.4 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	1	青灰色 5B5/1 青灰色 5B6/1	良	1/2		324
450	高坏	水田造成土	口径 － 脚径 9.0 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	暗オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 5Y7/1	良	1		58
451	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 11.7 器高 －	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	青灰色 5B6/1 灰色 N6/	良	1		194
452	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.8 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3	不良	1/3		481
453	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.4 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2	良	1/3		757
454	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 10.4 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 10Y7/1 灰白色 10Y7/1	不良	2/3	ヘラ記号	456
455	高坏	4区灰原下層	口径 13.2 脚径 9.4 器高 10.4	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	暗青灰色 5B4/1 青灰色 5B5/1	良	1/2		188
456	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 9.9 器高 10.5	回転ナデ	右	0.5	褐灰色 7.5YR4/1 褐灰色 2.5YR4/1	良	1/4		226
457	高坏	1区灰原	口径 13.7 脚径 9.3 器高 9.6	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	1		406
458	高坏	3区灰原下層	口径 14.5 脚径 10.5 器高 8.4	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	2～5	灰白色 10YR8/2 灰色 10YR8/1	不良	2/3		454
459	高坏	2区灰原	口径 15.0 脚径 10.8 器高 8.6	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ	左	1	灰色 N6/ 灰白色 7.5Y6/1	良	7/8		322
460	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 9.6 器高 －	回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B8/1 灰白色 2.5Y8/1	良	2/3		198
461	高坏	4区ｉ-ｊアゼ	口径 － 脚径 10.2 器高 －	回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1		308
462	高坏	4区灰原上層(北端)	口径 － 脚径 10.9 器高 －	坏部底部外面はヘラ切り後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N5/ 灰白色 5Y7/2	良	2/3		160
463	高坏	1区灰原 a-bアゼ	口径 － 脚径 10.0 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.5	褐灰色 7.5YR4/1 青灰色 5B6/1	良	1		424
464	高坏	4区灰原上層	口径 － 器高 － 脚径 11.1	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 N5/ 灰色 N6/	良	1		94
465	高坏	a-bアゼ	口径 － 脚径 9.7 器高 －	回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1	蓋坏144と融着	427
466	高坏	トレンチ1 灰原東法面	口径 － 脚径 10.2 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2		759
467	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.7 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	2/3		480
468	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.9 器高 －	回転ナデ	右	1～5	灰色 N5/ 灰色 N5/	良	3/4		458
469	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 9.8 器高 －	坏部は不明 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰白色 10Y7/1	良	1		237
470	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.6 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	0.5	黄灰色 2.5Y4/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1		477
471	高坏	2区灰原	口径 － 脚径 10.3 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 N7/	良	2/3		323
472	高坏	1区灰原	口径 － 脚径 9.3 器高 －	回転ナデ	右	0.5	暗灰色 N3/ 灰白色 5Y7/1	良	1/3		369
473	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 10.8 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1/3		781
474	高坏	1区灰原	口径 － 脚径 10.0 器高 －	回転ナデ	右	0.5～5	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y8/2	良	1		363
475	高坏	2区灰原	口径 － 脚径 10.3 器高 －	回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 灰白色 N7/	良	1		360
476	高坏	灰原東法面	口径 － 脚径 12.2 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色 7.5Y6/1 －	良	1		764

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
477	高坏	2区灰原	口径 － 脚径 9.8 器高 －	回転ナデ	右	0.5～1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1		327
478	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 9.0 器高 －	回転ナデ	右	0.5～1	黒色 N2/ 灰色 N5/	良	1		181
479	高坏	3区灰原上層	口径 － 脚径 9.2 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色 7.5Y8/1 灰白色 7.5Y8/1	不良	2/3		449
480	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 10.2 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N4/ 灰色 N6/	良	1	三方円孔	193
481	高坏	灰原東法面	口径 － 脚径 10.4 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 2.5Y7/2 灰黄色 2.5Y7/2	不良	1/3		758
482	高坏	3区ｉ-ｊアゼ	口径 － 脚径 9.2 器高 －	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1	青灰色 5PB6/1 明オリーブ灰色 2.5GY7/1	良	1/3		435
483	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 10.0 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	左	1	灰色 7.5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	2/3		460
484	高坏	窯跡南土器ダマリ	口径 － 脚径 9.4 器高 －	坏部上方は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～3	灰白色 5Y7/2 灰白色 5Y7/2	不良	1/8		77
485	高坏	3区灰原下層	口径 － 脚径 9.2 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N7/ 灰色 N6/	良	1		457
486	高坏	灰原東法面	口径 － 脚径 10.2 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面に回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰色 7.5Y5/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1		725
487	高坏	4区灰原下層	口径 － 脚径 10.2 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	左	1	灰黄色 2.5Y7/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	2/3	ヘラ記号	250
488	高坏	1区灰原 3区灰原上層 3区灰原下層	口径 － 脚径 9.4 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	オリーブ黒色 5Y3/1 灰白色 5Y7/2	良	3/4		760
489	高坏	トレンチ1 1区灰原	口径 － 脚径 9.4 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y4/1 暗灰黄色 2.5Y4/2	良	1/3	二方円孔	761
490	高坏	3区ｉ-ｊアゼ	口径 － 脚径 9.0 器高 －	回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 青灰色 5B5/1	良	1/3		434
491	高坏	2区灰原 3区灰原下層 4区灰原下層	口径 － 脚径 9.5 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	褐灰色 10YR5/1 黄灰色 2.5Y4/1	良	2/3		752
492	高坏	2区灰原	口径 － 脚径 10.1 器高 －	坏部は不明 その他は回転ナデ	右	1～8	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y7/1	不良	1		328
493	高坏	1区灰原	口径 14.4 脚径 － 器高 －	坏部は回転ナデ 脚部は不明	右	1	灰色 N6/ 灰色 7.5Y6/1	良	1/8		409
494	高坏	4区灰原上層	口径 － 脚径 － 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/1	不良	－		763
495	高坏	2区灰原	口径 13.9 脚径 － 器高 －	脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 明緑灰色 10GY8/1	良	1/10		762
496	高坏	3区灰原下層	口径 12.2 脚径 10.4 器高 10.7	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面に回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/2		485
497	高坏	1区灰原	口径 12.2 脚径 － 器高 －	回転ナデ	－	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/6		591
498	高坏	a-bアゼ	口径 11.2 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	暗灰黄色 2.5Y5/2 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	1/8		809
499	高坏	4区ｉ-ｊアゼ内 a-bアゼ ハイド中	口径 11.4 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 N6/ 灰色 7.5Y6/1	良	1/8		798
500	高坏	3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径 11.8 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1～1.5	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/5		820
501	高坏	1区灰原 3区灰原下層	口径 11.8 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	黄灰色 2.5Y6/1 灰オリーブ色 5Y5/2	良	2/3	透かしあり	805
502	高坏	1区灰原 1区灰原	口径 10.9 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	不良	1/4		804
503	高坏	1区灰原 4区灰原上層 a-bアゼ	口径 10.3 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/4		802
504	高坏	4区灰原下層	口径 12.0 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y4/1 灰色 7.5Y4/1	良	1/8		814

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
505	高坏	トレンチ1	口径 12.0 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N5/ 灰色 N5/	良	1/6		813
506	高坏	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層	口径 10.4 脚径 － 器高 －	坏部外面にカキメ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	良	1		811
507	高坏	4区灰原下層	口径 10.3 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y5/1 褐灰色 7.5YR5/1	良	1/4		244
508	高坏	2区灰原	口径 13.0 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 10Y6/1 灰色 10Y6/1	良	1/6		808
509	高坏	トレンチ1	口径 11.5 脚径 － 器高 －	脚部は不明 坏部外面にカキメ 坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	不良	1/4		807
510	高坏	4区ｉ-ｊアゼ	口径 12.3 脚径 － 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 外面にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰色 N6/	良	1/4		307
511	高坏	2区灰原 4区灰原下層	口径 10.5 脚径 － 器高 －	坏部外面にカキメ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 N6/ 灰色 N6/	良	1/2		818
512	高坏	2区灰原	口径 10.4 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	明青灰色 5B7/1 明青灰色 5B7/1	不良	1/8		803
513	高坏	水田造成土	口径 13.1 脚径 － 器高 －	坏部底部外面はヘラ切り後ナデ 坏部外面上方にカキメ その他は回転ナデ 脚部は不明	右	1	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		60
514	高坏	4区灰原下層	口径 13.2 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1/6		817
515	高坏	4区灰原上層	口径 13.2 器高 － 脚径 －	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ 脚部は不明	右	0.5	灰オリーブ色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/3		96
516	高坏	灰原上面 2区灰原	口径 14.4 脚径 － 器高 －	坏部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ 脚部は不明	右	1	灰色 10Y5/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/4		835
517	高坏	トレンチ2 3区灰原下層 4区灰原下層	口径 13.2 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰オリーブ色 5Y6/2 灰色 5Y6/1	良	1/3		806
518	高坏	水田造成土	口径 13.1 脚径 － 器高 －	坏部は回転ナデ 脚部は不明	右	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 赤黒色 2.5Y7/2	良	1/6		59
519	高坏	3区灰原下層	口径 16.8 脚径 － 器高 －	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	1	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	不良	1/3		799
520	高坏	1区灰原 3区ｉ-ｊアゼ	口径 15.8 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	明青灰色 5B7/1 紫灰色 5P5/1	良	1/3		800
521	高坏	1区灰原	口径 15.5 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1～5	にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	良	1/3		801
522	高坏	トレンチ2	口径 14.3 脚径 － 器高 －	坏部底部外面に回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1～2	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3	不良	5/6	年報4－9(No.5)	711
523	高坏	4区灰原下層(北端)	口径 14.2 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1	にぶい黄橙色10YR6/3 にぶい黄橙色10YR7/3	良	1/6		174
524	高坏	4区灰原下層	口径 12.9 脚径 － 器高 －	脚部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y7/1	良	1/3		266
525	高坏	4区灰原上層 4区灰原下層	口径 14.1 器高 － 脚径 －	坏部は回転ナデ その他は不明	左	0.1～0.5	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	1/2		121
526	高坏	2区灰原	口径 14.0 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 坏部内面に仕上げナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	不良	1/4		834
527	高坏	トレンチ1	口径 13.6 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/3	年報4－29(No.3)	831
528	高坏	4区灰原下層	口径 14.6 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 坏部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 10Y7/1 灰白色 10Y7/1	良	1/4		840
529	高坏	1区灰原 3区ｉ-ｊアゼ 4区灰原下層	口径 14.0 脚径 － 器高 －	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y6/1 灰色 N7/	良	1/2		833

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
530	高坏	3区灰原下層	口径　14.4 脚径　－ 器高　－	坏部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	1	灰色　N5/ 灰色　7.5Y6/1	良	1/3		832
531	高坏	窯跡南土器ダマリ 2区灰原	口径　13.4 脚径　－ 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5～1	褐灰色　5YR4/1 褐灰色　5YR4/1	良	1/5		819
532	脚付椀	トレンチ1 4区灰原下層	直径　11.3 脚径　8.7 器高　9.4	坏部底部内面に仕上げナデ 坏部外面にカキメ 脚部外面に部分的にカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰オリーブ色　7.5Y5/2 灰色　N6/	良	1		245
533	脚付椀	4区灰原下層	直径　10.9 口径　10.5 脚径　9.0 器高　9.4	椀部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y4/1 灰色　5Y6/1	良	1/3		178
534	脚付椀	2区灰原	直径　10.5 脚径　9.1 器高　9.6	椀部・脚部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/2		739
535	脚付椀	4区灰原下層	口径　10.5 直径　11.0 脚径　8.8 器高　10.5	椀部はカキメ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　7.5Y6/1 明青灰色　5B7/1	不良	1/3		241
536	脚付椀	2・4区造成土 灰原東法面	直径　10.5 脚径　9.4 器高　10.0	回転ナデ	左	1～2	灰色　N5/ 灰色　N5/	良	1/3		740
537	脚付椀	3区灰原下層 4区灰原上層	直径　10.5 脚径　－ 器高　－	椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ 脚部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　10Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1/2		738
538	脚付椀	4区土壙内埋土	直径　10.3 脚径　－ 器高　－	椀部底部外面はナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N4/ 灰色　5Y6/1	良	1/3		743
539	脚付椀	3区灰原下層	直径　11.5 脚径　－ 器高　－	椀部底部内面に仕上げナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　N7/	良	1/8		733
540	脚付椀	4区灰原	口径　11.0 直径　12.2 脚径　－ 器高　－	椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/12		734
541	脚付椀	4区灰原下層	口径　11.9 直径　12.2 脚径　10.2 器高　12.6	坏部底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	左	0.1	灰オリーブ色　7.5Y5/2 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2		248
542	脚付椀	4区灰原下層	口径　10.2 直径　12.6 脚径　－ 器高　－	椀部外面中程にカキメ 椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1～2	灰白色　5Y7/2 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/8		745
543	脚付椀	3区灰原上層 3区灰原下層	口径　6.3 直径　10.4 脚径　－ 器高　－	椀部底部内面に仕上げナデ 椀部外面下方にカキメ 脚部は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	青灰色　5B5/1 青灰色　5B6/1	良	1/8		736
544	脚付椀	4区灰原上層(北端) 灰原東法面	口径　8.8 直径　11.6 脚径　－ 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N6/ 灰白色　N7/	良	2/3		251
545	脚付椀	トレンチ1 トレンチ2 1区灰原 3区灰原下層	口径　7.8 直径　9.2 脚径　－ 器高　－	底部外面に回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.1	灰色　N4/ 灰色　N6/	良	1/4		407
546	脚付椀	4区灰原	口径　11.3 直径　13.2 脚径　－ 器高　－	椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　10Y9/1 灰白色　10Y7/1	良	1/12		735
547	脚付椀	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層	直径　11.1 脚径　10.3 器高　16.5	椀部底部外面に回転ヘラケズリ後 回転ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1	二方透かし	704
548	把手付脚付椀	3区灰原上層 3区灰原下層 4区灰原下層	口径　－ 直径　11.2 脚径　11.4 器高　－	体部底部内面に仕上げナデ 体部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ その他は回転ナデ	左	0.1～1	赤灰色　10R5/1 褐灰色　5YR4/1	良	1	三方透かし	219
549	脚付椀	4区灰原上層	直径　－ 脚径　－ 器高　－	椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y4/1 灰白色　5Y7/1	不良	－		742
550	脚付椀	4区灰原下層	直径　－ 脚径　8.3 器高　－	椀部底部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	不良	1/6		741
551	脚付椀	2区灰原	直径　－ 脚径　9.3 器高　－	回転ナデ	右	0.5	灰白色　10Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/2		325
552	脚付椀？	4区灰原上層	直径　－ 脚径　7.4 器高　－	椀部は不明 その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/4		755
553	鉢	トレンチ1・2 2区灰原 3区 i - j アゼ 4区灰原下層 a - b アゼ	口径　19.6 直径　21.2 器高　10.6	底部内面に仕上げナデ 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	明青灰色　5BG7/1 明青灰色　5BG7/1	良	1		410

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
554	鉢	3区灰原下層 4区灰原下層	口径 18.6 直径 20.1 器高 9.6	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面はナデ その他は回転ナデ	右	1	明オリーブ灰色 5GY7/1 明オリーブ灰色 5GY7/1	不良	1/2	ヘラ記号	511
555	鉢	灰原上面 1区灰原	口径 13.8 直径 15.9 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 10Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4		99
556	鉢	3区灰原下層 4区灰原下層	口径 14.1 直径 19.2 器高 10.1	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面はナデ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/2		512
557	鉢	4区灰原下層	直径 17.4 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	褐灰色 7.5YR5/1 灰色 5Y6/1	良	1/6		719
558	鉢	トレンチ1 4区灰原下層	直径 13.2 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	2/3		732
559	鉢？	4区灰原下層	口径 12.2 直径 14.4 器高 －	外面上部にカキメ 底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	不良	1/6		708
560	鉢？	3区 i-j アゼ 4区灰原下層	口径 12.0 直径 16.0 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	2～3	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	不良	1/10		709
561	鉢？	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層 a-bアゼ	直径 － 器高 －	外面にカキメ工具による施文 内面は回転ナデ	－	3	灰色 5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	－		552
562	鉢？	灰原上面	口径 19.6 直径 20.0 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	左	0.5	灰黄色 2.5Y6/1 暗灰黄色 2.5Y5/2	良	1/8		100
563	鉢？	4区灰原下層	直径 19.2 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良	小片		721
564	鉢？	トレンチ1	直径 17.0 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	黄灰色 2.5Y6/1 褐灰色 5YR5/1	不良	1/5		720
565	鉢？	灰原東法面	直径 13.9 器高 －	口頸部にカキメ その他は回転ナデ 底部は不明	右	1	灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/8		851
566	鉢？	3区灰原下層	直径 － 器高 －	回転ナデ	左	1～2	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	小片		821
567	大鉢？	4区灰原下層	直径 36.4 器高 －	受部外面下方は平行タタキ後カキメ原体によるナデ消し 受部内面下方は同心円タタキ後回転ナデ その他は回転ナデ	－	1	灰色 10Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	小片		718
568	大鉢？	1区灰原 3区灰原上層 3区灰原下層 3区 i-j アゼ 4区灰原上層 灰原上面	直径 43.3 器高 －	口縁部は回転ナデ 体部外面下半は平行タタキ後カキメ 体部内面下半は同心円タタキ	右	1	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/8		857
569	大鉢？	トレンチ1 2区灰原 4区灰原上層	直径 66.5 器高 －	口縁部は回転ナデ 体部外面下半は平行タタキ 体部内面下半は同心円タタキ	右	2～3	明黄褐色 2.5Y7/6 浅黄色 2.5Y7/4	不良	1/10		860
570	捏鉢	1区灰原 3区灰原下層 3区 i-j アゼ	口径 13.8 底径 10.0 器高 18.1	底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1		519
571	捏鉢	トレンチ1 1区灰原	口径 19.5 底径 11.6 器高 16.8	底部は回転ヘラケズリ 底部内面から穿孔 その他は回転ナデ	左	0.5	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	2/3		486
572	捏鉢	トレンチ1 1区灰原	口径 13.7 底径 9.3 器高 14.8	底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5B6/1 明青灰色 5B7/1	良	1/2	年報4－52(No.74)	482
573	捏鉢	4区灰原下層	口径 15.2 底径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～2	褐灰色 10YR6/1 褐灰色 10YR6/1	良	1/8		487
574	捏鉢	3区灰原下層 3区 i-j アゼ a-bアゼ	口径 14.6 底径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	良	1		499
575	捏鉢	3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径 14.3 底径 8.3 器高 16.5	底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ	右	1	明青灰色 5B7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/2		497
576	捏鉢	トレンチ1 3区灰原上層 3区灰原下層	口径 17.7 底径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		688
577	捏鉢	1区灰原	口径 15.2 底径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/8		500
578	捏鉢	3区灰原上層 3区灰原下層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径 17.4 底径 － 器高 －	底部外面は不明 底部内面に指圧痕 その他は回転ナデ	右	1～2	オリーブ灰色 2.5GY6/1 灰色 5Y6/1	良	－	把手付	689
579	捏鉢	トレンチ1	口径 17.4 底径 － 器高 －	口縁部は回転ナデ その他は不明	右	1	黄灰色 5Y5/1 黄灰色 5Y5/1	良	1/8	年報4－51(No.44)	538
580	捏鉢	4区灰原直上層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径 － 底径 10.2 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	2/3		690
581	捏鉢	3区灰原下層	口径 － 底径 10.4 器高 －	体部外面下方にカキメ 底部は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	明青灰色 5B7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1		498

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
582	蓋(壺)	3区灰原上層	直径 12.7 返径 9.4 器高 2.4	天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 灰白色 5Y7/1	良	1/4		447
583	蓋(壺)	3区灰原上層	直径 12.2 返径 8.7 器高 2.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰色 5Y6/1	良	1/10		700
584	蓋(壺)	4区灰原下層	直径 11.6 返径 7.8 器高 2.2	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1		187
585	蓋(壺)	水田造成土	直径 11.2 器高 2.6	天井部内面に仕上げナデ 天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ灰色 2.5GY6/1 にぶい黄色 2.5Y6/3	良	1/8		62
586	蓋(壺)	1区灰原	直径 11.0 返径 7.3 器高 3.1	天井部外面はヘラ切り後回転ナデ その他は回転ナデ	左	0.5	黄灰色 2.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/3		398
587	蓋(壺)	1区灰原	直径 12.8 返径 9.0 器高 －	天井部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/6		754
588	蓋(壺)	4区灰原下層	直径 13.0 返径 10.1 器高 －	天井部外面は不明 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色 10Y6/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/3		756
589	蓋(壺)	灰原東法面	直径 12.3 返径 10.0 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	褐灰色 10YR6/1 黄灰色 2.5Y4/1	良	1/3		753
590	蓋(壺)	トレンチ1	直径 11.3 返径 8.2 器高 2.7	天井部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良	1/3	年報4－47(No.73)	592
591	蓋(壺)	4区造成土	直径 14.0 返径 10.8 器高 2.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰黄色 2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y6/2	良	1/4		594
592	蓋(壺)	2区灰原直上層	直径 12.1 返径 9.6 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1/3		342
593	蓋(壺)	4区灰原下層	直径 13.7 返径 10.8 器高 1.6	天井部外面はヘラ切り後回転ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ灰色 10Y4/2 灰白色 2.5Y7/1	良	2/3		201
594	蓋(壺)	トレンチ1	直径 12.6 返径 9.6 器高 1.7	天井部外面は回転ヘラケズリ？ その他は回転ナデ	左	1	オリーブ灰色 2.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1		168
595	蓋(壺)	4区灰原下層	直径 12.3 返径 9.4 器高 1.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/6	ヘラ記号	701
596	蓋(壺)	4区灰原下層	直径 12.3 返径 9.4 器高 1.5	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1	灰色 7.5Y5/1 灰色 5Y6/1	良	1/6	ヘラ記号	595
597	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 13.2 器高 4.7	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	－	1～2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	566
598	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 10.6 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N5/ 灰色 N5/	良	1/3		533
599	蓋(短頸壺)	2区灰原直上層 a-bアゼ	直径 10.5 器高 3.1	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y8/1	良	1/4		422
600	蓋(短頸壺)	トレンチ1 1区灰原	直径 10.4 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	3/4		563
601	蓋(短頸壺)	3区灰原下層 a-bアゼ	直径 10.4 器高 3.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	2	灰色 N7/ 灰白色 7.5Y7/1	良	2/3		692
602	蓋(短頸壺)	トレンチ1	直径 10.4 器高 3.3	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3	年報4－44(No.55) ヘラ記号	560
603	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 10.4 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	－	1～2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/3	ヘラ記号	561
604	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 10.3 器高 3.7	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y6/1	良	1/2		532
605	蓋(短頸壺)	3区灰原上層	直径 10.2 器高 3.6	天井部外面はヘラ切り後ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/2	ヘラ記号	446
606	蓋(短頸壺)	a-bアゼ	直径 10.2 器高 3.3	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y5/1 灰白色 5Y7/1	良	2/3		420
607	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 9.6 器高 3.7	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/3	ヘラ記号	235
608	蓋(短頸壺)	4区 i-j アゼ	直径 9.8 器高 3.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	3/4	ヘラ記号	309
609	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 9.9 器高 3.1	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2	良	1/4	ヘラ記号	233
610	蓋(短頸壺)	1区灰原	直径 9.6 器高 3.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 7.5Y7/1 灰色 7.5Y7/1	良	2/3		368
611	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 12.8 器高 4.2	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～2	オリーブ灰色 10Y5/2 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/3	ヘラ記号	535

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
612	蓋(短頸壺)	1区灰原	直径 11.4 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/3		397
613	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 11.2 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1	不良	1/4		562
614	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 10.4 器高 3.6	天井部外面は回転ヘラケズリ？ その他は回転ナデ	左	0.5	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰白色 2.5Y8/2	良	1/3		234
615	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 10.6 器高 －	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/2	良	1/3	短頸壺643と一対	694
616	蓋(短頸壺)	3区灰原上層	直径 9.3 器高 2.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	－	1	灰色 5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/2		565
617	蓋(短頸壺)	a-bアゼ	直径 8.9 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	褐灰色 7.5YR5/1 灰色 7.5Y7/1	良	1/4		421
618	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 12.0 器高 3.9	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	－	1	灰白色 N7/ 灰色 N6/	良	1/3		534
619	蓋(短頸壺)	4区灰原上層	直径 11.1 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面は仕上げナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1.5	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	良	1/4		144
620	蓋(短頸壺)	3区灰原下層	直径 10.6 器高 3.2	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y5/1 灰色 5Y6/1	良	3/4		589
621	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 9.8 器高 3.5	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y5/1 灰色 N6/	良	1/4		536
622	蓋(短頸壺)	4区灰原上層	直径 9.8 器高 2.6	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	－	1	灰色 5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	良	1/4		564
623	蓋(短頸壺)	4区灰原上層	直径 10.4 器高 3.6	天井部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰色 7.5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	145
624	蓋(短頸壺)	4区灰原下層	直径 10.3 器高 3.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 10Y5/1 灰色 N6/	良	1/4	ヘラ記号	236
625	短頸壺	3区灰原上層	口径 9.8 直径 16.0 器高 －	底部外面は平行タタキ後回転ナデ後カキメ 底部内面は同心円タタキ後回転ナデ その他は回転ナデ	－	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	2/3		661
626	短頸壺	トレンチ1 4区灰原下層 a-bアゼ	口径 8.1 直径 15.4 器高 11.2	底部外面は回転ヘラケズリ 体部上方にカキメ その他は回転ナデ	右	1～2	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 N7/	良	2/3	ヘラ記号	462
627	短頸壺	a-bアゼ	口径 9.1 直径 15.2 器高 10.9	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に突締痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/1	良	1/3	ヘラ記号	618
628	短頸壺	北端	口径 8.0 直径 14.8 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1	良	1/6		169
629	短頸壺	トレンチ1 4区灰原下層	口径 8.8 直径 14.6 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1/4	ヘラ記号	619
630	短頸壺	4区 i-j アゼ	口径 7.2 直径 14.8 器高 －	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 5Y7/1	良	1/4		310
631	短頸壺	1区灰原	口径 8.0 直径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	黄灰色 2.5Y6/1 灰黄色 2.5Y6/2	良	1/4	ヘラ記号	665
632	短頸壺	4区灰原下層 4区造成土	口径 8.3 直径 － 器高 －	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1/4		691
633	短頸壺	1区灰原 3区灰原下層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径 8.4 直径 14.5 器高 10.9	底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ 底部内面にナデ その他は回転ナデ	右	1～4	灰白色 10Y7/1 灰白色 10Y7/1	不良	1/6	ヘラ記号	617
634	短頸壺	2区灰原	口径 6.4 直径 14.5 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色 7.5Y4/1 黄灰色 2.5Y5/1	良	1/6		344
635	短頸壺	3区灰原上層 3区灰原下層	口径 7.6 直径 14.2 器高 －	体部外面にカキメ 底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		620
636	短頸壺	3区灰原上層	口径 7.9 直径 14.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色 N6/ 灰色 10Y6/1	良	1/2		663
637	短頸壺	1区灰原直上層 1区灰原 3区灰原上層	口径 8.0 直径 14.1 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色 5PB6/1 青灰色 5PB6/1	良	1/3		643
638	短頸壺	4区灰原下層	口径 7.2 直径 13.4 器高 －	底部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰白色 N7/ 灰白色 2.5Y7/1	良	1/2		256
639	短頸壺	3区灰原下層	口径 8.2 直径 14.0 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ 体部下半にカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良	1/2		662
640	短頸壺	2区灰原	口径 7.6 直径 13.6 器高 8.1	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰白色 N7/ 灰白色 N7/	良	1/3		343
641	短頸壺	4区灰原下層	口径 7.5 直径 13.7 器高 －	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	明青灰色 5B7/1 明青灰色 5B7/1	良	1	ヘラ記号	254

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
642	短頸壺	4区灰原上層	口径　7.4 直径　－ 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　2.5Y7/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/4		158
643	短頸壺	4区灰原下層	口径　7.2 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/2	良	1/2	蓋(短頸壺)615と一対	693
644	短頸壺	3区灰原下層	口径　7.6 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	褐灰色　10YR5/1 褐灰色　10YR5/1	良	1/3	ヘラ記号	664
645	短頸壺	3区灰原下層	口径　6.2 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰褐色　7.5YR5/2 褐灰色　7.5YR4/1	良	1/4		667
646	短頸壺	2区灰原	口径　6.2 直径　10.8 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰白色　N7/ 灰色　7.5Y6/1	良	1/4		666
647	短頸壺	2区灰原 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　5.7 直径　10.7 器高　9.5	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	2/3		257
648	短頸壺	窯跡南土器ダマリ 2区灰原 4区灰原上層	口径　6.8 直径　15.0 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰白色　7.5Y7/1 灰色　N6/	良	2/3		126
649	短頸壺	a-bアゼ 4区灰原下層	口径　10.0 直径　23.0 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/4		675
650	壺	4区灰原上層 4区灰原下層	口径　11.7 直径　23.8 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ 体部にカキメ その他は回転ナデ	右	1	赤灰色　2.5YR6/1 灰色　5Y6/1	良	1/3	ヘラ記号	259
651	壺	4区灰原下層 4区i-jアゼ	口径　10.3 直径　20.5 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 灰白色　2.5YR8/2	良	1	ヘラ記号	262
652	壺	3区灰原下層	口径　11.4 直径　18.4 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色　7.5Y6/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	674
653	壺	4区灰原下層	口径　12.4 直径　－ 器高　－	回転ナデ 底部は不明	右	1	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/4		931
654	壺	3区灰原下層 4区造成土	口径　12.1 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰オリーブ色 5Y5/2 青灰色　5PB6/1	良	1/6		932
655	壺	1区灰原	口径　11.2 直径　19.0 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1～2	灰白色　2.5Y8/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/8		623
656	壺	4区灰原下層	口径　13.7 直径　19.6 器高　－	体部外面上半から口縁部にかけては回転ナデ 体部外面下半は粗いカキメ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	0.1～1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/2	ヘラ記号？	868
657	壺	1区灰原直上層 2区灰原	口径　12.2 直径　18.3 器高　15.3	体部にカキメ 底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面にナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰オリーブ色 5Y4/1 灰オリーブ色 5Y5/2	良	1/4		345
658	壺	4区灰原上層 4区灰原下層	口径　11.3 直径　21.0 器高　－	体部下半にカキメ 底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　N7/ 灰白色　7.5Y7/1	良	1/4		640
659	壺	3区灰原下層 4区灰原下層 灰原東法面	口径　11.0 直径　18.7 器高　－	底部外面はタタキ後回転ナデ 口頸部外面にカキメ その他は回転ナデ	左	1～2	灰白色　2.5Y7/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/8		677
660	壺	トレンチ1 1区灰原 3区灰原 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　12.6 直径　20.2 器高　18.4	口頸部に粗いカキメ 体部下半にカキメ 底部内面に同心円タタキ その他は回転ナデ	右	0.5～1	褐灰色　10YR5/1 青灰色　5B5/1	良	1/4		638
661	壺	1区灰原	口径　12.8 直径　20.0 器高　－	体部下半にカキメ後回転ナデ 内面の一部に平行タタキ 底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　5Y8/1	良	1/3		639
662	壺	3区灰原下層	口径　10.8 直径　17.5 器高　18.7	底部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	2/3		676
663	壺	4区灰原上層 4区灰原下層 4区i-jアゼ内 灰原東法面	口径　－ 直径　18.4 器高　－	口頸部は不明 底部外面は回転ヘラケズリ後粗いカキメ 体部は粗いカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/8		630
664	壺	トレンチ1 4区 灰原東法面	口径　－ 直径　21.4 器高　－	口頸部・底部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/8		625
665	壺	3区灰原下層 4区灰原下層	口径　－ 直径　19.7 器高　－	底部外面はカキメ 体部上半はカキメ後回転ナデ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y5/1	良	2/3		624
666	壺	トレンチ1 2・4区造成土 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原上層(北端)	口径　－ 直径　20.6 器高　－	口頸部は不明 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/8		627

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　　調	焼成	残存	備　　考	整理番号
667	壺	トレンチ1 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　－ 直径　22.3 器高　－	口縁部は不明 体部外面上半は回転ナデ 体部外面下半は平行タタキ後カキメ 体部内面上半は同心円タタキ後回転ナデ 体部内面下半は同心円タタキ	右	1	灰白色　N7/ 灰白色　5Y7/1	良	－		922
668	広口壺	4区灰原上層	口径　13.8 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面はカキメ 体部内面は同心円文タタキ	右	0.5	にぶい赤褐色　2.5YR5/3 赤灰色　2.5YR4/1	不良	1/2		154
669	壺	トレンチ1 1区灰原	口径　11.4 直径　－ 器高　－	口頸部は回転ナデ その他は不明	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	2/3		635
670	壺	トレンチ1 1区灰原	口径　11.8 直径　－ 器高　－	口頸部は回転ナデ その他は不明	右	0.5	青灰色　5B5/1 青灰色　5B6/1	良	2/3		636
671	壺	4区灰原上層	口径　12.8 直径　－ 器高　－	口頸部は回転ナデ その他は不明	右	0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　N6/	良	1/2		637
672	壺	4区灰原上層	口径　14.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ その他は不明	右	1	灰色　7.5Y4/1 灰色　7.5Y4/1	良	1/6		850
673	壺	4区灰原下層 灰原東法面	口径　13.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ その他は不明	左	0.5	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	1/3		849
674	壺	4区灰原下層	口径　11.1 直径　－ 器高　－	口縁部外面はカキメ後回転ナデ？ 口縁部内面は回転ナデ 体部外面は自然柚著しく不明 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰白色　7.5Y7/1 灰色　7.5Y4/1	良	1/3		870
675	壺	4区灰原下層	口径　15.3 直径　－ 器高　－	口縁部外面上半から口縁部内面にかけては回転ナデ 口縁部外面下半にカキメ 体部外面は自然柚著しく不明 体部内面は同心円タタキ	右	1～3	灰色　7.5Y5/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/3		869
676	壺	4区灰原下層	口径　16.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は不明 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰オリーブ色　7.5Y4/2 明青灰色　5B7/1	良	2/3		929
677	壺？	4区灰原上層	口径　12.0 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N5/ 灰色　N5/	良	小片		852
678	長頸壺	4区灰原上層 4区灰原下層	口径　8.0 直径　－ 器高　－	内面頸部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	黄灰色　2.5Y6/1 灰黄色　2.5Y7/2	不良	1		258
679	長頸壺	3区灰原下層	口径　8.2 直径　14.0 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　N5/ 灰色　10Y6/1	良	1/2		673
680	長頸壺	トレンチ1 2区灰原 4区灰原下層 4区造成土	口径　9.6 直径　15.6 器高　－	基部にシボリ痕 底部は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/6		642
681	長頸壺	4区灰原上層 4区灰原下層 4区土壙内埋土 i-jアゼ	口径　10.1 直径　16.0 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　10Y6/1 灰白色　10Y7/1	良	3/4		658
682	長頸壺	1区灰原 3区灰原下層 ハイド中	口径　10.0 直径　15.1 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　N6/	良	1		621
683	長頸壺	3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　－ 直径　14.7 器高　－	底部外面は粗いカキメ 底部内面に突締痕 基部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	黄灰色　2.5Y6/1 青灰色　5B6/1	良	1		622
684	長頸壺	4区灰原下層	口径　9.0 直径　－ 器高　－	内面頸部にシボリ痕 外面頸部にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	赤褐色　10R5/3 赤褐色　10R5/3	良	1	ヘラ記号	297
685	長頸壺	2区灰原上層 2区灰原 4区灰原上層	口径　7.1 直径　－ 器高　－	体部は不明 口頸部外面にカキメ 口頸部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1	黄灰色　2.5Y5/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/3		352
686	長頸壺	4区灰原下層	口径　7.8 直径　－ 器高　－	内面頸部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N5/ 灰色　N6/	良	1		296
687	長頸壺？	窯跡南土器ダマリ	口径　7.3 直径　－ 器高　－	口縁部外面上方はカキメ後ナデ その他は回転ナデ 体部は不明	左	0.1～1	灰白色　5Y7/1 暗オリーブ色　7.5Y4/3	良	1/2		76
688	長頸壺？	水田造成土	直径　－ 口径　9.1 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	黒色　10YR2/1 黒褐色　2.5Y3/1	良	1/6		823
689	長頸壺	3区灰原下層	口径　－ 直径　16.0 器高　－	口頸部は不明 底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に突締痕 体部外面上方はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/8		626
690	長頸壺	3区i-jアゼ	口径　－ 直径　14.4 器高　－	口頸部・底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰褐色　5YR4/2 黄灰色　2.5Y5/1	良	1/4		629

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
691	長頸壺？	a-bアゼ	口径　－ 直径　11.8 器高　－	口頸部は不明 基部にシボリ痕 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2	ヘラ記号	633
692	長頸壺？	トレンチ1 3区灰原下層	口径　－ 直径　15.4 器高　－	口頸部は不明 基部にシボリ痕 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　N6/ 灰白色　N7/	良	3/4		634
693	長頸壺？	2区灰原 4区灰原下層 4区灰原上層	口径　－ 直径　17.0 器高　－	口頸部は不明 基部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色　7.5Y5/2 灰白色　10Y7/1	良	2/3		628
694	長頸壺	1区灰原 3・4区ｉ-ｊアゼ 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　10.0 直径　14.6 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰白色　2.5Y8/1 青灰色　5B6/1	不良	7/8		484
695	長頸壺	2区灰原 3区ｉ-ｊアゼ	口径　8.8 直径　13.5 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ 口頸部外面と体部外面上方のカキメ 底部内面に突締痕 その他は回転ナデ	右	0.1～1	褐灰色　7.5YR5/1 褐灰色　7.5YR5/1	良	1		400
696	長頸壺	1区灰原 3区灰原下層 a-bアゼ	口径　9.0 直径　12.3 器高　12.3	底部外面は回転ヘラケズリ 基部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/2	ヘラ記号	509
697	長頸壺	a-bアゼ 3区灰原下層	口径　9.1 直径　13.9 器高　13.5	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に突締痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　N6/ 灰白色　7.5Y7/1	良	1	ヘラ記号	455
698	長頸壺	3区灰原下層	口径　8.0 直径　12.1 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/2		669
699	長頸壺	トレンチ1 4区灰原上層(北端)	口径　7.6 直径　12.2 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/4		670
700	長頸壺	3区灰原下層	口径　8.0 直径　13.0 器高　－	基部にシボリ痕 底部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/2	良	1		641
701	長頸壺	3区灰原下層	口径　－ 直径　13.3 器高　－	口頸部・底部は不明 基部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1.5	灰色　N6/ 灰白色　2.5Y7/1	良	1	ヘラ記号	631
702	細頸壺	3区灰原下層	口径　6.0 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色　N6/ 灰色　5Y6/1	良	4/5		671
703	細頸壺	4区灰原直上層	口径　6.9 直径　14.2 器高　－	体部上方にカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～2	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　5Y7/2	良	1		326
704	細頸壺	3区ｉ-ｊアゼ	口径　7.0 直径　－ 器高　－	底部は不明 体部上半にカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	672
705	細頸壺	4区灰原下層	口径　5.8 直径　13.1 器高　12.4	回転ナデ 底部内面に絞切痕	右	0.5～1	灰白色　N7/ 灰色　N6/	良	1		186
706	細頸壺	トレンチ1 3区灰原上層 4区灰原下層	口径　4.9 直径　13.0 器高　－	体部上半は回転ヘラケズリ後カキメ その他は回転ナデ 閉塞部は底	－	1	灰色　10Y5/1 灰色　N6/	良	1		668
707	壺？(口縁部)	トレンチ1	口径　5.4 直径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1		822
708	壺？(口縁部)	水田造成土	口径　4.0 直径　－ 器高　－	口頸部外面にカキメ その他は回転ナデ 体部は不明	右	0.5	灰色　N6/ 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3		606
709	壺？(口縁部)	3区灰原下層	口径　7.6 直径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/3		715
710	脚付長頸壺？	3区灰原下層 4区灰原上層	口径　－ 直径　－ 器高　－	回転ナデ	－	0.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/3		616
711	細頸壺？	1区灰原直上層 1区灰原 3区灰原直上層	口径　－ 直径　13.5 器高　－	口縁部は不明 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	褐灰色　7.5YR6/1 灰色　N6/	良	1/3		728
712	細頸壺？	1区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 直径　19.2 器高　－	口頸部は不明 基部に接合痕 底部内面にナデ 体部はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色　5B5/1 青灰色　5B6/1	良	1/8		632
713	脚付長頸壺	4区灰原 4区灰原下層	口径　8.9 直径　12.0 脚径　10.7 器高　23.9	底部外面は回転ヘラケズリ 頸部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y5/1 灰白色　5Y7/2	良	1	二方透かし	232
714	脚付長頸壺	2区灰原 3区灰原下層	口径　－ 直径　12.8 脚径　－ 器高　－	体部底部内面に突締痕 体部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 基部にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y5/1 灰白色　5Y7/1	良	1/3		750
715	脚付壺	4区(北端)灰原下層 4区灰原東法面	口径　－ 直径　－ 脚径　9.9 器高　－	体部底部内面に突締痕 体部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部は回転ナデ その他は不明	右	1	灰白色　2.5Y7/1 灰色　2.5Y7/1	良	4/5		838

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
716	脚付壺	1区灰原 4区灰原下層	口径　－ 直径　－ 脚径　9.5 器高　－	体部底部内面に突締痕 体部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 口頸部は不明 その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　7.5Y5/1 灰色　N6/	良	－	一方透かし	749
717	脚付壺	トレンチ1 4区灰原下層	口径　－ 直径　13.3 脚径　12.4 器高　－	体部底部内面に突締痕 体部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰色　7.5Y6/1	良	－		751
718	脚付壺	3区灰原上層	口径　－ 直径　－ 脚径　8.3 器高　－	体部底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 脚部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰色　5Y7/1	良	1/10	五方透かし	839
719	脚台	水田造成土	脚径　9.85 器高　－	回転ナデ	右	0.1～0.5	灰色　5Y6/1 灰黄色　2.5Y6/2	良	1/3		65
720	脚台	4区灰原下層	脚径　9.7 器高　－	壺部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	黄灰色　2.5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1		239
721	脚台	3区ｉ-ｊアゼ	脚径　10.6 器高　－	回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　N7/	良	1/2		436
722	脚台	3区灰原上層	脚径　10.0 器高　－	回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 緑灰色　5G5/1	良	2/3		451
723	脚台	4区灰原下層	脚径　12.5 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　N7/ 灰白色　N7/	良	1/2		681
724	脚台	4区灰原上層	脚径　13.0 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/2		123
725	脚台	4区灰原下層	脚径　12.2 器高　－	壺部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1	二方透かし	222
726	脚台	水田造成土 トレンチ1 4区灰原直上層 4区灰原上層 灰原東法面	脚径　15.2 器高　－	脚部上方はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～2	暗赤褐色　5YR3/2 灰褐色　5YR5/2	良	1/3	三方透かし	64
727	脚台	3区灰原下層 ａ-ｂアゼ	脚径　15.8 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　N7/ 灰白色　5Y7/1	良	1	三方透かし	682
728	脚台	2区灰原 4区灰原下層	脚径　19.3 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	にぶい黄色　2.5Y6/3 にぶい黄色　2.5Y6/3	良	1/3	三方透かし	683
729	脚台・蓋坏	4区灰原下層						良	1	三方透かし	184
730	脚台	4区灰原下層	脚径　10.3 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰色　10Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1/2	四方透かし	713
731	脚台	2区灰原	脚径　－ 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰白色　N7/	良	1/4	三方円孔	848
732	脚台	ａ-ｂアゼ	脚径　10.5 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	－	1	灰褐色　2.5Y6/2 灰黄色　2.5Y6/1	良	1/4		714
733	脚台	4区灰原上層	脚径　12.3 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y6/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/4	四方透かし？	125
734	脚台	トレンチ1	脚径　10.1 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/7	透かしあり	853
735	脚台	3区灰原下層	脚径　10.4 器高　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	1～3	灰色　7.5Y6/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/3		680
736	瓏	トレンチ1 4区灰原下層	口径　13.7 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 外面頸部に縦方向のカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y5/1 灰白色　5Y6/1	良	1	年報4－38(No.31)	298
737	瓏	4区灰原下層 灰原東法面	口径　12.3 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 基部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	0.1	灰白色　10Y7/1 灰白色　10Y7/1	良	1		645
738	瓏	3区灰原下層	口径　14.2 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 基部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　N7/ 灰色　N6/	良	1/3		650
739	瓏	2区灰原	口径　11.2 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	基部内面にシボリ痕 体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/6		705
740	瓏	1区灰原 3区灰原下層	口径　12.3 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 口頸部外面に縦方向のヘラミガキ その他は回転ナデ	右	0.1	灰白色　7.5Y5/1 灰色　N5/	良	1/6		695
741	瓏	1区灰原	口径　13.0 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	2	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/8		707
742	瓏	トレンチ1 4区灰原直上層 4区灰原上層	口径　12.0 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	褐灰色　5YR6/1 褐灰色　10YR6/1	良	－	ヘラ記号	706
743	瓏	3区灰原下層	口径　13.7 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	口頸部外面上方にカキメ 口頸部内面下方にシボリ痕 その他は回転ナデ 体部は不明	右	0.5	灰色　5Y4/1 灰色　5Y4/1	良	1/2		461
744	瓏	3区ｉ-ｊアゼ	口径　12.4 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 口頸部外面にカキメ その他は回転ナデ	右	3	灰色　7.5Y4/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/6		648

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
745	瓮	3区灰原下層	口径　16.3 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色　2.5Y7/2 灰白色　7.5Y7/1	良	1/4		647
746	瓮	4区灰原上層	口径　12.9 体部径　－ 器高　－ 孔径　1.6	口頸部外面にカキメ 体部は不明 その他は回転ナデ	左	0.1	にぶい橙色　5YR7/4 にぶい橙色　5YR7/4	不良	1/12		748
747	瓮	3区灰原下層	口径　12.8 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰白色　5Y7/1 灰色　5Y6/1	良	1/4		646
748	瓮	3区灰原下層	口径　12.6 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 7.5Y3/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/3		649
749	瓮	4区灰原上層	口径　13.8 体部径　－ 器高　－ 孔径　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.1	褐灰色　5YR5/1 黒色　5Y2/1	良	1/3		124
750	瓮	2区灰原 4区 4区灰原下層	口径　－ 体部径 11.0 器高　－ 孔径　－	底部内面に突締痕 内面頸部にシボリ痕 底部外面に回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰色　N5/ 灰色　N5/	良	1	ヘラ記号	299
751	瓮	トレンチ1 3区灰原下層	口径　13.0 体部径　10.1 器高　13.4 孔径　1.4	基部内面にシボリ痕 底部外面は格子目?タタキ後ナデ その他は回転ナデ	右	0.1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/2	ヘラ記号	657
752	瓮	3区灰原下層 4区灰原上層 a-bアゼ	口径　－ 体部径　9.6 器高　－ 孔径　1.7	底部外面はナデ 底部内面に突締痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　10Y6/1 灰色　N6/	良	1		652
753	瓮	3区灰原下層	口径　－ 体部径　8.7 器高　－ 孔径　1.6	口頸部・内面は不明 底部外面はナデ その他は回転ナデ 閉塞部は底 内部に穿孔の粘土層残	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1		651
754	瓮	2区灰原 a-bアゼ	口径　－ 体部径10.2 器高　－ 孔径　1.6	基部内面にシボリ痕 その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y5/1 灰色　10Y5/1	良	－		747
755	瓮	トレンチ1 3区灰原下層	口径　－ 体部径　8.1 器高　－ 孔径　－	基部内面にシボリ痕 底部外面はナデ 底部内面に突締痕 その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	3/4		656
756	瓮	3区灰原上層 3区灰原下層	口径　－ 体部径　9.1 器高　－ 孔径　－	外面下半から底部はカキメ 底部内面に突締痕 基部内面にシボリ痕 口頸部外面にカキメ その他は回転ナデ	左	0.5～1.5	灰色　7.5Y6/1 灰オリーブ色 7.5Y6/2	良	－		644
757	提瓶	窯跡南土器ダマリ	口径　7.0 器高　23.4 最大径　－ 最大厚　－	閉塞部外面はケズリ後ナデ、同内面はナデ その他は回転ナデ	右	0.5	暗灰黄色　2.5Y5/2 青灰色　5B6/1	良	1	輪状把手	81
758	提瓶	水田造成土 窯跡南土器ダマリ	口径　6.5 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	回転ナデ	右	0.5～1	灰色　N6/ 灰白色　2.5Y7/1	良	1	輪状把手	80
759	提瓶	3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　7.4 器高　22.4 最大径 18.2 最大厚 －	成形底部外面はカキメ 部分的に格子目？タタキ痕有 その他は回転ナデ	右	0.1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　N7/	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	522
760	提瓶	2区灰原 4区灰原下層 4区ｉ-ｊアゼ内	口径　6.7 器高　－ 最大径 20.4 最大厚 －	成形底部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y6/1 褐灰色　10Y6/1	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	531
761	提瓶	1区灰原 3区ｉ-ｊアゼ内	口径　7.3 器高　24.8 最大径 24.8 最大厚 －	閉塞部外面はカキメ 成形底部外面はナデ 成形底部外面上方は回転ナデ、部分的に格子目?タタキ痕有 その他は回転ナデ 空気抜孔残	右	0.5～1	灰白色　7.5Y7/1 灰色　5Y6/1	不良	1	鉤状把手 ヘラ記号	401
762	提瓶	3区灰原下層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　8.1 器高　26.9 最大径 19.2 最大厚 －	成形底部外面はカキメ 閉塞部外面はカキメ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	654
763	提瓶	4区灰原下層	口径　7.5 器高　22.1 最大径 17.3 最大厚 －	成形底部外面はカキメ 閉塞部内面に指圧痕 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/2	鉤状把手 ヘラ記号	583
764	提瓶	トレンチ1 4区灰原下層	口径　7.1 器高　－ 最大径 17.5 最大厚 －	閉塞部外面はカキメ 閉塞部内面にナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　N6/ 青灰色　5PB6/1	良	－	鉤状把手 ヘラ記号	603
765	提瓶	3区灰原下層	口径　6.8 器高　22.4 最大径 18.0 最大厚 －	閉塞部外面は回転ナデ、部分的に平行タタキ痕有 成形底部外面は回転ヘラケズリ後カキメ その他は回転ナデ 空気抜孔残	右	0.5～1	灰色　N6/ 灰白色　7.5Y7/1	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	513

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
766	提瓶	3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 器高　－ 最大径 17.4 最大厚 －	閉塞部内面にナデ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/3	鉤状把手 ヘラ記号	601
767	提瓶	3区灰原下層	口径　7.0 器高　21.3 最大径 16.8 最大厚 －	成形底部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　N7/ 灰白色　7.5Y7/1	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	518
768	提瓶	3区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部外面はカキメ その他は回転ナデ 空気抜孔残	－	0.5	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	－	鉤状把手 ヘラ記号	579
769	提瓶	4区灰原下層 4区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	回転ナデ	右	1	青灰色　N5/ 灰白色　5Y7/1	良	－	鉤状把手 ヘラ記号	608
770	提瓶	2区灰原	口径　5.5 器高　23.5 最大径 18.9 最大厚 13.6	閉塞部外面は回転ナデ、部分的に平行タタキ痕有 反対側は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色　N6/ 灰白色　N7/	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	346
771	提瓶	4区灰原上層	口径　6.4 器高　－ 最大径 18.1 最大厚 －	成形底部は内面はナデ 成形底部外面はナデ後カキメ 成形底部上方に格子目？タタキ痕有 その他は回転ナデ	右	0.5～1	明青灰色　5B7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	243
772	提瓶	トレンチ1 4区灰原下層 ａ-ｂアゼ ハイド中	口径　－ 器高　－ 最大径 17.6 最大厚 －	成形底部外面はカキメ 閉塞部内面にナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　10Y5/1 灰色　10Y6/1	良	－	鉤状把手 ヘラ記号	602
773	提瓶	4区灰原上層	口径　6.3 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	体部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	1	鉤状把手 ヘラ記号	151
774	提瓶	4区灰原下層 3区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 13.7 最大厚 9.5	閉塞部内面に指圧痕 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　5Y4/1 黄灰色　2.5Y5/1	良	2/3	鉤状把手 ヘラ記号	578
775	提瓶	1区灰原	口径　6.7 器高　22.3 最大径 17.6 最大厚 12.0	閉塞部内面はナデ その他は回転ナデ	右	0.5	明青灰色　5B7/1 明緑灰色　5G7/1	良	1	鉤状把手	359
776	提瓶	2区灰原 4区灰原上層 4区灰原下層 ａ-ｂアゼ	口径　7.7 器高　24.1 最大径 18.2 最大厚 －	成形底部外面はカキメ その他は回転ナデ	右	0.5	青灰色　5B6/1 灰白色　5Y7/2	良	－	鉤状把手	585
777	提瓶	2区灰原 4区灰原下層	口径　6.4 器高　23.5 最大径 18.4 最大厚 －	体部はカキメ その他は回転ナデ 空気抜孔残	右	0.1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	－	鉤状把手	587
778	提瓶	3区灰原上層 3区灰原下層	口径　8.4 器高　24.2 最大径 18.5 最大厚 －	成形底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ 絞切技法	右	1～2	灰色　7.5Y6/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1	鉤状把手	607
779	提瓶	4区灰原下層	口径　6.8 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	成形底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　N7/ 灰白色　7.5Y7/1	良	－	鉤状把手	586
780	提瓶	3区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 16.7 最大厚 －	成形底部外面はカキメ後ナデ 成形底部上方にタタキ痕有 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　10YR7/1	良	1	鉤状把手	584
781	提瓶	トレンチ1 1区灰原 3区灰原上層 3区灰原下層	口径　7.0 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部は回転ナデ、部分的にタタキ痕有 その他は回転ナデ	－	0.5～1	灰色　N5/ 青灰色　5B6/1	良	－	鉤状把手	600
782	提瓶	1区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部外面はカキメ後部分的にナデ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ その他は回転ナデ 閉塞部は不明	右	1	灰色　N6/ 灰色　5Y5/1	良	－	ボタン状把手	653
783	提瓶	3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ ａ-ｂアゼ	口径　7.0 器高　21.8 最大径 16.4 最大厚 －	成形底部外面はヘラケズリ後回転ナデ 閉塞部外面は回転ナデ、部分的に平行タタキ痕有 その他は回転ナデ	右	0.5～1	青灰色　5B5/1 青灰色　5B6/1	良	－	ボタン状把手 ヘラ記号	588
784	提瓶	1区灰原	口径　6.0 器高　18.7 最大径 14.5 最大厚 10.4	体部に回転ヘラケズリ後カキメ その他は回転ナデ	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　5Y7/2	良	1	ボタン状把手	311
785	提瓶	トレンチ1 3区灰原下層 4区灰原直上層	口径　－ 器高　－ 最大径 15.0 最大厚 －	成形底部外面はカキメ、部分的に平行タタキ痕有 その他は回転ナデ	左	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰白色　5Y7/1	良	－	ボタン状把手 ヘラ記号	598
786	提瓶	4区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	成形底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	1/4	ボタン状把手 ヘラ記号	577

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
787	提瓶	3区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 12.4 最大厚 9.1	成形底部外面は回転ヘラケズリ 閉塞部内面はナデ その他は回転ナデ	右	0.1～1	灰色　5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1	ボタン状把手	573
788	提瓶	4区灰原下層	口径　6.2 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部は不明 その他は回転ナデ	－	0.5	灰白色　N6/ 灰色　7.5Y4/1	良	－	ボタン状把手 （特殊）	576
789	提瓶	1区灰原 1区灰原下層	口径　7.8 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部外面にカキメ、部分的に平行タタキ痕有 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　7.5Y7/1 灰色　N5/	良	－	把手不明 ヘラ記号	580
790	提瓶？	1区灰原 3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	閉塞部内外面はともに回転ナデ その他は不明	右	1	灰色　7.5Y6/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	－		659
791	提瓶？	4区灰原上層	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	閉塞部内外面はともに回転ナデ 絞切技法	右	1	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	－		615
792	提瓶？	3区灰原下層 4区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	閉塞部外面にカキメ その他は回転ナデ 絞切技法	－	1	灰色　N5/ 灰色　N5/	良	－		660
793	提瓶	4区灰原下層	口径　11.0 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 閉塞部外面はカキメ？ 閉塞部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	1	灰オリーブ色 5Y5/1 灰色　5Y6/1	良	1/6	把手不明	855
794	提瓶	2区灰原	口径　－ 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	閉塞部外面は平行タタキ後カキメ 閉塞部内面は同心円タタキ 閉塞円盤内面はナデ後同心円タタキ	右	1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	－	輪状把手	856
795	提瓶	1区灰原 3区灰原上層 4区灰原上層 4区灰原下層 4区灰原	口径　－ 器高　－ 最大径 27.5 最大厚 －	閉塞部外面は平行タタキ後カキメ 閉塞部内面は同心円タタキ後回転ナデ	－	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	－	把手不明	859
796	平瓶	3区灰原下層	口径　5.7 直径　18.4 器高　16.5	体部外面にカキメ 閉塞部内面に指圧痕 その他は回転ナデ 閉塞部は底	右	0.5	青灰色　5B6/1 灰白色　2.5Y8/2	良	1/2	鉤状把手 ヘラ記号	568
797	平瓶	3区灰原下層 ａ-ｂアゼ内	口径　5.6 直径　18.4 器高　－	体部外面下方にカキメ 天井部内面に指圧痕 その他は回転ナデ 閉塞部は底？ 空気抜孔残	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　5Y7/1	良	1/6	鉤状把手	571
798	平瓶	トレンチ1 灰原上面 3区灰原下層	口径　6.3 直径　17.6 器高　－	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 天井部内面に指圧痕 その他は回転ナデ 閉塞部は底？	右	0.5	青灰色　10BG5/1 青灰色　10BG5/1	良	1/3	鉤状把手 ヘラ記号	574
799	平瓶	4区灰原下層	口径　－ 直径　18.3 器高　－	体部外面上方にタタキ後粗いカキメ 天井部内面に指圧痕 閉塞部内面にナデ その他は回転ナデ 閉塞部は底 空気抜孔残	右	1	灰白色　N7/ 灰白色　7.5Y7/1	良	1/3	ボタン状把手	569
800	平瓶	4区灰原下層	口径　6.4 直径　15.1 器高　15.0	回転ナデ 閉塞部は底	右	1～2	灰白色　5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1	ヘラ記号	185
801	平瓶	1区灰原	口径　6.0 直径　－ 器高　－	底部は不明 その他は回転ナデ 閉塞部は底？	右	0.5	明青灰色　5B7/1 灰色　N7/	良	1/8	ボタン状把手 ヘラ記号	572
802	平瓶	トレンチ1 3区灰原下層	口径　－ 直径　14.2 器高　－	口縁部は不明 その他は回転ナデ 閉塞部は底 空気抜孔有	右	1	灰白色　5Y7/1 灰色　5Y6/1	良	1/2	ボタン状把手	730
803	平瓶	3区灰原上層 3区灰原下層	口径　－ 直径　18.7 器高　－	体部外面上方にカキメ その他は回転ナデ 閉塞部は底	右	0.5～1	青灰色　5B5/1 灰白色　7.5Y8/1	不良	1	ボタン状把手	567
804	平瓶	トレンチ2 1区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ 灰原東法面	口径　－ 直径　19.4 器高　－	体部外面上方にカキメ 天井部内面に指圧痕 閉塞部内面にナデ その他は回転ナデ 閉塞部は底	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　10Y7/1	良	1	ボタン状把手	570
805	平瓶	3区灰原下層	口径　5.9 直径　－ 器高　－	天井部外面はカキメ その他は回転ナデ 閉塞部は底？	右	0.5	灰色　7.5Y4/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2	把手無	559
806	平瓶	3区灰原下層	口径　－ 直径　14.7 器高　－	閉塞部内面はナデ その他は回転ナデ 閉塞部は天井	左	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 明青灰色　5B7/1	良	1/2	把手無	557
807	平瓶	4区灰原下層	口径　－ 直径　13.8 器高　－	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ 閉塞部は底	右	0.5	灰色　N7/ 灰白色　5Y7/1	良	1/4	把手無	556

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
808	平瓶	4区灰原 4区灰原下層	口径　7.0 直径　19.3 器高　－	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ 絞切技法 空気抜孔残	左	1～1.5	明青灰色　5B7/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	1	把手無	313
809	平瓶	トレンチ1 4区灰原下層	口径　－ 直径　18.5 器高　－	体部外面上方はカキメ 底部内面に指圧痕 底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ 絞切技法？	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1	把手無	575
810	平瓶	灰原上面	口径　6.5 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5	灰白色　10Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1	ヘラ記号	98
811	平瓶	4区灰原上層	口径　6.1 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.1～0.5	灰色　7.5YR6/1 灰オリーブ色 7.5Y4/2	良	1	ヘラ記号	139
812	平瓶？	4区灰原直上層 4区灰原上層	口径　6.4 直径　－ 器高　－	体部は不明 口縁部は回転ナデ	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1	ヘラ記号	582
813	横瓶	1区灰原 2区灰原 3区灰原上層 3区灰原下層 3・4区 i - j アゼ 4区灰原下層	口径　10.7 器高　27.2 最大径 23.8 最大厚 34.9	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ 閉塞部内面は指押さえ後同心円タタキ	右	0.5～1	青灰色　5PB5/1 灰色　10Y6/1	良	1/2		858
814	横瓶	2区灰原直上層 2区灰原 4区造成土 4区灰原上層 4区 i - j アゼ	口径　12.2 器高　26.2 最大径 22.8 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	青灰色　5B5/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3		880
815	横瓶	トレンチ1 2区灰原 3区耕作土 3区灰原下層	口径　12.9 器高　27.5 最大径 23.0 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ 閉塞部外面にナデ 閉塞円盤内面に指圧痕	右	0.5～1	灰色　5Y4/1 灰色　5Y5/1	良	－	ヘラ記号	874
816	横瓶	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　12.0 器高　24.9 最大径 22.7 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	9/10	年報4－54(No.66)	879
817	横瓶	4区灰原上層	口径　11.9 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5	褐灰色　7.5YR5/1 灰色　5Y5/1	良	1	ヘラ記号	138
818	横瓶	灰原東法面	口径　11.0 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 口縁部内面下半に指ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5	灰オリーブ色 5Y6/2 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/5	ヘラ記号	875
819	横瓶	トレンチ1 耕作土 4区灰原下層	口径　11.8 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面にカキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5	灰色　N6/ 灰白色　5Y6/1	良	1/3	ヘラ記号	864
820	横瓶	トレンチ1 4区灰原直上層 ハイド中	口径　12.4 器高　－ 最大径　－ 最大厚　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	左	0.1～0.5	灰色　7.5Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1/2	ヘラ記号	92
821	横瓶	灰原東法面	口径　12.9 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	2/3	ヘラ記号	865
822	横瓶	1区灰原	口径　12.4 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は不明 体部内面は同心円タタキ	右	1	青灰色　5B6/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/2		900
823	横瓶	2区灰原 4区灰原下層	口径　13.0 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～5	灰色　N4/ 灰色　5Y6/1	良	－	ヘラ記号	873
824	横瓶	灰原上面 4区灰原上層(北端)	口径　7.6 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　N7/ 灰白色　N7/	良	1/3	横瓶？830と同一個体？	861
825	横瓶	2区灰原 2・4区造成土 4区灰原上層(北端) 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　－ 器高　－ 最大径 16.3 最大厚 －	体部外面はカキメ 体部内面は回転ナデ 成形底部内面に指ナデ	右	0.1～1	灰白色　N7/ 灰色　N6/	不良	－		866
826	横瓶？	4区ハイド中	口径　12.9 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部外面は不明 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰オリーブ色 7.5Y4/2 灰色　N6/	良	1/3		155
827	横瓶？	4区灰原下層 a-bアゼ	口径　12.5 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部内面は同心円タタキ その他は不明	右	0.5～1	灰色　N8/ 灰色　N8/	不良	1		876
828	横瓶？	トレンチ1	口径　10.0 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ 体部内面は回転ナデ その他は不明	右	0.5～1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/2	ヘラ記号	877

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
829	横瓶？	トレンチ1 1区灰原	口径　8.6 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	口縁部は回転ナデ その他は不明	右	0.5～1	灰白色　2.5Y8/1 灰白色　2.5Y8/1	良	1		863
830	横瓶？	a-bアゼ 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　7.6 器高　－ 最大径 － 最大厚 －	体部外面はカキメ後ナデ 体部内面は回転ナデ 成形底部内面に指圧痕	右	1～2	灰オリーブ色 5Y4/2 灰白色　2.5Y7/1	良	－	横瓶824と同一個体？	862
831	直口甕	3区灰原下層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　18.2 直径　51.1 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	1	輪状把手 ヘラ記号	939
832	直口甕	2区灰原 4区灰原上層	口径　13.3 直径　29.2 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	0.1～1	褐灰色　10YR5/1 褐灰色　10YR5/1	良	1/2	輪状把手 ヘラ記号	881
833	直口甕	窯跡南土器ダマリ 4区灰原上層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ？ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰白色　5Y8/1 灰白色　5Y8/1	良	－	輪状把手 ヘラ記号	888
834	直口甕	灰原東法面	口径　16.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ？後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/2	鉤状把手 ヘラ記号	887
835	直口甕	2区灰原直上層 4区灰原上層 灰原東法面	口径　13.1 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ？ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	1	灰オリーブ色 7.5Y7/2 灰白色　5Y7/1	良	1/2	鉤状把手	886
836	直口甕	トレンチ2	口径　11.6 直径　23.0 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	1	灰白色　5Y7/1 青灰色　5B6/1	良	1/4	鉤状把手 年報4－49(No.67)	885
837	直口甕	3区灰原下層	口径　13.1 直径　30.3 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1	青灰色　5B6/1 灰白色　7.5Y7/1	良	1/5	鉤状把手 ヘラ記号	890
838	直口甕	3区灰原下層	口径　11.7 直径　29.6 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1～1	褐灰色　10YR5/1 青灰色　5PB6/1	良	1	鉤状把手	889
839	直口甕	2区灰原 4区灰原上層	口径　13.9 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	1～2	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1/3		883
840	直口甕	4区灰原下層	口径　11.3 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	1/6	ヘラ記号	882
841	直口甕	3区灰原下層	口径　15.9 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	不良	1/6	ヘラ記号	884
842	直口甕	4区灰原下層 a-bアゼ 灰原東法面	口径　18.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～3	灰色　7.5Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	3/4	ヘラ記号	878
843	甕	3区灰原下層	口径　17.0 直径　27.1 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	左	1	灰色　7.5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	911
844	甕	4区灰原上層 4区灰原下層	口径　17.8 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	左	0.5～1	オリーブ灰色　2.5GY5/1 青灰色　5B6/1	良	1	ヘラ記号	912
845	甕	3区灰原下層 4区灰原下層	口径　19.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/2	不良	3/4		914
846	甕	2区灰原 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　17.4 直径　26.9 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	1	灰色　7.5Y4/1 黄灰色　2.5Y4/1	不良	3/4		909
847	甕	水田造成土 窯跡南土器ダマリ	口径　21.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 外面は平行タタキ 内面は同心円タタキ	右	0.5～1	オリーブ灰色 10Y4/2 灰色　N6/	良	1/4		79
848	甕	1区灰原 3区灰原下層	口径　21.8 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 基部にわずかにカキメ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　5Y5/1 灰黄褐色　10YR5/2	良	3/4	ヘラ記号	910
849	甕	4区灰原下層 灰原東法面	口径　18.9 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ？ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰オリーブ色 5Y5/2 灰白色　5Y7/2	良	3/4		906
850	甕	2区灰原	口径　22.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～2	灰色　7.5Y6/1 灰色　N6/	良	1		935
851	甕	4区灰原下層	口径　20.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ？後カキメ 体部内面は不明	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰オリーブ色 5Y6/2	良	2/3		905
852	甕	3区灰原下層 4区灰原下層 a-bアゼ	口径　22.3 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ？ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　10Y6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/3		927
853	甕	1区灰原 3区灰原下層	口径　20.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y8/2	不良	5/6		907
854	甕	4区灰原下層	口径　20.9 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ後部分的に回転ナデ	右	1	青灰色　10BG6/1 灰色　N6/	良	1	ヘラ記号	936

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
855	甕	1区灰原直上層	口径　18.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5	灰色　5Y5/1 灰黄色　2.5Y6/2	良	小片	ヘラ記号	901
856	甕	3区灰原下層	口径　16.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	小片	ヘラ記号	902
857	甕	トレンチ1	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	1	灰白色　10Y8/1 灰白色　10Y7/1	不良	小片	ヘラ記号	919
858	甕	2区灰原直上層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/2	良	小片	ヘラ記号	918
859	甕	4区灰原下層	口径　25.5 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰白色　2.5Y7/1 暗灰黄色　2.5Y5/2	良	1/6	ヘラ記号	937
860	甕	トレンチ1 2区灰原 4区灰原下層 4区造成土	口径　17.9 直径　28.4 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　5Y5/1 灰白色　5Y7/2	良	1	ヘラ記号 横瓶815を上に載せた状態で焼成されている	891
861	甕	2区灰原	口径　18.4 直径　29.5 器高　26.1	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1～2	灰白色　2.5Y8/2 灰白色　2.5Y8/2	良	1/3	ヘラ記号	930
862	甕	2区灰原 4区灰原下層	直径　27.3 口径　17.5 器高　28.1	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	左	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 青灰色　5B6/1	良	1	ヘラ記号	329
863	甕	トレンチ1 3区灰原上層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　18.5 直径　32.7 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰色　7.5Y5/1 灰白色　7.5Y7/1	良	3/4		920
864	甕	2区灰原 4区灰原下層 4区造成土 4区ｉ-ｊアゼ	口径　20.6 直径　48.7 器高　49.0	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～1.5	灰色　5Y5/1 灰色　N6/	良	3/4	ヘラ記号	949
865	甕	1区灰原 2区灰原 4区灰原下層	口径　24.6 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	不良	3/4		923
866	甕	1区灰原	口径　24.7 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰白色　5Y8/1 灰白色　5Y8/1	不良	1/6		926
867	甕	2区灰原直上層 2区灰原 2・4区造成土 4区ｉ-ｊアゼ	口径　24.8 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ後部分的に回転ナデ	右	0.5～1	明青灰色　5B7/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/4		933
868	甕	水田造成土	口径　17.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 外面は平行タタキ後カキメ 内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰色　N6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/8	ヘラ記号	66
869	甕	4区灰原下層	口径　23.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	右	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	1/4	ヘラ記号	892
870	甕	2区灰原 4区造成土	口径　19.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ？ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/4		897
871	甕	1区灰原 4区灰原下層	口径　23.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1～1.5	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y8/1	不良	1/4		916
872	甕	トレンチ2 2区灰原	口径　15.5 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 にぶい黄橙色10YR7/2	良	1/2	ヘラ記号 年報4－55(No.39)	895
873	甕	トレンチ1 4区灰原上層 4区灰原下層 灰原東法面	口径　24.5 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1	明オリーブ灰色　2.5GY7/1 明オリーブ灰色　2.5GY7/1	良	1	ヘラ記号 年報4－57(No.30)	938
874	甕	灰原東法面	口径　19.7 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ？	右	0.5～1	灰色　7.5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	2/3		904
875	甕	1区灰原 3区灰原下層	口径　21.7 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は不明	右	1	灰色　5Y6/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/3	ヘラ記号	898
876	甕	2区灰原 4区灰原下層	口径　22.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1～5	灰色　7.5Y6/1 灰白色　7.5Y7/1	不良	3/4		908
877	甕	トレンチ1 3区灰原上層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　16.7 直径　27.1 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ？ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰色　7.5Y4/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/2		921
878	甕	灰原上面 1区灰原 2区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ 灰原東法面	口径　16.5 直径　29.0 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 灰白色　5Y7/1	良	3/4	ヘラ記号	896
879	甕	トレンチ1 3区灰原上層 4区灰原上層 4区灰原	口径　15.3 直径　27.6 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	オリーブ灰色　2.5GY5/1 青灰色　5PB6/1	良	1/2		925

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
880	甕	水田造成土 灰原東法面	口径　16.9 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	緑灰色　10G5/1 灰色　10Y6/1	不良	3/4	ヘラ記号	903
881	甕	4区灰原下層	口径　21.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～2	黄灰色　2.5Y6/1 褐灰色　10YR5/1	良	1/8	ヘラ記号	917
882	甕	2区灰原直上層 2区灰原 3区灰原下層 4区灰原下層 4区ｉ-ｊアゼ	口径　17.0 直径　31.4 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	左	1	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰白色　N7/	良	1/2		915
883	甕	トレンチ1 1区灰原 3区灰原上層 3区灰原下層 3区灰原	口径　16.6 直径　30.8 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	灰黄色　2.5Y7/2 淡黄色　2.5Y8/3	良	1/4	ヘラ記号	928
884	甕	トレンチ1 3区灰原上層 4区灰原 4区灰原下層	口径　23.0 直径　43.6 器高　46.5	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	左	1～3	褐灰色　10YR5/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/3	ヘラ記号	948
885	甕	トレンチ1 4区灰原下層 4区ｉ-ｊアゼ ハイド中	口径　23.2 直径　46.6 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	3/4		934
886	甕	4区灰原下層	口径　13.9 直径　24.3 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰白色　10YR8/2 灰白色　10YR8/2	不良	1/2		913
887	甕	トレンチ1	口径　17.7 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1/4	ヘラ記号 年報4－56(No.65)	894
888	甕	1区灰原	口径　14.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は不明 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～1	青灰色　5B6/1 青灰色　5B6/1	良	1/3		893
889	甕	トレンチ1	口径　15.9 直径　－ 器高　－	口縁部内面は回転ナデ 口縁部外面にカキメ 体部は不明	右	1	灰白色　5Y7/1 灰オリーブ色 5Y5/2	良	1/6		899
890	把手付甕	トレンチ1 灰原上面 1区灰原 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　22.2 直径　27.2 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1	褐灰色　7.5YR4/1 褐灰色　10YR4/1	良	1/8		867
891	把手付甕	トレンチ1 2区灰原直上層 4区灰原上層 4区灰原下層 ハイド中	口径　26.4 直径　33.5 器高　26.9	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～3	灰黄色　2.5Y6/2 黄灰色　2.5Y6/1	不良	1/2	年報4－58(No.26)	153
892	甕	2区灰原 3区灰原 4区灰原下層 4区ｉ-ｊアゼ ハイド中	口径　22.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰色　5Y5/1 灰白色　5Y6/1	良	1/3		924
893	甕	トレンチ1 灰原上面 4区灰原下層 灰原東法面	口径　19.8 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　10Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1		954
894	甕	トレンチ1 2区灰原 4区ｉ-ｊアゼ 4区造成土	口径　22.7 直径　50.8 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1		950
895	甕	2区灰原 4区灰原下層	口径　16.9 直径　30.4 器高　32.8	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ後回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰黄色　2.5Y7/1	良	2/3		353
896	甕	耕作土 灰原東法面	口径　21.2 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	－	1～2	灰色　7.5Y6/1 灰色　N6/	良	1/4		942
897	甕	トレンチ1 3区灰原下層 4区灰原上層 4区灰原下層	口径　24.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	－	1	灰色　N6/ 灰色　7.5Y6/1	良	1/3		941
898	甕	4区灰原下層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	－	1～5	灰色　7.5Y5/1 灰色　5Y6/1	良	1/4		940
899	甕	トレンチ1 4区灰原下層	口径　29.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	－	1～2	灰色　10Y6/1 灰色　N6/	良	1/2		943
900	甕	トレンチ1 4区灰原下層	口径　28.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	左	1～1.5	灰色　10Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1/6		846
901	甕	2区灰原 4区灰原上層	直径　－ 口径　27.2 器高　－	口縁部はカキメ後回転ナデ 体部外面は平行タタキ？ 体部内面は同心円タタキ	右	0.1	灰色　10Y5/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/2		152
902	甕	1区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　33.5 直径　54.5 器高　64.0	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	2～3	灰褐色　7.5YR5/2 褐灰色　7.5YR4/1	良	1/2		854

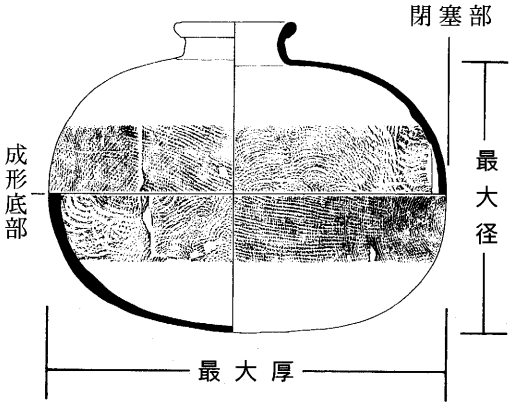
番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
903	甕？	ハイド中	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ	－	0.1	灰色　10Y5/1 灰白色　5Y7/2	良	小片		871
904	甕？	4区造成土	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	－	1～2	灰色　10Y5/1 灰色　10Y6/1	良	－		946
905	甕	3区灰原下層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部は不明	－	1～2	灰色　5Y6/1 灰オリーブ色　5Y6/2	良	－		945
906	甕	灰原東法面	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ その他は不明	右	0.5～1	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	良	－		843
907	甕	3区灰原上層 3区灰原下層 a-bアゼ内	口径　33.4 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	1/3		845
908	甕	3区灰原下層 灰原東法面	口径　39.7 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	0.5～2	灰褐色　5YR5/2 灰褐色　5YR5/2	良	1		841
909	甕	3区灰原上層 3区灰原下層 灰原東南法面	口径　50.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　10Y5/1 灰色　5Y6/1	良	1/5		958
910	甕	1区灰原 3区ｉ-ｊアゼ	口径　46.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 基部内面上方はナデ 体部は不明	右	1～2	灰色　5Y6/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/5		959
911	甕	1区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　48.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　10Y5/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/5		957
912	甕	1区灰原 3区灰原下層 3区ｉ-ｊアゼ	口径　50.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 体部外面は平行タタキ後回転ナデ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰白色　7.5Y7/1 灰黄色　2.5Y6/2	良	1/3		844
913	甕	3区灰原下層	口径　45.0 直径　－ 器高　－	口縁部は回転ナデ 基部上方内外面共にナデ 体部外面は平行タタキ後カキメ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　10Y6/1 灰色　7.5Y5/1	良	1/4		956
914	甕	3区灰原下層	口径　46.4 直径　76.4 器高　－	口縁部は回転ナデ 基部上方内外面共にナデ 体部外面は格子目タタキ 体部内面は同心円タタキ	右	1～2	灰色　5Y5/1 灰色　7.5Y6/1	良	1/6		955
915	大型蓋	4区灰原下層	直径　31.7 器高　－	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ その他は回転ナデ	－	1～2	灰色　N5/ 灰色　7.5Y5/1	良	1/4		716
916	大型蓋	トレンチ1 1区灰原 3区灰原下層	直径　37.1 器高　－	天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ	右	1～2	黄灰色　2.5Y6/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/17	年報4－43(No.53)	717
917	子持器台 (子坏)	3区灰原下層	口径　10.4 直径　12.7	親器外面に平行タタキ後回転ナデ その他は回転ナデ	右	1～2	灰色　10Y6/1 灰色　10Y6/1	良	1/8		551
918	装飾付壺 (子壺)	3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 直径　7.0 器高　－	口頸部にカキメ 底部外面にナデと剥離痕 その他は回転ナデ	右	1	灰白色　2.5Y7/1 灰白色　2.5Y7/1	良	1		504
919	装飾付壺 (子壺)	3区灰原上層 3区灰原下層	口径　6.0 直径　10.0 器高　－	底部外面は不明 その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y4/1 灰色　N6/	良	1/6		448
919	装飾付壺 (子壺の蓋)	3区灰原上層 3区灰原下層	直径　7.5 つまみ径　－ 器高　－	回転ナデ	右	0.5	灰色　7.5Y4/1 灰色　N6/	良	1/6		448
920	装飾付壺 (子壺の蓋)	水田造成土	直径　－ 器高　－	回転ナデ	右	0.1	灰白色　N7/ 灰白色　N7/	良	1/4		63
921	蓋	トレンチ1	直径　－ 器高　－	つまみ部は回転ナデ その他は不明	右	2	灰色　5Y5/1 －	良	1		170
922	蓋(壺)	1区灰原	直径　10.4 返径　5.2 器高　－	回転ナデ	－	1	灰色　5Y6/1 黄灰色　2.5Y6/1	良	1/4		593
923	蓋(壺)	トレンチ1	直径　7.6 器高　－	回転ナデ	－	1	灰色　10Y4/1 灰色　10Y5/1	良	1/8		590
924	装飾付須恵器 (小像)	4区灰原直上層	－	指圧痕	－	0.5	灰白色　5Y7/2	良	－		550
925	脚台 (装飾須恵器?)	2区灰原直上層 2区灰原 4区灰原下層 灰原東法面	脚径　20.5 器高　－	回転ナデ	右	1	灰色　N6/ 明青灰色　5B7/1	良	2/3		505
926	特殊扁壺	4区灰原下層	直径　16.0 器高　－ 口径　9.5×8.8 柄径　3.0	体部外面はカキメ 底部外面はカキメ後ナデ 体部内面は回転ナデ 閉塞部内面に指圧痕 柄部はヘラケズリ 閉塞部は底 空気抜孔残	右	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	1		599
927	柄？	1区灰原直上層	径　2.8	指圧痕	－	0.5～1	灰白色　5Y7/1	良	－		549
928	鍬形土製品	2区灰原	長　－ 幅　－ 厚　1.6	指圧痕	－	0.5	灰白色　2.5Y8/1	不良	－		503
929	鍬形土製品	4区灰原下層	長　9.4 幅　－ 厚　1.5	指圧痕	－	0.5	灰色　7.5Y6/1	良	1/2		242

須恵器観察表

番号	器　種	出土位置・層位	法量(cm)	技法上の特徴	轆轤	胎　土	色　調	焼成	残存	備　考	整理番号
930	専用焼台	4区灰原下層	直径　12.5 器高　3.7	底部外面はヘラ切り後ナデ？ その他は回転ナデ	右	0.1～0.5	灰白色　5Y7/1 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/2		177
931	専用焼台	トレンチ2	直径　12.1 器高　4.3	底部外面はナデ 穿孔部は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1～1.5	灰白色　N8/ 灰白色　N8/	良	1/8		605
932	専用焼台	4区灰原直上層	直径　12.6 器高　4.3	底部外面はナデ その他は回転ナデ	右	1～5	灰白色　10YR7/1 にぶい黄橙色10YR7/2	良	1/4		89
933	専用焼台	4区灰原上層 灰原東法面	直径　13.4 器高　4.05	回転ナデ	右	1	暗青灰色　5PB4/1 青灰色　5B5/1	良	1/4		119
934	専用焼台	4区灰原上層	直径　12.6 器高　3.1	回転ナデ	右	0.1	青黒色　5PB2/1 灰色　N5/	良	3/4		118
935	専用焼台	3区耕作土	直径　13.0 器高　3.2	回転ナデ	右	0.1	灰白色　N5/ 灰白色　N5/	良	1/6		604
936	専用焼台？	トレンチ2	直径　10.6 器高　5.2 孔径　－	回転ナデ	右	0.5～1	灰黄色　2.5Y7/2 灰黄色　2.5Y7/2	良	1/8		553
937	専用焼台	トレンチ1 4区灰原上層 灰原東法面	直径　11.1 器高　2.9	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	灰色　5Y5/1 にぶい黄橙色10YR7/2	良	1/3		120
938	専用焼台	4区ｉ-ｊアゼ	直径　14.0 器高　3.2	底部外面はヘラ切り後ナデ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色　N6/ 灰色　N6/	良	1/4	底部に複数の穿孔有	697
939	焼台	3区ｉ-ｊアゼ	口径　－ 脚径　－ 器高　－	坏部底部内面に仕上げナデ 脚部は不明 その他は回転ナデ	右	0.5～1	灰白色　2.5Y8/1 灰白色　2.5Y6/1	良	－	高坏転用 脚部を削除	729
940	焼台	4区灰原下層	口径　－ 直径　－ 器高　－	口縁部内面に粗いカキメ 口縁部外面は回転ナデ 体部は不明	－	1～2	オリーブ黒色 7.5Y3/1 灰色　N6/	良	小片	甕？転用	944
941	焼台	4区灰原上層	長さ　5.1 幅　2.2 厚さ　1.5	外面にナデ 内面に同心円タタキ 金属工具による切断痕	－	0.5	灰黄色　2.5Y6/2 灰黄色　2.5Y6/2	良	小片	切り落とし陶片転用	872
942	焼台？	4区灰原下層	口径　－ 直径　－ 器高　－	外面は平行タタキ後カキメ 内面は同心円タタキ	－	0.5～1	灰白色　5Y7/1 灰白色　5Y7/1	良	小片	甕転用 金属工具痕を残す 切断跡有り	951
943	焼台	4区灰原上層				0.5	灰黄色　2.5Y7/2 浅黄色　2.5Y7/3	良		高坏転用	117
944	焼台	4区灰原下層								坏身転用	229
945	焼台	4区灰原下層			左	0.5	灰色　N6/ 灰色　N6/	良		坏身転用	231

凡例

「出土位置」……窯跡南土器ダマリ‥‥65～68層
　　灰原‥‥‥‥‥‥‥‥74・79～82層(調査中は74層が後世に移動されて形成された層であるとの認識が無かったため、灰原全体を上下に分けて遺物を取り上げた。このため、表の上層・下層は第13図の土層とは全く対応せず、各区における相対的な上下を示すだけである)
　　造成土‥‥‥‥‥‥‥71～73・76～78層
「轆　轤」……ロクロの回転方向を示す。
「胎　土」……胎土に含まれる石英・長石などのおおよその大きさを示す。
「色　調」……『標準土色帳1995年後期版』を使用した。上段が外面、下段が内面の色調を示す。
「残　存」……径を推定できる部分についての残存率を示す。
「備　考」……年報4－38(No.56)‥「倉敷埋蔵文化財センター年報４」に掲載された遺物番号を示す。
　　()内は確認調査遺物整理番号



横瓶の部位名称

附編　自然科学的分析１

寒田窯跡群４号出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　純

1.　はじめに

この分析では蛍光Ｘ線分析法を用いた胎土分析法により、寒田窯跡群4号から出土した坏類の分析を実施した。この蛍光Ｘ線分析法は、胎土中の成分(元素)量を測定し、胎土の違いを調べる方法である。今回分析した4号窯出土須恵器のうち、形態分類が明確な坏蓋と身を選定し、形態的に5つに分類[1]されている坏が、胎土分析ではどのように分類が可能か検討した。また、この窯の灰原からは陶棺の破片も出土しており、器類(坏・甕)と陶棺の胎土もあわせて比較した。そしてほぼ同じ時期に操業していた県東部の牛窓町寒風窯跡群、県中央部の山手村末の奥窯跡、道金山窯跡の各窯跡出土須恵器と胎土の比較を行い、各生産地の胎土特徴について調べた結果を報告する。

2.　分析結果

蛍光Ｘ線分析法で測定した元素は、Si(珪素)、Ti(ﾁﾀﾝ)、Al(ｱﾙﾐﾆｳﾑ)、Fe(鉄)、Mn(ﾏﾝｶﾞﾝ)、Mg(ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ)、Ca(ｶﾙｼｳﾑ)、Na(ﾅﾄﾘｳﾑ)、K(ｶﾘｳﾑ)、P(ﾘﾝ)、Rb(ﾙﾋﾞｼﾞｳﾑ)、Sr(ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ)、Zr(ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ)の１３元素である。このうち今回の分析で顕著な差がみられたのは、Si、Ti、Al、Caの4元素であった。そこで、これらの元素を用いて、XY散布図を作成し違いを検討した。

〈坏類の分析〉

4号窯出土の5類に分類されている坏(蓋・身)が、胎土分析でどのように分類されるかでは、第1図 Si-Al、第2図 Ti-Ca、第3図 Si-Ti の各散布図で検討した。その結果、5類に分類された坏は、いずれの散布図でも胎土に違いはみられず、ほぼ一つにまとまった。また、坏以外にも専用の焼台と窯壁を分析した。すると、第1・3図では専用焼台の半分と窯壁の試料がそれぞれ別のグループを作り、胎土が異なっていることがわかった。

〈陶棺との比較〉

陶棺と器類(坏・甕)の胎土の比較では、第１・２・３図の各散布図ともに胎土に違いはみられなかった。また陶棺の表面には、断面写真１のように明赤褐色の化粧土(厚さ２～３㎜)が観察された。そこで、この化粧土と素地土の胎土が異なるかどうか調べたところ、表1の分析値のようにSi、Al、Fe、Naなどの成分に違いがあることがわかった。特にSi、Feの含有量が他の陶棺より多く検出された。

〈各窯跡との比較〉

県南部の寒風窯跡群および末の奥窯跡・道金山窯跡との比較を行った。その結果、第４図のSi-Ti散布図より、各窯ともほぼ識別が可能であった。

寒風窯跡群と末の奥窯跡・道金山窯跡はSi量が約69％を境界として、それより多いところに寒風が、また少ないところに末の奥・道金山の須恵器が分布した。また、寒田窯跡群４号の須恵器は、Si量が寒風とほぼ同じ含有量であるが、Ti量が寒風と異なり約0.7％付近を境界とし、それより多いところに寒田窯跡群４号が、また少ないところに寒風の須恵器が分布した。

3. まとめ

寒田窯跡群4号出土須恵器の蛍光X線分析法による胎土分析を実施し、以下のようなことが明らかになった。

(1)　5類に分類された坏が、胎土分析でどのようになるか検討したところ、胎土的には明確な差があらわれなかった。また、専用焼台と窯壁の資料も同様に分析し、坏類と比較したところ、専用焼台の約半分と窯壁の試料は、坏類と胎土が異なり識別が可能であった。つまり、焼台の半分近くが、坏類よりSi(珪素)成分が少なく、Ti(ﾁﾀﾝ)、Ca(ｶﾙｼｳﾑ)成分が多いことがわかった。この識別できた胎土の異なる焼台は、ほぼ一つにまとまることから、同一の胎土と考えられる(2)。また、この焼台の胎土を肉眼による表面観察を行ったところ、色調では暗青灰色と灰白色の2つに分かれ、表面の砂粒観察でも灰白色の焼台には石英などの鉱物が多く観察された。これは灰白色を呈する焼台に含まれる石英の鉱物含有量とSi成分量が多く含まれていることが一致することから、この胎土に含まれている石英などの鉱物が胎土差としてあらわれたと推測される。

(2)　陶棺の胎土分析では、陶棺が坏・甕類と胎土的に差が認められず、ほぼ同じ粘土を使用していると考えられる。また、陶棺の表面に塗られた明赤褐色の化粧土は、その内側の素地土と比較したところSi(珪素)、Fe(鉄)の成分が素地土に比べ多く含まれていた。これは、陶棺表面を赤色系の色にすることが目的で異なった粘土を使用したことが推定される。

(3)　寒田、末の奥・道金山、寒風の各窯跡群の胎土比較を行ったところ、各窯跡群とも識別が可能であった。この胎土分析値に違いがあらわれた原因として、窯跡が立地している地質基盤層が関係していることが想定される。そこで各窯跡の基盤層をみると、寒田と寒風が流紋岩地帯に、末の奥・道金山が花崗岩地帯に立地していることがわかった。この基盤層と、各窯跡出土須恵器の胎土分析値を比較すると、流紋岩を基盤とする寒田、寒風の須恵器は、Si(珪素)量が末の奥・道金山が立地する花崗岩地帯と比べ多いことがわかる。しかし、同じ流紋岩地帯の寒田と寒風の間でも、Ti(ﾁﾀﾝ)量が異なっており、寒田にTi量が多く含まれていた。これは窯跡が立地する地質基盤が同じであっても、須恵器に使用された粘土が、一致するとは限らないことがわかった。

では、なぜTi量に差があらわれたのか。現段階で考えられることとして、寒田窯跡群が立地する地質基盤層は、流紋岩および花崗岩などが複雑に入り組んでいる地帯で、このことが胎土差としてあらわれたのかもしれない。今後の検討課題としたい。

註

(1)　資料提供者により分類されたものを分析した。

(2)　編者註　第５章で２類とした専用焼台がこれにあたる。

参考文献

・「日本地質図大系」中国・四国地方　朝倉書店

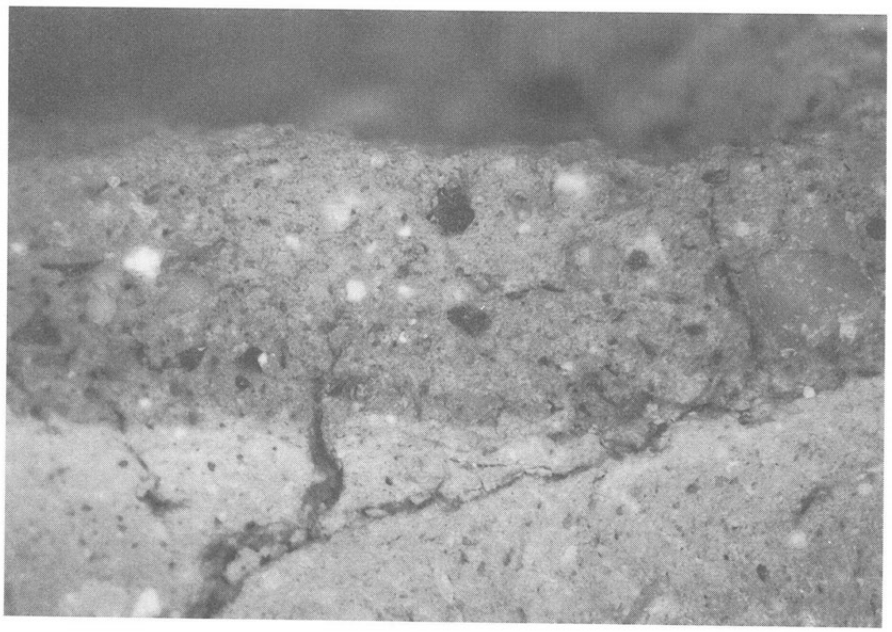
・都城秋穂・久城育夫「岩石学Ⅰ」偏光顕微鏡と造岩鉱物　共立出版

表１　寒田窯跡群４号出土須恵器の胎土分析一覧表(％)　(ただし、Rb・Sr・Zrはppm.)

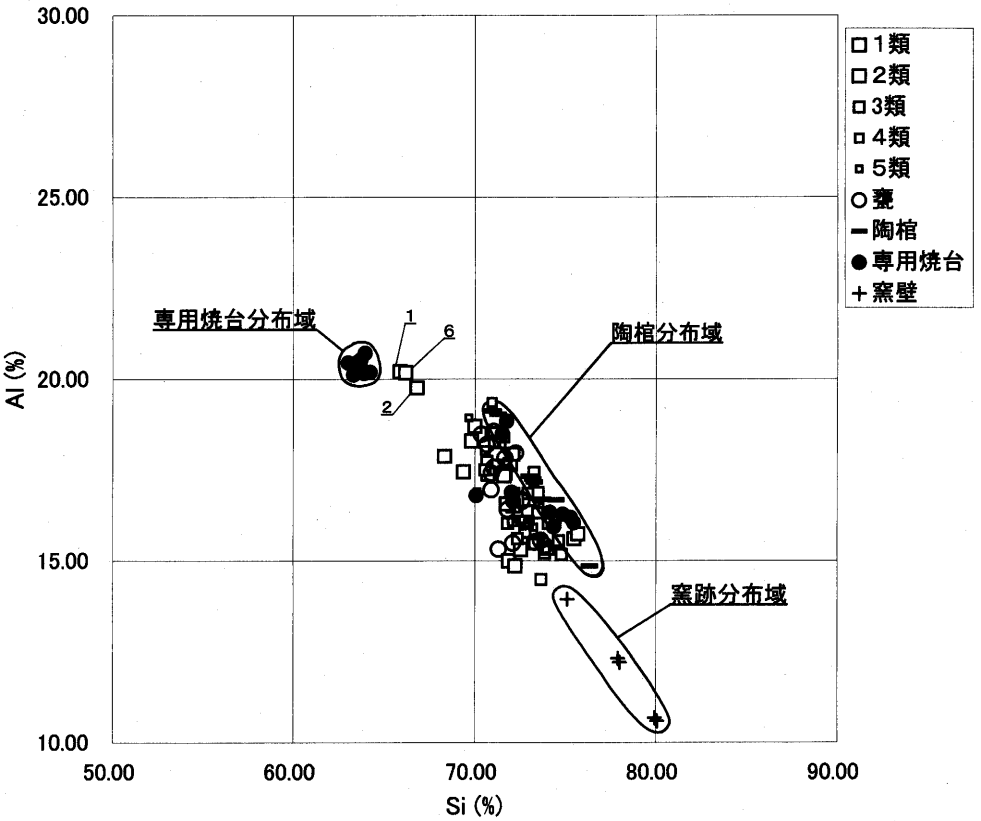
番号(掲載番号)	器種	分類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1(65)	坏蓋	1類	66.83	0.77	19.75	5.55	0.05	1.94	0.46	2.78	1.73	0.02	194	72	231
2(69)	坏蓋	1類	65.90	0.87	20.20	6.03	0.05	1.93	0.42	2.88	1.57	0.00	200	72	247
3(71)	坏蓋	1類	71.95	0.82	17.64	2.72	0.02	1.74	0.45	2.79	1.72	0.00	149	74	267
4(63)	坏蓋	1類	71.16	0.77	17.59	3.84	0.03	1.75	0.42	2.43	1.84	0.00	162	82	233
5(66)	坏蓋	1類	71.87	0.82	14.99	5.38	0.05	1.68	0.41	2.72	1.85	0.00	199	73	272
6(177)	坏身	1類	66.20	0.89	20.17	6.21	0.07	1.89	0.42	2.43	1.59	0.00	180	65	255
7(191)	坏身	1類	70.74	0.90	17.38	4.58	0.03	1.37	0.32	2.36	1.88	0.00	144	74	280
8(182)	坏身	1類	73.43	0.88	16.40	3.33	0.03	1.58	0.36	1.95	1.87	0.00	170	72	287
9(99)	坏蓋	2類	72.12	0.82	16.51	4.06	0.03	1.69	0.52	2.32	1.79	0.00	168	107	273
10(97)	坏蓋	2類	69.38	0.82	17.44	5.29	0.06	1.77	0.44	2.84	1.75	0.01	164	85	251
11(102)	坏蓋	2類	73.02	0.82	16.50	2.87	0.03	1.73	0.47	2.61	1.77	0.03	155	92	261
12(105)	坏蓋	2類	71.67	0.81	17.41	2.97	0.03	1.75	0.38	2.85	1.91	0.00	181	81	268
13(82)	坏蓋	2類	69.82	0.74	18.29	2.28	0.02	2.15	0.50	4.39	1.64	0.04	160	105	220
14(101)	坏蓋	2類	71.61	0.81	17.33	3.62	0.03	1.75	0.33	2.58	1.75	0.04	173	74	241
15(90)	坏蓋	2類	72.09	0.82	17.92	2.93	0.02	1.74	0.32	2.08	1.90	0.05	182	72	254
16(75)	坏蓋	2類	74.18	0.82	16.15	3.06	0.02	1.67	0.26	1.94	1.67	0.09	153	57	290
17(79)	坏蓋	2類	75.49	0.78	15.60	2.15	0.03	1.57	0.44	1.89	1.83	0.04	179	93	262
18(205)	坏身	2類	73.21	0.81	16.45	2.51	0.03	1.66	0.35	2.86	1.95	0.01	175	76	288
19(233)	坏身	2類	73.01	0.81	16.55	2.98	0.03	1.77	0.48	2.32	1.86	0.03	169	106	272
20(261)	坏身	2類	68.34	0.68	17.87	7.06	0.06	1.72	0.34	2.18	1.60	0.00	167	56	228
21(204)	坏身	2類	75.71	0.78	15.73	2.22	0.02	1.51	0.45	1.44	1.94	0.06	169	112	287
22(203)	坏身	2類	72.22	0.79	14.85	5.48	0.05	1.63	0.36	2.39	1.93	0.04	163	60	291
23(178)	坏身	2類	71.33	0.84	18.28	2.94	0.02	1.75	0.32	2.48	1.86	0.03	166	66	262
24(230)	坏身	2類	72.53	0.86	15.30	5.43	0.05	1.52	0.47	1.63	1.99	0.06	174	99	273
25(231)	坏身	2類	71.75	0.84	16.56	4.18	0.04	1.63	0.41	2.34	2.05	0.05	209	90	268
26(199)	坏身	2類	74.12	0.79	15.34	3.95	0.03	1.48	0.59	1.43	2.05	0.00	200	85	286
27(211)	坏身	2類	70.97	0.85	18.49	2.82	0.02	1.74	0.33	2.82	1.80	0.01	172	60	255
28(189)	坏身	2類	70.01	0.78	18.70	3.85	0.03	1.71	0.27	2.72	1.75	0.01	175	58	257
29(137)	坏蓋	3類	72.77	0.85	15.78	4.21	0.03	1.60	0.42	2.04	2.05	0.08	197	68	293
30(142)	坏蓋	3類	73.53	0.80	15.54	3.48	0.03	1.68	0.60	2.22	1.93	0.04	187	116	273
31(143)	坏蓋	3類	73.86	0.85	15.20	3.29	0.03	1.66	0.37	2.60	1.98	0.01	175	65	284
32(144)	坏蓋	3類	73.31	0.86	15.46	3.69	0.03	1.59	0.31	2.61	1.93	0.06	171	58	303
33(139)	坏蓋	3類	72.93	0.86	16.85	2.87	0.02	1.68	0.33	2.42	1.82	0.07	159	52	266
34(126)	坏蓋	3類	72.15	0.78	16.84	2.76	0.02	1.76	0.56	3.21	1.72	0.05	140	105	250
35(283)	坏身	3類	73.47	0.92	16.31	2.93	0.02	1.66	0.49	2.07	1.94	0.04	172	84	280
36(252)	坏身	3類	74.63	0.84	15.54	2.64	0.02	1.61	0.42	2.11	1.95	0.06	190	78	298
37(294)	坏身	3類	73.67	0.83	14.48	4.35	0.04	1.62	0.39	2.41	2.02	0.01	173	75	284
38(292)	坏身	3類	72.35	0.78	15.60	3.58	0.04	1.81	0.35	3.34	1.90	0.04	192	75	285
39(293)	坏身	3類	73.51	0.74	16.87	2.37	0.03	1.71	0.59	2.12	1.81	0.05	160	87	236
40(297)	坏身	3類	74.79	0.86	15.17	2.87	0.03	1.54	0.49	2.08	1.94	0.05	174	94	304
41(272)	坏身	3類	71.81	0.73	16.02	3.42	0.10	1.70	1.69	2.55	1.73	0.06	149	169	261
42(266)	坏身	3類	74.45	0.86	16.18	2.91	0.02	1.54	0.36	1.56	1.84	0.06	174	74	298
43(263)	坏身	3類	74.07	0.81	16.02	2.91	0.03	1.62	0.44	2.11	1.76	0.06	149	82	298
44(286)	坏身	3類	72.91	0.76	16.36	3.27	0.02	1.67	0.44	2.59	1.74	0.05	169	83	288
45(291)	坏身	3類	70.67	0.83	17.72	3.84	0.02	1.66	0.32	2.73	1.89	0.07	205	69	250

番号(掲載番号)	器種	分類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
46(274)	坏身	3類	74.05	0.91	15.31	3.61	0.03	1.63	0.32	1.95	1.96	0.06	177	79	289
47(251)	坏身	3類	73.27	0.83	17.42	3.06	0.02	1.64	0.36	1.52	1.69	0.02	150	67	288
48(290)	坏身	3類	70.56	0.80	17.49	3.84	0.04	1.75	0.53	2.79	1.96	0.05	204	81	239
49(24)	坏身	3類	71.09	0.73	18.28	2.63	0.02	1.74	0.56	2.87	1.83	0.06	174	105	226
50(2)	坏蓋	4類	72.08	0.96	16.07	4.89	0.05	1.66	0.30	2.39	1.47	0.01	91	63	419
51(3)	坏蓋	4類	73.91	0.81	15.28	4.27	0.04	1.53	0.34	1.91	1.62	0.06	144	63	384
52(152)	坏蓋	4類	71.65	0.88	18.38	3.38	0.03	1.67	0.30	1.95	1.60	0.02	131	64	304
53(148)	坏蓋	4類	73.28	0.82	17.17	2.77	0.03	1.60	0.53	1.71	1.83	0.09	177	94	265
54(138)	坏蓋	4類	73.21	0.85	17.23	2.96	0.03	1.65	0.33	1.82	1.75	0.00	156	76	263
55(159)	坏蓋	4類	70.95	0.85	19.35	2.86	0.03	1.74	0.35	2.02	1.69	0.01	159	80	247
56(21)	坏身	4類	72.98	0.83	16.02	4.61	0.04	1.63	0.31	1.81	1.57	0.05	138	62	387
57(23)	坏身	4類	70.58	0.80	18.03	3.90	0.04	1.80	0.35	2.49	1.76	0.06	181	65	325
58(7)	坏蓋	5類	73.07	0.89	16.13	4.10	0.05	1.66	0.29	2.31	1.32	0.05	128	59	402
59(16)	坏蓋	5類	73.60	0.84	15.67	4.23	0.05	1.54	0.36	1.80	1.63	0.08	150	67	349
60(17)	坏蓋	5類	73.67	0.73	15.61	3.84	0.03	1.55	0.37	1.99	1.97	0.08	199	64	290
61(11)	坏蓋	5類	73.27	0.74	15.92	3.83	0.03	1.61	0.28	2.21	1.89	0.06	172	65	282
62(13)	坏蓋	5類	69.67	0.79	18.93	3.92	0.04	1.78	0.30	2.72	1.62	0.04	181	55	313
63(28)	坏身	5類	72.82	0.80	15.96	3.81	0.03	1.71	0.30	2.43	1.90	0.07	153	65	279
64(27)	坏身	5類	72.64	0.79	15.95	4.39	0.03	1.67	0.33	2.43	1.49	0.08	146	64	383
65(25)	坏身	5類	70.14	0.77	16.89	3.59	0.03	2.14	0.22	4.59	1.48	0.01	126	55	268
66(32)	坏身	5類	72.31	0.79	16.14	3.58	0.04	1.76	0.58	2.90	1.66	0.10	148	91	305
67	甕		71.06	0.81	17.56	4.36	0.04	1.47	0.33	2.58	1.62	0.01	152	66	354
68	甕		71.66	0.84	17.82	4.39	0.04	1.27	0.34	1.84	1.61	0.04	175	86	374
69	甕		70.67	0.84	18.20	3.87	0.03	1.35	0.29	2.87	1.73	0.01	175	67	266
70	甕		72.25	0.89	17.96	3.02	0.02	1.29	0.36	2.28	1.74	0.05	171	74	278
71	甕		70.90	0.76	16.95	4.07	0.04	1.26	0.87	2.81	2.01	0.06	215	161	279
72	甕		71.04	0.84	18.56	3.14	0.03	1.45	0.30	2.57	1.86	0.04	194	69	265
73	甕		71.80	0.86	16.40	3.49	0.05	1.41	1.10	2.61	2.01	0.08	181	195	286
74	甕		72.62	0.83	16.63	3.20	0.03	1.37	0.53	2.49	2.05	0.07	203	98	298
75	甕		70.36	0.79	18.48	4.27	0.05	1.29	0.86	1.77	1.86	0.08	151	126	222
76	甕		73.30	0.76	15.51	4.13	0.04	1.34	0.45	2.23	1.96	0.07	195	92	317
77	甕		73.88	0.84	15.41	3.38	0.03	1.38	0.49	2.35	1.96	0.09	177	80	315
78	甕		73.64	0.73	15.56	3.17	0.03	1.32	0.46	2.65	2.14	0.10	198	76	270
79	甕		70.92	0.81	17.40	3.65	0.03	1.39	0.80	2.92	1.88	0.03	200	147	282
80	甕		71.30	0.78	15.32	5.56	0.04	1.45	0.67	2.81	1.82	0.06	194	131	291
81	甕		72.10	0.73	15.48	4.95	0.04	1.36	0.71	2.43	1.87	0.08	205	143	273
82	甕		72.62	0.87	16.67	3.07	0.02	1.36	0.35	2.66	2.08	0.10	215	73	276
83	陶棺		74.48	0.85	16.67	2.28	0.02	1.33	0.40	1.92	1.79	0.09	167	68	293
84	陶棺		73.75	0.85	16.69	2.41	0.02	1.25	0.54	2.61	1.66	0.10	145	76	258
85	陶棺		73.29	0.88	17.17	2.49	0.02	1.29	0.39	2.69	1.55	0.09	138	74	291
86	陶棺		72.99	0.85	17.32	2.44	0.02	1.31	0.51	2.68	1.66	0.08	148	81	301
87	陶棺		73.20	0.89	17.24	2.66	0.03	1.37	0.45	2.34	1.53	0.10	128	75	306
88	陶棺		71.27	0.96	19.03	2.87	0.04	1.37	0.37	2.49	1.42	0.03	141	77	317
89	陶棺		71.00	1.01	19.12	2.59	0.03	1.43	0.32	2.92	1.38	0.08	125	61	308
90	陶棺		76.34	0.86	14.85	4.05	0.05	1.05	0.43	0.65	1.46	0.10	106	98	370
91	専用焼台		63.50	1.02	20.45	7.44	0.07	1.99	0.77	2.72	1.80	0.03	223	111	225
92	専用焼台		63.73	0.95	20.53	7.36	0.08	1.96	0.79	2.56	1.81	0.05	215	113	244
93	専用焼台		75.47	0.71	16.04	2.25	0.02	1.55	0.34	1.61	1.77	0.10	166	63	263
94	専用焼台		71.52	0.87	18.50	2.83	0.02	1.73	0.39	2.00	1.86	0.07	205	95	266
95	専用焼台		74.86	0.79	16.28	2.24	0.01	1.59	0.31	1.99	1.69	0.08	154	76	264
96	専用焼台		63.91	0.99	20.16	7.47	0.08	2.01	0.77	2.55	1.82	0.04	198	118	227
97	専用焼台		63.59	0.97	20.44	7.47	0.17	1.91	0.82	2.52	1.83	0.03	198	120	226
98	専用焼台		63.41	0.92	20.33	7.38	0.06	1.98	0.77	3.05	1.78	0.09	207	112	220
99	専用焼台		72.03	0.79	16.88	3.79	0.04	1.72	0.29	2.46	1.77	0.05	182	57	278
100	専用焼台		63.96	0.93	20.71	7.21	0.07	1.74	0.79	1.93	1.75	0.67	197	112	206
101	専用焼台		74.35	0.79	15.93	2.46	0.02	1.53	0.51	2.25	1.99	0.04	186	76	275
102	専用焼台		70.08	0.78	16.79	5.45	0.05	1.73	0.34	2.65	1.87	0.07	180	73	242
103	専用焼台		64.25	0.95	20.19	7.22	0.08	1.92	0.75	2.43	1.85	0.02	197	116	234
104	専用焼台		63.54	0.91	20.20	7.21	0.07	1.96	0.78	3.33	1.80	0.01	205	110	222
105	専用焼台		63.03	0.96	20.45	7.29	0.07	2.00	0.72	3.47	1.78	0.05	200	111	230

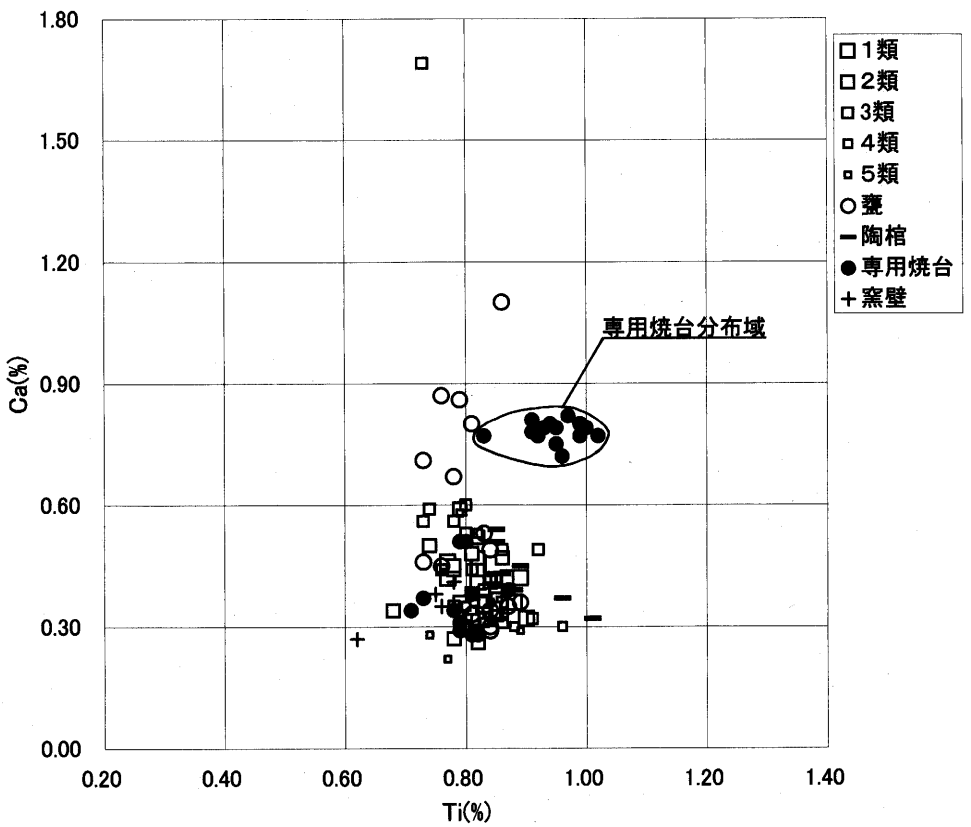
番号(掲載番号)	器種	分類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
105	専用焼台		63.03	0.96	20.45	7.29	0.07	2.00	0.72	3.47	1.78	0.05	200	111	230
106	専用焼台		63.70	1.00	20.34	7.33	0.08	1.94	0.79	2.78	1.76	0.05	190	114	232
107	専用焼台		63.50	0.99	20.40	7.41	0.09	1.93	0.80	2.90	1.81	0.03	202	122	231
108	専用焼台		63.65	0.94	20.21	7.21	0.07	1.92	0.80	3.20	1.75	0.04	185	106	214
109	専用焼台		63.53	0.93	20.40	7.19	0.07	2.06	0.79	3.06	1.79	0.03	204	96	236
110	専用焼台		74.38	0.80	15.94	2.46	0.03	1.57	0.51	2.09	1.95	0.07	171	86	275
111	専用焼台		63.32	0.83	20.12	6.94	0.08	1.96	0.77	3.83	1.79	0.07	203	116	227
112	専用焼台		75.29	0.82	16.19	2.28	0.03	1.63	0.28	1.56	1.67	0.10	157	67	251
113	専用焼台		63.70	0.91	20.27	7.29	0.08	1.98	0.81	2.89	1.75	0.06	193	116	221
114	専用焼台		74.15	0.81	16.33	2.23	0.02	1.73	0.28	2.54	1.68	0.10	129	63	251
115	専用焼台		72.09	0.73	16.63	3.63	0.03	1.65	0.37	2.74	1.89	0.06	179	68	254
116	専用焼台		71.75	0.81	18.84	2.74	0.03	1.65	0.38	1.79	1.76	0.09	189	97	263
117	窯壁		75.11	0.62	13.94	3.94	0.05	1.60	0.27	2.10	2.10	0.07	159	46	319
118	窯壁		79.94	0.75	10.68	3.07	0.06	1.43	0.38	1.60	1.77	0.13	132	68	422
119	窯壁		80.07	0.76	10.59	3.06	0.06	1.31	0.35	1.91	1.61	0.14	136	52	433
120	窯壁		78.01	0.78	12.20	3.30	0.04	1.58	0.41	1.51	1.87	0.08	143	62	408
121	窯壁		77.91	0.73	12.31	3.60	0.04	1.45	0.37	1.54	1.75	0.11	158	71	428



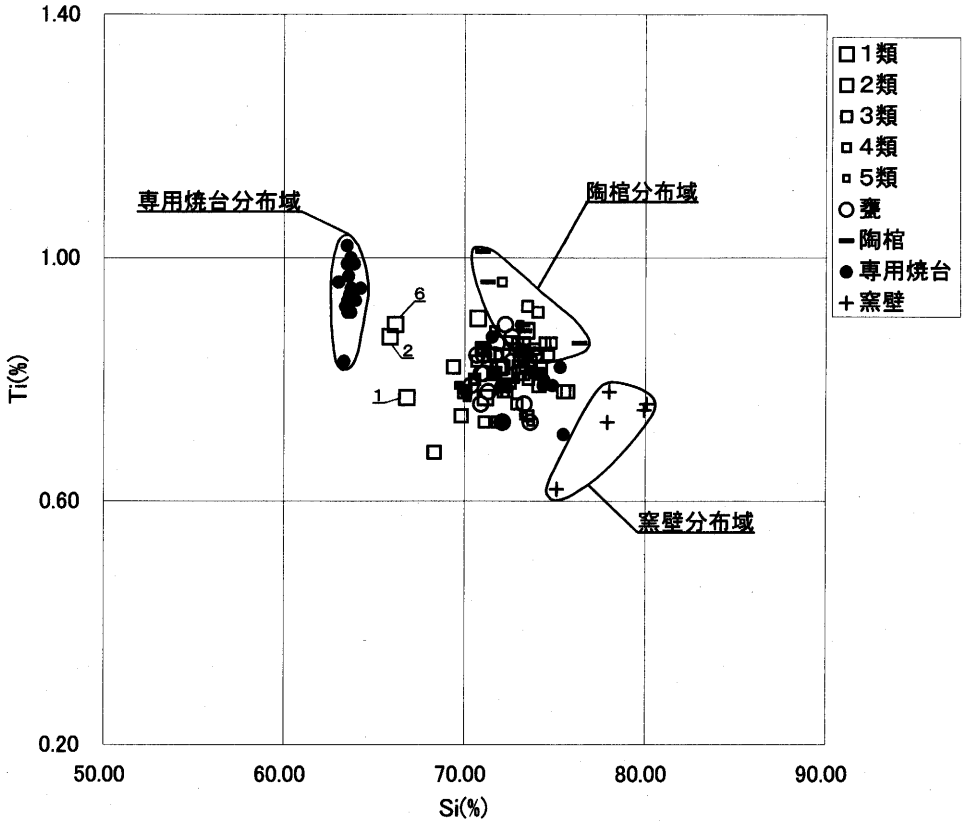
陶棺(身)断面写真１(× 15倍)



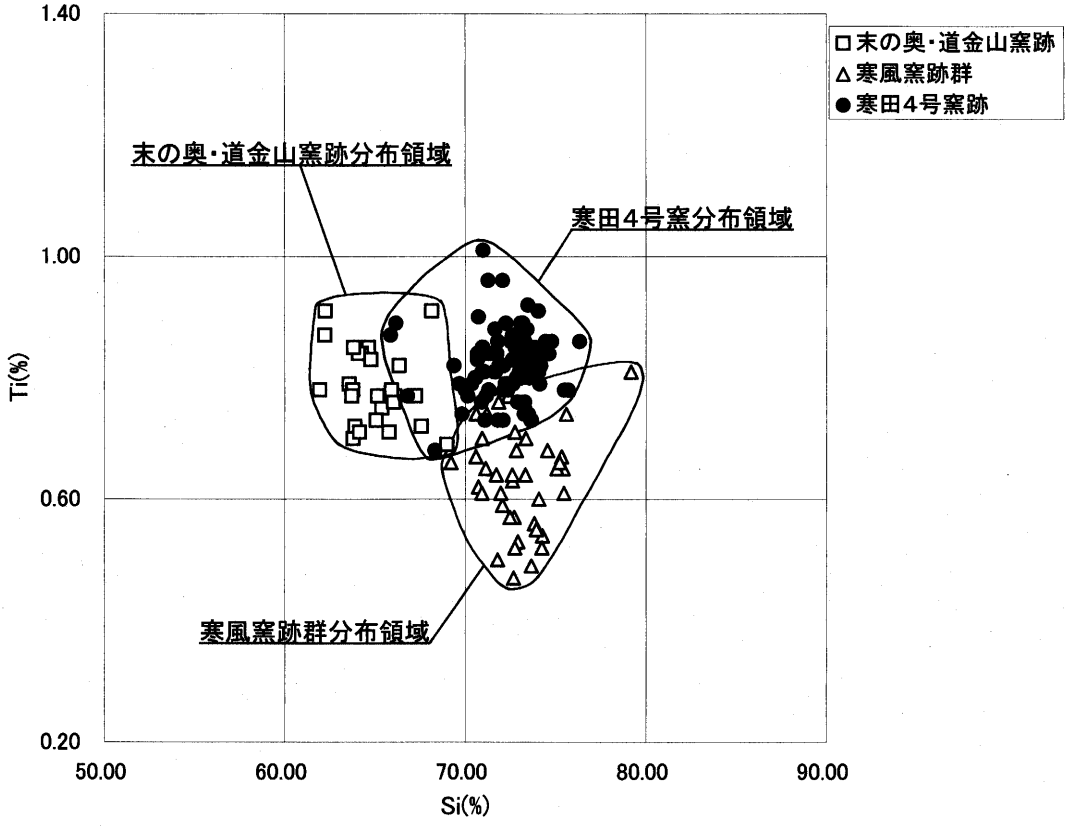
第１図　寒田窯跡群４号　分類による胎土の比較(Si-Al散布図)



第２図　寒田窯跡群４号　分類による胎土の比較(Ti-Ca散布図)



第３図　各窯跡の胎土比較(Si-Ti散布図)



第４図　各窯跡の胎土比較(Si-Ti散布図)

附編　自然科学的分析2

寒田窯跡群4号から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

寒田窯跡群は、古墳時代後期から奈良・平安時代の玉島陶古窯跡群の中で東方に所在する一群である。本窯跡群では須恵器窯4基と瓦窯3基の合計7基が確認されている。このうち、4号窯跡は、残存長9.6m、最大幅1.7mで、補修の痕跡などから最低でも7回以上の操業が行われたことが推定されている。窯跡内からは、須恵器(蓋坏、甕、短頸壺等)が多数出土しており、その特徴から7世紀第2四半期にかかる時期のものと考えられている。窯跡内の燃焼部にあたる45層と床面形成土に相当する52層からは、それぞれ炭化材が出土している。燃焼部の炭化材は燃料材、床面形成土の炭化材は操業前に床面を乾燥させるのに用いた木炭にそれぞれ由来する可能性がある。この他、36層からも炭化材が出土しているが用途の詳細は不明である。

本報告では、各層から出土した炭化材の樹種同定を行い、用途別の木材利用について検討する。

1．試料

試料は、36層、45層、52層から出土した炭化材各1点、合計3点である。

2．方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、2種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

遺構名	層　位	樹　　種
4号窯跡	36層	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	45層(燃焼部)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	52層(床面形成土)	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表1　樹種同定結果

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*)　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激または緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*)　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

４．考察

炭化材は、燃焼部(45層)、52層(床面形成土)、床面より上位の層(36層)から出土している。45層の炭化材は、今回の試料の他にも多数出土しており、焼成時の燃料材に由来する可能性がある。床面形成土の炭化材は、操業前に床面を乾燥させるために利用した木炭等に由来する可能性がある。36層の炭化材については、用途などの詳細は不明である。

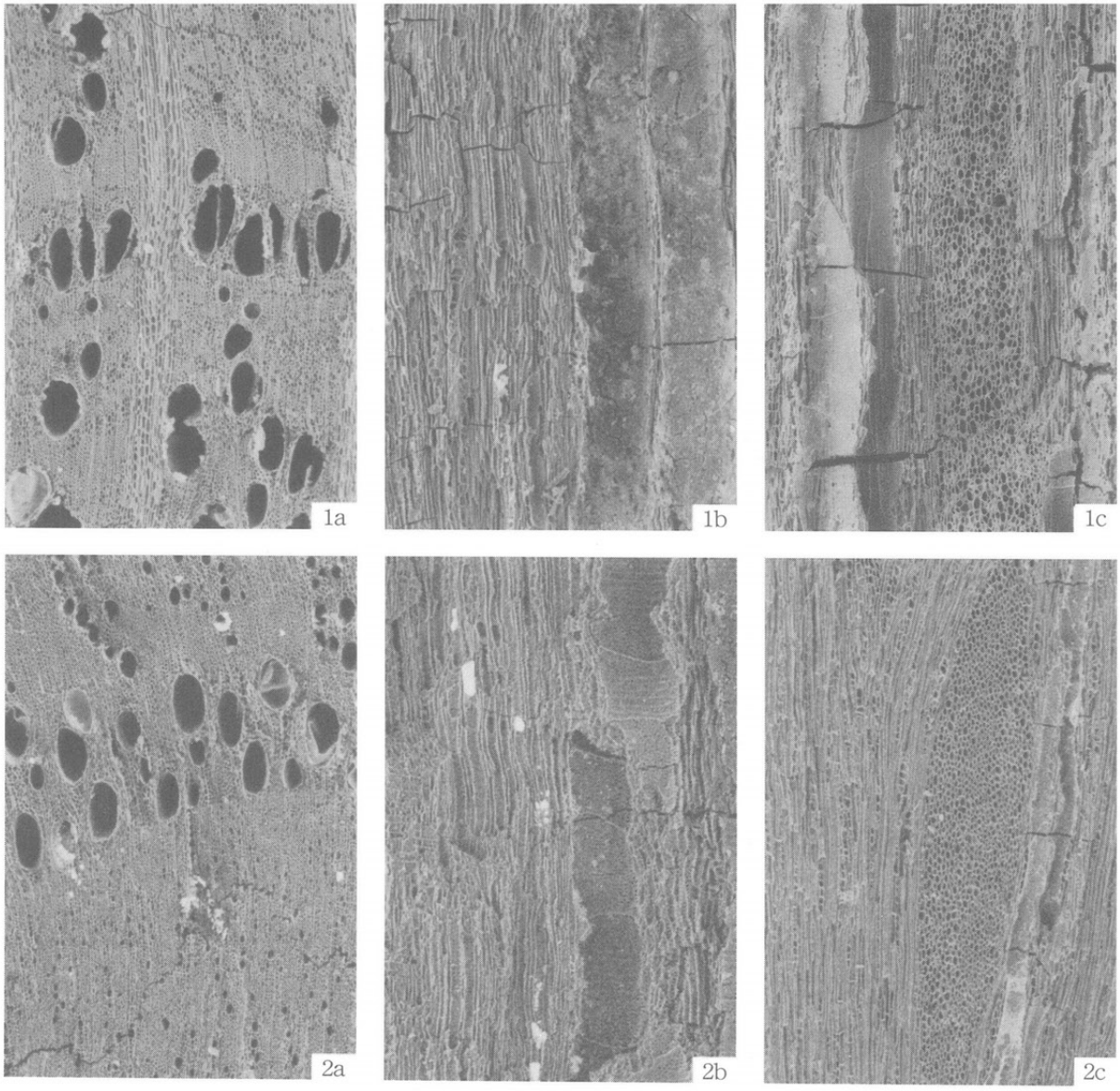
これらの炭化材の樹種は、36層の炭化材がクヌギ節、他の２点がコナラ節であった。いずれも同属の近い種類であり、共に二次林の主構成種でもある。また、材質も重硬でよく似ており、薪炭材としては国産材の中でも最も重要な種類とされる(平井, 1979)。これらのことから、層位(利用箇所)による種類構成の違いは認められない。

二次林は、人里周辺等には普通に見られることから、４号窯跡の周辺にもクヌギ節やコナラ節で構成される二次林が見られた可能性がある。入手が容易で、薪炭材としても優れていることが、クヌギ節やコナラ節が利用された背景に考えられる。

クヌギ節やコナラ節の木材は、木炭にするといわゆる硬炭となる。硬炭は、火付きは悪いが、熱量が高く持続性に優れており、還元炎を得るには適している。須恵器の焼成に還元炎が必用であることを考慮すると、少なくとも燃焼部で使用された燃料材には、焼成された木炭が利用された可能性がある。

岡山県内では、須恵器窯から出土した炭化材の樹種を明らかにした例が知られていない。西日本では、大阪府や兵庫県で燃料材と考えられる炭化材の樹種同定が行われた例がある。このうち、大阪府の陶邑では、５世紀には常緑のアカガシ亜属を主とした組成が見られるが、６世紀から複維管束亜属(ニヨウマツ類)が増加を始め、７世紀および８世紀ではニヨウマツ類が多くを占める組成に変化することが報告されている(西田, 1976,1980)。また、兵庫県鬼神谷窯跡では、点数は少ないが、５世紀～６世紀に常緑広葉樹のアカガシ亜属やシイノキ、７世紀初頭に落葉広葉樹のクリ、７世紀中頃にニヨウマツ類やモミ属等が確認されている(伊東, 1990)。この変化は、陶邑で見られた変化によく似ている。このような変化が見られる背景には、燃料材の利用が膨大であるため、本来見られた常緑広葉樹を主とした森林から、落葉広葉樹を主とした二次林へ変化したことが推定されている(西田, 1976,1980)。これらの結果から、須恵器の燃料材には遺跡周辺の植生が反映されていることが推定される。

今後、玉島陶古窯跡群の各窯跡から出土する炭化材の樹種同定を行い、時期による木材利用の変化の有無等についても検討したい。また、窯跡以外の遺構から出土する木材の樹種同定も行い、木材利用の比較等も行いたいと考える。



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（窯体内36層）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（窯体内52層）

a：木口，b：柾目，c：板目

図版1　炭化材

引用文献

平井信二　(1979) 木の事典　第2巻．かなえ書房．

伊東隆夫　(1990) 鬼神谷窯跡出土炭化材の樹種．「鬼神谷窯跡発掘調査報告」，p.45-46，竹野町教育委員会．

西田正規　(1976) 和泉陶邑と木炭分析，「大阪府文化財調査報告書第28輯　陶邑Ⅰ－本文編－」，p.178-187，大阪府教育委員会．

西田正規　(1980) 須恵器生産の燃料について．「大阪府文化財調査報告書第30輯　陶邑Ⅲ　－本文編－」，p.132-136，財団法人大阪府文化財センター．

図　　版

1. 遺跡遠景
（調査前・北から）

2. 遺跡遠景
（調査中・東から）

3. 窯体検出状況
（東から）

図版 2

1. 窯体a－b断面
（西半・北から）

2. 窯体a－b断面
（中央・北東から）

3. 窯体a－b断面
（東半・北から）

1. 窯体e−f断面
（東から）

2. 窯体g−h断面
（東から）

3. 調査風景
（西から）

図版 4

1. 窯体遺物出土状況

2. 煙道付近遺物出土状況

3. 焚口遺物出土状況

1. A～D区第51層残存範囲

2. A・B区床面断ち割り

3. E・F区床面断ち割り

図版 6

1. 床面形成土内
遺物出土状況

2. 焚口初期窯壁
（南壁）

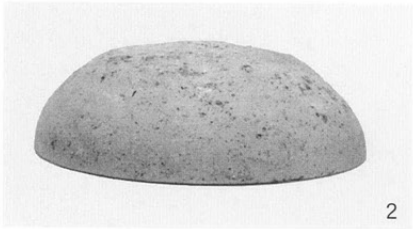
3. 焚口最終窯壁
（南壁）

1. 灰原検出状況
（北から）

2. 灰原縦断面
（北から）

3. 灰原横断面
（東から）

図版８　出土遺物（１）


2

5

7

8

11

13

16

17

19

21

23

24

25

27

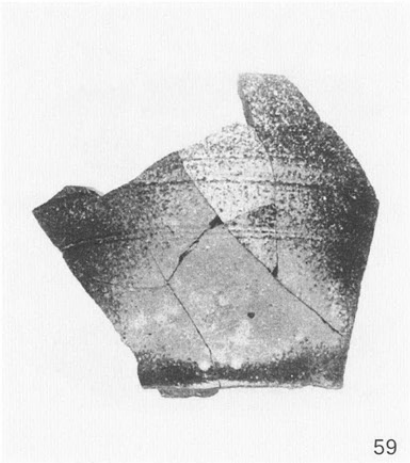
32

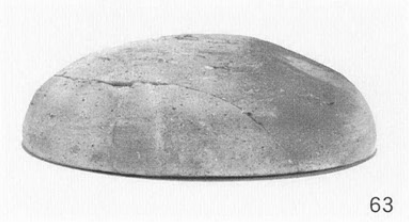
34

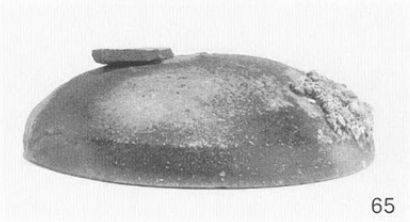
38

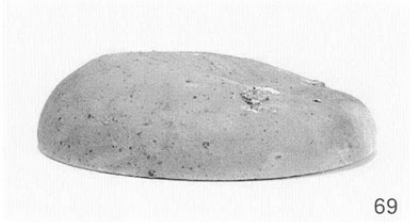
57

45

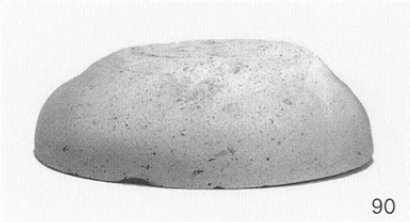

59


63

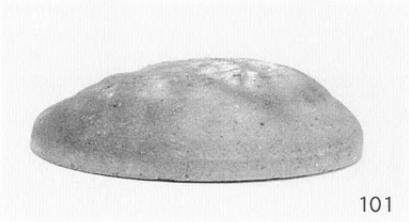

65

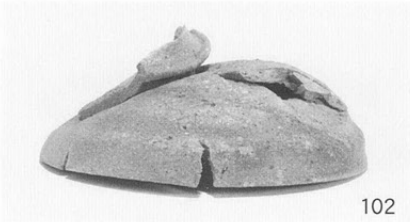

69

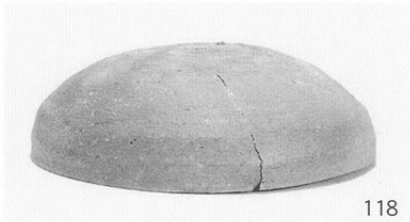
82


90

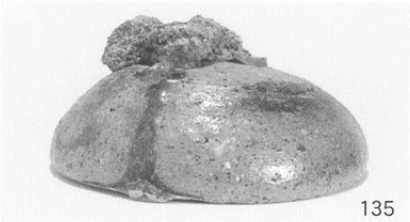
99

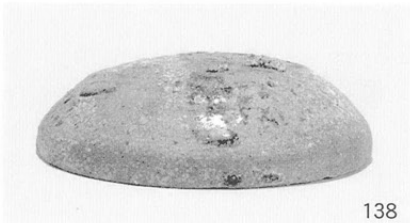

101

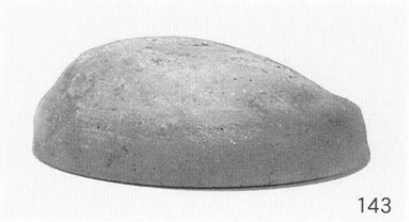

102

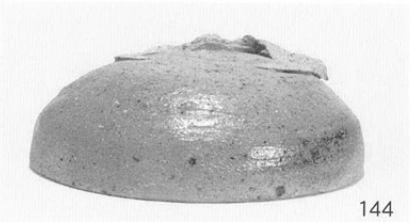

118

126


135

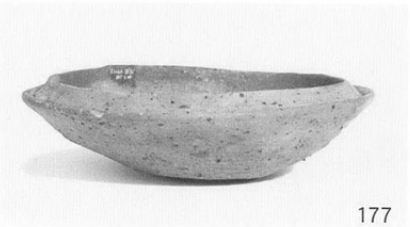

138


143


144

148

173


177

178

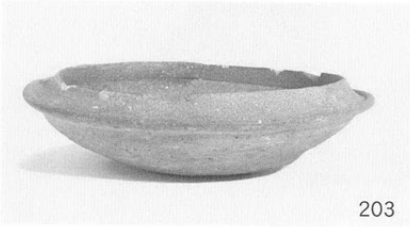
図版10　出土遺物（3）

182

188

189

202

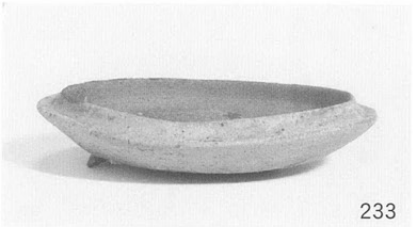

203

204

211

214

231

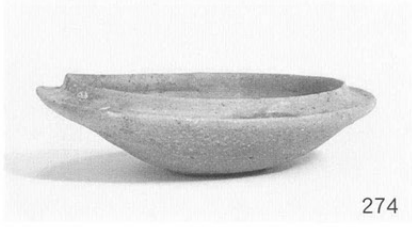

233

251

252

263

266


274

283

286

291

293

308

309

311

313

315

316

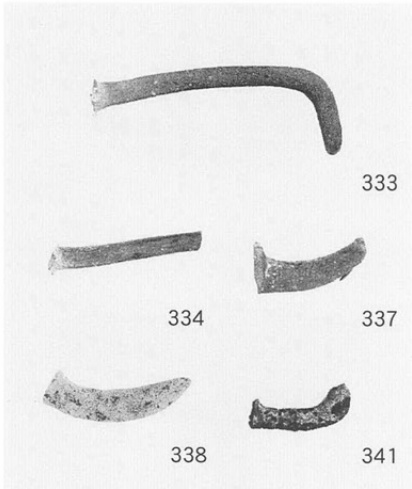
319

326

321

347

329～331


333
334
337
338
341

351

358

360

384

385

386

図版12　出土遺物（5）

393

415

422

430

437

441

442

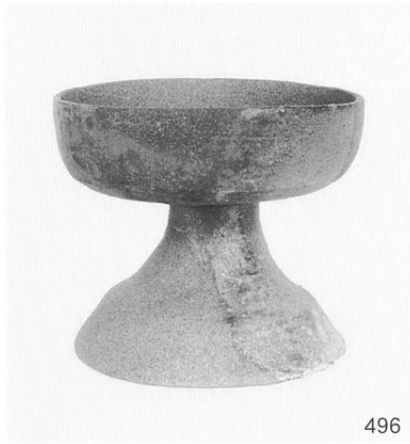
455

438

444

458

459


496

532

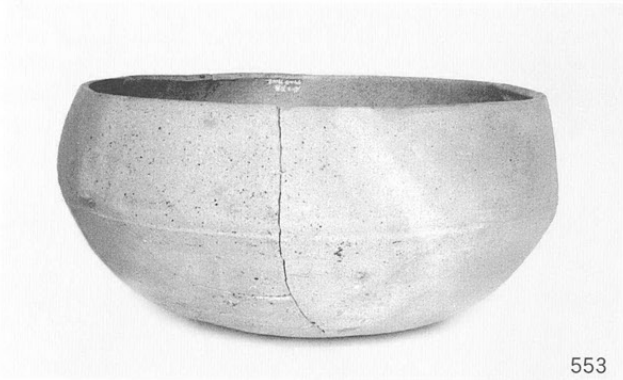
533

535

541

548

555


553

556

570

571

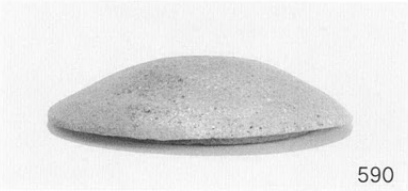
575

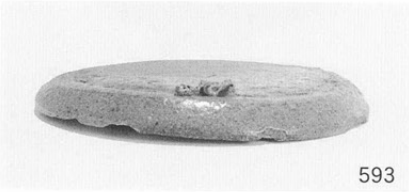
図版14　出土遺物（7）

582

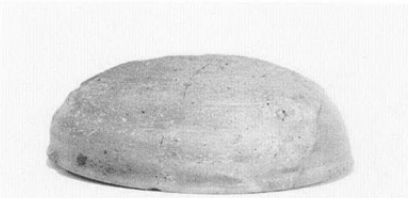
585

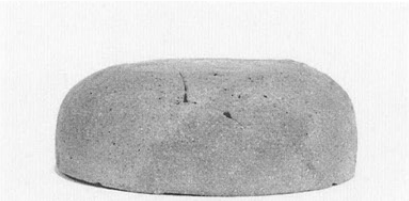
586

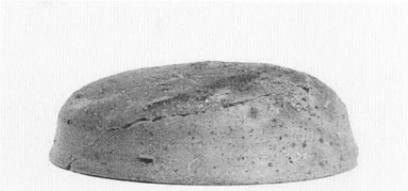

590

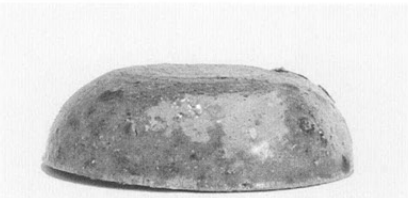

593

594

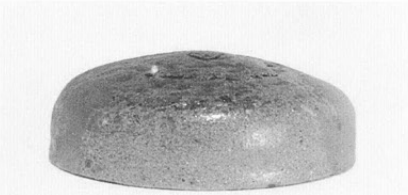

598

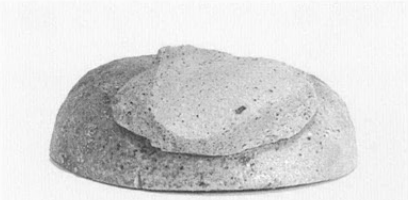

605

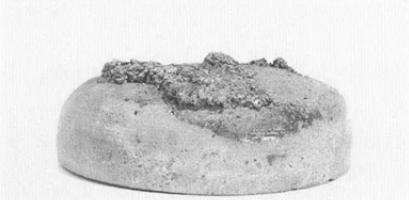

606


610

611


612


616


620

626

637

639

641

647

648

660

657

662

668

679

680

681

682

694

図版16　出土遺物（9）

695

703

705

706

696

713

697

751

757

762

765

770

771

775

778

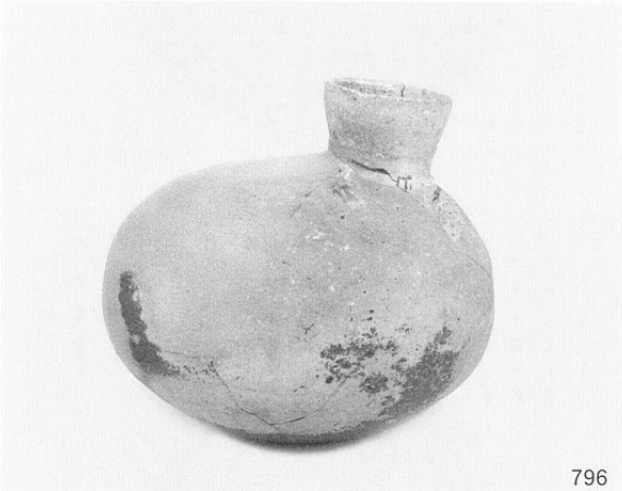
783

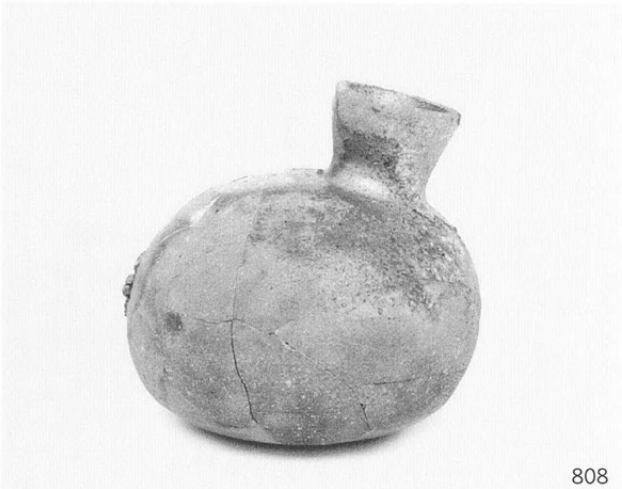
図版18　出土遺物(11)

774

785

787


796


808

800

807

813

832

838

815・860

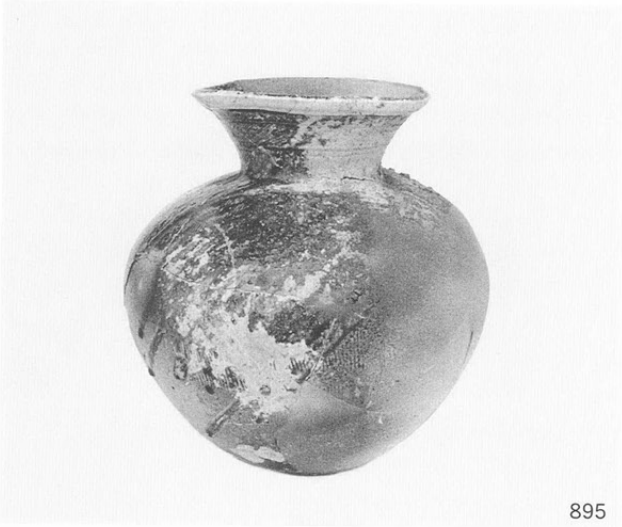
862

878

883

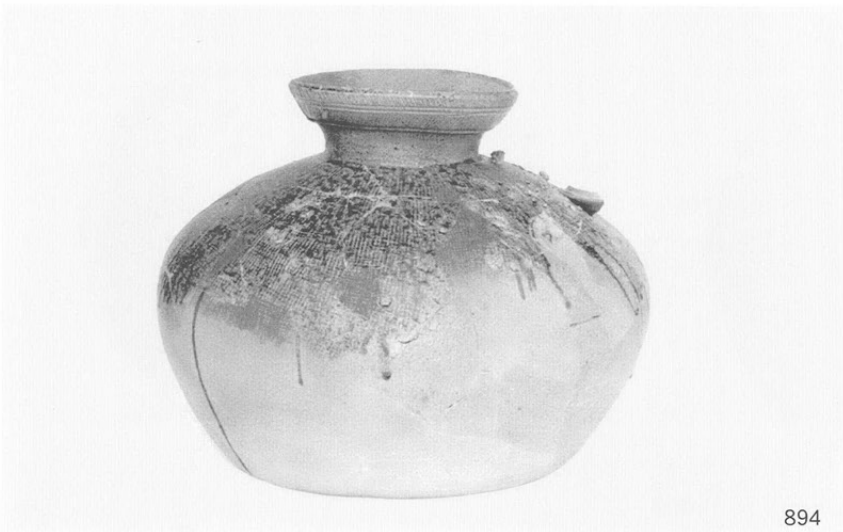
図版20　出土遺物(13)

891

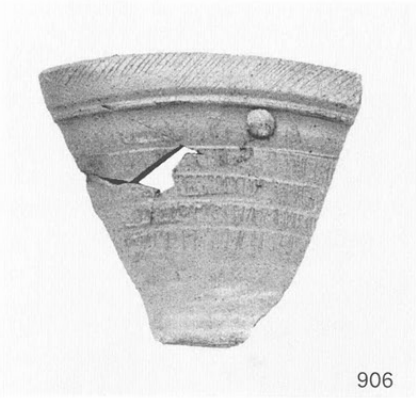


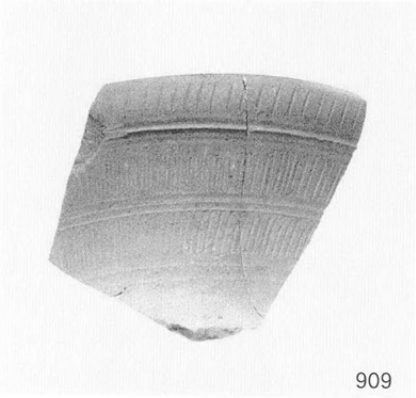
895

864



894


906

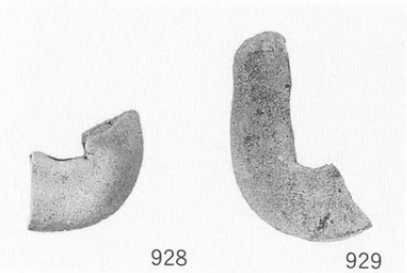

909

902

908

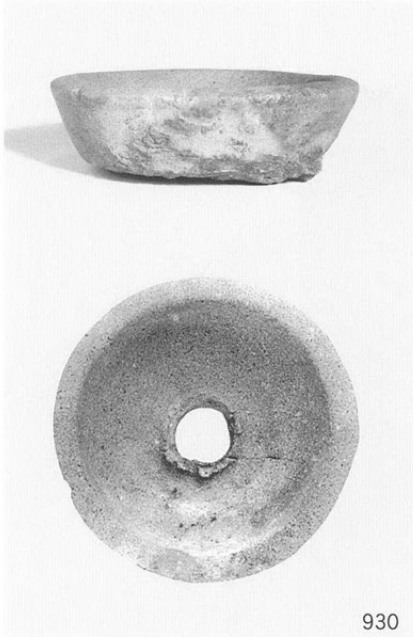
918

924

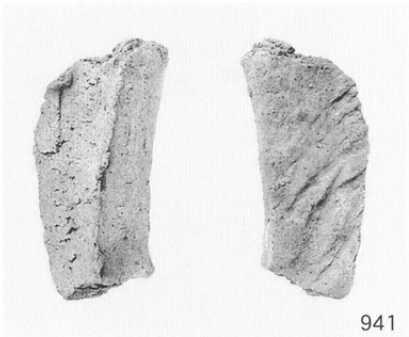

928　929

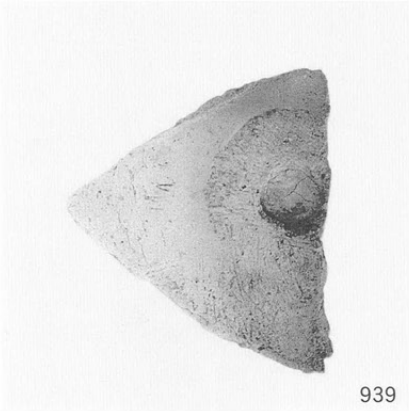
926

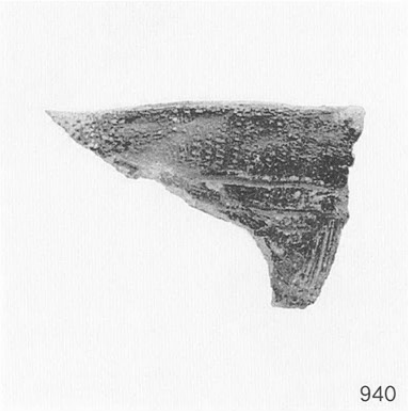
図版22　出土遺物(15)

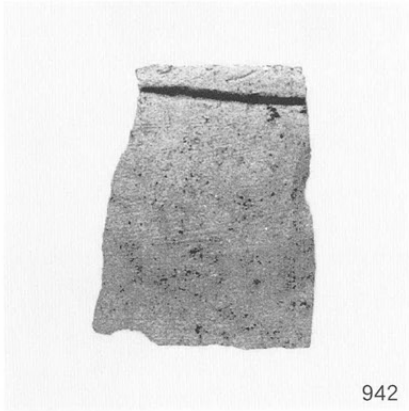

930

934

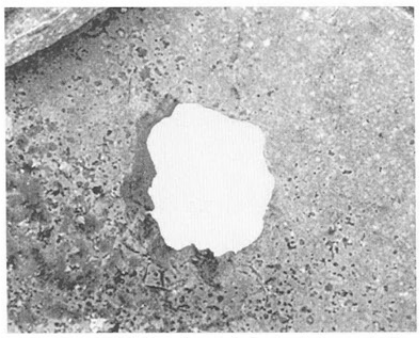

941

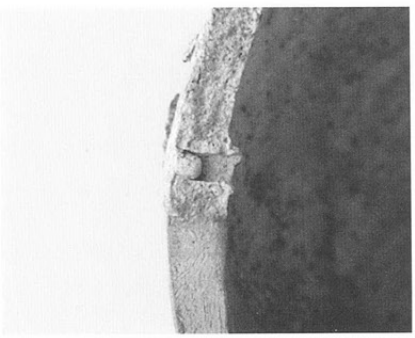

939


940

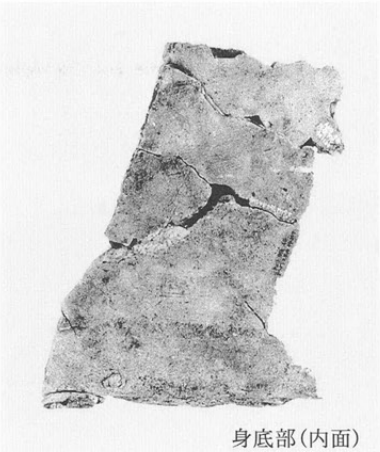

942

焼台に転用された蓋杯(10)

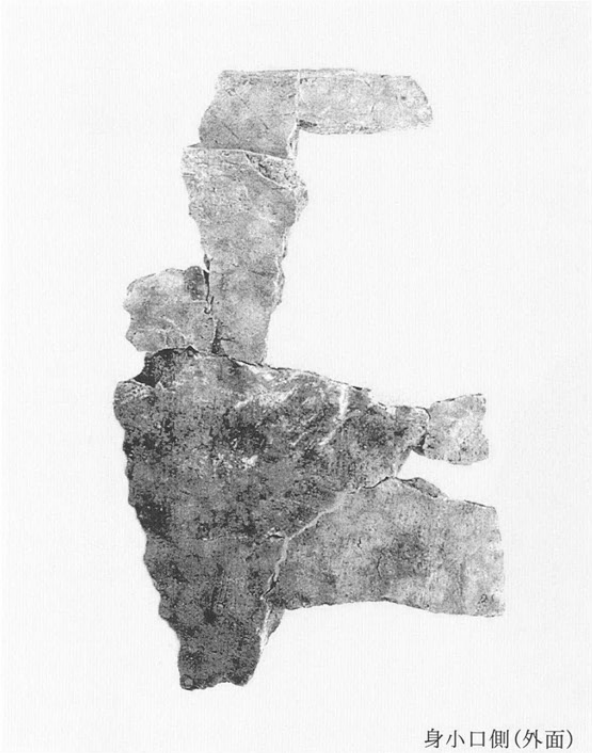

焼台に転用された高坏の穿孔


空気抜孔(926)

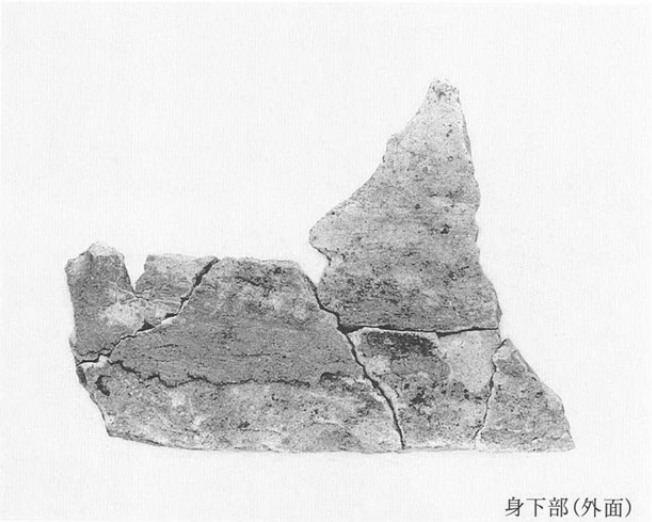
脚

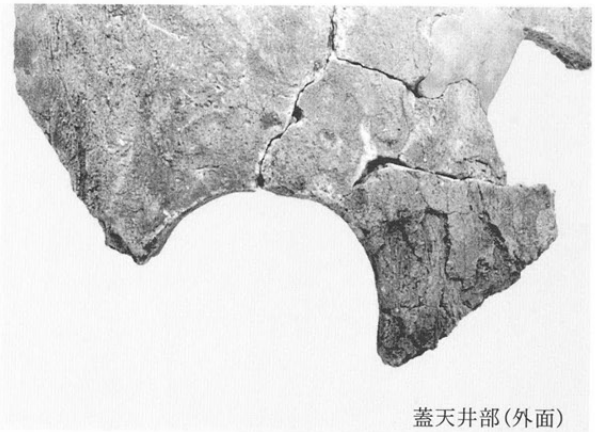

身底部(内面)

身底部(外面)


身小口側(外面)

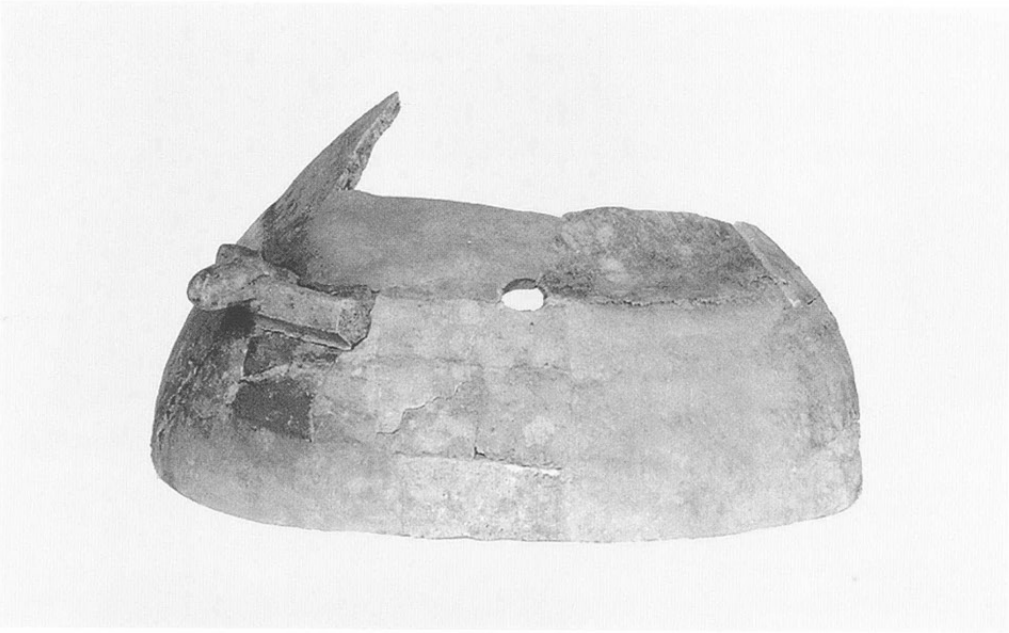
身受部(外面)


身下部(外面)


蓋天井部(外面)

蓋内面(葉脈痕)

図版24　出土遺物(17) 陶棺



1. 蓋(正面)

2. 蓋(側面)

3. 蓋(俯瞰)

報告書抄録

ふりがな	さぶたかまあとぐんよんごう
書名	寒田窯跡群４号
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第10集
編著者名	藤原好二・鍵谷守秀・小野雅明
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712-8046　岡山県倉敷市福田町古新田940番地　TEL 086-454-0600
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
さぶたかまあとぐんよんごう 寒田窯跡群４号	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 たましますえ 玉島陶	33202	06-008	34° 35′ 03″	133° 40′ 49″	19990901～ 19991209	315㎡	特別養護老人ホーム増築工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寒田窯跡群４号	窯跡	古墳	窯跡	須恵器・陶棺・製塩土器	

寒田窯跡群4号
倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第10集

平成15年3月31日　印刷発行

編集・発行
倉敷埋蔵文化財センター
〒712-8046　岡山県倉敷市福田町古新田940番地
TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
SABUTA No.4 KILN In Tamashima

Volume 10

Kurashiki
Archaeological Center

March 2003